
魔法少女リリカルなのは～剣豪伝説～

キャメルクラッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説〜

【Nコード】

N99840

【作者名】

キャメルクラッチ

【あらすじ】

ある少女が手にした力、それは魔法という不思議な力であった。しかし運命の歯車はそれだけに止まらない。ジュエルシードの封印を進める途中に出逢った魔法と異なる力を持つ青年、それは少女の運命を数奇な道へと誘う。絡み合う魔導師とサムライ、果たしてどんな未来を切り開く事になるのか……

※改訂中

序章 魔法と剣が交わる時（前書き）

この小説は素人の書いたご都合主義によって成り立っております。また物語の軸は魔法少女リリカルなのはに沿って展開されるので、オリジナリティーにも著しく欠けています。そんな穴だらけでも構わないという方はどうぞ。

序章 魔法と剣が交わる時

とある街の中————昼時とも夕時とも取れない時間帯、人数が疎らとはいえ会社勤めのサラリーマンや学生達の姿が居残る景色。その衆人環視がある一点、不自然な生き物達へと戸惑いの視線を突き刺す。それは決して有り得ない、余りにも異質で非常識な光景がそこにあつたからだ。

これだけ周囲の異様な視線と空気を感じれば、普通の人間なら何からのアクションを示すだろう。所がその元凶の一角はあろうことにグッと腹の音を盛大に響かせたのだ。肝が太いというのか、神経が通っていないというのか、ともかく物事に動じないふてぶてしさだけは大了たものである。

「あゝ腹へったなあ……」

力のない足取りと呟きを漏らす青年。パット見て10代後半くらいの年齢だろうか？黒いツンツン頭に剣道部に所属していそうな装いが特徴的だ。しかし、尤も異質なのは彼の背中には刀剣と思しき得物を堂々と背負っている事だろう。

「だいたいお主が備蓄の食糧に手を出すからこうなったんじやろうが」

それに対し呆れを隠さず冷たく突き放すは、見るからに高齢の老人。身長こそ低いが白髪の手と青年を叱りつける姿はさながら師弟とも映るだろう。しかし、これまた驚くのはその点でなく、老人が乗り物のように扱っている動物。

「クピー」

「ガウ」

そう、どう見てもそれは犬ではなかった。

この日本に於いては動物園以外では決して見る事の叶わない生き物。種類によっては絶滅寸前に分類される貴重な動物、それでいてネコ科の動物として頂点に君臨する肉食獣。

—————間違いなく誰の目から見ても出てくる結論は………
…「虎」そのものである。

おまけに空を舞う鳥はハゲタカ。

いや正確には猛禽類、「コンドル」や「ハゲワシ」の総称であるのだが、とにかくこれも本来なら街中で見かける生き物ではないだろう。少年程の大型なら殊更に。

「わかったよ、オレが何かみつてくりゃあいいんだろう？」

そんな周囲の常識を覆す異様な光景の中、罰が悪いように不貞腐れた口調で言い返す青年。

身長割に童顔でどこか幼げな面影を宿す姿は大きな悪童とも取れない。

その彼がケツと小さく捨て科白を残し、韋駄天のような速さで何処かへと駆け出す。

「まったく……あやつにも困ったもんじゃ。こんな街中では得物等見つかる筈もなかるうに」

少し呆れながらその後ろ姿を見送った老人は愚痴を溢す。おそろくこんな経験は一度や二度ではないのか、微塵も慌てずにホットけば直ぐ戻ってくるはずだと言わんばかりである。

「ま、仕方あるまい。少しここで待ってみるか」

そういうと徐に近場のベンチに腰をかけた。

そして連なるように寄り添う二匹の動物。

——しかし、周囲の反応がここに来て初めて大きく揺れ動く。

おい、あれって……

もしかして虎なのか？

何だ？動物園からでも逃げ出したのか？

ザワザワと殺気立つような気配。

警察にでも通報した方がいいんじゃないのか？

おい！はやく連絡しろよ！

当然の事ながら危険な動物を野放しにするなど有り得ない。下手をすれば誰が襲われるか分かったものではないのだから。

その反応に、しまった！と慌てふためく老人。彼も旅慣れていた為に当然の反応を見落としていたのである。街中を闊歩するに当たって居てはならない存在を。

「これはまずい、いくぞカゲトラに庄之助！」

「ガウー」

「クピー」

その不手際に気づき先の青年を追う様に、彼等も脱兎の如くこの場を走り去る。

おい！あいつら行っちゃったぞ！！

どうすんだよ？

どうするったって、警察に連絡するより他はないだろ。

そして後に残されたのは壮大な目撃者の数と、茫然と彼等を見送る人々の姿であった。

* * * * *

「たく、ムサシの野郎！見てやがれ、いまに凄い獲物を持ち帰ってやるからな」

ブツブツと小言を言いながら閑静な郊外の階段を駆け登る青年。そう、件の騒ぎとなった原因の一角である。その彼がまるで得物を見付けたと言わんばかりの形相で長い頂きを目指す。まるでその先に極上の御馳走があると分っているように。

元来野生で逞しく育った彼はこういう『獲物』には鼻が効く。それが彼のトラブルメーカーたる所以なのだが、今回もその例に漏れず己の直感に従って恐ろしい程見事に大物へと辿り着く。

「!? なんだ、この気配……変な感覚がしやがる。こう、まるで人を追い払うような、近づけさせないような感覚、こりゃあ絶対何かあるな!」

久々に胸が熱くなる、そんな鼓動に揺さぶられ階段を駆け上った彼の眼に映ったのは、神社の境内で見た事もない獣と小柄な少女が争っている場面であった。

「なのは! 防護服を!!」

「え? えええ! ?」

少女と傍らの小動物が何かを叫んだ瞬間、犬のような獣が咆哮を上げながら呐喊する。その威力はちょっとした衝撃を生み周囲に砂塵が舞ったにも関わらず、煙が晴れた後には無事に佇んでいる少女の姿が現れた。だが獣の攻撃はそれだけにとどまらない。鳥居の上から再度の攻撃をしかけたのである。

「なのは!」

おそらくその少女の名前と思わしき叫び声が、小動物から再度あげられる。

—————そしてその瞬間、

「来い！！クサナギ！！」

と、男の叫び声が木霊し、少女と獣の間へ割り込むように剣が突き刺さったのである。

「な！？」

「ふえ！？」

「グオオオー」

その第三者の思わぬ登場がこの場に居た者達を驚かす。少なくとも少女と小動物の驚愕は半端ではなく、信じられないといった顔付であった。何故ならその場に張られた結界によって、普通の人間が乱入して来るなど有り得ない事象であったのだから。

しかも彼等を驚かしたのは、それだけに止まらない。

その剣を手にした青年が徐に居合いの構えを取ると……。

「ずりゃああ！！」

けたたましい叫び声と共に横一文字のカマイタチが獣を薙ぎ払ったのである。その威力は凄まじく獣が張った障壁を切り裂き、その

衝撃は尚も緩む事なく本体を弾き飛ばす。防ぐ術を失った獣はその身を近くの樹木へと叩きつけられる事になった。おそらく障壁で緩和されていなかったら身体は真つ二つ……、意識を刈り取るには充分すぎる威力といえよう。

そして訪れた静寂、そこにはあっけに取られたツインテールの少女と、口をポカーンとしながら呆けている小動物の姿。まるでこれは夢じゃないのか？といった表情で、自分達の常識を根底から覆す現実に、脳内処理が追い付いていけなかったようである。

そんな彼等を余所に当の青年は二カッとはくそ笑む。

「いやゝ大漁、大漁♪これでムサシやカゲトラに庄之助から何も言われないで済むぜ。にゃっはっは」

そして気絶している獣の尻尾をムンズと掴み、この場を立ち去ろうとした。

流石にこの暴挙に我を取り戻した少女は、この青年に慌てて待たをかける。

「あ、あの！」

「あ、そうだ。お前ら怪我とかしてねえか？」

しかし図らずも二人の声が同時に交錯し、思わぬ相殺効果によって二の句が出ない少女がアタフタと身振り手振りでパニックになっってしまう。出鼻を挫かれた人間とは得てしてこんなものであるう。傍らでは小動物が落ち着いてといったゼスチャーをしているから何ともシュールな光景であるのだが。

そこへ漸く助け舟ともいうべく新手の声が上がる。

「刃よ、こんな場所におったのか」

それは街中であわや御用となりかけて逃げてきた老人と二匹の動物。

刃と呼んだ青年の匂いを頼りにここまで追いかけて来たのである。

「へっへっへ、見ろよこれ♪ たった今仕留めた夕飯だぜ？ 今日はいくつに焼き肉が食べっからな、これで文句ねえだろ」

それを見た青年が急に相好を崩し、ニヤケ顔になって嬉々として答える。その姿に流石の少女も絶句した。普通に考えればこんな化け物を食べようなんて発想は出てこない。

いや、それどころか新たに加わってきた老人達でさえ喜んで話しているではないか。もはやどこからツツコンでよいのやら……そんな頭痛を抑え、少女は声を振り絞り一つの問いを何とか投げかけた。

「あ、あの！ た、助けてくれて有難うございます、それで、えと、あの、貴方達は一体……」

その一声に青年達は我に気付き、ああそうだったなと意志を一つにした。思わぬ獲物に気を良くした為か仲間と共に周囲の気配りなどすっかり忘れていたのだ。この辺が彼等らしいと言えばらしいのだが。

しかしこのままだとお互いの事情が噛み合わないのも事実。とり

あえずは自己紹介から始める事すら怠っていたのだから。その失態に気付いた青年が代表して少女に応えを出す。

「オレは、鉄刃！サムライだ」

宜しくな、と言わんばかりの満面の笑みで手を差しのべて。

「あ、あたしは、なのは、高町なのはっています」

それに触発されたのかギュッと握手を交わす少女に先ほどの狼狽はなく、本来持っていた明るい笑みと真っ直ぐな瞳でそれに応じる

これが、一人の魔法少女と剣の頂点を極めんとするサムライの出会いであつた。

序章 魔法と剣が交わる時（後書き）

これが作者の処女作でもあり、全ての点において至らない事だらけとなっています。そんな素人同然の出来ですが、温かく見守ってくれると幸いです。

※一度完成した展開を修正してるので、若干変わっていく箇所も出てきます。

登場人物紹介（前書き）

この作品の主要人物のご紹介。
後に加筆したりするかもしれませんが。
とりあえずは簡易設定という事で。

登場人物紹介

名前…鉄刃くろがねやいば

性別…男

年齢…公式設定では定まっていない筈。ちなみにこの作品では18歳としています

容姿…父親譲りの黒髪とツンツン頭

性格…やんちゃでお調子者を絵に描いた感じ。ただ、正義感や負けん気も強い

本作で登場する刃は、原作終了三年後を経ていて「魔剣クサナギ」を帯刀している。つまり、峰さやかと再会する少し前のイメージ。日本一のサムライを目指して武者修行中に海鳴市を訪れ、魔法という力と触れ合う切欠ができたという訳ですね。すなわち時間軸や世界観は、なのは達と同じにしているというご都合主義。

父親に剣十郎と美人な母親を持つ。そして宮本武蔵を剣の師に、佐々木小次郎や柳生十兵衛という名だたる剣豪とも剣を交えた。更にはスサノオの血をひくという真正正銘のサラブレッド。剣術にかけては柔軟な思考で数々の秘剣も編み出す。

又、刃の使用していた魔剣や聖剣はもはやロストログアの域に達しており、こと破壊力に関しては魔法すら上回っていると考えられる。何しろ地球をチリにする剣や火星に到達する事の出来る魔剣が存在しているのだから反則もいいところである。尚、原作で鬼丸が使った木刀に気を集中して何万トンもの重力を発生させ押し潰す技も覚えさせています。というか原作最後でその鬼丸を更には上回って破っていますから。その後三年という時を経れば身につけていても不思議ではないとの予測。

基本的には戦いの中で友情や力を培うタイプなので、どんどん暴

れさせていきたい。魔導師という未知の存在に彼が心踊らないわけがないですからね。武蔵曰く、戦えば戦うほど強くなる「戦いの申し子」。

名前…高町たかまちなのは

性別…女

年齢…9歳

容姿…ツインテールに跳ね髪型

性格…明るさや優しさを備えるだけでなく、正義感や使命感も歳不相応に強い

本作のメインヒロイン。アニメの展開を考えているので驚異的な成長と天性の才能を開花させていく。恐るべきはその適応力と初志貫徹の折れない心。何の戦闘訓練も受けていなく身体能力も高い少女が、魔力の高さだけで敵を捻じ伏せていく姿はまさに圧巻。というか反則も甚だしいといえるだろう。反面、年相応の少女らしく動物好きな一面や誰からも好かれる人懐っこさも持ち合わせています。アリサ・バニングスや月村すずかといった友人が居るのも一重に彼女の魅力がそれだけ高い事を物語っている証。もう一人の主人公に負けず劣らず縦横無尽の活躍を描いていきたいですね。

彼女を一言で表現するならば……「全力全開!」というか、これ以上相応しい言葉は見付かりません。そして、こと戦闘に関しては刃共々、アグレッシブなので抑えのユーノ君やクロノ君は気苦労が絶えないかもしれない。何しろ彼女は、お話し力でねじ伏せる的な側面を持ち合わせているので。

名前…エメラルド

性別…女

年齢…???

容姿…ショートヘアで髪留めを左髪に付けている

性格…理知的で冷静

原作では地底人がスパイとして放ったアンドロイド。刃の協力者として記憶を改竄されるが、ピラミッド内で同じソルジャーとの戦いで記憶を取り戻す。その際に敵側となるが「力の戦士」・「技の戦士」・「頭脳の戦士」・「防御の戦士」が合体したパーフェクト戦士を倒した後に再び刃に味方する。因みに彼女の正体は「防御の戦士」ことエメラルドソルジャーであった。

能力としてはバリアーや回復能力を携え刃の心強い支援役をこなす。彼女は飛行能力も備え攻撃以外ではほぼ欠点の見当たらない優秀な存在でもある。ピラミッド最上階内部で超重力装置を破壊する際に刃を庇い、防御システムの攻撃をその身に受け最期を遂げた。記憶を改竄されてたとはいえ、刃には少なからず好意的な姿勢で接しており相互間の争いがなければ良い関係を築けたのではないかと想像される。本作ではそんなI Fを想定した位置に置きたいです。

名前…宮本武蔵^{みやもとむさし}

性別…男

年齢…約400歳

容姿…小柄で二頭身。顎鬚と眉毛が異常に長く白髪となっている
性格…人情家の側面と合理的主義を併せ持つ。そしてお調子者でもある

刃のブレイン的存在で悪知恵は相当なもの。しかし最後は失敗し

たり、ドジを踏むので毒は少なかったりする。年齢から既に常識を超えているが見かけによらず剣腕も相当なもの。食い意地やスケベ根性も相当なものであり、幾度かりりカル面子に絡ませようと思っただのはここだけの話。でもこれをやると凄いグダグダになるのでやっつけられません。

織田信長御前試合第一回の優勝者であり権力者から恨みを買ったこともある。その為に権力とは無縁の存在として生活を送っている。

名前…ユーノ・スクライア

性別…男

年齢…9歳

容姿…見方によって女の子とも男の子ともとれる

性格…礼儀正しく生真面目。少し控えめなタイプなのかもしれない

なのは魔法の先生。彼女が魔法に触れる切欠となったのはユーノの念話に拠る所が大きい。性格と同じく攻撃的な魔法よりも補助系の魔法を得意とし、バックアップ面でののを支える優秀な存在。作者的には、なのはより他の女性と幸せになって頂きたい子。

絡み役として色々弄られ易いが根は悪くないし、同年代の少年と逞しく育っていたらどうなっていたか非常に気になるタイプでもある。どちらかというとスバル・ナカジマの様な子が相性的に合うと思うのは私だけなのだろうか……

名前…峰^{みね}さやか

性別…女性

年齢…18歳

容姿…黒髪のロングストレート

性格…常識人としてツツコミ役をこなす。武道の一門だけあって剣道を嗜み気丈

刃の恋人といっても差し支えない女性。その性格は明るく朗らかで誰からも好まれ易い。その証に人間だけでなく、敵側の勢力だった者にも寛容であった。少し意地っ張りな面もあるが、基本は素直で優等生タイプ。武蔵からは刃の鞘とまで評された。

また乙姫の血を引く龍の巫女だった事もあり、月の女帝かぐやにその身を狙われた。一時は老婆と変わり果てるが最後はその身を元に戻す。この際に刃から告白を受けており、明らかに相思相愛の一面を展開していた。因みにこの作品では影も薄く活躍の場を与えられなかった悲劇のヒロイン（笑）。本当に御免なさい。

名前…鉄諸羽くろがねもろは

性別…女性

年齢…???

容姿…母親似で金髪のロング

性格…財閥のお嬢様だけあり礼儀正しい。しかし実態は気が強く物事をハッキリいうタイプ

刃の妹で原作では、刃の父親を敵と誤解していて憎んでいた。しかし実はその敵と思われていた男が実の父親だと分り、ビンタ一発で全てを水に流すという器の大きさを見せる。刃と同じ血筋の為か気の強さや物事をハッキリ語る一面は似通っている。しかし、融通の効く一面や父と兄を認めている節も見られ、本当はお兄ちゃんっ子属性を持ち合わせているのでは？と推測される。それは久しく見ぬ父や兄に対して憎しみを持つというより、どこことなく慕うような

雰囲気を漂わせていた。

間違いなく後付け設定のキャラであったが、初期に登場してればそれなりの人気を獲得したと思われる。それだけに惜しいキャラでもあった。因みにこの作品ではアリサと役目が被り、彼女も使いどころが非常に難でした。お気に入り的人物だけに悔やまれる……ある意味、悲劇のヒロインその2（笑）。

登場人物紹介（後書き）

この作品はY A I B Aの原作を知らないという意味が分り難いと思います。

何分、古い作品なので仕方ないのですが。

そんな訳で修正・加筆等を行うかもしれませんが。

本来なら両方の原作に詳しくなくても楽しんで貰えるようにしたいのですけど。

第一話 高町家の人々（前書き）

鉄刃一行は偶然出会った少女、高町なのはに連れられ少女の家に訪れる事となった。果たしてこれは吉と出るのか凶と出るのか？

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第一話 高町家の人々

閑静な住宅街に少し大きめな家屋がある。その住人は仲睦まじい夫婦と三人の子供が居て、近所でも評判でちよつとした有名所。主な理由としては喫茶「翠屋」を開き、傍目から見ても美男美女の家族構成でなされていたからだ。おまけに人当たりも良く世話好きで、一家の父親はサッカーチームの監督まで請け負っている。その彼等の悪評を言う者などちよつとお目にかかれまいだろう。

その家には――――「高町家」という表札が掲げられていた。

そして夜も更け夕飯時にはやや遅めの時間。小さい子供が起きるにはやや辛い時間だったにも関わらず、その「高町家」では食卓を囲み賑やかに会話がなされている。いや、正確にはその凄さに呆気にとられる住人と、その原因となる客人の構図。

「コラ！！刃よ、その肉はワシのじゃぞ！！」

「るっへー！！ヒョッひほそほへのへフフヘイ（海老フライ）ほヒョッへるヒヤへえハ！！」

「なに、お主、それが師に向かって口にする言葉か！？」

「ガウ！！！！」

「クピ！！！！」

「あ、コラ！そりゃ、オレんだぞ！！」

「ガウ」

「馬鹿め、スキありじゃ！」

ドタバタと我先にと食べ物に群がる姿はまさに野生動物。そこにテールブルマナーもなければ、口に食べ物を頬張りながら怒号を交わし、スキあらば相手の物を奪う掠奪者の如し。アンタ達の辞書に「遠慮」という二文字はないのか？と、密かに高町家の心中が一致していたのは仕方ないのかもしれない。

おまけにその旺盛な食欲に止まらず、何か変な動物まで食卓を囲っている。彼等の目が節穴でなければ間違いないトラとハゲタカという動物。さながらサファリパークもどきの光景が展開されていたのだ。さりとて人を襲うような気配も見受けられず、寧ろ彼らに懷てる節があった。

当然そんな客人の姿を見て彼等は何者なのだろう？という疑問に辿り着く。

それを解決しようと家長である男性が代表して口を挟む。

「ああ、ご飯の方ならまだあるから心配しなくてもいいよ。それより、鉄：刃君だったかな？それじゃ君の話を訊く限り、神社の境内でなのはが犬に襲われている所を助けてくれた分けなんだね？」

とりあえず腹の方も人心地着いたのか刃達の方も箸を止め、高町家の面々と顔を合わせた。

「助けたっつーよりも獲物を見付けたから倒したただけだな」

「それで事情を説明した所、そのなのは殿に招待されたというわけじゃ」

刃は人懐っこい満面の笑み、そしてムサシの方も補足するように口添える。

「……なるほど」

「父さん！」

「まあ、待て。恭也の言いたい事も分かる、だけど今は話の途中だ」

先程から鋭い視線で刃達を見据えていた青年。この家の長男である高町恭也であった。なのはに客人として迎えられた青年達は、刀を携え見るからに一般市民ではないだろうと分かる相手だっただけに警戒をしていたのだ。

だがそれを制止した士郎は何か思惑があるのか、疑問に思っている事を飲み込み改めて自己紹介を始めた。

「先ずは、なのはを助けてくれた事に心から感謝します」

「私は、なのはの父で高町士郎」

で、こちらが……と、ふと視線を送り家族にも挨拶を促し、それに気づいた家族の面々もここぞとばかりに喋り出す。

「高町恭也、なのはの兄だ」

「あたしは高町美由希。宜しくね」

「なのはの母で喫茶店のパティシエをしているわ」

三者三様にそれぞれの反応。親和性の高い言葉や無警戒で本当に歓迎しているかと思えば、明らかに警戒の念が強い反応もありと様々だ。

それに対し特に動じる事もなく、刃達も礼儀とばかりに自己紹介を始める。

「オレの名はヤイバだ。鉄刃、気軽にヤイバって呼んでくれ」

「重ね重ねご親切なお心遣い感謝する。ワシは宮本武蔵、武蔵と呼んで下され」

「クッピ」

「ガウ」

「んで、こっちのトラがカゲトラ、鳥の方が庄之助だ♪まあオレ達の家族みたいなもんだから、共々宜しくな！」

屈託のない顔で答える様はどことなく好感を持てる。おまけに彼等の仲の良ささえ伝わって来るようだ。その為か、美由希や桃子の方はすぐに笑顔を浮かべて満足気に頷いた。彼等は決して悪い人達ではない。寧ろどこことなく抜けている感じが愛くるしささえ感じるほどだ。きっと彼等となら直ぐに仲良くなれるのだろうと。

逆に男達の方は躊躇いも感じつつ、直ぐには警戒を解く事が出来

なかった。確かに悪い感じは受けられない……、だからといってそのまま警戒を解くには相手の素性が知れないからだ。

「それにしても武蔵さんて、かの剣豪と同じ名前だよね」

「あら？言われてみればそうよね」

「名前から察するにそれなりに武道を嗜めるように見受けられますが」

「お姉ちゃん、かの剣豪って？」

「ん？なのは、知らなかったの？あの巖流島の戦いや二刀流で有名な宮本武蔵。テレビや小説でも題材でとりあげられるじゃない」

「ま、俺達も剣を嗜む者として一度は興味を持つものさ。まして二刀流とあっては俺や美由希も他人事とはいえないからな」

流石に同姓同名であってもその当人だとは誰も思っていないのか、士郎や恭也でさえ昔話の要領として語っている節があった。

そこへ、刃からの大きな爆弾宣言。

「いや、信じらねーと思うけどよ、本物だぜ？このジジイ」

……束の間を置いて、事情を知らない高町家の面々は呆けた。それは何か聞き捨てならない科白が放たれたからだ。仮にもかの剣豪は江戸時代初期の人間、現在生きているとしたら齢400にはなるだろう。どう考えても人間の寿命は軽く超えている。あの冷静な恭也と思慮深い士郎でさえ、滅多に見せない表情を一瞬だけであるが

呈してしまったのだ。

仮にこれが人外の生き物なら納得出来ない事もない。事実、極一部の存在であるが「夜の一族」と関わりのある側から見れば。だが目の前の老人からはその匂い、彼等に通じる気配が何も感じられなかった。その意味する所は普通の人間であり、到底真実であると思えない。

だから思わず美由希も軽く冗談を返した。

「あはは。冗談上手いな、刃君も」

おそらく彼は軽く場を和ますような事を言ったのだろうと。

「あれ？もしかし『ゴホン！』って何だよ、ムサ……」

「あゝ、誓って言うがワシは間違いなく、あの宮本武蔵じゃよ。巖流島の決闘で佐々木小次郎を破り、今なお無敗を続ける大剣豪じゃ。カゝカツカツカツカ」

そこには威厳も恭しさもない、締りのない表情をさらす年寄りの姿。さも自分は本物だと言わんばかりの態度だが、これではとても信じられたものではない。どうみても信憑性に掛けているといった所だ。

「まったく、あのジジイは。ん？どうかしたのか、オッサン」

「おっさ……ん、ゴホン。オレは高町士郎と紹介した筈だが。一応、一度目は許すが次はしっかりと名前と呼んでくれ」

「お、おう!？」

万年新婚夫婦との肩書を持つ高町士郎。その彼が直にオッサンと呼ばれた経験など未だ嘗て無かった事であった。その訊きなれない科白にシヨックを受けるも、彼は昏い笑顔で背後に不気味な気配を漂わす。明らかに怒りの感情を出しているのだが、その質はあまりにも禍々しいものであった。

かつて鬼丸でさえ見せた事のない重圧。歴戦の勇士である刃でさえ、これには思わず委縮して同意を示すしかなかった。

まさに禁句とはこの事である。

「さて、自己紹介も終わった事だし、今夜は皆さんも泊っていかれてはどうです？既に外は夜ですし、流石に御客である方々を失礼で迎えられませんから」

「……宜しいのかな？いくら愛娘を助けたとはいえ、今日初めて会った見ず知らずの人間を泊めるなどと、少々物騒な気もするのじゃが」

軽い互いの挨拶が済んだ頃、タイミングを見計らうように宿泊を進める士郎。

だがムサシもその意図に気づき、鋭い眼光を返す。

（やはりこのご老人、只者ではないな。だが少なくとも、彼らの剣や身体からは禍々しい血の匂いや、殺意を感じる事はない。今までこの街で見かけた事もないので警戒を完全に解く事は出来ないが、

もう少し様子を見る必要はあるのかもしれない。だとすると、暫くはオレの目に届くところに居てもらった方が好都合か……」

「しかし、お話から察するにこの先泊る場所とかはないのでしょうか？こちらとしましても、娘を救ってくれたお礼と感謝の気持ちもあるのですよ」

「あゝ、それいいね」

「うん。なのはも、それがいいと思うな」

「何だ？オレ達、ここに泊ってもいいのか？やったな、ムサシ！」

「刃、お主はもう少し……まあよいか。では重ね重ねのご厚意、かたじけない」

ムサシとしては、面倒事も避けたかったが一飯の恩もある。この家の人達がこちらを警戒しているのもある意味当然と理解しながらも、厄介事になるのだらうと薄々は予感めいたものを胸に抱いていた。それは高町士郎と名乗る男性や恭也と名乗る子供の視線と言葉に警戒の色が混ざり、普通の人間だとは思えない気配を持っていたからだ。おそらくは、自分達同様に裏の家業や事情に携わった事があるのだらう。そんな人達と関わればどうなるか……、まさに自明の理である。

そして先程の少女の力。明らかに小さな子供が持つ力ではなかった。今迄に見てきたどんな力とも知れぬ、得体のしれない力。こちらとしても、事情が知れぬ今は警戒の必要があったのである。

———それなのに、

「ねー刃君、君って日本中を武者修行して回ってるんだって？　だったら何か面白い話とかありそうだし、良かったら訊かせてね」

「あーズルイ、お姉ちゃん。なのはも、訊きたいのに」

「何だ、そんな事でいいならたくさん教えてやるよ。面白れえ奴等なら沢山会って来たし、珍しい物も見えて来たからな」

「この調子ときたもんじゃ。ヤレヤレ」

刃の無警戒さに呆れを隠せなかった。

「何か言ったか？　ムサシ」

「別に何でもないわ。それより、士郎殿の方が何か言いたいようじゃが？」

「士郎が？」

「ああ。もし良かったらだが、明日の朝、道場の方と一緒に稽古でもやってみないかね？　息子達も剣を嗜んでいるし、知らない剣技を見るのは互いの向上につながると思うぞ」

「稽古？　じゃあ、お前らと一緒に修行できんのか？　おー面白そうだな！」

「あはは、刃君はそういうのが好きそうだもんね」

「……父さん」

「恭也もそれでいいな？」

「ああ、分かったよ」

恭也と士郎にしてみればこれが願ってもない機会だと分かっていた。彼等の力量や技量といった事から、流派やあの剣。これらの疑問を少しでも解決する場となったからである。そういう思惑を胸に秘め、空き部屋に彼等を案内しようとした時……、

「じゃあ、なのはが部屋まで案内するね♪」

素敵なまでの笑顔で案内役を買って出たのが、なのはであった。もつとも彼女にしてみても、先程の話だけでなく詳しい経緯などをもっと訊きだしたいからであつたのだが。

流石に家族の前で魔法の事も話す分けにはいかない。そう思つて足早に刃達を空き部屋へと連れて行つたのである。

* * * * *

「んで？オレ達に何か訊きたい事があんだろ？」

二階のなのはの正面にある空き部屋。そこになのはと刃達が輪を囲むように座り込んでいた。流石に小さい身であるとはいえ、なのはは立派な女性。軽々しく異性をそれも大人を連れ込むのは世間的にも、彼女の羞恥心的にも咎められた。無論それが功を奏し父親や兄の異論を抑える事になつたのだが。

その内面を知る由もない刃は細かい事など関係ないとばかりに問題を提起する。

刃自身も先程の出来事で未知なる力をまざまざと眼にさせられたのだ。気にならないといったらウソになるだろうし、何しろ自分が仕留めた獲物を不思議な力で子犬の姿に戻す様を見せられた。

何でもその時は「魔法」の力がどうのとか言っていたが……、未知なる力に興味が湧くのも仕方ないというもの。そういった期待を込めて口を開いたのだ。

それに対し口を開いたのは意外にもユーノ・スクライア。

もっとも彼の姿は相変わらずフレットのままであるが。

「はい。先程も少し話をしましたが、ジュエルシードの事と貴方達の事についてです」

「ユーノくん……」

「ジュエル何だかって、あの光る石みたいな奴の事だろ？ 犬っころから出て来たキラキラした」

「ええ、あの石はとても危険な物なんです。然るべき所に集めて管理しなくてはいけない物。だから僕となのはで集めていた所に……『ワシ等が現れたと？』…はい」

ユーノの確認にムサシが念を押す。

「魔法も使えない普通の人間には手に負えない代物なのに、刃さんは倒す事が出来た。貴方達は一体何者なんですか？」

（ユーノくん、もしかしたらこの人達も魔力を持っているんじゃない？）

（いや、僕もそれは考えたんだけど、この人達からは微塵も感じられないんだ）

なのはも不思議には思っていた事を念話でユーノと相談していた。結界に覆われた空間に入る事が出来るのは自分と同じ魔法関係者以外有り得ないからだ。冷静に思考を働かすと考えられる原因は決して多くない。当然導き出される結論に「魔導師」となるのも道理。

しかし返って来た内容はそれと異なる結論。

小さな少女とフェレットは眼を細くして、うーんと苦い顔をするしかなかった。

そこへ件の青年剣士は同じく首を傾げて不満そうに呟く。

「そうか？あの変な犬ところだってそんなに強くなかったぜ。あれならダークやプラズマの方が、よっぽど化け物じみて強かったかな」

「刃よ、あんなのと比較する方がどうかと思うのじゃが」

「まっ、あんなのなら軽いもんだよ♪」

ここで考えてみて欲しい。刃がかつて戦った強敵達。鬼丸率いる八鬼や四天王、水・炎・闇・光の鬼神達。果てにはかぐや率いる月

星人や地底人等と戦い抜いて来たのである。いわんやあの程度の怪物など雑魚にも等しいと言えるだろう。

又、激戦を培ってきた刃は必然的に自身の身体能力も鍛えられている。ましてや今、彼が帯刀している剣は魔剣クサナギ。もはや並大抵の事では刃を打ち破るのは無理なのだ。

無論、蚊帳の外であるのはとユーノにとって意味不明、そんな事を話されても納得はいかない。

「でも、刃さんが持っている剣からは不思議な力を感じるんですが？」

だから、前々から感じていた剣にこそ、秘密があるとユーノは当たりを付けていた。あれからは微妙に魔力に似た力を感じる、あれこそが何かしら関係あるのだと。

「つつてもなく、これは沖縄の先っちょで見付けただけで、まだどんな力があるのかはよく分からねえし。分かっているのは光速飛行の力くらいじゃねえか？」

「「剣が飛ぶ？」」

思わずシンクロしてなのはとユーノは口ずさむ。

（はて？今、何かとんでもない説明が流れたような……まてまてまて、落ち着けユーノ・スクライア。あの剣が普通の剣でないのは分かった。だけど本人でも理解していない不思議な力を宿している。もしかしてロストログアの類に分類される代物なのか？だとすると、彼個人が所持していて良い物ではない。いや、まだそう判断するに

は早すぎる。何にしてももう少し様子を見てみないと)

逸早く合理的に思考を組み立てる辺りは流石、魔法関係者だけあって不可思議な現象には耐性があるユーノ。逆になのはは不慣れな為にそこまで思考が追いつかない。

咄嗟に浮かぶ内容と言えば至極単純な現実、

「そういえば刃さん達って、ユーノ君を見ても何も驚きませんよね？」

自分が体験した事になる。

「な、なのは!？」

「ああ、コイツの事か。だってなあゝ」

ここで初めて刃は自分がかつて戦った相手達の事を説明した。それはとても壮大な冒険譚であり、命がけの死闘。かつてジャングルから日本に赴き、一人のライバルとなる男と出会った事、そして風神剣や雷神剣に始まる強敵達との戦い。月からの侵略者や地底からの侵略者等とまさに夢物語。

当然の事ながらそこには人外の敵も数多くいたのだ。

今更、小動物が喋った所で何を驚く事があるのか。

「そ、そんな事が……」

（なのは、今の話は本当なのかい？）

（し、知らないよ、そんな話。全然訊いた事ないもの）

（でも嘘を吐てる様には見られなかった……）

（どうするの、ユーノ君？）

二人が念話で相談をしている時、ふいに武蔵が口を開く。

「で、今度は当然お主達の事について訊かせててもらえるのじゃろ？」

「そうだな！オレも、あの魔法とかてつのはすんげえ興味あるし」

「……分かりました。それについては僕からお話します」

本来なら魔法の事は口外する内容でないのだが、事ここに至っては関係を持った者として知らぬ存ぜぬでは通せなかった。そして何よりムサシの眼光は嘘を許さないといった鋭さを放っていたのも大きい。これが刃だけであつたなら多少の誤魔化しは通用したのだろうが……。

不承不承であつたがユーノ・スクライアから語られた内容はこうであつた。自分が発掘したジュエルシードを事故でこの世界に散ばせてしまった事。偶然巡り合う事になった少女の力を借りている事。ジュエルシードの力がどれほど危険な物なのか。そして自分が別の世界から訪れ魔法の力を持っている事。ユーノが語った内容も刃同様に俄かには信じ難く、夢みtain内容であつた。

「へーなんか面白そうな話だな！」

「ふむ。確かにこれも修行の一環と思えば、貴重な経験になりそうか」

しかし、そこは好奇心旺盛で不思議な事に目が無い刃。既に瞳はキラキラと輝き、首を突っ込む気がありありと表れていた。おまけにムサシの一言が決定打となって。

「あ、あのーそれってもしかして、ジュエルシード集めと一緒に手伝ってくれるって事ですか？」

その反応が予想外だったのか、なのはも恐る恐る尋ねてみると、

「へへ、まあな。そのジュエル何たらを探してれば、前みたいな化物と戦えるんだろ？くく腕がなるぜ」

「まあそういう事じゃ。なのは殿達に異存がなければワシ達も手伝うのじゃが？」

（どうしよう？ユーノ君）

（おそらくあの人の持っている剣、あれからは不思議な力を感じるんだ。まだ彼等の力はハッキリと分からないけど、きっとなのはの力にもなってくれると思う。それに先の話を聞いた限りだと、彼等も強い力を秘めている可能性があるみたいだし、ここはお願いしてみるのも悪くないと思うけど）

（でも……）

こんな危険な事に関わらせたくない。そんな申し訳ない気持ちで刃達の方をチラリと見やる。しかし、そこにあったのは呆れるくらい無邪気で楽しそうな顔。本当に危ない事だって理解しているのか疑問に思う態度であった。

だけど先ほどの力は嘘じゃない。そんな藁にもすがる思いが過り、躊躇い半分、申し訳なさ半分の気持ちを込めた声で尋ね返してみると、

「じゃあ、あの、お願いしても……いいですか？」

「よし、そーと決まればオレ達は仲間だな！宜しく頼むぜ、なのは！」

そこにはスツと手を差し出して来て、何とも心強い顔で返事を返す刃がいた。

「ツ、……うん！」

だからか、なのはももつられる様に、力強く微笑み返していたのである。

まるでアレコレ悩むのが可笑しいと思う不思議な感覚、周りを引き込んで鼓舞するような、そんな気持ちにさせられて。

—おまけ—

その頃、カゲトラと庄之助はどうしていたかというところ……、流石に大型の動物を部屋で泊める訳にもいかず、かといって外に出しては周囲の目もあるという事で道場にてお泊りとなっていたとき。

第一話 高町家の人々（後書き）

口調や性格が違和感だらけだと思います。その為に不愉快な気持ちにさせていたら済みません。まさか実際に物を書くというのがこんなにも大変だとは思いませんでしたので。

ちなみに結界の解釈として絶対ではない、イレギュラーも有り得る。エースですとかアリサが残された例があるので、それにあやかっ
て刃のように人外じみた存在なら割って入れるのかも？と強引に進
めました。苦しいけど勘弁して頂けると幸いです。

第二話 サムライの力（前書き）

鉄刃と高町なのは、二人はジュエルシード探索の仲間として共に行動する事となった。少女にとっては次々と起こる不可思議な騒動。果たしてこの先どうなっていくのか……

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第二話 サムライの力

「次は本気でこいよ、でないと……負けちまうぜ?」

まだ空気がヒンヤリと漂い朝霧の残る時刻、高町家にある「道場」でひと組の男達が対峙する。この家の長男、高町恭也と客人の鉄刃。共に剣士として纏う風格は一流のソレであり、座して彼等を見る人間にも極度の緊張を与えていた。

昨夜の会談の後、士郎が刃に稽古の誘いをした為に、こうして二人は同じ道場で打ち合っていたのである。

そして、刃が挑発するような科白を恭也に向ける。

「……ふっ。言うじゃないか、ならばお前も様子見でなく本当の力を出してみろ」

それを嬉々として返す恭也。

同じ道を極めんとする者、高みを望む者にとって自分と同じ力量を、もてる力を、可能性までもつぎこんで戦える相手に巡り合える事は幸せと言ってもいい。

それにつられて知らず知らず恭也のボルテージも高まっていく。

「面白れえ! だったら後悔するなよ、恭也!」

その瞬間、刃には恐ろしい程の数の闘刃が数を増す。それは目に見えて身体を覆い、足元の誇りが舞い上がり、触れる物は全てを切

り刻む剃刀の如しだ。

まるで真空波とでもいう異様な光景に見てとれるだろう。

（技は向うが上、ならばオレがする事は最高の一撃をお見舞いする事だ。その為にも精神力を集中し、闘気を高めるんだ。じゃねえと、恭也には勝てねー）

そして切っ先にすべての意識を集中にするように闘刃も剣へと集まり出す。

「！！……わかった。ならば俺も最高の一撃を持って応えろとする」

恭也の方も刃の尋常ならざる気配に普通の一撃では迎え撃つ事が無理だと判断した。否、剣士としての血が騒ぎ出したといっても過言ではない。相手が最高の一撃を繰り出すならこちらも最高の一撃を打ち出す事こそ、互いの誇りと信念をかけるに相応しい。

（まさか、俺がここまで熱くなるなんてな。不思議な男だな……アイツは）

「永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術師範代、高町恭也。いくぞ！！」

覚悟を決め流派を名乗った後、恭也は己の持てる最高の技を放つべく『神速』を使った。そして一瞬で間合いを詰め奥義を放つ。

「御神小太刀二刀流奥義 薙旋！」

「ここだ！！」

方や己が得意とする高速の四連撃、方や心技体を一つにし実体のない闘刃を纏め上げた一撃。どちらも自身が放つ最高の剣技。

互いの攻撃が交差し————瞬間、ほんの一秒にも満たない時間が止まる。

それは本人達だけでなく道場に居た観客達にとっても。

まさに刹那の時間、力が蓄積されるように間を置き、道場が半壊する程の衝撃が辺り一帯を覆った。

* * * * *

— Side Miyuki Takamachi —

あたしの眼から見ても彼の……、刃君は強いと思う。だって一見隙だらけのようで、気配に気づく速さが普通でなかったから。初見は適当そうな人だという印象は拭えなかったし、あたしより強いとは到底思えなかった。

でも、手や口が食べ物に集中している間でも、彼の視線だけは敏感だった。長年の習慣によって築きあげられた反応っていうのかな。あたしだって稽古をやっているから、そういう気配には敏感になる。そこに気づいた時、やっぱり何かあるんだと思わされた。

———だけど、

「まさか、こんなに凄いなんて……」

初見の打ち合いでは恭ちゃんと互角。勿論これは腕試しで相手の力量を計っているのは百も承知。実際、二人とも全力を出してるようには見えない。

ううん、僅かだけど技量では恭ちゃんが勝っている感じ。刃君の方は荒々しくて全く洗練された感じが無い、いわば野生剥き出しの剣技。もつといえは本能的に動いているのがピッタリだ。それで互角に持っていくのは、一重に実践で磨き上げた賜物なのかもしれないけど。

そんな彼が一端間合いを置いて恭ちゃんを挑発した時、あたしは信じられない物を見せられた。

（確かに殺気等は相手に重圧を与える意味で、見えない刃となる事もあるよ？戦いに於いて「気」は重要だし、相手を凌駕した方が有利なのも事実。……だけど目に見えてここまで溢れるなんて明らかに異常だ。あれじゃまるでカマイタチみたいに現象を起こしているじゃない）

見ればお父さんも驚いている。当然だ、こんなのはそう御目に掛れる代物じゃないし、下手をすれば大けがだってお負いかねない。

それに比べて当の恭ちゃんと刃君だけはどこか楽しそうだった。

まるでこの時を待ちわびた恋人みたいに……。

そして二人が一步を踏み出した時、尋常じゃない衝撃が道場全体を覆い包んだんだ。

「恭ちゃん!!」

「恭也!!」

「刃!!」

立会人である士郎や武蔵、そして美由希が共に安否を問う叫び声をあげた。

二人の剣士が刀を交えた後、大きな衝撃波が道場を覆い天井の一部まで崩れ落ちて来た。そして二人は瓦礫の下敷きとなって埋もれてしまったのである。彼等の動揺も半端じゃなくなるのは無理が無い事であった。

——訪れる一瞬の静寂。

まさかと思い、三人が瓦礫の山に駆け寄った時……。

「あてて、やるなあゝお前。こんなに熱くなったのは久々だぜ」

「お前こそな。まさかここまで強いとは思わなかったよ」

ガラガラと木材の破片を払い落とし、二人は無事な姿を現した。

所々に怪我は負っているものの、呆れる事にお互いの健闘を称う

始末。それだけを見ると先程の死闘は嘘みたいでもある。何とか……、周りを心配させるのも大概にしてくれといった感じであった。

（まったく、あ奴等の無鉄砲ぶりにはヒヤヒヤするわい）

（まったくですね。無茶も程々にしてもらわないと、こっちの身がもたない。）

思わず怒鳴りたくなる気持ちちが二人の握手姿を見る事で一気に冷め落ちる。流石にこれには苦笑いするしかなかったのだ。

そして同時に二人は彼等の試合を見て解り合っていた。自分達はどこまでも愚直な面があり、共に共感できる親友となれるという事を。

この日、鉄刃達と高町家の家族は本当の意味で横の繋がりを持ち、誤解を解きあう事が出来た。もっとも高町なのはとの信頼関係はもう少し後になるのだが……。

* * * * *

—————高町家の道場で刃と恭也が死闘を演じていた頃、
なのはの方かというと。

敷地内から響き渡るけたたましい爆音によって眠りから覚めていた。

「うにゃあ!？な、なに、今の音は？」

「落ち着いて、なのは。おそらく道場の方からだと思う。だから行ってみれば何か分かる筈だよ」

なのはとユーノ、二人とも昨夜は夜遅くまで刃達と語りあっていた。その為に夢の中の住人と化していたのである。特になのはにとっては低血圧なのか朝の早起きは得意としていない。布団の温もりが抗い難い誘惑となって、彼女を深い眠りへと誘っていたのだ。

しかし、流石に絨毯爆撃でも受けたのかと思われる爆音。これにあっては深い眠りからも覚めるというものの、慌てて寝間着姿のままでなのは達が道場に向かうと、そこは見るも無残に半壊した道場の姿であった。

「え、えくと、これは……」

半ば茫然と佇むなのは。

奇しくも友達であるフェレットが似たような反応を示したのは間違いではない。

二人とも寝起きで頭の回転が鈍い時に信じがたい光景を見せられたのだ。理解が及ぶまでに幾ばくかの時間を有するのは仕方がないだろう。

そこへ、現状を尤も詳しく知ると思われる人物、父親の声が掛けられた。

「ん？なのは、もしかして今の音で目を覚ましてしまったのかい？」

「お、お父さん、これって一体何なの？」

「おい、恭也。俺はこれから御近所の方に事情を説明して来るから、お前と美由希は武蔵さん達やなのはを連れて家に戻っていてくれ。お母さんもそろそろ朝ごはんの支度にかかっているだろうしな」

「了解。ほら、後で説明してあげるから家に戻るぞ、なのは」

「え？あ、でも……」

「ほくら、こんな場所で立ち話もないでしょ、ね？」

「あ、お姉ちゃん」

「ガウ〜♪」

「あはは、カゲトラも早く戻ろうだって」

釈然としないのはであったが、この場では仕方ないと引き下がるしかなかった。恭也や美由希の説得もあったし、皆も後で事情を説明してくれるとの事だったので。但し（一体何があったの〜!？）等と心の中で叫びながら。

彼女はカゲトラの背中に乗せられ、家族と共に家の中へと戻るのであった。

「じゃあ、お兄ちゃんと刃さんが稽古をやっていたら熱が入って、

道場が倒壊しかけちゃったって事？」

なのはは、食卓のテーブルをいつもの家族や新顔の刃達と囲み、和やかに朝食を摂っていた。既に顔も洗い着替えを済まし頭の切り替えも確りしている為か、半信半疑の呆れ口調で呟いた。

どうやれば稽古で道場の屋根が崩れて落ちたりするのだろうか。尤もその現状を見てしまった以上、全てを否定する分けにもいかず、背中に僅かな冷や汗も垂らしていたのだが。

「ん、まあ、そうなるな」

少しとぼけた表情で応える恭也。

まるで憑物が取れたように実に爽やかな表情である。

「あ、母さん、そのソースとって」

「はいはい♪」

食卓の上でのほほんと会話を聞いている美由希に桃子。

（何だろう？この風景。普通もつと緊迫感とかピリピリした空気が流れてもいいのに）

未だ高町家の物事に動じない様に着いていけないユーノ。

いや、寧ろユーノ達の方が困惑しているのかもしれない。

なのはとユーノがチラリともう一人の張本人である刃を見ると…

…。

「うめくな♪本当、桃子の料理は最高だぜ！こりゃあいくらでも腹に入るわ」

「うむ！確かに桃子殿の料理は至高の一品といっても過言ではないのう。これだけの腕前となると士郎殿達もさぞ鼻が高いであろうな」

「あらあら♪」

こちら何事にも動じない凄い馴染みよう。もう何年来の付き合いであるような錯覚さえ起こされる。刃達の順応力も負けず劣らず凄い物があると、半ば呆れるしかなかった。

「それよりなのは。そろそろ学校に行く時間だろ？あんまりのんびりしていると遅れてしまうぞ」

「えーもうそんな時間なの！？」

いまひとつ釈然としない、自分だけ残されて面白くない気持ちでいるのはであったが、流石に学校に遅刻する分けにもいかない。慌しく食事を終えると、いつてきまーすと挨拶を足早に済まし、家を出て行く。

勿論妹の後には、兄と姉も学校がある。妹の走りゆく姿に苦笑いを交わしつつ、彼等も自分達の学業へと足を運ぶのであった。

そして————子供達が家を出払った頃を見計らって、士郎は刃達に提案を持ちかける。

「……つまり、ワシ等はこのまま高町家に居候をさせてもらっても、構わないという事じゃな？」

「ええ。先程の試合を観てハッキリ分かりました。貴方達が害を齎すような人でない事が。それに俺自身、刃君を気に入ったのもありますけどね。君なら恭也と良い稽古相手にもなるし、他にも色々と聞きたい事があるからな」

武蔵から刃に視線を変え、何か思惑があるのか先程の試合を思い出す士郎。

—Side Shirou Takamachi—

「立会人は俺とその武蔵さんに美由希。双方、これに異存はないな？」

「ああ」

「へっ！オレも何もないぜ！！」

「では、これより高町恭也と鉄刃。二人の試合を始めてもらう！」

オレの一言が互いの空気を変えた。一瞬の油断が勝敗を決する、まさにそんな言葉が相応しい緊張感が場を支配する。

これは思っていた以上に楽しめそうだ。

「いくぜ、恭也!!」

瞬間、彼は風の様なスピードで恭也の間合いに入った。

速さだけなら恭也に決して劣らない。

「くっ!! なめるな!!」

それを恭也は正面から薙ぎ払い、刃君の一瞬の隙を見付け追撃にかける。

「にやろお……この!!」

「外さん!!」

剣を振るう速さや間合いはほぼ互角。だが、繊細な剣技という意味では御神流を修める恭也の方が一枚も二枚も上手だな。対する刃君は自由奔放な剣技、細かい技量で見ると粗が見えるのは仕方がないか。

それにしても腕試しの段階で相当な速さだな。傍で見てる美由希も良く付いていつているが、驚きを隠せていない。

「どうした? もう後がないぞ」

「うるせー! だったらこれでどうだ!!」

壁際に追い込まれた刃君を挑発するように、恭也が啖呵をきる。

まだまだ甘いな、相手がどんな隠し玉を持っているか分からない間に、反撃の余力を残すとは。下手をすると手痛いしっぺ返しをくらうぞ、恭也。

案の定、彼は追い詰められてからが、エンジンのかかるタイプのようだ。

「うおおおおーッ！！」

「チッ！」

明らかに先ほどより太刀筋が鋭くなり、剣に込められた力も増している。

乱打、いや連撃。一撃の繊細さで劣る分を手数を増して強引に^{イコ}対等に^{イル}持っていくか。

やはり相当場離れしているようだ。

（ム！？）

それに業を煮やした恭也の体制が変わる。

（神速を使うつもりか……）

恭也は勝負を決めに行くつもりか。だがそこでオレは自分の目を疑った。まるで本能的な動作といってもいい、何と彼は初見でこの太刀筋に反応を示したのだ。それはまさに神憑りの、背筋が凍りつくような反射を見せてくれた。

「ぐはっ！」

本来なら一撃で決まっていた急所を見事に躲したんだからな。

「まだだ!!」

そうだ、ここで追撃の手を緩めては二流、オレはそんな指導をしたつもりはない。

何より勝負に手を抜くなど以ての外だ。

「こっ、の…ヤロォ!!」

だが、ここでまたしても驚かされる。

なんと突きに対して突きを当てたのである。

あの状態でよくもまあ、見事としかいいようがない切り返した。

「やるな！」

それに対し恭也も驚愕するが、口元は微かに笑みを浮かべている。なるほど、剣士としての血が騒ぐといったところか。自分と対等の相手と戦える喜びは何にも代えがたい宝だからな。

そして恭也は瞬時に間を取ると、二人は構えを取りつつ一瞬の攻防が止まる。

次の一手が試合の流れを決める……、そんな空気になった時またしても彼、刃君は予想に反して驚くべき行動に移った。

「何のつもりだ、貴様！」

恭也から背を向けたんだからな。

普通なら侮辱してるにも等しいこの行為に、恭也は激昂しかかる。

思わずオレも一体何のつもりだと脳裏を過るが、次の瞬かに彼が放った言葉、

「次は本気でこいよ、でないと……負けちまうぜ？」

そう、これで一気に場の空気に異変が起きた。

目に見えて彼の闘気が増えオーラーの様に刃を放ったのだから。

ここで初めてオレも恭也もコレが刃君の奥の手だという事に気がかされた。

— Side Out —

観てるこちらが熱を帯びてくる、そんな昂揚を感じさせる試合。その当てられた余韻くすぶる気持ちを静め、笑顔で士郎は問いかける。

「こうして知り合ったのも何かの縁だ。流石にこの先ずっとはいなくても、暫くは家に留まり一緒に暮らしてみないか？ その方が恭也や美由希だけでなく、きっとなのはも喜ぶ。勿論、オレや母さんだってな」

その応えに刃もムサシも異を唱える事などなかった。

ほどなくして鉄刃御一行は、正式に高町家の居候として住み着く事となったのである。

ちなみにカゲトラや庄之助。普通なら彼等は即警察に通報されるべき存在であった。だが……、おそるべきは高町家。どんな裏技を使ったのか分からないが、一週間も経つ頃には周囲の住民や警察等から認知のもと、何事も騒動が起らなかったという。気に謎多き家でもあった。

第二話 サムライの力（後書き）

作品の補足として。

・恭也が御神流の名乗りを挙げた場面や剣技。ウィキで調べただけなので何か間違っているかもしれません。何分、「とらいあんぐるハート」の方も全く知識がないのでこうなりました。

・刃VS恭也。素の力はほぼ互角と想定して戦わせました。刃の世界では剣の力によるパワーが大きいけど、それを抜きとすれば然程の差はない気がします。

・試合時における双方の獲物は木刀。作中では剣と表していますが、表現上こちらの方がシックリくるのでそうしました。

第三話 固まる決意（前書き）

鉄刃と高町恭也、二人の対決は一応の決着を着ける事となった。相譲らず互角の勝負、いわゆる引き分けとしての幕切れであった。結果、互いの技量を認め新たな絆を生むことになる。それは鉄刃達の居候としての帰結であった。

魔法少女リリカルなのは―剣豪伝説、始まります。

第三話 固まる決意

— Side Nanoha Takamachi —

皆さん、こんにちは。高町なのはです。つい先日まで普通の小学生をやっていた私は、ひよんな事から「魔法」の力を手に入れて新しく友達となったユーノ君のお手伝いをしています。何でもこの世界に落ちたジュエルシードと呼ばれる不思議な石を探して封印する事。これを放置しておくとしても危険な事が起こるのはこの間の経験で良く解ったから。

だけど———そんな私でも一応は小学三年生。普段は学校もあるし、大好きな友達だっています。つまり何が言いたいかというと……。

今日は、私のお父さん高町士郎率いる翠屋JFCチームの打ち上げ。桜台JFCとの試合に勝って皆で食事をしているのです。そして、大親友のアリサ・バニングスこと、アリサちゃん。月村すずかこと、すずかちゃんと揃って「翠屋」でケーキを食べていたりします。

「それにしても改めてみると、何かこの子フェレットとはちよっと違うない？」

「そういえばそうかな」

———ドキッ、相変わらず鋭い洞察力でユーノ君を見つめる二人。いつもながら目の付けどころが違うのにはビックリなのです。だって普通の人が見たら今のユーノ君はただのフェレット、私のパ

パやママも気づく事がなかったのに。

でも流石にコレばかりは話せない。だってユーノ君との約束だし、あんな危険な事に二人を巻き込みたくないから。

だけど……私の中でチクリと罪悪感のような感情が生まれる。

本当にそれでいいのか？逆の立場だったなら自分はどう思うのか？

———御免、今の私には解らない。

そんな後ろめたい感情を振り払うように、軽く玩具状態のユーノに対してフォローを入れる。

（ごめんねえ……ユーノくん）

（だ、だいじょうぶ）

「ねえ、なのは。あの噂の人は？」

「あ、刃さんの事？」

「だって、なのはちゃん、野犬から助けてもらったんでしょ？」

「おまけに、目下居候中の身。これが気にならずにいられますか♪」

そこへ、ふと先日話題にした刃さんの事が、二人から問われちゃった。

「うーん、そろそろこっちに来る頃だと思うんだけど……」

（なのは、刃さん達来たみたいだよ）

（あ！本当だ）

やや遠目だけどハッキリと分かる特徴。黒髪にツンツン頭に背中に帯刀、そして袴姿で下駄まで履いてるんだもん。何より決定的なのは周りに一緒にいるカゲトラ君と庄之助君。もうこの街じゃ彼だって証明しているも同然なのであります。

「あ！刃さくん」

「おう、なのは」

渦中の人、刃さんを手招きでコッチコッチと呼ぶと、彼は凄く不機嫌そうな顔でした。

「まゝたつく。何でも今日は荷物が多いから手伝ってくれだって？士郎も人遣いが荒れえよな」

口や態度では悪態を着けつつも律儀に約束は守る、刃さん。案外、根は素直なのかもしれない。そんな子供っぽい態度に苦笑いしながらも軽く労いの言葉をかける。

「にやはは。でもお父さんは男手が足りて助かるって♪」

「ぎゃぴ!？」

そこへ割り込む動物の奇妙ないななき。あれ？この声はカゲトラ君。そう思い、反射的にその声がした方向に眼を向いたら……。

「きゃ〜可愛い♪何これーこんな間近で虎なんて見るの初めて！」

「アリサちゃん……」

驚く事に二人とも怖がる所か、カゲトラ君とじゃれ合っている姿があったのです。凄いフカフカの毛並みよ、とアリサちゃんは頬を殴り付け、瞳をランランと輝かせて。おまけにあのすずかちゃんまで、次は私もといった顔付き。

（いくら物事に動じないからってその反応は流石にどうかと思います、なのはは）

その姿にニヤハハと苦笑いをするしかない私は、チラッとユーノ君の方を見やる。そこには二人の様子を少し複雑な、ホットしたような悔しいような、微妙な瞳をしていたのは間違いじゃないかな。うん、ここはツツコンだら人として駄目な気がする。

—————ただ、この馴染みようにはちゃんと理由があったりするのです。

それは鉄さんがこの街を訪れて数日。彼の事だけでなく、カゲトラ君や庄之助君の事までが街じゅうに認知されていたからです。何でもお父さんは心配するな、と一言を残して何処かに出掛けるし、学校でアリサちゃん達に話したら、ああそれって少し前に凄い噂になっていたとか、どうやら一枚噛んでいる感じのようでした。だって逆に一度会わせなさいよって言うくらいだったし。

むむむ、もしかしてなのはだけ蚊帳の外？

何か考えだしたら胸がモヤモヤしてくる。

「何やってんだ？ お前ら」

そんな二匹の動物と戯れる二人の少女（親友）を余所に、刃さんもジト目で呆れる。

まあ無理ないよね？ うん、意外にも刃さんが常識人に見えた。

勿論そんな事を口に出して言わないけど。

でも今回の目的は刃さんの紹介、流石にそれを放って置いてばかりもいられないので、コホンと軽く咳をして場の空気を正常に戻します。そうすると二人も少しはしゃぎすぎたと顔を赤くして此方に注目。これでやっと本題に入れそうかな。

「あ、刃さん。あの二人が昨日お話したアリサちゃんとすずかちゃん」

「はじめまして。アリサ・バニングスよ…んっ、です」

「月村すずかです」

アリサちゃんは何時もの調子で凄く元気。強引に丁寧な口調を直す辺りは所謂ギャップを感じちゃいます。だって滅多に見れないし。逆にすずかちゃんは初対面だから少し緊張気味かな？ 刃さん、傍目では少しヤンチャに見えるもん。

「お前ら、なのはの友達なんだって？ オレは刃。まあ、宜しくな」

ほら、期待を裏切らない反応。殆ど興味なさそうにぶつきらばうな挨拶しかしないし。どうやら刃さんの頭には、お手伝いに対する不満しかないみたい。うんうん、少しあの人の性格が掴めてきちゃった。

アリサちゃんなんて見るからに変な人を扱う視線だ。

刃さんも挨拶を済ますと気だるそうな態度で翠屋の中に入っていました。でも、カゲトラ君と庄之助君は動物だから店内に入れないの。食品を扱う店でそこはやっぱり憚れるから。

そんな様子をユーノ君と笑って見てると、入れ違いに男の子達格外に出てきたみたい。傍らにはお父さんも一緒に。

———
んだけど、その内の一人から何か違和感を感じたんだ……。

「何だか話と随分イメージが違う人だね」

「何よアレ？ 感じ悪いわね。本当にアレでなのは助けたのかしら」

「なのはちゃん？」

「なのは？」

（……なのは？）

わたしがボーっと一点を見ていた為に、皆が不思議そうに首を傾げる。いけないいけない、こんな調子だと皆に心配をかけちゃう。さ

っきの違和感はきつと気のせい……だよ、うん。

だから慌てて取り繕うように話を逸らしたの。

「え？あ、ううん、何でもないよ。それより刃さん、本当に凄いんだよ。この前なんかお兄ちゃんと剣術の稽古もしていたし」

二人ともフーンと特にそれ以上踏み込んでこなかったのは助かったけど、何処か疑うような眼だった。それってどっちに対してなんだろう？わたしが誤魔化した事について？それとも刃さんがお兄ちゃんと稽古をした事に対してなのかな？

心中でビクビクしながら微妙にピントがずれた思考が浮かぶのは、やっぱり焦ってたからなのかも。

話しこんでたら思っていたより時間も過ぎてたみたいで、

「さて。じゃ、私達もこれで解散しますか」

「うん、そうだね」

そろそろお開きの時間になってたみたい。

「そっかし、今日は皆、午後から用があるんだよね」

「お、皆も解散か？」

ここでお父さんが声を掛けてくる。ちゃんとなのは達の事も気配っていたようで、様子を見に来たみたい。それに対してアリサちゃんやすずかちゃんも今日のお礼を述べている。この辺のやりとりは

何時もの光景、本当に自然で礼儀正しいんだよ。

先の刃さんとの挨拶を見てると本当にギャップが凄いなあ。

(ねえ、ユーノくん)

(何？なのは)

(今日は……、今日一日はジュエルシードの事を忘れて、休んでもいいんだよね？)

(……もう五つも集めて貰ってるんだよ。たまには身体を休める事も大事だし、こんな日くらいはそういう事を忘れても大丈夫だよ)

そっか、そうだよ。少し元気が出てきた！よし♪

お父さんと一緒に二人を見送りながら、なのは達も家路に着くのでした。因みにカゲトラ君と庄之助君が荷物持ちの手伝いをして、刃さんは翠屋に居残り。何でもお父さんが掃除の方をお願いしたとかで、少し不貞腐れていたそうです。

— Side Out —

* * * * *

時間は少し進み高町士郎クラブチームの率いる試合が終わり、それぞれが岐路した頃。当然なのは我が家に帰り、学校の予習を淡々とこなしていた。この辺りはしっかり自分が為す本業を疎かにせ

ず、生真面目な彼女の性格を物語る。どこかかの誰かに見習わせた
態度であろう。

しかし——それも束の間、静寂は直ぐに破られる事になる。

——キイイイインッ！

「なのは!？」

「ユーノ君、これって!？」

前にも体験したジュエルシードの発動。今回もそれと酷似した魔力の反応を感じ取ったのだ。しかも以前とは比較にもならない巨大な反応、黙って放置しておくかどうかどんな惨事が起こるか容易に想像がつくほどに。

必然としてなのはがそれを見過ごすなど有り得ない。素早く普通の小学三年生から魔法少女へと意識が切り替わり、彼女は元凶を突き止めるべく海鳴市を展望できる高層ビルの屋上へと駆け出していた。そこでなら誰の目にも憚る事なく、レイジングハートの発動も自分の力を出し切れるからだ。

そして、彼女とユーノが高層ビルから街並みを見下ろした時、そこに浮かぶ景色は変わり果てた街並み、まるで街中に巨大な樹木が根を張るように聳え立っていた。

「ひどい……」

「多分、人間が発動させちゃったんだ」

ジュエルシードが一番強い力を発揮する、それは強い想いを持った者が願いを込めた時。単純に思うよりも思う、これは人間が複雑な心理を有するからこそ他の動物よりも強い願望として表れる。何より辺り一面を覆う現状が今迄の事よりも悲惨な惨事だと、いやが応にも認識させられる。

そして綴られるユーノの一言がなのはの心を穿つ。

「やっぱり、あの時の子が持っていたんだ。わたし、気付いていた筈なのに……、こんな事になる前に止められたかもしれないのに……」

責任感の強い故か自分の起こした行動に後悔の念が表れる。何とか出来たかもしれない、その気持ちが一層と自身を追いつめていく。

「なのは……」

ユーノから見ればその姿は痛ましいものであった。彼女が悪いわけではない、本来なら自分がやらなければならぬ仕事だからだ。それなのに、こうして自分以外の人間が苦しみ悩む……そんな姿は自分が傷つく事よりも辛いのだ。

彼がそんな葛藤に苛まれていると、レイジングハートがなのはの気持ちに呼応するように強い力を放つ。

まるで強い怒りと深い悲しみを交えて。

「ユーノ君、こういう時どうしたらいいの？」

「え：あ、うん、封印するには接近して封じないと駄目なんだ。先ずは元となっている部分を見付けないと」

と、ユーノが対策を講じる。しかし——そこへ二度目の驚愕が二人を襲う。

「刃新陰流！！風車あ！！どおりゃあああああ！！！！！！！！」

雄たけびのような絶叫で、誰もいない空間に巨大な回転の渦が巻き起こったからだ。しかし、それは二人にとって聞き覚えのある声、最近知り合ったばかりの青年にとっても似ている。ソレは尚も飛翔を続け樹木を根こそぎ切り崩す勢いだ。まるで草刈り機が通った後の如く、後ろには一つの道が開かれていく。

それがふと起動を高層ビルの屋上、つまりなのは達の元へと切り替わる。

「え？え？ふええええええええええ！？」

「あれって……まさか」

「よ、やっぱりお前らか」

と、愛嬌のある声で目前に姿を現したのは、やはり鉄刃その人であった。彼は極普通にさも当然といった自然体で、柵の上から挨拶を交わす。何やってんだ、お前ら？の口調で。

「————ッ、あの、刃さん『何とかしたいんだろ？』……え？」

「だから、これはお前等が話していた石ころの仕業で、それをなの

はは何とかしてえ」

そして、なのはの二の句を遮り、何もたついてんの？といった軽いノリで行動を促す。まるで迷っている暇があるなら、さっさと動けよといった感じた。そこには些かの迷いも躊躇いもない。

それをポカンと反応した後に、なのは表情が先ほどと打って変わって明るくなる。

「はい!!」

「だったら、やる事は一つ！その石ころをとっと見付けて封印すりゃあいんだよっ！」

まるで馬鹿が伝染したように。

その小さな身でレイジングハートを振りかざし、

「リリカル、マジカル、捜して最悪の根源を！」

なのはは魔法の言葉を紡ぐ。それは彼女の才能が大きく開花されたといっても良い。魔法陣が展開されて幾つもの光がソコから飛び立ち、街を樹木を覆い尽くしていったのだから。

その光景に流石の刃もすげえなど感心する他なかった。

それだけの奇跡が目前では行われているのだ。

「見付けた！」

「本当!?!」

そして奇跡は続く、少女の気持ちに応えんが為に。

レイジングハートは形を変える、今の状況に最も即した形へと。

「行って! 捕まえて!」

少女の魔力がレイジングハートへと収束される。

それには……。

少女の想いが、力が、願いが。

そして光の閃光となって魔力は放たれた。

* * * * *

「刃さん、ユーノ君……わたし、本当は気付いてたんだ。あの子が
持ってるの。でも気のせいだって思っちゃって」

無事ジュエルシードの封印を終え、帰り路を歩く三人。そこでな
のはが思っていた事を口に出す。自分のせいで誰かに迷惑が掛かる
のはとても辛い、そう思ったから今回の事件は悲しかったと。今回
の原因となった男の子がジュエルシードを持っていた事にもつと毅
然と対応していれば良かったと。

だが、そんな少女の悲壮を刃は否定する。

「かく何をいうかと思えば。お前はあの石コロを見付けて問題を解決したじゃねえか。だったらもっと胸を張って堂々とすればいいんだよ」

「あはは……」

なのはとしてもその言い分は確かに分かる。だけど、理屈は分かっても気持ちは別物なのだ。そんな簡単に割り切れるほど大人でもなければ、経験を積んだ覚えもない。だから、少し無理をした声で応えてしまう。

それが癪に障ったのだろう、刃はなのはの服をグイッと掴んで持ち上げる。

「ふ、ふえ!？」

「や、刃さん!？」

刃の急の態度に泡をくったのか、戸惑うユーノ。

なのはも咄嗟の行為に慄いてしまう。

「甘ったれんじゃねえ!! 見ろ、この街並みを。お前が頑張ったからコレで済んだんだ。何時までもウジウジしてそれを否定するつもりかよ!？それともアレか、お前は神様で自分なら何でも出来ると思いがあってんじゃねえだろうな!」

「!？」

そう言って刃がなのは突きだした先には倒壊した家や道路が映しだされる。

「確かにお前が思ったように街は破壊されちゃったけどよ、その力であの石ところを封印したからこそ、また立ち上がれる奴等もいんじゃないねえのか？ だいたいお前なんてまだガキじゃねえか、それがコレだけの事をやっただけでも大いに意味はあると思うぜ。要は諦めなけりゃあ夢は叶うってな、その力を腐らしちまうのは勿体ないだろ？」

言外に一度くらいの失敗でヘコたれてどうすると、高町なのははその程度の存在なのかと、熱く、だが確実に心に響く言葉。それは彼の人生が敗れる事や間違ふことの悔しさ、頑張って勝ち取る事の尊さを知っているからこそその重みでもあった。

「刃さん……」

なのはの瞳に光が宿る。それはまだ小さな……灯り始めたばかりの火。だけど、確かに虚ろな瞳から力強い瞳へ変わった瞬間であった。

まるで次は失敗しない、今迄と違う心構えのように。

その表情に満足したのか刃はこれ以上の言葉は必要ないとばかりに彼女を解放する。

「よし！ んじゃ、帰ろうぜ。士郎達も心配してんだろうしよ」

「うん！」

（なのは、……良かった。少しは元気になったみたいだ）

———後日談。

僕、ユーノ・スクライアが知った新事実。

あの日、刃さんがジュエルシード暴走の場に現れたのは、本当はなのはの為でなく、単なる個人的な恨みだったみたいだ。

何でも片付けを任された「翠屋」が滅茶苦茶にされたとか言っ

怒られるのはオレなんだぞと、怒り心頭でした。

案の定、オーナー事、高町士郎さんは店の被害を見て、かなりの雷を落していたし。

何気にジュエルシードはこんな身近にまで影響を及ぼしていたんだな。

そしてこの時、士郎さんを怒らしては絶対に駄目だと思ったのは、言うまでもないね。

第三話 固まる決意（後書き）

アニメを観て思った事。第三話で樹木が出現した時、なのはは勿論、結界など発動された場面がありませんでした。それなのに何で誰も気付かないんだ？確か第二話で子犬がジュエルシードを発動させた時も飼い主の女性はその姿を見て気絶しています。つまり、普通の人間にも見えてるとしか思えないんですよ。

そんな自己解釈の元、刃君を無理やり絡ませてみました。

※刃新陰流風車やいばしんかげりゆうかざぐるま

闇玉に吸い込まれた刃がその世界から脱出する際に覚えた技。
応用として火炎車かえんぐるまや風雷風車ふうらいかざぐるまがある。

第四話 少女の苦悩（前書き）

魔法少女になってからの初めての失敗：それは高町なのはにとっての痛恨の悔みとなった。それでも鉄刃の言葉もあり、心に小さな火を灯しながら立ち直る。そして確固たる決意のもと、ジェルシード探索に力を注ぐのであった。

法少女リリカルなのは、剣豪伝説、始まります。

第四話 少女の苦悩

「ふう〜、やっと拭き掃除が終わったな」

空雑巾を片手にドテッと座り込む刃。

彼は居候の身として普段は家の雑用事を任される。つまり道場の清掃を仰せつかっていた訳だ。刃とて剣の修行に身を投じるサムライ、こと道場等の掃除に限っては思いもよらず熱心であった。それなりに思う物も多いのだろう。ここは彼が恭也と一騎打ちをした場所でもあるのだから。

そして倒壊するなどの騒動もあったが今ではスツカリ改築も終わり元通り。

尤も今回の掃除に限っては前回のジュエルシード暴走事件が関与してくるのだが……。

——詰まる所、単なる罰当番みたいな処置である。

「ふむ。お主も精がでるのう、普段の修行もこれくら精が出れば良いのじゃが」

「なんでえ、ムサシかよ」

そこへムサシがタンタンと入り込み、劳いの言葉をかけた。ただ彼の場合、口が達者な為に実際自分は動こうとしない面が多い。だから刃も軽薄そうな眼差しを向け心の中で小言をいう。

要するに口だけ挟んで何もしない奴って嫌だよな、と。

だがそこは百戦錬磨の宮本武蔵。伊達に人生経験が永くなく、敵意や敬意に敏感に反応しすぐさま刃の心の内を見破って説教モードへと入る。

「何じゃ？その眼は。そもそもお主が高町家の方々に迷惑を掛けたからこうなっておるんじゃないやろう。普段から精進が足りんからこうなるんじゃない、タワケ者め」

「うっせーな、大体あれはオレのせいじゃねーだろ。言ってみればオレだって被害者みたいなもんだぜ？文句があるならあのジュエルシールドつつうのにいえよな」

「ふん、任された以上は成し遂げるのが筋というものじゃ。いつまでも女の腐った態度など女々しいと思わんのか」

火花が飛び散るように互いの眼光が鋭くなる。売り言葉に買い言葉、こうなってはもう二人は止まらない。師が師なら弟子も弟子とあった所か。たちまち近場の得物を握り、道場の至る所に剣戟と埃が飛び散る始末。これでは清掃した意味を台無しというもの。結局は似た者師弟なのだ。

互いの憂さ晴らしが済んだ頃にはもう、二人は大の字になって道場で寝転んでいた。

「なあ、ムサシ」

「なんじゃ？」

「あれからもう三年近くなるんだな……皆、元気でやってかな」

昔を懐かしむように天井を見上げる刃。

「ふん。それなら問題なからう、さやか殿はあれでしつかり者じゃ。それに鬼丸も元に戻ったし、かぐやや地底人の問題も解決しとるしの」

武蔵も喧嘩仲間の小次郎や十兵衛の事を思い出し、同じように天井を見上げる。

「本当、元気でやってんのかね」

この時、二人が思い描いたのは昔の激闘と仲間達の姿であった。

* * * * *

― 同時刻 ―

高町家で刃とムサシが子供の喧嘩を転じていた頃、もう一人の主役とでもいう少女高町なのは月村家のお茶会に誘われていた。何でも親友であるアリサ・バニングスが最近様子の可笑しい彼女を心配し、同じ月村すずかと画策して立食を企てたのだ。コレで少しでも元氣を出してもらおうと。

もっとも大義名分に月村家の当主、月村忍と高町恭也のプチデートも利用していたりするのだが。

—————まあそれはさておき、そこはお約束とでもい
べきトラブルが起こる。

なんとも空気の読めない「ジュエルシード」は、月村家の猫に憑
依して傍迷惑な騒動を招いたからだ。

まさに二人の心意気を台無しにする様はK・Yそのもの。

そんな中、二人の親友を誤魔化すようにジュエルシード封印へと
行動したなのはの前に、更なる混乱を重ねるように立ち塞がる少女
が現れた。

「ユーノ君、今、あの子も魔法を使ったよね！？まさか……」

「あれはデバイス、間違いないよなのは。彼女もなのはと同じ魔導
師みたいだ」

（間違いないこの子、僕と同じ世界の住人。でも、何でこんな世界
にいる！？）

その一見は眉目秀麗、金髪ツインテールに凜とした雰囲気纏わ
せ、黒服の装いが戦士としての風格すら漂わす。しかも年代は対峙
する少女とほぼ同年代。しかし、無機質で冷たい瞳はどこか儚げで
消え入りそうな陽炎のよう。まるで誰かに振り向いて貰いたいよう
に泣く幼子の面影さえある。

矛盾——内在する雰囲気と発する雰囲気の違和感。

それをなのはは敏感に感じ取った。

（何だろう？まるで誰かの後を追いかけるような、そんな空虚な瞳）

だが金髪の少女は同じ魔導師と見てとったか、なのはを敵として認識する。どこまでも無機質と無感情な態度で己のデバイスを握る手に力を入れる。

『Arc Saber』

それを主の意志として受け取ったのか、呼応するように音声を発し鎌状の形態から光弾を放つ。とても少女が使用する力とは思えない、巨大なそれでいて力の余裕を感じる攻撃。まさに歳不相応の天才を感じさせるに相応しい一撃だ。

——しかし、もう一人の少女も天賦の才では決して引けを取らない。

『Protection』

人間に防衛本能があるように、人工知能が搭載されているデバイスもまた主の危険に敏感に反応する。即ち主の意思を余所に自ら防ぐシールドを展開したのだ。これは互いに信頼関係が築かれているからこそ為し得る業、まさに人や人口知能という垣根を越えた絆に等しい。

なのははもその意を素早く汲み取り相手の少女の攻撃を防ぐと同時に、大空へと鳥のように舞う。

それを追う金髪の追撃者。

図らずも両者は空中戦を選び、デバイスとデバイスを交差させ、

束の間の膠着状態となった。

「なんで…何で急にこんな…」

「応えても…多分、意味はない」

「ッ!」

問答、両者の意見が交わされる。そこにあっただのは疑問と拒絶。白の少女が困惑を見せれば、金髪の少女は壁を張り、互いの感情だけが昂り合う。

しかし——そこに両者の経験の差が表れた。

戦いの世界に入って間もないのはは周囲の意識を対峙する金髪の少女だけに向けすぎたのだ。本来自分が真っ先に注意しなければならぬ、ジュエルシードの封印を蔑にして。逆にその間隙を突き、もう一人の少女は己の目的を最優先と、ジュエルシードの確保に走る。そう、巨大化した猫に入っているロスト・ロギアへと。

（あっ!？）

なのはがソレに気づいた時には既に遅く、ニャアウウと意識を刈られ、いななきを上げる猫の声。金髪の少女が放った魔力の一撃は確実にジュエルシードの本体を捉え、その力を封印する。

しかも致命的なミスという失態を付けて。

なのはの注意が散漫になったスキを、金髪の少女は恐ろしい迄に冷静で的確に突いたのだ。

「ごめんね……」

その中に申し訳ない気持ちと、躊躇われる気持ち、そしてそんな自分を嫌う気持ち。様々な含みをたった一言に乗せ、大きな魔力弾を飛ばした。

一瞬の隙が勝敗を別ける。

戦いに於いて弱肉強食は理。

例えどんな言い分があろうと結果が全て。

———ただ、

自分が伝えたかった事、分かりあいたいと思った事。

そんな想いが走馬灯のようになって、高町なのはも弾けるように散った。

* * * * *

「あゝあ、やーっと、終わったぜ」

「まったく、何でワシまで……」

「お、終わったみたいだね。お掃除御苦労さん」

月村家で誰も予想だにしない壮絶な戦いが行われていた頃、ここ高町家の道場では二度手間となった掃除を終えた刃とムサシがいた。

勿論そのタイミングを見計らうように登場する高町士郎。

なかなかどうして彼の眼も鷹のように鋭いものだ。見てないようで見てるのは抜け目がない。

そんな士郎に向けて恨めしい視線を送るのは刃。自分達が居候の身という立場も関係して力仕事に文句が言えない事、今回の件に関しては自分鼻にも悪くないという思い、それらが分り易いほどに表情となって見てとれる。

そんな刃の心情を察した士郎は、苦笑いしつつも兼ねてより聞きたかった事を口にした。

「なあ、刃くん。初めて会った時から思っていたんだが……、もしかして三年前、この日本であった事に君は関連しているのか？」

（まさか、この男！？）

「ん、三年前？何の事だ？」

武蔵は何かを察したのか真剣な眼差しを、刃は本気で何の事か考えているようだった。

「これは俺自身、半信半疑な事なんだが……薄らと残る記憶の中に地面に飲み込まれた覚えがあるんだ。そして眠気が襲ってきた後は何も覚えていない、ただ一つを残して」

記憶の紐を一つ一つ解きほぐのように言葉を綴る士郎。

「巨大な竜、首が八つもある姿だけが脳裏に残っているんだよ……」

真剣な、それでいて虚言は許さないという眼光が刃達に向けられる。

（やはりこの男、ヤマタノオロチの中に取り込まれた記憶が残っているみたいじゃな）

「あゝ、あの事か」

「ふゝ。その事ならワシから説明しよう」

事は重大な内容だがその真剣さを微塵も感じさせない刃の口調と、交渉事に関しては彼の代理人ともいうべきムサシの反応は面白い程に割れた。

この辺は一般的な常識として一枚も二枚もムサシが上なのだ。

隠し事は返って疑心を生み互いの関係を悪化させる。まして目前の男は半ば事件の事を確信しているとあっては冗談で返すは失礼。そんな思惑を込めムサシは徐に過去の事件に関する情報を公開した。

三年前の出来事、そして鉄刃やこの日本で起きた数々の不可思議な現象も。

初めは疑惑の念も抱いていたが徐々に……だが確実に士郎の疑惑は確信へと変わる。これで全ての猜疑が解けた。彼等が一体何者であったのか、得体の知れない力の一旦がどんな物であったのか、そ

して、ここにいる宮本武蔵も本物であるという事実を知った。

勿論——その日の内に、高町家の家族はそれを知る事になる。

鉄刃の過去と彼が関わってきた事件を。

* * * * *

刻は少し戻り、なのはと金髪の少女が一戦を終え、30分を過ぎた頃。月村家の一室で関係者が見守る中、なのはの意識が覚醒する。そして皆様に彼女の身を案じるように悲壮感を漂わし、無事であった事に心から安堵の声をあげた。

「なのは!？」

「なのはちゃん！」

「……アリサちゃん、すずかちゃん」

ゆっくりと意識が戻る中でなのはも臃気な声を出す。

（そうだ、私、先の子と）

（なのは、大丈夫？）

そしてゆっくり状況を把握しつつあったなのはに、ユーノも心配そうに念話を送る。彼はあの後、なのはの身を案じ急いでアリサやすずかに知らせに行っていたのだ。勿論彼は魔法で動物形態になっている故、その所作を以て伝えていたのであるが。

唯一事情を知るユーノにとって、なのはの安否はやはり気にかかっていたのである。

（ユーノ君……あの子は？）

（なのはと戦いが終わった後、ジュエルシードを回収してどこかに行っちゃった）

（それでもう夕暮れ時なんだね。それに皆にも心配かけちゃったし）
現状を整理するにあたって落ち着きを取り戻したなのはが窓枠を眺めると真っ赤な夕暮れ時。心に大きな穴を開けたような虚脱感を感じさせずにはいられない。

しかし今一番、なのはが取るべき行動はそれではなかった。

「なのは、一体何があったんだ？」

少し厳しさを込めて恭也がなのはに理由を問い詰める。

そう、何より周囲の人間が彼女を心配し、怪我をしてしまった事についてなのだ。

流石に妹に甘い兄恭也とて今回ばかり有耶無耶にするつもりもなく、言外に確認と言うべき言葉があるだろう？と厳しい眼差しを向けた。

自然、部屋にいる全ての者がなのはへと様々な思惑の視線を移す。

それを感じ取ったのはも、直ぐに自分の行動の軽率さを理解し、心から謝罪をする。

「御免なさい。ユーノ君を捜してる内に転んで、気が付いたらここで眼が覚めたの」

「……そうか。皆も心配していたんだぞ、ほら」

心中で何かを察した恭也はそれ以上の追求を避け、皆にも謝らなければならぬだろうと促す。

「アリサちゃん、すずかちゃん……それにお兄ちゃんも、忍さんも本当に御免なさい」

そこに誠意を感じ取った皆はこれ以上の追及を避け、一先ず彼女の無事に心を下ろすのであった。何より弱った少女を追い詰める程、厳しくなれる筈もなく。自分の軽率な行為を自覚してるなら、と各々の中で思いを胸に仕舞いつつ。

そして――――未だ吹っ切れぬ不安を胸に、少女は兄と家路へ帰るのであった。

―― おまけ ――

「んで？オレ達のお土産は？」

「何でお前にお土産なんて持ってこないといけないんだ」

「あんだと！日々、清掃に勤しむ人間に労いの一つがあってもいいじゃねえか！」

「それは当然の事だろう。何しろ居候の身分なんだ、寧ろ率先してやらねばならない仕事だろうが」

ドタバタと始まる取っ組み合い、いわゆる子供の喧嘩みたいなものである。

鉄刃と高町恭也。

何を話そうと相も変わらず仲のよい喧嘩仲間であった。

第四話 少女の苦悩（後書き）

ここで刃の過去話が露呈したのは後々のフラグとなっています。Y
A I B A界からの参入者の為に。

それとなのはの葛藤。心の内を一人で抱え込み悩む人間にとって、
刃の様な人間は眩しいんですね。

少なくとも小さな子供にとって明け透けのない態度はどこか羨まし
さを感じるものだと思います。それを変化させて行くために、アニ
メ通りに悩む様を表現してみました。

まあ：出来云々の方はともかくとして、作者の思惑としてはそんな
流れとなっています。

因みに刃の過去話を端折ったのも別の回で使いたかったからです。
どうせなら、なのはの親友たちの前の方がいいかなと。

第五話 温泉街（前書き）

新たな魔法少女の出現、それはジェルシード探索を更に混乱させるものとなった。また、初の敗北は心の葛藤を齎し周囲の心配を大きくさせるものとなる。

苦悩を胸にそれでも少女の歩みは止まらない……

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第五話 温泉街

「おいしい天気じゃのう」

「くっぴ」

「ふふん、この分では高町家の面々も楽しい家族旅行になりそうじやな」

曇り空一つない晴天、肌を触れる風は心地よく、大気にこもる熱も暑すぎない。まさに快晴、最高のお天気日和といえる、そんな日に縁側でムサシはお茶を啜りながらポツリと呟いた。その陽気のよさに庄之助もご機嫌のようだ。もつとも構図的に猫を抱く年寄りではなく、ハゲタカを侍らす年寄りというのは気にしてはいけないが。

さてムサシが何故こんな事を言ったかという、ただ今、日本は大型連休の真っ最中、例に漏れずこの高町家でも家族サービスが出来る数少ない休みなのだ。そうなる、と当然店はアルバイトに任せて家族は旅行の一つにでもとなる。もつとも今年は例年と違って珍妙な居候……もとい鉄刃達が居るとあってどうするか論はあったのだが、彼等も一緒にどうかとなった。だがカゲトラや庄之助も一緒となると流石にそうもいかない。

だからこうして刃やムサシ達は留守番となっていたのだ。

そして前方から近づいてくる何者か。

「おーい。翠屋からのお土産を持って来たぞ」

「ガウ♪」

カゲトラを傍に両の手でお菓子を持ち歩く刃である。どうやら「翠屋」から昼のデザートを持って来たらしい。あの店の商品なら期待大で楽しめるといふもの。それが分かっているから武蔵達は刃の下へと集まった。

「たまにはオレ達だけで居るっての良いもんだな」

「そりゃあ、つい最近までは武者修行も兼ねておったからのう。ここに居るとさやか殿の家に居ったのを思い出すわい」

そんな軽い挨拶、そこには——折角の羽を伸ばせる機会、自分達も存分にゆっくり満喫しようといった緩い空気が込められていた。何気に彼等も手前勝手なものである。

何にしても最高の茶菓子が出来たと彼等は家の中へと入って行く。

そんな和やかに過ごす、有る家の一日。

だけど彼等は気付いていない。

誰も手の届かない遥か遠く、暗く厚い場所から全てを見ている存在がいる事を。

そしてその存在は決して忘れる事の出来ない、古よりの存在。

大地を見守る彼等の存在を。

― 齒車は再び絡み合おうとしている ―

* * * * *

― 海鳴温泉 ―

自然豊かで休日等には観光客も賑わう海鳴市屈指のスポット、そこが湯の街と言われる海鳴温泉。勿論ここは温泉だけあって宿も揃えられており、意外にスーパー銭湯も備えられている。まさに慰安旅行としてはうってつけの宿泊地というわけだ。日帰りできる近場というのも海鳴市の人々にとってはポイントが高いだろう。

そして高町家も当然それを利用していたりするのだ。今回は彼等の他になのはの親友であるアリサ・バニングスに月村すずか、そして恭也の恋人である月村しのぶも一緒に。ちなみに月村家にはメイドがいてこの旅行に参加していたりもする。名をノエル・K・エーアリヒカイトとファリン・K・エーアリヒカイト、ノエルはメイド長でファリンはすずか専属のメイドだ。

彼等は高町家の居候、鉄一行を熱心に誘ったのだが大型動物の事を理由に断念、ならばせめてお土産でもと気持ちを切り替えて宿へと辿り着いていた。そして各々が日頃の疲れを癒すべく思う様に別行動へと別れていく。温泉に浸る者、自然の中で疲れを癒す者、旅館の中を回って貴重な時間を満喫する者、余暇の過ごし方はそれぞれに誰もが貴重な時間を愉しんでいたのだが……。

「見て見て、お土産コーナーとかあるよ」

「あら、アッチには卓球台もあるわね」

「うーん、どうしようか？」

「じゃあ、ジャンケンで決める？」

女三人寄れば姦しいとはよく言ったもの。まだ小さいとはいえその力は侮りがたし、誰に遠慮する事もなく羽目を外すは三人の少女達。高町なのはとアリサ・バニングス、そしてアリサ・月村すずかの三人娘である。

湯上りで浴衣姿の彼女達が髪を卸すその姿は、三人が三人とも雑誌の表紙を飾っても可笑しくはない。まさにゴージャスといわんばかりの潤いだ。

——しかし、そんな少し近寄りがたい雰囲気を持つ三人の下へ一人の女性が声を掛けてくる。

「はあーい、おちびちゃん達」

「「「？」」」」

妙齢の女性、少し気崩した浴衣は大人の色香を醸し、艶やかな肌は情欲を誘う……まさに見る者が見たらコロリと絆されたかもしれない。だがここに居るのは幼いながらも立派な女性であり、将来性という意味では決して劣らない逸材ばかり。残念ながらそういった甘い話しにはならなかった。

構図的には幻想郷、……になる筈だったのだが別の意味で不穏な

雰囲気醸し出す。実に勿体ないと思ったのは果たして誰なのか、周囲に発する気配を察して誰も近づかない。

三人娘もその陰呑を敏感に感じ取りこの人は誰だろう？といった感じで戸惑っている。

そして少女達の警戒に憶する事なくその女性はなのはの側へと近付くと、

「君かね、うちの子をあれしてくれちゃってるのは。あんま賢こそうでも、強そうでもないし……ただのガキンちよに見えるんだけど」

軽い敵意を向けてなのはを威圧する。まるでなのはとその女性の周囲だけ重力が重くなるような錯覚、ズシリと鉛を絡められて脚が動かない、そんな畏怖がなのはの身を竦ませた。少なくとも初対面の女性から敵意を向けられる覚えがないだけに益々意味が分らない。

その戸惑いに助け舟を出したのはやはり正義感の強い少女^{アリサ}。

彼女の偉大な所は口だけでなく行動で態度を示す事、まさにこんな場面で身体を張るのは中々に難しいのだ。

気丈に気持ちを奮い立たせてアリサは、なのはの前で相對する女性を睨み返す。

「なのは、お知り合い？」

「う、ううん」

それに対してなのはは首を横に振る。やはり初対面らしく帰って

来る反応は否定だ。

「この娘、貴女を知らないそうですがどちら様ですか？」

それを訊いて我が意を得たりとばかりに、精一杯の凄みを利かせてアリサは女性に問いかける。要訳すると私の友達に何喧嘩ふかけてんのよ！こっちは貴女の事なんか知らないってーの。といった所だ。

臉をパチクリさせてそれを訊き終えた女性は少しポカンとした後、毒気を抜かれたのか声高らかに笑い始めた。

「ごめん、ごめん。人違いだったかな？知ってる子によく似てたからさあ」

どことなく演技染みた謝罪であったがなのはに近づいて、フェレット^リをよしよしとペットのよう^ユに撫でる。その仕種だけ見ると大人が子供をあやす姿にも見えるが一応は自分の非を認めているみたいだ。

（今の所は挨拶だけね。忠告しとくよ、子供は良い子にしてお家で遊んでなさいね。おいたが過ぎると……ガブっといくわよ？）

（！！）

だがそこでなのはとユーノの頭に念話が流れてくる。それは警告、明らかに先の行為が意図的であったのを示す内容。噛み砕いていうなら宣戦布告に等しい挑戦状と言い換えてもいい。

女性はそれだけを残すと照れ隠しを装ってこの場を立ち去って行

った。

（ユーノ君、まさかと思うけど今の女性ってあの子と関係があるんじゃない？）

（なのはもそう思う？アイツは「うちのこ」って口にしてたから可能性は充分にあるよ。いや、今迄に僕達と関係がある人間を探ると他に思い当たる節がないし）

（じゃあ……またあの子と会えるかもしれないね）

（なのは？）

なのはの口調に変化を感じ取ったユーノは首を傾げた。

見れば先ほどまで狼狽していたのが嘘みたいに力強い瞳。

「ねえ、やっぱりお土産から見ていいかな？刃さん達の分を探しておきたいし、先に用事を済ませておいた方が心置きなく遊べそうだもん」

「なのは？まあ、アンタがそう言うなら別にあたしは構わないけど、なんか変わった？」

「うん。なのはちゃん、急に元気になったみたいな感じがする。もしかして今のと何か関係あるの？」

「だって折角の休みで皆と旅行に来てるんだもん。ずっと気にしてても勿体ないし、楽しまないと何のために来たのか解らなくなっちゃうと思うんだ。だから気持ちは切り替えてパパッと遊んだ方がいい

「思うの」

——ね？と言わんばかりのウインクで、なのはは二人の手を引っ張って目的のお土産を物色するのであった。

—トウルル〜♪—

部屋に振動するは電子音、電話を使用する際のアレ。夕飯時が少し過ぎた時間帯に浴衣姿の女性が悪戯な笑みを浮かべて受話器越しに相手が出るのを待っている。

「ふふ。刃君達、今頃何してるのかしらね？」

「そうだな、大方俺達がいらないのを良い事に羽目でも外してるんじゃないか？家に戻ったらそこらじゅうが散らかって大変だったりするかもな」

「あらあら。でも、あの子達も無理しないでこっちに来ればよかったのに」

「確かに。だが、庄之助はともかくカゲトラまでいたんじゃ無理があるだろう」

ガチャ。

「あ、刃君？私、桃子よ。留守番の方は大丈夫かしら？」

『おく桃子か。こっちは何も問題ないぜ。翠屋の皆も元気だし、オレ達も晩飯中』

「ふふ。お邪魔だったかしら♪」

『別に構いやしねえよ、もう殆ど終わった頃だしな。んで？そっちはどうなんだ』

「そうねこっちも恙無く皆、楽しんでるわ。でも、なのは達はそろそろ眠った頃かしら？あの子達も残念がってたわよ、刃君達が来ない事」

『だったら次からはカゲトラ達も一緒になるぞ？まゝ今回はお土産を期待してから、オレ達の事は気にすることだねーって』

受話器越しに伝わる笑い声。

高町夫妻と刃達の雑談はまだまだ終わりそうにない。

* * * * *

ハッハッと粗い息遣い、木の葉を踏み込む足音、いずれも深夜に響く音としては些か穏やかではない。月の灯りを頼りに森の中を奔り抜けるその姿、魔法少女こと高町なのはだ。もちろん彼女のペツト……もとい友人であるフェレットモドキも一緒に。

本来なら少女が一人で出歩く時間帯でないし、何より闇夜の森中

を奔る事は褒められる事ではない。というか事情を知らない人が見たら家出少女と思うだろう。それが極一般的な解釈な気がするが、今の彼女には「事情」というものがある。

—————そう、『ジュエルシード』という魔力の反応を感知したという。

「レイジングハート、お願い！」

いよいよ魔力の反応が近づいた所でなのははデバイスを起動する。

しかし……どうやら先客がいたようだ。

「二つ目」

なのはが現場に辿りついた時には見覚えのある少女がジュエルシードを封印し終えた所。その傍らには昼間、宿で絡んできたと思わしき女性を携えて。

「あーら、あらあらあら……子供は良い子でっていわなかったっけか？」

なのは達に気付いた女性がやや挑発気味に威嚇する。しかし昼間と違って特徴的なのは獣らしき耳と尻尾を生やしている点だ。見るからに普通の人間とは一線を画しているし、なのはにとって初めて見る獣人。

それは魔法世界に至っては普通に存在する「使い魔」という存在。

この辺に関してはやはりなのは反応が鈍く、ユーノの動作は素早い。何しろ彼自信が魔法のある世界出身だから当然の事だが。

「それを！ジュエルシールドをどうする気だ！？」

猫の威嚇よろしくフレットの威嚇、……コホン。本来ジュエルシールドを発掘したユーノは勿論それを黙って見過ごす事など出来なかった。彼も責任感だけでなく熱い正義感を持つ男だったのである。惜しむらくは傷ついた身体を癒す為に動物形態になっていた為、その説得力が半減してしまう点。実に勿体ない。

だが先客である金髪の女性と、その彼女を護るようにもう一人の女性はそうもいかない。

獣人の女性はたちまに大型の狼へと変貌を遂げたのだ。

つまり、お前たちは敵だ！文句があるなら掛けてこいやワレ、という意志表示。

（やっぱり！アイツは使い魔だったんだ。何でこんな世界に使い魔を使役するような高ランクの魔導師が来ているんだ？それにどう見てもジュエルシールドを集めるという事は、その力も知っていると判断すべきか）

「ユーノ君？」

（なのは、今から僕はアイツを相手にするから、もう一人の方をお願い！）

ユーノは素早く現状を判断すると、使い魔を切り離すべく別の方

向へと誘いをかける。

そして残された者の流れは必然と……。

「で、どうするの？」

「話し合いで何とか出来るってこと……ない？」

二人の魔法少女が対峙する構図となる訳だ。

「私は、ロストロギアの欠片をジェルシードを集めないといけない。そして貴女も同じ目的なら、私達はジェルシードをかけて戦う敵同士って事になる」

「だから！そういう事を簡単に決めつけないために、話し合いって必要なんだと思う」

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ、きっと何も変わらない……伝わらない！」

金髪の少女はこれ以上の問答を強引に押し切るように、初めて攻撃へと転じた。一呼吸の間を置いたかと思うと、信じられない速度でなのはのバックを奪い自らのデバイスを振りおろす。差し詰め袈裟切りといった言葉が似合うかもしれない。

しかし、それを逸早く反応したなのはも流石だ。

本当に運動が苦手なのか？という疑問符が付く位の見事さでソレを回避する。

「魔法」という力だから実現できた宙に舞うという回避行動で。

（まだ、まだ伝えたい事があるのに！何とか話を訊いて貰わなきゃ）

理由——なのはにとって一番気掛かりなのはソレ。何故自分達は争わなければいけないのか？何故力を併せてジュエルシードの封印が出来ないのか？何故そんな悲しい瞳をしているのか？

グルグルと脳裏を過る思考、それがメビウスの輪ばりに出口のない無限ループへと誘う。

だが相手もそれを黙って見過ごす程、戦いに関しては素人ではない。すぐさま好機と判断して自らが十八番とする砲撃魔法を撃つ。
すなわち——……

『Thunder Smasher』

紫電の光がまさに雷光の2文字に恥じない威力となって放たれたのだ。いわゆる一撃必殺に値する高威力の直射型に分類される魔法。貫通力よりは全体に及ぶ衝撃に比重を置いたのは電撃を伴う事でも分かるだろう。

だが、なのはも前回に比べて成長の速さを垣間見せる。

やや反応は遅れるも即座に自らも砲撃魔法を撃ったからだ。

『Divine Buster』

こちらはなのはが編み出した貫通力を重視した一撃必殺。波及効果こそないが単純に魔力を相手にぶつけるだけあって、本人の魔力次第で如何様にも威力が上がるのが恐ろしい。

その砲撃と砲撃が激しくぶつかり合い、魔力と魔力の拮抗する。しかし、そこでのなのはの強い意思が更なる力となって均衡を打ち破る。まさに「魔法」少女達でなく「魔砲」少女達と言った方が相応しい撃ち合いだ。

（はぁはぁ、やったの……かな？）

雲散する霧のように魔力が薄れていく中、渾身の力を使ったなのはは息を荒げて決着の行方を探る。

———と、そこへ虚をつくように降り掛る声。

『Scythe Slash』

なんと金髪の少女は上空から直滑降でなのはに狙いを定めて来たのだ。それも接近戦に特化したと見られる鎌状の形態に変化したデバイスで。なのはが慌ててそれに反応するも、結果として首に突き付けられる形で終わってしまう。

つまり———「決着」という二文字である。

「……」

「……」

それを理解していたから互いの中で、束の間の無言が空気を支配する。そんな静寂を破ったのがレイジングハート、主の敗北を理解しジュエルシードを相手に譲り渡したのだ。その自律行動はある意味、未来からきた某猫型ロボットも顔負けの判断力を誇るかもしれない、同じテクノロジーの結晶として。

まあ、それはさておき。

「主想いの良い子なんだね」

その意図を汲んだ少女もこれ以上の争いは不毛とばかりにジュエルシードを確保する。勝者とは常に余裕がある存在なのだ。

尤も挑戦者がそれで素直に引かないのも世の習わし。

「まって！」

滲み出る悔しさを胸に仕舞いなのはは叫ぶ。

「……出来るなら私たちの前にもう現れないで。もし次があったら今度は止められないかもしれない」

「なまえ、あなたの名前は！？」

「フェイト、……フェイト・テストロッサ」

月明かりに照らされた金髪の少女は自らをフェイト・テストロッサと名乗り、一陣の風に舞う様に飛び去って行く。これが後に終生の親友となる者の名前を、なのはが初めて訊いた瞬間でもあった。

第五話 温泉街（後書き）

なかなか人物を扱いきれないのが不完全燃焼の出来具合。

あとアニメでこの回を観て思ったのが、なのはさんの運動神経に関する設定って変だよなという事。

アレだけ動き回れる人間で戦闘も素人だったのに随分パワーアップしてるんですよ？

これじゃあそんな設定なくともいいのに。

第六話 ターニング・ポイント（前書き）

フェイト・テストロッサ。金髪の少女はそう名乗りを残して、なのはの前から姿を消した。自分だけの胸に秘め、なのはの葛藤は続く。誰にも語れない魔法の話、自らの正義感が自身を追い詰めているとも知れずに……

魔法少女リリカルなのは 剣豪伝説、始まります。

第六話 ターニング・ポイント

——夕日が沈む僅かな時間帯。街は紅色に染まり街行く人々の雑踏が盛んになる。そして一人の少女、高町なのはが海沿いの防波堤を独り物想いに耽け寂しそうに歩いていた。その理由はクラスで起こった一つの騒動に端を発する。

彼女の親友、アリサとすずかは先の温泉時からなのはの様子を心配して元気づけようと躍起になっていた。その成果もあってか一時に比べなのはの様子も明るくなり、胸を撫で下ろしたのも束の間、なのはは痛恨の失態を犯す。

それは金髪の少女を思うあまり二人の話を無視していた事だ。いや、それだと語弊がある。二人が特にアリサが激怒したのは心の内、隠し事をして何時までも明かそうとしない煮え切らない態度と、自分達を蔑にした気持ちの方向性。そこに噛み付いたのだ。

——親友である自分達より大切な事って何？

——私達の関係ってその程度だったの？

——それとも親友だと思ってたのは自分達だけ？

話してくれなきゃ何も伝わらない。皮肉にもそれを実行すべく当人が、足元を疎かにした結果によって招いた不祥事だった。

勿論なのはそれに気づいている。だからこそ自己嫌悪に苛まれ、親友達の事を想う。

— Side Nanoha Takamachi —

この日、私はアリサちゃんと喧嘩をした。ううん、喧嘩といっても悪いのは私の方。だって、アリサちゃんは自分の気持ちを晒して怒ってくれた。だけど……私はそれに対して何も答えられずにただ誤魔化す事しか出来なかったから。

本当なら、親友に隠し事なんかしたくない。自分の気持ちや感情を表に出して応えたかった。だから、それが出来ない自分に自己嫌悪を抱いちゃったの。あんなに好きな、大切な親友を傷つけてしまった事にが悔しくて。

やっぱり、私が間違ってたのかな。

いくら約束だからって二人を裏切って良い理由にならないから。

それに、刃さんなら、こんな事しないよね……。

あんなに叱って教えてくれた筈なのに。

— Side Out —

* * * * *

「初めて会った頃はさ、私、今よりずっと気が弱くて思った事全然言えなくて……誰に何を言われても何も反応できなくて」

流れゆく街並み、まるでそこだけが時間の止まったような静寂の中、ポツリとすずかの口から昔の独白に似たセリフが零れる。果たしてそれは自分に向けてなのか、それともこの場に居ない誰かにむけてなのか、その心中はすずかにしか分らない。

しかし、隣に居るアリサだけは違った。何故なら彼女も同じ気持ちをも有する一人であったからだ。車内から見える景色に瞳をやりながらも、続きを引き継ぐように心情を吐露する。

「私は我ながら最低の子だったっけね。自信家で我儘で強がりで、だからクラスメイトをからかって馬鹿にしてた……心が弱かったからね」

今の自分達が親友でいられるのはなのはのお蔭。少なくとも今でも二人はそう思っている。それなのに、なのはの瞳はこちらに向いていない。その事が歯痒く、もどかしくさせるのだ。

———もっと自分達を頼って欲しいと。

———信頼して欲しいと。

なのはの自分達には干渉させようとしないうる態度に苛立ちながらも、自己嫌悪に二人は包まれる。だがそんな微妙な空気の中、アリサが何かを見付け、急に静寂を破る大声を挙げた。

「!?!? あれは…鯨島、車を停めて!」

「な、何? どうしたのアリサちゃん」

「あ、アリサお嬢様!？」

その唐突な大声に、すずかや車を運転していた執事の鮫島も驚く。

「すずか! あれ!!」

アリサが指差してみた先、そこにあったのは――――。

「なあ、本当にこっちからなのは匂いがすんのか? カゲトラ」

「ガルル♪」

カランコロンと下駄の音を響かせて歩く青年、鉄刃。背中には明らかに銃刀法違反にかかるであろう刀剣を背負うのは今更だ。その彼が街中を歩く理由は一つ、高町夫妻に末っ娘の迎えを頼まれていた事による。

勿論刃も初めはこれを渋った。それはすごく面倒な顔で。やれ稽古の時間が減るだの、やれ過保護だのと。だがそこは彼の性格を把握しつつある夫妻。食い意地の張った刃に相応しい晩御飯を餌に見事刃を釣り上げたのだ。序にいうとムサシもちゃっかり御相伴に預かるべく乗りかかって。

「まあ、なのはの奴も今一元気ねえし、少し発破でもかけてやっかな。つうか士郎も恭也もアイツを甘やかしすぎなんだよ。ガキはガキらしく泥だらけになって遊ばせてやりゃあいんだ。いっそオレ

が狩りの仕方でも教えてやった方がいいかな」

自分の父親がそうだったように野生で揉まれれば小難しい事ばかり考えないだろう。そう短絡的に結び付けるのはどうかと思うが、大凡彼の思惑はそんな所だ。

事実、側のカゲトラはそのお蔭で刃と知り合えた。尤も初めは凶暴な動物として襲いかかって来たのであるが、そこはすっかり忘却の彼方。

だからか、両手を組んでポキポキと音を鳴らす。

実にあくどい顔である。
たのしそ

「ガルウ？」

「お、なのはの居所が分ったのか？」

クンクンと警察犬の様に何かを見付けカゲトラが向きを変える。その先にあったのはキラリと光る宝石、何とジュエルシードであった。まだ魔力の発動前なのか周囲には影響もなく、物騒な気配もない。

それならと、無造作に刃はソレを掴む。

「確かこれがなのは達の探してるジュエルシードとかって石コロだったな。なんでえ、こんな簡単に見つかんのか」

誓って言うが本来はそう簡単に発見出来る代物ではない。魔力が発動する事によってそれを探知し、封印するのが定石なのだ。例外

として広範域にこり押しで魔力を流し、強引に発動させるという手段もある。通常は砂漠に投げた石を見つけるような、気の遠くなる作業と根気が必要と言えピンとくるだろう。やや誇張気味であるがそれ位、労力と時間を有する。

つまり刃がそれだけ恐ろしい強運を持ち、「龍神の玉」という探索作業を経験し、カゲトラの野生の力を以てして偶然を重ねた結果と捉えてもいい。身も蓋もない言葉で飾るなら単なる偶然、ビギナーズラックだ。

——そして案の定、連鎖反応は止まらない。甲高い声で刃を呼び止める存在がいた。

「ちょっと、そこのあんた!!」

「あ、アリサちゃん、いきなりは拙いよ」

仁王立ちして刃を指さす少女とそれを諫める少女の姿。

「あん? ……ああ、お前ら確か、なのは友達だっけ」

刃が誰かと思い振り向いた先に居たのは先日の少女達。二人とも紹介を受けているので顔は覚えていた。しかし、その後が頂けない。

特に興味の薄い事には適当な覚え方をする彼は、彼女達の名前を覚えていなかったのだ。基本的に自分と接点のない人間はあまり印象に残らない楽観ぶり。オブラートに包めば細かい所を気にしないのが刃の大物たる由縁というべきか。勿論単に抜けているというの言っってはならない。主に彼の名誉のためにも。

そして、額に指を当てうくと唸りながら記憶の柵を開けようと悩んだ末に、

「ええーと、ば、ば、……爆発にツキカゲっ！！何でこんな所に居るんだ？なのは一緒じゃねーのか」

思い出した！とばかりにポンと手を叩いて、精一杯の笑顔で人差し指を突き付ける。一応これでも必死に記憶を振り絞ったのか、その笑みはどうだ？ちゃんと覚えているだろうと、キラキラ輝いていた。

一体どう覚えればそう間違えられるのか。ここまで来ると、ある種の才能かもしれない。特に金髪の少女はプルプルと怒りを抑えるように身体を震わせ、俯き加減。あのすずかでさえ、口を開けて呆れを隠せない姿はレアだ。

カウントダウン、秒読み開始でも構わない。

その失礼の極みに遂に雷が落ちた。

「なによ！この前、ちゃんと自己紹介したでしょ！？アリサ、私の名前はアリサ・バニングスよ！！あんた人の名前も碌に覚えられないなんて、どんだけバカなのよ？良い年した大人の癖に！」

火に油を注ぐとこうなるのか。そんなお手本というべき光景だ。虫の居所が途轍もなく悪いアリサは、一気に癩癩を起こす。自分の名前を未だ嘗て『爆発』等と呼ばれたのは初めて、最早こうなってはヒステリーが収まらず、ガーと捲し立てるように止まらない。

ちなみにこの時、別の世界でタクトを振るう某貴族の娘がクシャ

ミをしたのは気のせいにしておこう。世の中には知らない方が幸せな事もあるのだから。

彼女はズカズカと歩み寄りビシッと人差し指を向けると、一気に堪った不満をぶちまける。

「そういうあんたこそ、何でこんな所に居る訳？ 仮にも居候の身なんだから、少しくらいは役に立つ事をしなさいよ！ これじゃただの穀潰しも同然じゃない。ほんつとに木偶の坊なんだから」

「アリサちゃん、ちょっと落ち着いて、これじゃ鉄さんも話せないよ。せめて相手の意見も訊かないと」

「で、でも！ すぐかだって、この事は気になってるんでしょ！？ なのはみたいなボケっとした子が一人で歩いてたら、どんな目に合うか心配で堪らないじゃない」

自ら喧嘩別れした負い目を自認しているのか、アリサもすずかも心の奥底ではなのはを心配していた。その表れとして無意識の内に本音が口からポロリと出たのである。俗に言う正直になれない意地っ張りな子、古めかしい言葉なら「てやんでえ女」の本領発揮だ。

（何だ、コイツ等もなのはの事が心配なんじゃねえか。最初っから素直にそう言やいいのによ）

やや一方的に捲し立てられ動揺したものの、言われっ放しは刃の性に合わない。しかし、咄嗟に反論をしようとした時、アリサの口から洩れた本音の部分を訊いて全てを呑み込む。

そしてニヤリと生温かい視線をアリサに向けると、彼女もそれを

敏感に感じ取り真っ赤になって攻守が逆転する。完熟トマトのように頬を染め、な・な・な・な・な、なによ、文句でもあるの？と言わんばかりに睨むがそれがまた逆効果。

照れ隠しの反応がどんどん墓穴を掘り、居た堪れない気持ちになったアリサが感情を昂らせる。

「先から一体何なのよ！？ニヤニヤして気持ち悪い—————」

—————トクン、

「ッ！？」

だが、その負の感情に反応する物体があった。精一杯の反論を試みたアリサの言葉にジュエルシードが反応し、急激に刃の掌の中で魔力が暴走する。指の隙間から四つの光線を奔らせ、持ち主を消し去ろうと力がどんどん膨張していったのだ。

無論それは刃本人だけでなく、周囲の人間にも影響を及ぼす。以前の大樹でもそうだが暴走した力は見境なく人を傷つける。それを知っている刃は、手にしたジュエルシードを叩きつけるように手放し、二人の少女を護るべく剣を振りかざす。

「チッ！カゲトラ、そっちの二人は頼むぜ。オレはコイツをぶった切ってやる！」

「ガルウウッ！」

「ええ！？ちょ、ちょっと何なのよイキナリ！？」

「きゃっ!?!ま、待って、そこは引っ張らないで」

その言葉を合図にカゲトラはアリサとすずかの服を喰えると、刃の邪魔にならない様に近場の建物の影へと駆け出す。一切の淀みもない一連の流れ、二人の息はピッタリだ。

逆に咄嗟の状況に困惑気味の少女達。アリサは囁まれた場所が右腕の裾辺りなのでいいが、すずかは服の下腹部、乙女には微妙な位置が見えてしまいそうになり、ちよつと涙目で服を抑えていた。

だが、今は火急を要する事態。ソレを素早く左目で確認した刃が次いで櫓を飛ばす。

「やべえっ!?!オイ、お前らしっかり伏せてろよ!マジで冗談じゃ済まねーぞっ!」

その瞬間、刃が投げたジュエルシードから巨大な魔力の光が柱となって聳え立つ。天にも届かんとする勢いで、大気を裂き雲を払い建物を吹き飛ばし、圧倒的な力の渦が光を中心として、並みの人間なら立つ事も覚束ない風の奔流を形成する。

神々しい力と禍々しい力が織り交ざった神秘の力、それがジュエルシードをロストログアと言わしめる力の根源であろう。僅か小さな固まりでさ凄まじい片鱗を見せてくれるのだから。

願いし者の望みを叶える魔法の宝石。人が扱うには過ぎた力なのだ。荒れ狂う暴風の中、必死に光の柱を見つめる二人の少女は、それを初めて体験する事になった。

* * * * *

― 同時刻 ―

「フェイト!？」

「うん、これは……」

あるビルの上で海鳴市を眺めるフェイトとアルフが、その夥しい魔力の放出量に反応していた。常に鷹の目でジュエルシードの反応を探っている二人がソレを逃すはずもない。

「どうやらジュエルシードが発動したみたいだよ。あの面倒なちびっ子達も居る事だし、ちゃっちゃと片付けよう、フェイト」

「大丈夫、私なら、私とアルフが居れば誰にも負けない。それに、母さんが待ってるから」

覚悟を決めたフェイトがビルを飛び立つ。しかしどこか悲壮感の漂う雰囲気アルフも一抹の不安を隠せない。

（フェイト、本当にそれでいいのかい？ あんな鬼婆の言う事なんか従わなくても……いいや、あたしはフェイの使い魔なんだ。こんな時だからこそ、主を支えないでどうするんだい）

思い直すように頭を振るい、自分の主の後を追う様にアルフも続く。

それは、さながら二筋の流星のように。

「なのは！」

「ユーノ君、あれがそうなんだと思う」

そして、時同じくして気付く、もう一組の魔法ペア。

いわずもがなののはとユーノの探索コンビである。

「なんて力だ、これはあの時の大樹の暴走の比じゃない。放っておくと大変な事になる」

「うん、でも……何か違う感じがしない？ユーノ君。何て言うか今迄私が見て来たのは動物や思念みたいなのが実体化したのだったけど、これはそれと違う純粋なジュエルシードだけの力みたいな」

「確かにジュエルシードは人の願望を叶える物だけど、何もそれは依代を絶対に必要とするみたいじゃなさそうだ。魔力の結晶体みたいな物だから純粋な力の暴走だって考えられるのかもしれない。何にしてもこのままだと被害が大きくなる、早く封印しないと！」

街中で急に発動した巨大な魔力、それは嫌でも感知させるに充分な力の波動。今迄の発動と異なる力の源に躊躇したのも束の間、前回の街並みを瓦解させた大樹のような経験は二度と御免だと、なのは素早くレイジングハートを発動させ、封印に赴く。

——勿論胸の中にはもう一人の魔法少女フェイトの姿を胸に描い

て。

(きっとあそこにはフェイトちゃんも、……ううん、ひょっとしたら刃さんも居るかもしれない！)

「ウウウウウルル」

「な……なんなのよ、これは！？あの宝石が急に光ったと思ったら、台風みたいに荒れ狂って」

「わ、分らないけど、もしかして鉄さんはアレを知っていたんじゃない？」

吹き荒れる暴風の中、カゲトラはアリサとすずかを護る盾として庇う。地に低く伏せた状態で、腹の中に包まれた二人は辛うじて顔だけを覗かせる。

そして吹き飛ばされまいとカゲトラにしがみ付き、刃の正体をその目にした。

「うおりゃああああっ！！」

剣道でいう上段の構えから振り下ろす一撃。

しかし異質なのはその剣、刀身を包む光は自らのみでなく刃を覆い、全身が静電気を帯びたかのようにバチバチと音をたて輝く。

素人目に見ても明らかに異常ともいえる力の具現。

それがジュエルシードの波動と真っ向から克ち合った。

電力が放出されたかのようなバチバチという音、飛び散る火花、それでも物言わぬ宝石は自らが発光する光の障壁を以てしてソレを弾き返す。

後に残されたのは余波によって飛び散るガラスの破片と、クレーターのように直径5〜6mはあろうという窪み。

「ケッ！なるほど、こんなんじゃこいつは破れねえって事か、面白れえ……ちったあ本気になれそうだぜ。こんなもんで勝ったと思うんじゃねえぞ、ジュエルシード！」

そんな、強敵が現れたかのように、刃の顔は喜びで綻ばして叫ぶ。

残念ながら刃は魔法を行使できない。そもそもジュエルシードの封印などできやしないのである。ならば如何すればよいのか？答えは簡単だ。

力の源を壊してしまえばよい。

素早くそう結論付けた刃は再び構えを取る。しかも今度は力技に頼った体勢でなく、中段の構えから身体のみを抜き、嘗てのライバル六代目沖田総司の五段突きを放とうと。

「ちょ、ちょっと、なんなのよ、この光景は。こんなのが続けばこの辺り一体、大災害に見舞われちゃうわよ！？それにあの刃って奴、

なんであんな力がある訳？　どういう事なのよ」

（まさか、なのはちゃんはこの世界と関わってるの？　そう考えると、最近の様子に説明がいくし）

初めてみる規格外の力。そしてそのエネルギーの大きさに驚きを隠せないアリサ。いや、言葉こそ出てこないが隣にいるすすかも同様に驚きの顔をしている。

「ヘッ、上等だ！　だったらこれならどうだ！？　その亀みてーに固いバリヤもぶっこわしてや『ちよっと待ちなさいよ！』————る？」

だが、そこでアリサの横槍が入る。あまりの超常現象に街中が破壊されると思ったのか、アリサが咄嗟に叫んだのだ。

冷静に考えれば他に手がないのだが、そこは非日常という世界に初めて触れた事もあったのだろう。我が身の危険も顧みず刃を止めようと、カゲトラの腹から身体を乗り出す。

「あんた、あんな物騒な力をこの街中で使うって気なの！？　冗談じゃないわよ、そんな事したらこの辺り一体が更地になっちゃうじゃないっ！！」

「バーロ！　んな事言っただってな！、あんなの放っておけねーだろうが！？　それより危ねーから下がってろって言ってんだろ、バカやろーっ！！」

「でも！」

—————キイイイイン。

そこへ、二人の喧騒を遮断する不可思議な音が辺りを支配する。しかも同時に、ビル街を呑み込むように辺り一帯を覆い尽くす景色の変化、時間が止まったような空間が創り出されていく。

「今度は何だ！？……いや、コレは結界か？って事は——」

「な、何よ今度は？何で嵐がおさまってるの？どういう事よ」

「まるでここだけ隔離された空間みたい。それに人の気配までここにもないよ？」

コロコロと一片する状況、アリサとすずかはやはり理解が追いついていかない。そんな状況に駄目押しの一手となる少年の声が舞い降りる。

「刃さん！」

「やっぱな、この結界はお前が張ったのか？」

見た目はフェレット、中身は少年。そんな奇天烈な小動物の降臨によって。

（フェレットが喋った！？しかも知り合いみたいに話してるってどういう訳よ、もー！！！）

（まってアリサちゃん、あのフェレット見覚ええない？ほら、なのはちゃんから紹介して貰ったユーノ君って子に似ているような……）

（あ、言われてみれば。……って、ちょっと待ってよ、すずか！それってまさか！？）

「はい！今、ここは僕が結界を張りました。だから刃さんはなのと一緒に、ジェルシードの封印をお願いします！」

「「なのは（ちゃん）ですって！？」」

聞き逃せない名詞に反応するのは、その幼き少女の友人二人。

特にアリサはたったいま、考えもしなかった仮定を生み出したばかり。一縷の望みを打ち碎かれたかのように絶叫してしまう。

自分の友人がこんな事に関係していたのかと。

そして、二人が次に眼にしたのは、栗色の髪に跳ね返りのツインテールの髪型、白の服装で固められた少女が、ふわりと天使のように舞い降りてくる姿であった。

「アリサちゃん？それに、すずかちゃんまで……」

「「なのは（ちゃん）」」

その聞きなれた声に――三人の少女は氷のように固まった。

「刃さん、これは？何で一般の、それもなのはの親友がよりにもよって、ここにいますか？」

「別にオレがアイツ等に教えた訳じゃねえよ。偶然ジェルシード

を発見した所に居合わせちまっただけだ。そうしたら急に暴走しやがったんで、放っておく訳にもいかねーだろ？——それに、よ」

刃が顎をしゃくり指し示す先、そこには……。

「おやおや♪まったく、つくづく暇のようだね、アンタ達は」

「……」

ジュエルシードを挟み刃達を見下ろす形でフェイトとアルフの姿があった。

「アイツ等だろ？この間の旅行でオマエが言っていた相手って。どく見てもなのはと同じ年頃だし恰好もそっくり、おまけに鎌みみたいな武器を持ってるやあ嫌でも気付くぜ。確かデバイスとかっていう、魔法の杖みたいなものなんだろ」

「はい、でも油断しないで下さい。あの少女は、なのはと同等——いえ、戦い慣れているという意味では、なのはより上かもしれない。明らかに僕と同じ世界の出身みたいだし」

「やれやれ、まだ懲りてないと見えるね。言っただろう？お痛がすぎるとガブつといくって。まだ邪魔するってんなら今度はただじゃ済まないよ？」

その刃とユーノの発言を威嚇で返すアルフ。頭を掻く姿勢は呆れと嘲笑が混じり、獣特有の狩りをする不穏な殺気を身に纏う。まさに狼の名を冠する者として恥じないプレッシャーだ。しかも幸か不幸か、本日のアルフは不機嫌さもあって、3割増しの凄みが実に効果的となって表れる。

「クッ、君達は、コレが何か解って集めているんだろ！？だったら如何に危険で犯しちゃいけない行為だって事も知っているはずだ。こんな事をしていたら何れは管理局も介入してくるんだぞ！！」

「はん！そんなのはオマエ達に関係ないね。コッチは苛立っているんだ、これ以上意味のない論争をしようってんなら、力づくで黙らせるよ」

「ま、待って！フェイトちゃん、話を、話を訊いて欲しいの！」

そこへ我を取り戻したなのはが入り込む。

伝えたい「想い」・「気持ち」・「言葉」、それらを必死に募らせて。

「私には話す事なんて何もない。……あるとすればこれ以上、こちらの邪魔をしないでという事だけ」

「だったら！何でそんな悲しい――――」

フェイトの拒絶にも尚、裏に秘められた気持ちが何であるのか？それをなのはが言いきる前に、ポンと肩を叩き遮る刃。顔を横に振り真剣な眼差しでなのはを見詰め、口を開く。

「とりあえず今はそんな暇ねえだろ？オマエとユーノは後ろの二人とジュエルシードの封印を頼む。なぐに、心配するこたーねえよ。御託を並べて理屈を捏ねるより、実行あるのみ！オマエが確り心を開いて打ち合えば相手にもきつと伝わるはずだぜ」

「刃さ……ん？」

「てな訳で後は任せたぜ！オレは今からジュエルシードの暴走を食い止めてやらあっ！」

——そう。ジュエルシードは結界内に抑えた事で暴風こそ収まったものの、魔力の放出は未だ続いている。このままだと再び暴れ出すのは時間の問題だ。だから彼は誰よりも速く動く。

身体に漲る気迫が刃の全身を光で包み、その意志に呼応した魔剣『クサナギ』が先程よりも二周りは大きい波動を形成し、それが一つの塊となって上昇気流のように力場を生み出していく。膨張寸前の力の塊、そんなニュアンスが相応しいだろう。

そして、ギリギリまで溜めこんだ力を以て刃は円運動へと移り出す。明らかに平衡感覚というものを逸脱したその勢い、最早単なる回転というには生易しい速さ。刃を中心にエネルギーが渦を巻き、遂には局地的な竜巻を生み出してしまったのだ。

一体どれだけの力がそこに形成されているというのだろうか？通常竜巻は積乱雲を伴って発生するものだが、地上付近と上空の温度差によって大気が不安定になり積乱雲は作られる。その上昇気流を伴う渦巻きが自然界で生じる竜巻だ。それを一個人の力で為し得るなどまさに異常、魔導師顔負けの化物である。

「そんなばかな！？なんで個人の力で竜巻なんて作り出せるんだ」

「ユーノ君、そんな悠長な事言っちゃられないよ！？アリサちゃんもすずかちゃんも、確りカゲトラ君に掴まって後ろにいてね。ここは絶対に護らないと！」

「あーもうっ！さっきから何なのよ、この状況！？なのは、後でキツチリ説明しなさいよっ！」

「なのはちゃん、絶対怪我だけはしないでね。そうになったら私もアリサちゃんも、きっと後悔するから」

「――うん、御免ね。私がキツチリしていなかったから、こんな危ない目に巻き込んだじゃって。だから約束する、この件が終わったら全部話すね」

咄嗟に反応したなのはが、アリサとすずかを包むように障壁を展開させる。勿論そこには親友を任された事もあるが、何より憑物が取れたかのような表情、護れたという行動が嬉しかったのかもしれない。

ケジメという覚悟を纏い、なのはは力強く二人の言葉に応じた。

「ッ、あの男の人は一体……アルフ、あの人から魔力を感じる？」

「いーや、まったく感じられないよ。信じられないけどアイツ、魔導師じゃないみたいだ。っていうか冗談だろう？何で魔力もない人間があんな事できるのさ」

一方フェイトとアルフもこの光景に驚きを隠せない。魔法陣もデバイスもない人間が作り出す圧倒的な力の渦、不謹慎かもしれないがソレに魅せられてしまったのだ。

「ウオオオオー！ー！ー！ー！ツツ！」

雄々しい咆哮の元狙いを定めた刃は、一振りの剣戟に乘せて竜巻の渦を放つ。狙いは宙に浮かぶジュエルシード。並みの力はその障壁を打ち破るのは至難を極め、高位の魔導師でなくては封印も覚束ない結晶体。

——そこに自然の暴力とも呼ぶ圧倒的な破壊の渦が、小さな塊を一瞬にして呑み込んだ。

ドオオオン！という轟音が轟き爆煙が辺りを包む。明らかにジエールシードの張る結界との衝突に於けるエネルギーの拡散、余波は止む事もなくビルの上層部分を吹き飛ばし、ガラガラと崩れ落ちる瓦礫は礫となって地に降り注ぐ。

そんな見るも危険な僅かな時間。

暫しの静寂が訪れ爆音のあった場所に視界が取り戻されていくとそこには確かにキラリと輝く宝石が中に浮かんでいた。

「なのは、早くあれを封印しやがれ!!」

「ここがオマエの仕事所だろう? とばかりに発破を飛ばす。

「うん！任せて」

無論なのはもそれは承知済み。ジュエルシードの封印は魔導師である自分達の畑なのだから。後ろの護るべく友の気持ちを乗せ、素早く飛び上がる。

——しかし、この一言に反応したもう一つの人影。

「……」

「……」

沈黙を守る宝石を挟み、なのはとフェイトが対峙したのだ。

双方譲れぬ想いで睨みあっていたが、ふとなのが口を開く。

「この間は自己紹介できなかったけど……私、なのは。高町なのは。私立聖祥大学付属小学校三年生」

（どうして、そんなに寂しい眼をしてるのか）

相手の事を知るために、自分の事も知って貰いたい。

今迄は相手の事を知ろうとする気持ちばかりが先走り、伝えていなかった部分。

高町なのはという一人の少女の名前。

当たり前の行為がここで初めて二人の間に織り為された。

時間にして一拍の間、ずっと無言を貫いていたフェイトは何も応えない。否、これ以上話を訊いちゃ駄目だと、無理矢理払うかの様に臨戦態勢を取る。

勿論目的は目前のジュエルシード。

『Sonic Move』

無理に争う必要はない。余分な疲労を選ぶ事もない。そんな判断を取ったフェイトは持ち前の機動力を活かし、誰よりも速く目的を遂行すべく手を伸ばす。遂行した後は転移魔法という撤退手段を切り札にして。

「いけない！」

それに対し、遅れて反応したなのは焦りの声を挙げる。慌てて足元に白い羽を展開した高速移動魔法を発現し、追いつがるが――
――。

そこに第三者の影、立ち塞がる城の様にジュエルシードの前で仁王立ちする刃が在った。

「甘めえよっ、そんな虫の良すぎる事を黙って見逃すと思ってるのか？」

「ッ！？ 貴方は……」

「刃さん！」

クサナギの波動を推進力として、空中の主戦場に見事躍り出たのである。その頼もしい味方の出現に、なのほも喜びの声を挙げ顔を綻ばす。

しかも、刃の行動はそれだけに止まらない。

右手に掴みし魔剣の向きを水平に流し、ジェット噴射の要領でフェイトとの間合いを一気に詰め、先制打の一撃へとなだれ込んだからだ。

「でりゃああああっ！」

（駄目、この間合いじゃやられる。躲さないと！）

フェイトの額に流れる一筋の滴、体中の毛細血管から悲鳴に近い血流の音が体内を駆け廻り、心拍音が爆発するかのように高まりだす。――この男の一撃を真っ向から迎え撃つのは危険だと感じ取った末の回避行動、咄嗟に垂直的に飛翔して鋭い弾丸となった呐喊から身を守る。

「チッ、躲しやがったか。なら、これならどうだ！？」

「バルディッシュ！」

己の突進を回避されたと知るや刃は鋭角に切り上げ、尚もフェイトを追い詰める。その動きはさながら追尾機能のような流れ、巧みにクサナギの角度を変える事で最も相応しい力の流動を作りだす。まさに卓越した技能があつてこそその戦闘力。

フェイトにとっても高速移動に付いてこられる相手等、初めての経験だったのかもしれない。己の頼りとする愛機、インテリジェンスデバイスの力をフル稼働させ魔力を込める。

それは目前の男を、刃を、対等の相手として認めた瞬間だったのかもしれない。

両者は互いに剣戟という火花を散らし合う。

見る者によっては舞踏とも呼べる近接戦闘で。

「やっぱり貴方もあの女の子の仲間なんですか？ 見た所、魔道導師のように見えません、けどっ！」

「まあな、アイツには一応世話になってるし、危なっかしくて見ちゃいらんねえ、よっ！」

まるで悪態とも取れる冗談、とてもコレが戦闘中とは思えない愛嬌、そんな軽口の叩きあい。鏑迫り合いとなった状態で言葉が交わされる。あたかも喧嘩仲間とじゃれ合うように。

（アルフはもう一人と交戦中、……何であの子にはこんなに仲間が集まるんだろう？）

「？……何だか知らねえが、戦闘中の雑念は命取りだぜ！」

フェイトが少し躊躇を見せた為だろう。眉を顰め今一つ納得のいかない刃が面白くなさそうに、人差し指を突き付けて檄を飛ばす。言外に気概が削がれるだろという八つ当たりが含まれているのは実に彼らしい。

———そこへ決定打となるなのはの一言が飛ぶ。

「刃さん！ ジュエルシードの封印は終わらせました。フェイトちゃんとは……私と、私が話を付けないと駄目な気がするの。だから、お願い！」

真剣な瞳で昂る感情に抑えが効かない様子からも、その本気度は確かなものであった。

だからだろうか？ 刃はクサナギを納めると仕方ねえなという顔つきで言葉を綴る。

「よっしゃあ、良くやったなのは！ だったらここはオマエに任せて、オレはもう一匹と遣り合うか？ 狼の丸焼きなんてのも旨そうだしな。んじゃ、そういう事で宜しく」

「ちょ、刃さん、こんな時に何で削ぐような事いうかなあ」

刃の場違いな一言に思わずズッコケそうになるのは。むうくと可愛く睨む様は、折角の感動の場面を濁さないでと凄む上目遣い、今迄の緊迫感はどこへやらだ。

「だ、駄目ーっ！！ そんな事、絶対にさせません！」

そして伝染する真面目^{フエイト}っ子。

ほら、本気にしちゃった。——と、そんなジト目でなのは刃を責める。

どうも刃が先の攻防でスッカリ興醒めしたのか、殺伐とした空気はナリを潜め何とも穏やかな空気が場を支配する。というよりなのはがジュエルシードを封印終了した時点でフエイト達にとっては詰みと言えた。脅威を排除した今、残されたのは少女達の蟠りであつて、危機ではない。

そんな緩やかな空気の中てられたフエイトは、うっかりペースに

乗せられたようである。

他方——もう一つの戦場ではユーノとアルフが火花を散らして攻防を繰り返していた。

攻撃的なアルフに比べユーノは防御魔法を得意とする。

決定的な一打に欠く二人は千日手となって勝敗を決めあぐねていたのだ。

「まったく、なんなんだい、あの男は!？」

「あ、あはは……。何だか刃さんらしいや（でも、刃さんのあの力は何なんだろう？以前話してくれた話は本当だったのかも）」

そんな二人も主役の様子を傍目に窺い、アルフは苛立ちを、ユーノは呆れを隠せない。先程前は天変地異じみた光景があったかと思えば急に子供の喧嘩じみた騒動、コロコロと目まぐるしく変わる状況にやや気持ちの整理が追いついていないといった所であろう。

まあ——流石に何時までもその調子とはいかないが。

「フェイト!そんな事よりジュエルシールドはどうするのさっ!？」

「ッ!……そうだった（駄目だ、ここでこのまま戦ってもジェルシールドは手に入らない。——なら）」

こうなってくるとフェイトの判断は早かった。状況二対三の不利、まして目的のジュエルシールドは目前の少女が封印済み。出し抜く事

も叶わなければ奪取する可能性も望み薄となってしまった現状。

ここはまだ決死の勝負を付ける時期ではない。それは残りを揃えてからでも遅くないのだから。

「アルフ！」

そう導き出された結論は『撤退』の二文字。

「クッ、……まあ、しゃあないね。アンタ達、特に黒髪の奴！次に会ったらこの借りは絶対に返してやるからな、覚えておきなよっ！」

素早く主の意を汲んだアルフは、フェイトと共に後方へ距離を取ると転移魔法を使い、この場から影も形も残さず消え去った。見事なまでの立つ鳥跡を濁さずである。

「刃さん！？」

そんな彼女達を黙って見過ごした刃に、なのはは疑問をぶつけた。

……いや、疑問というより少しの癩癩、フェイトと話せなかった事の歯痒さというべきか。

「仕方ねーだろ？今はそれよりもこっちの方が大事なんだからよ。オマエ……凄え睨まれてるぞ、ありゃあ下手に誤魔化したら袋叩きになりそうだな。たっく、変に隠し事なんかすつから面倒になんだよ」

と、同時にゴツンと降り注ぐ刃の拳骨。

「いたっ!？」

頭に?マークを付けたような表情で涙目のなのは刃を責めるがそれも詮なき事。スツと二人が地上に降り立つと、輪を囲むようにアリサとすずか、それにユーノが駆け寄ってきてワイワイと騒ぎたてる。どうやら彼等の長い一日はまだまだ終わらないみたいだ。

そして、この一日がある引き金となった事を、刃達が知るのは暫し後の事。

* * * * *

―― 同時刻 ――

海鳴市で刃達とジュエルシードが発した熱源を感知する存在が遙か遠くにあった。特殊な結界で隔離された空間の力を探知するのは通常有り得ない。況してこの日本には残念ながらそんな技術は存在しないのだ。ならばそれを見付け出した存在とは何なのであろうか?……ゆっくりと運命は動き出す。

「艦長!小規模次元震に匹敵するような力の乱れを感知しました!」

「そう……」

残念そうな含蓄を込めポツリと呟く女性の一声。その近くには数人の10半ば位の男女が集い、制服とおもわしき統一された装いで

纏められ、動き口調からは訓練された組織のようでもある。ただ驚くべきは地球の科学力ではお目に掛る事のない室内、まるで戦艦内部ともいうに相応しい機材が揃えられ、大型のモニターがあらゆる映像を映し出していた事だ。

しかも、その巨大な物体は不可思議な空間を漂っている事。海や空ではない、まして宇宙空間でもない中を、まるで艦のように動く。そんな集団がモニターに刃となのはの姿がしっかりと映し出し、ジュエルシードのエネルギー反応まで掴んでいた。

———更にはもう一つの場所でも。

「ボス、やはりこれを見すごすことは？」

「忘れたか？我々はあのサムライに借りがある事を」

不思議なフードを被り顔はおろか肌さえ覆い尽くす服装をした集団。パチパチと灯り火が薪を食い、淡い陽炎のような明かりを照らす部屋の中、彼等は語る。驚く事にこの一団はるか遠く離れた場所から全ての事象を見ていたのだ。刃とジュエルシードが起こした一連の事件、そこに魔導師という魔法を扱う存在が居る事を紛れもなく掴んでいる。

ただ、『サムライ』という言葉にはどこか懐かしく、包み込む口調。中央に座する低くしゃがれた声の持ち主の言葉を最後に、その空間は深い闇に閉ざされていた。

第六話 ターニング・ポイント（後書き）

サブタイトルの如く様々な分岐点となる今話。

早々とアリサやすずかに正体がバレ、さらには余所で蠢く存在。物語の分岐を主眼にしてみました。

思惑としては私がアリサやすずかに思い入れしていた事。例え秘匿の問題やユーノとの約束があったとはいえ、あそこまでフェイト一辺倒に思考が傾くのは納得いかないと。だってそれじゃあ、二人が気の毒じゃないですか。危険な目に逢わせたくないという気持ちも理解できますが、逆の立場だと絶対に首突っ込んでくると思うんですよ、なのはの場合。そういう虫が良すぎる態度は駄目という事で暴露コースに。

因みに本邦初公開となった鉄刃の剣技の一つ。

「竜巻斬り（たつまきぎり）」

ジュエルシードにぶつけた奴ですが、本来は鬼丸が編み出した技です。

そして元々は風神剣や霸王剣から繰り出される剣技なんですな。

今回はクサナギの未知数の力を考慮して使わせて頂きました。

原作では刃も使用してましたしね。

その力は巨大なビルを倒壊させ、宇宙に漂う衛星すら打ち砕く。

使い手によっては富士山すら吹き飛ばしかねない威力で、連発可能というぶっとび具合。

第七話 告白（前書き）

ジュエルシードを巡る攻防は高町なのはとフェイト・テストアロツサのみならず、アリサ・バニングスや月村すずかをも巻き込んでしまふ。しかしながら、鉄刃の協力もありその場の争いは無事、事なきを得る。そして陰からは謎の勢力が動き始めるのであった。

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第七話 告白

人は大地を渡るに動物を扱い駆け巡った。また海を渡る為に船を造り新たな大陸を目指した。大空を征するために動力を使い飛行機械を誕生させた。このように何かを為す都度、必要な技術や道具を生み出し造り出して来たのである。

ならば並行して存在する世界、いわゆる次元の間に無数に存在する文化を持った世界があったのなら？人はその次元の間を渡る技術をし得るだろう。当然の事ながら『地球』と呼ばれる惑星もその次元の中に存在する一つの世界にすぎないのだ。こうした幾つもの世界を『次元世界』と呼び、それら並行して存在する世界を繋ぐ超空間を『次元空間』と呼んだ。

——そして現実次元空間を航行する艦が地球の間近に迫っていたのだ。

「皆、どお？今回の旅は順調？」

「前回の小規模次元震クラスの発生以来、特に目立った動きはないようですが……」

「二組の探索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね」

「そう……危なくなったら急いで現場に向かう必要がありますよね。ね？クロノ」

「大丈夫。分かっていますよ艦長、僕はその為にいるんですから」

責任者と思わしき妙齡の女性が部下らしき面々に慰労の言をかける。それに対し際立った緊張感等は感じられないが、何かを警戒するかのように監視行動を報告するオペレーターの二人、そしてなのはと年頃の近い黒髪の少年が自信あり気に応える。

まるで必要とあらば介入しそれを治めようとする一団、彼等はどうやら海鳴市で起きたジュエルシードの暴走、それを観測し警戒している様であった。

果たしてこの勢力は一体何者であるのか……。

— Side Nanoha's Room —

少女らしい趣きのある装飾、勉強机や本棚にベッド等の家財道具一式から、パソコンや携帯電話と小学生にしては少々豪華な一室。しかも広めの室内は家主を置き友人の二人と居候の二人組み十カゲトラと庄之助を置いてなお、さほど窮屈感を感じさせない。追記としてフェレットモードのユーノも当たり前であるがこの場には健在だ。

そして此処では重要な説明会が催されている。なのはが今迄隠し通していた秘密を、友人のアリサとすずかに見られてしまい説明を余儀なくされていたのだ。尤もなのは自身、何かを吹っ切たのかそこには痛々しい面影がなくなり、全てを明かす覚悟が出来ていた。

「じゃあ、なのはちゃんはユーノ君を助けた時に魔法が使えるよう

になったんだ？」

「それで？その事は誰にも言えなくて、とっても危ない事だから……私達にも話せず独りで悩み続けていったってわけ？」

「うん……みんな、ごめんね。ずっと黙ってた」

一通りの事情を話し終えたなのははペコリと頭を下げた。どんな事にも真っ直ぐで真摯な姿勢をとる高町なのは本来の姿で。思いこんだら頑固で融通の利かない一面はあるものの、一度認めたら素直に間違いを正すだけの器量は持ち合わせていた。だからこそ、言葉の節々に心からの謝罪が込められ、一切の駆け引きもそこには存在しない。

なのはのカール気味のツインテールが不意に軽く揺れる。

何とアリサが微笑みながらなのはの頭を撫でたのである。自分達の知っているなのはが在ったから、戻ったから、嬉しくて。幾分赤く染めた頬にぶっきらぼうな口調であったがそこには親友を許す意味合いを込められていた。

「ばっかね。なのはのそんな不器用な所なんてこっちは先刻承知よ」

「ふふ、アリサちゃんたら。でも私も同じ。なのはちゃんの、そんな不器用だけど自分の気持ちを偽らない所は信じてるよ」

「え？で、でも……私、ずっと二人に隠し事してたんだよ？ずっとこんな大切な事を内緒にしてたのに」

詰られたり叩かれる位の覚悟を決めていたなのにとって、それは余にも予想の斜め上を行く反応であった。二人とも責める所か水に流すとても云わんばかりに微笑み返し、すずかに至っては両手を握り返して涙ぐんでいる。

（ふむ。麗しい友情じゃのう）

（そうかあ？）

これに関しては完全な外野状態である二人が小声で呟く。

ムサシと刃だ。

（ほれ見てみい、アリサ殿とすすか殿の器の大きさを。あの歳で相手を思いやり受け入れる寛容さは既に成熟した大人と比べても遜色がなからう。これは将来が楽しみじやな）

（つーかよ、なのはも一人で背負いこみ過ぎだつーの。もつと周りの力を借りやがれてんだ）

溜め息混じりの苦言を交わす二人を余所に少女達の仲直りは続く。これは仕返しよ、とばかりにアリサがなのはの頬を引っ張り、すずかがそれを諫め、なのはが玩具にされる三角形。

一見すると喧嘩に見えるかもしれないが内実は違う。照れ隠しにじゃれ合うアリサ、半泣きでも憑物が取れたなのは、苦笑いでも安堵の気持ちを隠せないすずか、そこには少し前まであったありふれた日常。等身大の小学生三年生、少女達の姿が顕現していたからだ。

「でもアリサちゃん、ちょっと力いれすぎだよ。ううゝヒリヒリす

る」

「今迄内緒にしていた罰よ。これくらい我慢しなさい」

「ふふ。それにしても、ユーノ君を助けたのが切欠だったなんて。見た感じだと普通のフレットなんだけどね……。あまりなのはちやんを困らせちゃ駄目だよ？」

「キュ？」

一通り気持ちの捌けが済んだのか喧騒はナリを潜め事の張本人^{ユーノ}へ視線が集まる。それもその筈、なのはが魔法を使える要因となった不思議な道具を所持する動物なのだ。何かと謎も多く人語を喋れる事も既に筒抜け。

乙女達の魔の手（？）がジリジリと逃げ場を失くすようにユーノを囲う。

（な、なのは、た、たすけてっ!?!）

（あ、あはは、御免ユーノ君、流石に今回は無理っぽいかも）

哀れユーノ、念話でなのはに救いを求めるも返事は死刑宣告^{みじろし}。わらわら集まる好奇の瞳、麗しき乙女の柔肌に包まれ弄られる裸体が痛々しい。

ユーノ・スクライア、幼い身ながらも次元世界で遺跡発掘を生業とする優秀なスクライア一族の出身。そんな彼とて男性として女性を意識しない分けではない。平素なら気恥しくも喜ぶだろう。

ただ彼の最大の不幸はその手落ち、一番の親友高町なのはにさえ本当の姿を見せていなかった事だ。実は疲弊した魔力回復と怪我の治療の為に、動物形態を取っているなど少女達は夢にも思わない。その為に男性として一番傷つく箇所を見られ暫く凹む事になる。

因みにこの認識のすれ違いが後日、再度災いとして降り注ぐのは全くの余談。ユーノ曰く、何故あの時詳しく説明しなかったのだとか。

（何を遊び呆けておるんじゃ……）

（んゝ寧ろこっちの方がらしいんじゃないの？どうも、うじうじ悩む姿を見るとイラつくんだよね。オレだって皆でパァゝつと騒いでた方が面白れゝし。な？カゲトラ、庄之助）

（ガウガウ）

（ピーゝ）

（全くお主は、それよりもじゃ。こうなって来るとワシらの事も話す必要があるな。流石にあれだけ見られて何も説明しない訳にはいくまい）

（何か拙いのか？別に隠さなきゃならねえ事なんて何もねえぞ）

（そうは言っとらん。……問題なのはあの少女達の事じゃ。あの手のタイプはまず間違いない顔を突っ込んでくるわい。その理由はお主が良く解っておるのではないか？）

——そこで刃の思考が納得する。ああ成程、要するにさやかと同じなんだと。今は実家に残り高校生となった峰さやか、嘗ては刃と共に日本中を駆け巡る壮大な冒険を体験した女性。彼女も武道を嗜むとはいえ、それは一般的な強さではない。

しかし、それでも彼女は時には命を懸け、力を併せ苦難に立ち向かった。足りない部分を補い、有る時は囚役を、有る時は慈愛を以て。だからこそ喜びも苦労も分かち合い、尊い絆となって育まれたのだ。そこにあるのは力の優劣ではなく、信頼という互いの結びつき。

ならば目の前の少女達はどうか？考えるまでもない。こんな危険を孕んだ事に首を突っ込むお人好しはさやかと同類、なのはの為を想えば離れる道理も嫌う理由も皆無。

（まあな。でもよ、オレ達だって同じだったじゃねえか。なら別に何も心配する必要なんてねーだろ？オレがいてムサシがいて、庄之助にカゲトラもいる。なのはの親父や恭也だっているんだ、アイツ達だけに押しつける奴なんていねーよ。それになんたって魔法つう夢のような話しなんだぜ？石コロ一つであんなでつけえ力を持つてやがるし、これだけで終わると思えねー。久々に腕がなつてきやがったぜ。序にクサナギの力も試せるしな）

（お主……折角途中まで良い話しをしておったのに、途中から本音がダダ漏れじゃぞ）

「—————で？その二人と二匹でコソコソ話してる、あんた達の説明は？」

突然の一言。ジト目で睨め付けるアリサを筆頭に背後にはなのは

とすずか、何気になのはの肩でチョコンと二本足立ちするユーノがズラリと並ぶ。その有無を言わせない圧迫感、刃達を以てして冷や汗を垂らすに充分な迫力であった。

いわずもがな先の得体の知れない力の説明をしろと暗に促すもの。なのは同様、あんだ達の正体は一体何なのか問うもので、一切の欺瞞も許さないという眼光。それに観念した刃は最後の確認とユーノに向かい念を押す。

「お、おう、別に説明は構わねえけどよ……いいのか、ユーノ？」

「……はい。こうなってしまった責任の一端は僕にあります。その所為でなのはが苦しむのは見たくないし、彼女達との関係を壊すような真似だけは絶対にしたくないですから。それに、僕も刃さん達にはもっと詳しく事情を訊きたいと思っていました」

「ほら！これで文句ないんでしょ？ちゃっちゃと説明しなさいよ」

「短気な娘じゃな」

これはムサシ。高血圧の気でもあるのか一人ヒートアップするアリサを前に、目を細めて至極もつともな言葉を言う。うんうんと、同意する面々が心なしか彼を擁護しているようだ。というより口に出してハッキリ言える勇氣に感心していたのかもしれない。

「なんですって!？」

「まーまー、アリサちゃんも落ち着いて。あんまり興奮すると身体に毒だから」

「すずか……あんたも何気に毒づくわね。——まっ、いいわ。
でもこれは此の場に居る皆の総意だから、決して誤魔化したりしな
いで話してちょうだい。あたしだってこれでも少しは気にしてるん
だから」

本人も無意識の内に自覚していたのか、親友達の割と冷たい反応
にグサリと内心で傷つくも持ち前の気丈さでおくびにも出さず言葉
を嚙む。そもそも肝心の話しが一行に進まなくては元も子もないか
らだ。すると再び一同の空気は真剣未を帯び、ムサシと刃の元に意
識が集う。

「ではこれで決まりじゃな。なのは殿には以前話した事じゃが、改
めて説明する事になるからう。この際じゃ、再度質問したい事が
あれば一緒に質問してくれるとよいじゃろう」

「じゃあ先ずはオレがさやかの家に行った所からか？」

「まあ大雑把な時間の流れではそこからじゃな。何をやって過ごし
てきたのか？ 要はおおまかな事件とトラブルを軸に都度の出逢いと
目的を添えればよからう。細部の経過はちと冗長すぎるしの、では
……」

——そして、一瞬の間を置いてムサシが声を綴
る。その内容とは……。

事の発端は鉄刃が父親と日本に帰還した事から始まる。そして日
本に戻った際に終生のライバルとなる男、鬼丸武との出会いが運命

を決定づけてしまった事。初めは刃が鬼丸に対して一方的に対抗心を剥き出しにして挑んでいたが、彼が実家の道場にあった魔剣『風神剣』を手にした事により鬼と化してしまった事。

鬼丸は手始めに日本の中枢を牛耳ると直ぐに己の野望を果たすべく全国の支配を目論んだ。豊富な人的資源と優秀な科学者の手により彼に刃向う者は悉く蹴散らされ、事実上逆らえる者は存在しなくなり残りは目障りな刃の抹殺のみとなった。そこで刃は対抗手段として対の魔剣『雷神剣』を手におさめ反旗を翻すのである。

もっとも番人として雷神剣を見守っていた宮本武蔵……つまりあの二刀流で生涯において無敗を築いた大剣豪、彼が刃を雷神剣の使い手として相応しいかどうか見極め、かつ刃を直々の弟子とする事で鬼丸に敵対出来る唯一の存在として育て上げる事にしたのだ。

魔剣には元の使い手——つまり「風神」と「雷神」が宿る。強靱な精神力で彼等を屈服させないと、身体を支配され人は自我を失い鬼と化す。あの鬼丸でさえそうであったように、刃とて初めは何度もその身を奪われ同じ魔道へと堕ちそうになった。そこを寸での所で抑えるのがムサシだったのだ。

やがて刃と鬼丸は戦いを魔剣に宿す根幹の「玉」、天下を奪う事が可能な「龍神の玉」を争奪する争いへと転じていく。つまり元々の「玉」より各上の存在があり、それを手にする者は最強の名と同時に地上の支配者になる事さえ可能であった。

「お主らも鬼丸の事を一度は耳にした事があるじゃろう？何せ日本中を巻き込んで刃と争っておったんじゃないからな。それも東京のご真ん中で」

「そういえば私、お姉ちゃんから聞いた事がある。何でも三年くらい前に日本を牛耳ろうとしてた鬼がいたって……」

「本当、すずか？ 私は知らないわよ、そんな事があったなんて」

「う、うん、私もそんなに詳しい訳じゃないけど……何でも一年にも満たない、ほんの半年間ほどの争いがあったって。一振りでビルや街を壊滅に陥れる力を何度もテレビで目にしたとかで驚いてたよ」

ムサシの問いかけに心当たりを思い出したすずかが相槌を打つ。
ただ自分で実際に目にした分けでもなく、姉から訊いた話だけに自信もなさそう気に。そもそも、そんな大事件が尾を引かず話題とならない方が可笑しい。

その猜疑心が二人の心情を物語る――――――とてもじゃないが信じられない、と。

「なんだよ？ 言っとくけど本当の事だからな。鬼丸の話しもこのエロ爺がムサシ本人だったのも」

「あの、刃さん。私もその話は前に訊いたけど、今一番気になってるのはその刀の方なの」

（僕もそれは気になってたんだ。前に刃さんから話だけは訊いてたけど……実際にあの力を見たら、とんでもない代物だって事が分かる。想像していた以上の力だと言いかげないよ、しかも物理的な破壊力が込められてるからリンカー・コアにダメージを与える魔導師の戦いとは全く異なるし。この世界はこんな異質な力が普通に眠ってる物なのか？）

なのはとユーノはそれよりも刀の方に関心があったのだろう、今度はより委細を訊き出そうと真剣になる。二人にとって魔力以外の力を使って自分達の土俵に上がってこれる存在、もう以前の様に軽く流せる話ではなかった。

「まあ待たんかい。その辺も説明はするが今は一通り終わらせてからじゃ」

その制止を一先ず打ち切り……ムサシはゆっくりと語りを続ける。

鬼丸は「術」を用い過去の偉人・英傑達を何かの媒体を依代として現世に復活させたのだ。それが八鬼（ヘビ男・ヒトデ男・カマキリ男・ナメクジ男・ナマコ男・クモ男・カエル男・コウモリ男）や四天王（巨大なちようちんアンコウ・保護色で人に偽装するカメレオン・小柄な身形ではあるが恐ろしいまでの怪力を誇るチビゴリラ・科学の粋を極めた変形可能な巨大ロボット）を代表とする刺客達。

中には佐々木小次郎や柳生十兵衛といった実在の剣豪すら世に戻す秘術も使った。彼等是一个の命として確実に現世に止まり消える事もなく明確な意思の元、操り人形と化す事もなかったのだ。死者の蘇生という禁忌と呼ぶべき人外の術。

更には『龍神の玉』を探す旅に至って三好青海入道に天草四郎時貞、風魔小太郎や石川五右衛門という剣豪以外の歴史的人物すら眠りから呼び覚ました。もともと依代がある以上、本体は厳密には人と言えないかもしれないが。

何れにしても人として在らざる者だからこそ扱えた術なのだろう。ある一部の者に関しては術者が元に戻っても効果は解けず、そのま

ま存在するのだから。これに対してはなのは達だけでなくミッドチルダ出身のユーノですら驚愕の内容であった。

——然も有りなん。完全な肉体の蘇生を含め新たな命の蘇生など次元世界広しといえど訊いた事のない事実、それがずっと文明の遅れた地球で行われているなどある組織が知ったら果たして如何なる事やら。

「あ、あの、ちょっと待って下さいっ！じゃあ鬼丸って人は死人を蘇らせたって分けですか！？そんな馬鹿な話して……」

「ユーノよ、お主はまだ若い。……いや、なのは殿達もじゃ。じゃからどうしても常識に捉われ狭い世界での現実に固執するきらいがあるようじゃな。そもそも人間の歴史等有り得ない事の繰り返しで進歩して来たのじゃぞ？大体お主として似たような口であろう、動物が魔法を使う事自体非常識の塊りではないか。ならば化物や人外が存在が現れたとして何の不思議があるというのじゃ。この広い世界には想像を超えた現象などいくらでも転がっておるわい」

「動物って……いや、でもっ！」

「あ、それは私も同感。フェレットが言葉を喋ったり魔法を使うなんて訊いた事ないもの」

「……」

ユーノが扱う魔法は正確には『ミッドチルダ式』という形式。細かくは他にも部類されるものもあるが、兎に角それは科学技術というオカルトや心霊とは違う純然たる科学の力であり、扱う上で素質の問題はあれど理論を組み立てて初めて魔法が使用可能となるのである

る。それを補助するのがデバイス、つまり記憶媒体という訳だ。

非科学的な事象と同一視されては困る！というのがユーノの意見であったが、それは彼にだけ通じる理屈。ムサシや刃は勿論、アリサにとっても似たような物で得心のいった顔で頷く。ただ、さすがだけは微妙な表情で口を噤み、黙って意見を訊くに止めていたが。

そんな様子を苦笑いで見詰めるのはは、刃に話しの続きを促す。

「まあ、それでよ。その龍神の玉を手に入れたまでは良かったんだけどな？折角鬼丸と白黒決着を決めようって時に、空から変な宇宙船でかぐやが横槍を入れてきやがったんだ。あんにやろう、女のくせにやたら強かったからな」

「かぐや？」

「かぐやって、あのかぐや姫の事ですか？」

「竹取物語に出てくるお姫様の？」

思わず昔話に登場するかぐや姫を連想して、少し憧憬する三人。ちなみに上からアリサ・すずか・なのはの順である。

「何を考えてるか知らねえけどよ、アイツに捕まったら悲惨なんだぜ？何しろアイツは若い女のエキスを摂りやがるからな」

「「「エキス???」」」

縁起でもない言葉にヒシヒシと不吉な予感を感じた乙女三人衆。首を傾げ額からはツーと汗を垂らし、必死に何かを打ち消すような

仕種を取る。心なしか口元もやや引き攣っているみたいだ。

「精気だよ、せ・い・き。お前等なんて格好の餌食なんじゃねえの？」

「因みにそうなる……どうなっちゃうの？」

これはなのは。おそろおそろと口を開く姿は、死刑判決を待つ囚人のような感じかもしれない。決定的な引導を渡されるまでは頭で理解していても諦めきれない悪足掻き。決して後ろめたい事をする分けでもないのに冷や汗がダクダクと零れ落ちていた。無論、これは他の二人の少女も同様であるのだが。

「んゝよぼよぼの婆さんだな。見ろ、目の前に居んだろう？手頃な年寄りの見本が。つまりそういうこった」

「なななな、なによそれっ!？」

少女達にとって筆舌に尽くしがたいのか、動揺の仕方が半端ではない。特に目も前の老人が一役買ってリアルに説得力を高める。おそらくこの瞬間、彼女達は自らの老後を容易に想像したのだろう。震えながら寄り添う姿は本当に怯えている様だ。

成年期をすっ飛ばし老年期を迎える。……これほど少女達が悲しむ残酷な事も珍しい。思春期を過ごし素敵な恋人との甘い時代、愛しい人との結婚、愛すべき子供達、どれもが霞みとなって消えるのだから。有り得ないとばかりに首を振って何やら喚く姿が実に痛々しい。

それを、今度はユーノが暴走しすぎでしょ？と悲しい目で労わる

と再び言を求めた。

「おう、まあそんなこんなで色々あったかぐやとの一戦も、『龍神剣』と『龍神』の力を借りてこの地球に封じて終わったんだよ、一応はな。だけどその後には今度は地底人が現れちまってよ、しかもその背後には鬼丸も絡んでると来やがった。ご丁寧(ご丁寧)にスパイまで送りつけてな……」

少しだけ思う事があったのか刃は最後の箇所を力なく語る。彼にしては珍しい事にユーノは視線をムサシへと送るが、返って来るのは首を振った重々しい空気。

それは軽々しく踏み込んで良い内容でないと聡明なユーノも気付く。誰にだって触れられたくない傷はあるもの、おそらく刃にとつてのソレが最後の発言だと察しをつけたのだ。

——そして、一呼吸の間を置いてから残りをムサシが引き継ぐ。

「奴らも鬼丸に唆されたとはいえ、ある意味被害者じゃったからな。大地が汚され自分達の住処にまで被害が及んで来ては怒るなという方が無理じゃったんじゃろう。ピラミッド型の兵器を用い自らの怒りとして世界中で暴れよった」

「……あの、ずっと不思議に思ってたんですけど、それだけの事件なら何で誰も問題にしないんですか？ 私もそうですけど記憶に残ってないのが考えられないんです」

「実は私もずっとそれを考えてたの。普通、そんな事件が起こったなら知らないなんて有り得ないもの」

「おそらく、これはワシの推測じゃがその答えは最後の戦いによるものじゃろう」

すずかとアリサの疑問、それに対するムサシの回答——それはこうであった。

地底人の侵攻を退けた刃達は束の間の休息の後、鬼丸と最後の決戦を迎えた。彼は日本の大地に封じられた蛇、八岐大蛇やまたのおろちを復活させる。嘗て神話の時代、スサノオが封印したという巨大な八つの首を持つ蛇で、人々の悪意を吸収しその身を成長させた邪竜は、遂には日本列島そのものと言い換えても良い存在となったのだ。

当然の如く大地に住む人々は蛇の一部として吸収されその身を奪われた。それを今度は『霸王剣』という古の武器、スサノオが用いたとされる神剣を扱い、例え刃一人の力でないしろ、女帝かぐやや、地底人、それらの力を結集して大蛇を再び封印する事に成功させる。その結果、大地は静まり元の列島として落ち着き、人々も大蛇の身体から解放されたのだ。そして霸王剣は最後の神通力を持つて、大蛇と共に大地に眠りに付く事になったのである。

不思議な事にその事件を覚えている人間はおらず、薄らと夢のうに残り一つの都市伝説として事は終結するに至った。勿論当初は騒ぐ者も居たが確たる証拠も存在せず、あまりにも馬鹿げた話しであったのか事態は直ぐに下火となる。おそらくであるが霸王剣の神通力、これは単にオロチへのカウンターではなく、人々にも影響したのではないだろうか？

つまり、常識を超えた怪現象を信じる者はいない。ただ、迷信深い者達が伝承として語り継ぎ、御伽噺のように残るのだと。少なく

とも大蛇が大地に戻った後の大地は以前と変わらぬ姿であった。都市や街の環境も変わらず映像等の記録に何も刻まれていない。

———鬼丸や地底人、さらには宇宙からの侵略も含めて。しかし、極々ほんの一部の存在だけはそれに気づく。静かな生活を求める『夜の一族』のみが。

「うーん、良く解らないけど、つまりその霸王剣に宿る神様みたいなのが影響してるって事？」

「……」

「ワシの推測にすぎんがな」

ムサシの持論を訊き終えた後、アリサはスケールの壮大さに呆れつつも何とか同意を示す。傍らのすずかも口では何も語らないが、納得のいった顔付きにはなっていた。

そして、そんな二人の親友をよそに同じ非常識仲間、なのはとユーノも呆れていた。

（ねえ、なのは。前にもあらましは訊いてたけど、あの力を実感した後で改めて知ると、何かとんでもない話だね）

（う、うーん、私達もあまり人の事言えないけど……その気持ちはなんとなく分かるな）

にやははと乾いた笑みを浮かべユーノの意見に同意すると、なのはは最初に訊いた剣の力がどうしても気になった。力の源が神様みたいなのは分ったが、そんな物が転がっていたら普通の人は危険で

ないかと。

「あのく刃さん。じゃあ龍神剣というのは風神剣と雷神剣が一つになった物で、元来は八岐大蛇を封印する神様が所持していた剣だったって事ですよね？それも今は大地で眠りに付いちやってる分けて……私達の国って普通にこんな力のある物が眠ってるの？」

「なのは、こういうのは有るか無いか？じゃねえんだよ。要はサムライだから剣の道を極めてえし、剣は魂みたいなもんなんだぜ。だつたらさ、夢みたいな冒険をした方が楽しいだろ？」

「答えになつとらんわ、戯けめ。なのは殿、要はお主、こういう巨大な力が物騒だと思ったのじゃろう？生憎ワシらは世界がどうのとかよりもサムライとして生きていければそれでよい。心配せんでも無関係な者を殺めたり、暴力をふるったりなどせぬわ。それに魔剣の類は自らが主を選ぶ事が多い、そのレイジングハートのようにな」

ムサシが心配無用と指さす先に一際輝くアクセサリー、レイジングハートがなのはの首に飾られていた。

「あ……」

「つまり誰にでも扱える長物ではないという事じゃ」

ムサシの高笑いがスウーとなのはの心配を消していく。何しろレイジングハートとなのはの絆は固く、まだ出逢って間もないが互いの信頼は築かれている。ならば刃の魔剣にも同様の事がいえるのではないか？そう思うと自然と気持ちが分ってしまったのだ。

それをニヤニヤと見つめる刃とムサシ、うっと罰が悪そうに視線

を泳がせ誤魔化すのが精一杯なのは。傍から見ると本当に仲の良い兄弟、兄貴分にコズかれじゃれ合う姿は血を分けた実の兄弟に見てとれる。所々でうにゃあゝとか、ふゝんだ、等とまさに脱力全開は最高の漫才だろう。

「まったくもう……あんた達は」

「クス、なんか本当に昔から兄弟みたいな感じだね。なのはちゃんも刃さんも」

巨大な力という見方からすれば魔法も魔剣も実は変わらない。少なくともすずかとアリサは親友のなのについては信を置いている。だが、刃やムサシは付き合いも浅く判断の悩む所であった。しかし、自分達を助け裏表もなく触れ合う姿勢をみると、薄薄と人間性も目につく。危険性云々は兎も角、その微笑ましい光景に二人ともどうやら安堵の息はつけたようだ。

「ま、ワシらの経緯いきざしはそんな所じゃ。さて、なのは殿よ。お主はまだ大事な説明が終わっておらんじゃろ？」

「え?」

「いやいや、アリサ殿にすずか殿の事だけではない。なのは殿の御家族にも筋を通すべきではないかと、言っておるんじゃ。既にこちらの事情は全て報せておるしの、あとは実の娘が家族に隠し事をしておってはご両親も悲しむのではないか？」

「……っ。うん、分かりました! ユーノ君の事も含めてキッチリ説明する事にします。御免ね、約束破る形になっちゃって」

「いや、もういいんだ。確かに無暗に話す事じゃないけど、そのせいで誰も知らない所でなのはが傷ついたら悲しむのは家族や友達だったんだから。巻き込んでしまった責任の一旦は明らかに僕にもある。だから一緒に事情を説明するよ」

「ユーノ君……」

ユーノの覚悟を見たのは、軽く微笑むと一緒に謝ろうかと、二人で笑いあう。それは二人が抱えていた罪悪感と後ろめたさ、それなりに罰はあるだろうがケジメをつけれる事が何より気持ちを軽くさせていたのだ。それを、うんうんと頷くアリサに、きっと大丈夫だよと後押しをするすずか。危険という意味では心配だがどうやら自分達も首を突っ込む気が満々の様である。

「ふむ、それがよかろう。士郎殿達は話せば分かる方じゃからな」

「まっ、話して無理だってんなら、そんな時は強引に動きゃあいんだよ。自分の道は自分で決める、オレなんて一度自分で決めたら反対されようが絶対に曲げねえぜ」

「こらこら変な事いわないの！折角の良い話しが台無しじゃない」

「でも、刃さんらしいかも」

どうやらなのはだけでなくアリサとすずか、二人も刃の性格に馴染んできたようである。以前の刺々しさがある声でなく、世話の掛る相手という意味で受け入れていた。後、何気にツツコミの息もピツタリだ。

「ユーノ、お主もキツチリ筋を通した方がよかろう？何、ジュエル

シードの搜索なら心配せんでも最後まで付き合つてやるわい。というか黙っていてもアヤツは首を突っ込む気が満々じゃからな。後顧の憂いをなくし綺麗にしてからでも構うまい」

「ムサシさん……有難うございます」

ユーノとなのは、二人が今迄抱えていた罪悪感と不安。

それが期待へと変わった瞬間でもあった。

— Side Out —

* * * * *

————この日の夜、高町なのはは家族の皆に自分の隠している事を全て告白する。

ユーノとの出逢いで魔法が使えるようになった事。そして、自分が何をしているのかも。何より自分の意思で決めた事であり、やり遂げたい目的もあると。その為に危険な目に遭つても挫けないだけの覚悟があり、今まで黙っていた事を謝りたいと思っていた事。傍らにはユーノも自分の事を隠さず語り、大事な娘を巻き込んだ謝罪、そして虫が良すぎるのを承知で力を貸して欲しいと頭を下げていた。

それを険しい表情で睨めつける兄恭也。姉の美由希も恭也ほどではないが複雑な表情で二人を見つめ、母の桃子は黙って士郎の反応を待つ。彼らの胸中にはどれだけの想いがあったのか知る由もないが、在る者は湧きおこる殺気を只管に抑えつけ、また在る者は純粹

に娘の心配を願っていた。そんな中で、沈黙を続けていた父士郎が徐に口を開くと……

「なのはの話しは良く分った。だから一つだけ約束を守ってくれば父さんからは何も言う事はない」

「約束？」

「そうだ。決して一人で無茶をしない事。仲間、家族を、困った時には必要とし頼ってくれるなら、なのはのやりたい事を応援する。どうだい、約束できるか？」

「っ！勿論、そのつもりで今日は皆に打ち明けたの。だって、……だって、同じ事を刃さんやムサシさんからも言われたから、もうこんな思いで隠すのは嫌だったから、反対されても気持ちを話さそうと思ったの！！」

「……そうか。ならば後は言う事はない。なのは、頑張ってこい」

彼はたった一言、そう告げた。

第七話 告白（後書き）

はい、かなりのご都合主義です。そもそもY A I B Aの世界は設定が杜撰なのでツツコミを入れたらキリがありません。

さて今回の主題。

それは、なのはさんとユ一ノ君の覚醒に尽きます。そしてこの時点で、家族や親友に告白したのも一重に刃の影響によるものです。そもそも今回の暴露話も、アリサとすずかの救済処置から来たんです。アニメを観ていて彼女達の待ちの姿勢があまりにも不憫で。どうせなら皆加えて展開させたいなくと。そこで刃に白羽の矢を立て、力の一端を見せてからなのはの考えを吹っ切らせようとした次第。

あと基本的になのはの家族は娘に甘いので反対はしない気がします。

第八話 時空管理局（前書き）

高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずかの和解。そして語られた事実、これらは新たな結束とより強い絆を生む事になった。その一方でもう一人の魔法少女との再戦も着実に近づいていく。

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第八話 時空管理局

― 四月二十七日 海鳴市住宅街 ―

子供達が学校を終え登下校で活発になる時間帯。活気に満ち溢れた笑い声や道端の雑踏が様々なリズムで彩られ、一気に人の波で溢れ返る。勿論それは『私立聖祥大学付属小学校』とて例外ではなく、送迎バスや徒歩で帰宅する生徒の数で一杯だ。

その学校から少し離れた沿岸部に――波止場を歩く三人の少女、なのは達が居た。少し違うのは周りに二匹の動物が寄り添う様にいる事、いわずとしたカゲトラと庄之助の二匹である。少女達が徒歩で下校する際は必ずと言っていいほど傍らに付き添う。ちなみにこの面子にフェレットもセットであるのだから、事実上は三匹の動物がお供というべきか。

その本来ならかなり異質な光景、二匹はある意味珍獣として認知され子供達が餌をやったりと、街の住人からは馴染まれていた。勿論、色々と問題はあるのだが実害もなく何より月村家とバニングス家の影響力からか、もはや公認の扱いとしてスルーされている。

そして最後尾を歩く少女、すずかが先日の問題となっていた件くだんの青年について口を開く。

「ねえ、なのはちゃん。あれから刃さん達どうしてるの？」

「どうせあの人の事だから、剣の稽古だの修行だのといって道場に立て籠もってるんじゃないの？ ねっ、カゲトラ」

「ガウ！」

ここ数日來の浅い付き合いとはいえ、大凡の性格を把握して來たのか、オマエの主人の行動なんて予測済みよとカゲトラの背を擦る。すると気持ちの良さそうな目で軽く吠えるカゲトラ。

「にやはは。やっぱり分かつちやうかな？あれから凄い熱が入ってたから刃さん、張り切りすぎて道場とか壊してないと良いけど」

「って、どんだけ滅茶苦茶してんのよアイツ」

「でも訊いた話しだと恭也さんも一緒になって稽古してるんでしょ？お姉ちゃんも稽古ばかり身に入れて構ってもらえないから少し拗ねてたよ」

「う、うーん、……それはあるかも。二人とも倒れるまで鏢迫り合っちゃったし」

なのはが思い出すのは昨夜の稽古の事。二人とも熱が入って動けなくなるまで打ち合いをやっていたのだ。しかも木刀とはいえ生身で打ち合うのだから身体には擦り傷や痣だらけ、下手に口を挟もうとしたら凄いい形相で睨まれるくらい気合の入りが凄かったのだ。普段はあまり参加しない父や姉、そしてムサシまで代わる代わるで参加する始末。

それが甦って思わず苦笑い。なのはは困った家族なんだよ？という口調で事の顛末を話し、稽古は大事だけどそれで怪我したら見るコッチが心配で気が気でなくなると溜め息を吐く。それを訊いた二人は呆れ顔、特にすずかは姉が高町恭也と交際していることも手伝って他人事とはいえなかった。

何故なら夕べも姉の忍から延々と愚痴を訊かされ、それを窘める立場だったのだから。普通なら小学生に窘められる高校生など構図的に逆と思われがちだが、流石にコレを放置しておく両者の仲もギスギスしてしまうので手頃な所でガス抜きは必要となる。つまり――その御鉢を回されたのが彼女という訳だ。

それが巡り巡って最後は此处で語られる。わいのわいのと専ら渦中の人間を話題に上げる中、なのはの肩にチョコンと乗っているユ―ノが当座の問題となっている一つの懸念を語りかけた。

（ねえ、なのは。あの女の子……確かフェイトって言ったよね？使い魔も一緒だったけど、きつと今もジュエルシードを探してると思う。だから何かあっても一人で解決しようとしなくて、皆の事も考えて動かないと駄目だよ。僕だっているし、刃さんだって力になってくれるんだから）

（うっ、それは確かに……ううん、大丈夫！フェイトちゃんの事が気になるのは本当だけど、もう一人で解決しようなんてしないから。だからお願いだよ？ユ―ノ君）

（なのは……有難う。一緒に頑張ろう！）

その念話をなのはは頬笑みで返す。言葉はいらない――互いの瞳で二人は気持ちを通じ合わせ自然と頷き合う、それはアリサやすずかと同じ友情の証。

そして潮風は二人を祝福する様にそっと包み込み、波止場に響く少女達の喧騒は止む事がなかった。

* * * * *

OLやサラリーマンが多く闊歩するオフィス街、そこはやや人を選ぶ感がある高級マンションが立ち並び、高層ビルの群が都会的な街の景観を主張していた。そして夕時に街を去る人々の姿が、ノスタルジックな世界と寂寥を感じさせる。その一角、ブラインドが閉められ部屋の中は夕日が差し込むに止まる部屋で……。

「くそ！なんなんだよ、あの黒髪の男は！？アイツのせいで手に入る筈だったジュエルシードは失敗するし、無駄に魔力を疲労するで収獲ゼロじゃないかっ！！忌々しいったらありやしない」

「……アルフ、少し落ち着いて。過ぎた事を悔やんでも始まらないよ」

高町なのはと同じくジュエルシードを収集する少女、フェイト・テストロッサとアルフの姿が在った。特にアルフは前回の戦闘による疲弊と失敗に苛立ちを隠せず悪態をつく。その表情には恨みというより焦燥……どこか追い詰められた気配を醸す。

それをソファに座って窘めるフェイトも同様に、顔色は精彩が欠き何か思いつめた表情が。一端口を嚙むと助走をつけるように、バシと机を叩き捌け口にするアルフを落ち着かす。その口調は努めて冷静だ。

だがそれで納得いかないのがアルフ。先程迄の怒りから一転、今

度は泣きそうな顔で主に縋ると。

「だってさあ、アイツのせいであの女に怒られるのはフェイトなんだよ!？」

「大丈夫だよ。母さんもきっと分かってくれるから」

穏やかに、だけど芯の強い語り——それがアルフの心を穿つ。

(だから心配なんだ、あの人が……あの女がフェイトの事を心配するなんて考えられないから、だからあんな奴に邪魔されてフェイトが辛い目に遭うのがたまらく許せないんだよ)

使い魔における契約、それは主主体の一方的な側面があるが、また一方でここを通い合わせる事も出来る。例えば主の動揺や悲しみは使い魔に恐慌と不安を、自信や喜びは矜持と至福を齎す。有る意味では一心同体ともいうべき関係。

またアルフの素性——それは子狼の頃に遡る。病に伏せ群れを追いつ出された彼女は死の間際にいた。それをフェイトとの契約によってパートナーとなり救われたのだ。想いという気持ちでは彼女達の繋がりは、並みの契約とは違う利害を超えた信頼という絆に他ならない。

故にアルフはフェイトの心を痛いほど理解していた。それならばと、少しでも暗い話題を変えて元氣を出して貰おうと私生活の改善……主に体力の回復を願い、適度の食事と休養を願い出る。

「ん、でもさ、フェイトも少しは食事を摂らないと身体がもたないよ? 怪我だってしてるんだし」

「有難うアルフ。でも時間も少ないし……それに、あたしは平気」

それを申し訳ない顔で返すフェイト。結局アルフにとっては何時もと同じ問答、どれほど口酸っぱく主を窘めても彼女は頑なに変わる事がなかった。

（こんなんじやフェイトは潰れちまうよ。何のバックアップも受けて一人で背負ってたら何時かは身体も限界が来る……弱音も吐かないで頑張ってるのに、あんまりじゃないか。くそ、あの婆あさえないけりゃあこんな目にあわないのに）

アルフの嘆息を余所にフェイトはバリアジャケットをその身に包む。

「行こう、アルフ。母さんを待たせないんだ」

「まったく頑固なんだから、私のご主人さまは。でも、フェイトが行くってんなら何処までもついてくまでさ」

次のジュエルシードの位置を特定したのか、フェイトはアルフを誘い部屋を後にする。彼女が扱う広域探索魔法——それは拠点とする遠見市を始め、海鳴市に至るまで幅を広げての結果だ。勿論、一度に全ての領域を探索する事は無理であるが、数回に分けチェックを入れれば済む。

常々、アルフがフェイトの身を案じるのもコレが一つの原因であった。その理由は膨大な魔力の消失、元々成長期に入る前の少女には体力や器からして許容量に限度がある。続けて使用すれば倒れる可能性は勿論、いざという時の対応に遅れを生じてしまう。

さりとて他の方法がない彼女達にとってはソレしか手段がなかった。幸か不幸かそのサーチに一つのジュエルシードを探知し、無駄にはならず済んでいる。だから、フエイトほんにんは勿論、アルフも続けていたのだ。

しかし……今回に限っては最大の壁が立ち塞がる事を彼女達は未だ知る由もなかった。もう一人の魔法少女でもない、変な剣を持つ青年でもない、全く別の存在を。

* * * * *

市民の憩いの場、といったら真っ先に浮かぶのが公園や公民館が挙げられる。交流の触れ合いや年代の垣根を除いた接点が生まれるからだ。例えば子供は言うに及ばず主婦仲間や高齢者達の集い、時にはペットの散歩仲間といったグループがそうだろう。特に公園に至っては四季折々の緑と変化も特徴で、花見もあればBBQといった家族の集いに四季を感じさせる。

——そして、その臨界公園を歩くのが学校帰りの少女達、なのはである。先の寄り道で帰宅時間が遅れパタパタと走り行く姿、気にしない……といえは嘘になるが、それなりに良家である彼女達は割と躰が厳しい出自だったりする。

つまり、連絡もなしに帰宅時間が遅れば普通の家よりは後が面倒なのだ。勿論、当人達はそこまで厳格に頭が固い分けではないが、悪戯好きというほど周囲の事を配慮しない訳でもない。故に足も速

くなる、と。

不意になのははぴタリと足を止める。その顔は何時もの緩い表情から一転して険を含んだ物へ。

「!？もしかして、コレって……」

「どうしたの、なのは？」

「なのはちゃん？」

その様子に親友の二人も歩みを止め、なのはの側へと近付いて行く。継いで言葉を投げようとした彼女等は、ソコで初めて親友がある一ヶ所をジッと見つめている事に気付いた。その行方には……木々が生い茂る中に空間の歪みと殺気にも似た空気が。そして、鳥や虫達の鳴き声も止み、場は緊張を含んだ静寂に包まれる。

軽率な行動がとれない——口で語らなくても少女達は頭で理解したのだ。その異変とコレから起こる出来事、前回のジュエルシードの暴走と同じ雰囲気。事実、その歪みはあつという間に一つの木を人面樹と変え、意思を持つ魔物として彼女達に敵意を向けて来た。

ソレを逸早く察したのがなのは。幾つもの経験を重ね対応の術を学んだ彼女は、既に思考でも身体でも起こすべく行動が何か分っている。何時もの緩い空気を纏う少女ではない一人の指揮官として、直に最良の手段を起こす。

「ユーノ君、お願い！トラちゃんと庄之助君はアリサちゃんとすずかちゃんの方を！」

「分った、こっちは任せて。封時結界!!」

「ピーッ!!」

「ガウッ!」

スルリとなのはの肩を降り地に立つユーノ。彼が前脚を空に仰ぎ術式を叫ぶと周囲だけでなく、公園全体を覆うほどの結界が展開されていく。

彼が得意とする結界魔法、その一つ『封時結果』——通常空間から特定の空間を切り取り、時間信号をズラす魔法。それは術者が許可した者か、同じ魔導師でないと内部への侵入や事象も認識できない。後に結界魔導師として才を開花するユーノならではの優れた技量である。

「流石だね、ユーノ君。なら、私も!」

自分も負けられない。なのははニコッと小さく微笑むとレイジングハートを構え、魔法少女へと変身を遂げる。白を基調とした清楚さに制服をモチーフにした形のバリアジャケット、戦闘形態のデバイスモードとなったレイジングハートを左手にする姿はまさに白き天使の降誕。

それを後方に避難していた二人……庄之助の背にすずかが、カゲトラにはアリサ、彼女達は改めて親友が足を踏み入れた世界を認識する。

「あれがなのはなのね。前は意味が分らなくて実感できなかったけ

ど、今ならハッキリ分るわ」

「うん、わたしも同じかな。なのはちゃんが人に言えなかった理由も分る気がする」

バキバキを枝を腕の様に操りなのはを絡め取ろうとする樹木。無数とも言える手管は四方を囲い、大地を決って少女に襲い掛かるが、寸での所で宙に逃れるなのは。ジリジリと間合いを確保し戦闘の様子を見詰めるユーノ。三者は互いに自分が得意とする手段を用い戦局を有利に導こうと動く。

牽制——一種の膠着状態の中で、二・三の絡めてを掻い潜り樹木の頭上を奪ったのはが攻撃を仕掛ける。追尾誘導型の射出魔法、ディバインシューターだ。接近戦を禁物と判断したなのはは複数の誘導弾を以てジュエルシードの暴走を抑制に打って出た。

この世の叫びとは思えぬ薄気味の悪い呪言、まさにそんな形容が相応しい絶叫をウオオオンと樹木があげたのはその時だ。なのはが連射型の射出魔法を放つと同時に、驚く事に周囲に結界を張りディバインシューターと対抗したのである。

それも、見事になのはの魔法を防ぎきる硬度の結界。今迄にない知能と思わぬ力になのはも戸惑いを隠せない。

「うそ！？ 結界で凌ぐなんて……それも、もしかしてユーノ君並みの？」

一撃離脱。あまり機動力を得意としない彼女だが、動揺を抑えつつ無数の枝を何とか振り切って間合いをとる。いくらなのはが高速移動型ではないといえ、並みの魔導師と比較すれば充分な速さであ

る事が幸いした。でなければ明らかに樹木の枝で絡め取られてしまっただろう。

———乱れた呼吸を整え、チラリとなのははユーノの方を見やる。

（なのは、無茶しないでも大丈夫！魔法に必要な時間ぐらいなら僕だって稼いでみせるし、こんな事くらいで弱音を見せてたら刃さん達にも笑われちゃうからね。それに、なのは一人で相手する必要なんてどこにもないよ）

（ユーノ君……）

今の攻防を見る限り生半可な魔法であの結界を突破するのは難しい。となると砲撃魔法、それも集束魔法か直射型の大技が望ましいだろう。なのはとユーノはそれを理解していたから、共にこの場を切り抜ける方法が一致する。

役割分担——この場合でいうなら、前衛がユーノとなってなのはを守り、樹木の邪魔を防がねばならない。要はユーノがその危険な役割を買って出たという訳だ。

（ううん、ユーノ君以上の結界なんてないのに。馬鹿だなあ……私）

心の中で首を振り先程の考えを打ち消すのは。よくよく考えてみればユーノの結界魔法はデバイスもなしに自分の魔力だけで構成している。数々の戦闘で地味に、しかし堅実に裏付けされた強さを示したのを思い出す。それだけ彼の支援魔法は優れているのだと。

「うん、お願いユーノ君！」

「これくらい僕だってやってみせるよ!」

二人の決意が固まったのを見計らってレイジングハートは主の意を汲む。デバイスモードからシューティングモード、彼女得意の一撃必殺極大の砲撃魔法体勢へと。

そして、なのはが目を瞑り意識を集中し始め、ユーノは素早く彼女の前へと出る。

無論、樹木としてそれを黙って見過ごしはしない。己の敵が攻撃準備をするのを好しとする筈がないのだ。二度三度に渡る不快な絶叫を上げたと思うと、大地を削り地中から根っ子の部分が幾重にも彼女達へ襲い掛かる。それは本気、先の比ではない威力となつて極太の根が槍のように鋭さを帯びて。

「させないっ!!」

キーンという激しい接触音、咄嗟に張ったユーノの結界がそれを弾く。立ち塞がるは巨大な塔とすれば、弾かれるは矢の数。城壁を突破しようと何度も諦めず矢は塔に向かって降り注ぐ。

どちらかの体力、若しくは意識が弱まった時がバランスの決壊。そんな凌ぎ合いがなのは達の目前で続けられたのだ。

(負けられない、絶対に!僕にだって出来る事がやっとなんだから。刃さんじゃないけど気持ちじゃ折れるもんかっ!!)

二足立ちで更に力を入れるユーノ。だが、ここが勝負の分かれ目と理解しているのか、それに対抗して樹木も更に攻撃の手数を増や

す。より強力な威力を伴った攻撃は遠方のすずか達の足元まで地割れを起こし、周辺の木々は生命力を奪われ枯れ果てていく。

その恐るべき状況、ジュエルシードの暴走を押さえたのは意外にもこの場に居る者ではなかった。

「え？」

ポカンと間の抜けた言葉がユーノの口から零れる。だが、それを責めてはいけない。ユーノではないがなのはやアリサ達も表情では同じようなもの、それは突如飛来した三日月の魔力弾が大根切りの様にスパッと根を輪切りにし、尚も止まることなく本体へと降り注いだ事に因る。

ピギアと苦痛を漏らし、一番理解に遅れた樹木は咄嗟に結界を張ってその飛来を防ぐ。一体何者が自分を攻撃してきたのだろうか？そんな苦悶に歪めた表情を作り、魔力が飛んできた方角に視線が行くと。

「な〜まいきに、バリヤまで張るのかい」

「……今迄のより強い。それに、あの子もいる」

金髪の長髪をツインテールに結った魔法少女、フェイト・テストアロッサと使い魔アルフが木の上に姿を現していた。なのは達の戦闘の様子を窺い知るとジュエルシードが誰の手にも渡って居ない事が解ったのだろう、彼女のデバイス形態が接近戦を想定した鎌のようになる。

それが意味するのは三つ巴、今の戦況を表すならこの言葉が相応

しい。数度に渡る戦闘によって彼女達の頑なさはなのにもよく理解出来ていた。当然、ユーノもそれに気づきなのはへ念話を送る。

（どうするの、なのは？ここで彼女達と戦闘をするのは得策じゃないよ。かといってジュエルシードを渡す訳にもいかない）

（今はジュエルシードの封印も大事だけど、アリサちゃんやすずちゃん達の……それに自分やユーノ君の安全が第一だよ。だから、ここは協力して暴走を抑えようと思うの）

（……御免。そうだったね、だったら二人の安全は僕に任せてなのはフェイト達とジュエルシードの封印に協力してやって。あの樹木が自暴自棄になって暴走されたら、二人とも危険になる可能性もあるから）

ポリポリと頭を前脚で掻くとユーノは勢いよくその場を走り去る。その後ろ姿を見届けると、なのはは正面、フェイト達に向かい声を出す。

「フェイトちゃん！私には話したい事がいっぱいあるの……でも、今はそれよりこの暴走を食い止めたい、だから一緒に協力したいんだ。お願い、力を貸して！」

「随分虫がいい要求をしてくるけど、どうするフェイト？」

「どちらでも構わない。私はただジュエルシードを手に入れるだけだから」

「————まっ、敵さんも悠長に待ってはくれないみたいだしね」

ゴウツと土から大量の土砂を削り分け幾重もの蔦がフェイト達を囲む。どうやらジュエルシードを取り入れた樹木はなのは達だけでなく、フェイト達も敵と見做したようだ。牽制とはいえ数に物をいませた攻撃が彼女達を襲う。

悪態を吐きながらアルフは、それを拳で破壊していく。機動力に特化したフェイトは当然、その身を捕えられるほど遅くはない。つまり、後方に下がりながら前衛のアルフが目前の攻撃だけを往なしていたのだ。

そして、キリがないと悟ったフェイトは素早く攻撃へと転じる。

「いくよ、バルディッシュ」

『Arc Saber』

バルディッシュと名付けられたデバイス。その鎌状の形態から再び三日月の魔力弾が射出される。まるで草を刈り取るように、強靱な蔦や根の部分を切り刻み一本の道を形作ると、その後にアルフの魔力を帯びた拳、鉄拳が残りの残骸を全て滅していく。

おそらく彼女達がコンピを組めが各上の相手といえど足元を掬われる……そんな、二乗三乗にも強さを高めるとはこの事だろう。まさに見事なパートナーシップ、追い詰められた樹木はその力を防御の結界に回し何とか魔力弾を凌ぎきる。

だが、この場に居るのはフェイト達だけではない。先の魔力チャージで放出のタイミングを見計らっていたなのは、阿吽の呼吸でそこに追撃の一手を撃つ。

「撃ち抜いて！ディバイン」

『Buster』

桜色の魔力光、なのはの極大砲撃魔法だ。流石にこのコンボは堪えたのか、責め凌ぎ合う弾光と結界が徐々にバランスを崩し始めていく。キシキシと縮められて尚、渾身の力を注ぎ己の身を護る樹木。最早攻撃にまで回す余力がなくなったのか、操る触手も範囲が狭められ今では本体となった部分だけに止まっていた。

「チッ、しぶといね。往生際が悪いんだよっ！」

「貫け轟雷！」

『Thunder Smasher』

思いの外粘る怪物に舌打ちをしたアルフ、そして業を煮やしたフエイトは今迄温存していた直射型の砲撃魔法を放つ。電撃を伴う魔力資質は彼女特有の砲撃で物理的な破壊力でいえばなのはのディバインバスターを凌駕する。

削りに削られていた結界ではそれに抗する事は不可能。前衛からの砲撃魔法に加え、後方からの砲撃魔法によって遂に樹木の結界は最期をみる。力の拮抗を易々と崩し元凶であるジュエルシード本体を撃ち抜くと、恐ろしい絶叫を最後に力の暴走は鎮められた。

—————終焉の一撃、それはまさに最後のトリを飾るに相応しい砲撃だった。そして、ジュエルシードが取り除かれると、樹木は元の姿へと戻る。まるで今迄の戦闘が夢であるかのような静寂が

訪れ、力の封印を受けた宝石は二人の魔法少女に挟まれる様に静かに宙を漂う。

「あの子がなのはの話していたフェイトって子みたいね」

「うん、それに犬みたいなの女の人も」

「二人とも今は戦闘中だから油断だけはしないで下さい。何かあった時は僕がサポートしますけど、何が起こるか分かりませんから」

間隙を縫う様に一息を吐くアリサとすずか、それにユーノの三人。戦闘中まではユーノが張った結界に護られていたが、今はそれも解除されやっと言葉を発する事が出来た。……といっても公園を囲む広域結界までは解除されていないのだが。

どうやらなのはが執着していた相手だけに気になる存在のようだ。その容姿は同じ女性としても綺麗という単語が似合うどこか謎めいた雰囲気、力の方もたった今、なのはと同じ無茶苦茶ぶり。思わずプハーと溜め込んだ息が盛大に零れる。

外野がジッと見守る一方でその渦中の人物達は……。

「また逢えたね、フェイトちゃん。でも、今は先ず、お礼を言わせてほしいの」

「お礼？」

「うん。言ったでしょ？協力しようって。だから、そのお礼」

「？」

何を言ってるの？この子、———そんな拍子抜けた顔のフェイトを余所になのははペコリと頭を下げた。それも、『有難う』という一言と見事なまでに鮮やかな笑顔を付けて。

その行動に茫然とするフェイト、すると今度はなのはが右手を前に差し出す。

「ッ！……君と私は敵同士の筈、一体何のつもり？」

「あ、握手はまだ早すぎだったかな？」

ビクツと身を竦ませると警戒心を露わにフェイトはなのはから距離をとる。するとその仕草にポリポリと頬を掻き、急過ぎたかな？と自分の失敗をにやはと照れ隠すなのは。

そして一転、今度は真剣な眼差しに変わると自分の決意を包み隠さず語り始める。

「うん、これは私なりのケジメなんだ。もう、スジを通さない行動は嫌なの。だから、例え分り合えなくても感謝をしたい時はお礼も言うし、譲れない時はコツチも引けない。フェイトちゃんとは正々堂々と勝負をしたいから。……だから！この戦いが終わった時は、ちゃんと話を訊いて欲しいのっ！！」

「……言った筈、もう邪魔をしないでって。私はジュエルシードを手に入れられればそれでいい」

「本当ならフェイトちゃんに譲ってあげたい気持ちもあるんだ。だけど、今の私には同じくらい大事な人がいるって気付けたし、ユー

ノ君の力になりたいというのも本当。それに何より、こんな危険な事をほっとけない自分があるの。――だから、悪いけどココは譲れないっ！！いくよ、フェイトちゃん」

『Flash Move』

その科白を端に、二人の間で火蓋が切って落される。足元に小さな白い翼を出すと意外な事に自ら接近戦へと打って出るなのは。あつという間に間合いを詰め、レイジングハートを振りかざす。

「疾い、けど」

機動力という意味で言うなら一日の長はフェイトにあった。なのはの勢いを削ぐ為に敢えて攻撃を躲し、上空へと素早く身を逃れる。故になのはの攻撃はスカッと空を切り制空権を彼女に奪われてしまう。

しかし――ここからが、なのはの本領だった。

『Divine Shooter』

空を切った遠心力を利用し、振り向きざま周囲に無数の魔力弾を形成する。それは先の戦闘でも見せた追尾誘導型の射出魔法。シューという発生と共に勢いよく射出されると光の弾丸と化す。

（この子、以前とは全然違う。ううん、魔力が強くて凄い早さで成長してるって事じゃない。もっと根本的な、戦士としての心構えみたいなものを持っている。何で？この強い意志は一体何？）

付け入る隙がない技量、それは初めて対面した時の事を考えると

段違いであった。だが何よりフェイトを驚かせたのは、なのはの強い意志が宿った瞳。明らかに迷いや躊躇のない、決意を秘めた顔である。

「でも、私だって負けられない！」

『Defender』

なのはが『Protection』という魔法シールドを使用する様に、フェイトもそれは同類であった。瞬時の躊躇を見せるも直ぐに気を取り直し、宙を錐揉みしながら全弾の被爆を避けるように、確実に一発づつの着弾で防ぐ。コレは防御に難を示す彼女ならではの回避術であろう。

機動力と経験、眼の良さによる見切りがあって初めて成功する高等回避術。そして、彼女が優れているのはもう一点——応用力の高さにあった。……二発・三発・四発と、徐々にディバインシューターの着弾で起こる爆風を煙幕代わりの隠れ蓑として利用し、自らが放つ魔法のタイミングを巧妙に隠したのだ。

「……まさか、これで終わりじゃないよね？フェイトちゃん」

全てのシューターが着弾したのを固唾を吞んで見守るなのは。空には魔力の着弾による爆風と爆煙が視界を奪っていた。その為僅かな油断も見せずジッと様子を窺っていると——。。

『Thunder Smasher』

「ッ!？」

先の戦闘で見せた電撃を混ぜた魔力光、ディバインバスター並みの威力を秘めた砲撃魔法が、轟音となって煙を突き破る。魔力資質として電気を保有する希有な才能を持つ彼女ならではの電撃魔法。その威力は推して知るべし、ジュエルシードの暴走を鎮めた事からも容易だろう。

（やっぱり機を狙っていたんだね。でも、私だって何時までもやられてばかりじゃないよ）

相手が機動力で優れるなら自分は防御力と一点突破の破壊力。全方位の防御を捨て一極集中の防御力を高めた『Round shield』というシールド型の魔法を即座に選ぶと、やや角度をズラし反射という防御スキルを見せた。

無論、鏡のように乱反射という訳ではないが、機動を変えらった方がシクリくるかもしれない。飛来の位置を微妙に変化させ僅かなダメージの損傷で直撃を免れる戦法をとったのだ。しかも、フェイトに比較するとゴコチなくはあるが、鋭角的な飛翔で電撃魔法の中を掻い潜り、最小限のダメージのまま間合いを詰めるという離れ業を演じて。

「そんな！？有り得ない、魔法を掻い潜ってくるなんて……」

魔法に耐えた、これなら納得出来る。魔法を躲した、これも理解出来る。だが、掻い潜って尚攻撃を仕掛ける？それも砲撃魔法の中で。そんな予想だになかった反撃にフェイトは焦りを覚えてしまう。

彼女の機動力を以てすればなのは反撃を回避するのは難しくない。否、簡単であろう。普通なら躲せた攻撃、冷静な彼女ならそれ

を選んでいた筈だ。冷静に対処すれば最も効率的な手段を選ぶのが常套であるのだから。

しかし——どんどん手強くなる相手に、焦燥を覚えたフェイトは己の支柱となる事が不意に過った。

（駄目だ！負けられない、ここで負けちゃったら……ジュエルシードが、母さんのお願いが叶えられなくなる）

グッとバルディッシュを握る手に入れると、姿勢を前傾に変えなのは迎え撃つ。二人の少女の雄々しい叫びが重なり合い、力と力、意地と意地がぶつかり合う。

まさに、そんな瞬間————。

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる」

突如として魔法陣が浮かび、そこから一人の少年が現れると、この攻撃を制止したのだ。黒衣のジャケットに身を包み、両者のデバイスを抑え込むその技量、明らかに普通の人間ではない。

その風貌はあどけなさが残りお世辞にも男性として身長が高くない事から、歳の頃はなのは達と然程変わりなくとれる。それでもどこか特殊な訓練を経験した軍人の空気を纏うのは……おそらくバリアジャケットだろうが、どこか規律のとれた服装が組織人である事を匂わせるからだ。

一旦、両者の顔を確認すると、彼は少女達の驚愕を余所に自らの名乗りを告げる。

「僕は時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせて貰おうか」

* * * * *

人知れず公園内で魔法少女達の激戦が繰り広げられていた同時刻。ここ、高町家の道場でも異変が訪れていた。道場の中で刃とムサシを含め稽古を共にする恭也と士郎、そして怪我の治療を手当てる美由希が一斉にある方向を向いている。

何故か？それは、庭の土をグシャと踏み込む音が近づいていたからだ。音から得られる情報は少人数……というよりおそらくたった一人、重量感を感じさせないのは大柄でなく軽量だからだろうか。当然ながら礼儀の欠いた侵入者というのが全員の見解。知人や客の類ならいきなり庭先の道場へと近付きはしない。

今から土足で入り込む者であろう人に対し、彼等は入り口へ注意を向けていた。といってもあからさまな殺気の類もなければ、警戒するような足取りでもない事に若干の違和感を覚えつつ。

（ヤイバよ、分っておろうが油断するなよ）

（ケツ、白昼堂々と盗みを働くとはいい度胸だ。ふん縛ってやらあ）

（ふっ、いい度胸だ。何処に侵入してるのか思い知らせてやろう）

（まあ……同情の余地はないけど、ご愁傷様って所かしら）

（しかし……泥棒の類にしては妙に堂々としすぎているな。一体何のつもりだ？）

各々が思案する中、いよいよ得体の知れぬ存在が入口に手を掛け、ガラリと姿を現す。それは、身長がこの中で一番小柄なムサシより少し高め、白のマントで身体を覆うような出で立ち、だが美しい金髪を、左側面だけ髪飾りで束ねるショートヘアの少女が在った。

一体どんな顔をした者なのか？一目見てやろうと注視していた彼等、特に刃とムサシはそれを見て驚愕の顔を浮かべる。ほう、とその美貌に軽く感嘆の反応を示す高町家の家族は兎も角、二人は少女の名前と正体を知っていたのだ。

「お、お主は！？」

「お、おまえ……何でここに！？」

「久しぶりだな、刃。また……お前の力、借りたい」

物音が消えた道場の中を、三人だけの声が静かに響いていた。

第八話 時空管理局（後書き）

はい、時空管理局執務官様の御登場です。アニメではこの後、なのはとユーノを誘ってアースラへと同行するのですが……この作品ではアリサとすずかも共に同行する事になります。一蓮托生とはこの事、もう彼女達も全面で堂々と関係者扱いなのです。

そして刃の前に現れた謎の女性。原作を御存じの方なら推測に難しくない彼女です。本当は彼女共々、なのは達とアースラ行きも考えたんですが、敢えて今回は別々の方向にしました。管理局の方々が刃の力を知るのももう少し先。

第九話 交渉（前書き）

突如なのは達の前に現れた時空管理局執務官を名乗る謎の少年。彼は驚く事になのはとフェイトの間に入り、両者の攻防を制止させたのだ。片や高町家では刃の前に現れた謎の女性、彼女もまた新たな勢力として顔を現した。事態の混迷が加速する中、彼等の未来はどうなっていくのか……。

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第九話 交渉

「え〜と……済まないがコレは例の話しに出て来た彼女という事でいいのかな？」

「済まんな、士郎殿。御察しの通りこ奴の名はエメラルド、前に事情を説明した通りで間違っておらん」

状況整理――取り敢えず置いてけぼりとなった高町の面々、士郎が目の前の光景について確認をとる。というのも何の前触れもなく現れた一人の少女が、甲斐甲斐しくも刃の世話を焼いていたからだ。初めは無法者の類だと思われたが一転、刃とムサシにとって旧知の仲であった為今は居間の客室で皆がお茶を啜りながら揃っている。

そこで、一息ついた所で士郎がムサシに説明を求めたという訳だ。それを意外な者を見る好奇心な視線で美由希は黙って静観し、桃子に至ってはニヤニヤと微笑んでいる。要するに口を挟むには情報が少なくソレを少しでも把握しようという寸法であり、恭也は無粋な事こそ口を挟まない物のそろそろ自己紹介の一つも求めるような雰囲気ではあった。

コホンと咳払いを一口いれ、この唐突に姿を現した少女に対しムサシは口を開く。

「んっ。で、エメラルドよ、お主が何故生きているのか？そして、何の理由で姿を見せたのか？当然、話してくれるんじゃないかな」

「ていうかオマエ、本当にエメラルドなのか？」

「間違いない、私はお前達の知ってるエメラルド」

「では訊くがお主、何故生きておる？ 確かお主はヤイバを庇ってその身に防御システムの攻撃を受けて亡くなった筈じゃが」

「……」

ムサシの言葉に目を瞑り、間を置くエメラルド。その様子からは言葉を選びどこから説明すべきか考えている節が窺えた。そして、時間にして数秒……沈黙を破り再び開かれた口から紡がれたのは――。

「―――確かに私は一度、ピラミッドの中でヤイバを庇って破壊された。しかし、お前達と和解した後、ボスは地上の人間達に時間を与え、行く末を黙って見届ける事を選んだ。その上で私や他のソルジャー達も再び造り上げ、誰も地底に手出しが出来ないような深い地の底に潜り地上と隔離した。だから、本来なら私もこうして姿を見せる事はなかった」

「だったら何で今頃になって地上に現れやがった!？」

「ソレを今から説明する。単刀直入に云う、ヤイバ、お前の力また貸して欲しい」

ヤイバの両肩を掴みどこか嬉しそうな物言いのエメラルド。言葉の方も柔らかく大事という任務よりは若干の私情も含まれているといった感じ、あけすけに自分の感情を顕していた。

しかし、それで事情が解るのは本人だけ。当然ムサシなどは頭を抱えて呆れた顔付きでそれに反論を投げかける。

「サッパリ意味が解らんわ。何がどうなってそうなるんじゃ？」

「そうかな？ お前達なら心当たりあるはず。……例えばこの地にジユエルシードという異界の遺物が紛れこみ、魔導師という奴がいる事」

ビシッとムサシに指を突き刺しながら、今度は逆に鋭い視線で物語る。

「「!？」」

核心とはまさにこの事、思わぬ返しがムサシを唸らせヤイバも言葉を失う。

「私達、地の民はずっと太古の昔から地上を見て来た。だから、その力や存在も知ってる」

「ちょっと待てよ！ って事は何か、またオマエらのボスが地上に侵略しやがるとか言うんじえねえだろうな！？ もしかして」

ヤイバの激昂に対しエメラルドは横に首を振ると、

「逆、地上の安全の為に力貸して欲しい。延^ひいてはそれが地底の為に繋がる」

「どういう意味じゃ？」

「つまり、魔導師や遺物が如何に危険か私達知ってる。だから、ソレが暴走しない内に排除をする任務が私に下った。あの力、どれだ

け脅威なのか良く知ってるのではないか？それに、お前達と一番親しかったのは私だ。円滑に進めるのに適任だった」

「……要するにオマエ等もジュエルシードとかいう石ころを探してるって事か？それでもってオレ達に協力をしろ——って訳だよな？」

ヤイバの何とか整理しようというたどたどしい言葉にエメラルドも頷く。

尤も追及の言はヤイバだけに終わらない。以前の轍を踏むまいと鷹の様に眼を光らせる人物、ムサシがもう一声噛み付いたからだ。

「じゃがワシ等は既になのは殿と協力を結んでおる。ここにお主達が加わると第三者の介入、つまり争いの種を撒く事になると思わぬか？そもそもジュエルシードの封印は魔導師しか出来ぬと訊いておる。そんな物を手に入れて一体どうするつもりじゃ？」

あゝなるほど、と気を緩ませるヤイバとは逆にムサシは警戒を解く事なく、眼光に鋭さを増して相手の真意に探りを入れる。安にお前のせいで余計に事が大事になる、そんな牽制は老獪な彼ならではの手管だろう。

所がそんなムサシの上を行ったのがエメラルドからの返し、驚愕の一言であった。

「別に構わない。私達の目的、ジュエルシードの排除だからだ。余所者の介入は極力避けねばならないし、事件が解決するなら石はどうでもいい。特に必要としないし、欲しければ譲る。要は一緒に行動する事で目的が達せられるか否かという事。そもそも、お前達は

変だと思わなかったのか？魔導師の存在を……」

「なんじゃと？一体どういう意味じゃ……」

「簡単だ。奴等は一人じゃない。組織という単位で存在して、必要とあらば介入してくる。その組織の名を『時空管理局』、我々よりずっと進んだ科学力と巨大な力を保持する異世界の住人だ」

「じ、じくう…：かんりきよくう？」

梅干しでも食したような酸っぱい表情で復唱するのはヤイバ。概ね反応的には彼以外も似たり寄ったりであったが、いよいよ大掛かりな組織の名前が出ると無視できないのは高町家の人々であった。何しろ彼の家では大事な娘がこの世界に関わっている。

渋い表情で黙って訊いているがその心中や如何程であっただろう、あまり好ましくない反応であったのだけは確かなようであるが。事がどんどん大事になっていく予感をこの場に居る皆が胸に抱えたのは間違いないようである。

その反応を特に気にしていないのか、エメラルドも淡々と話を進めていく。

「そうだ。奴等の眼に掛るのは時間の問題、こちらが関与したなくともアチラはどう思うかな？刃のような巨大な力を持つ者を黙って見過ごすとも思っているのか？下手をすれば向こうの管轄に組み込まれ体の良い扱いになる。協力する時は人の善い顔をして、言う事を訊かない……反発する者を人はどうするのか……ムサシなら言わずとも解るはず」

「む、むうう」

ムサシはその言葉に何の反論も出来ないのか、詰まった科白しか口から出なかった。———というのも無理はないだろう、彼の過去には嘗て権力者から恨みを買って逃げ惑う経験があったからだ。

『織田信長御前試合』、それは裏の家業として多くの人間を刈り出した。地位や名誉に莫大な財産と恩恵が巨大な反面、闇の一部として流れる血や命も多い。ムサシはその第一回大会で優勝を果たして強者であったが、時の権力者達にとってはソレが不評を買う事にもなった。

結果彼は命を狙われ半世捨て人状態で野に下ったのである。まさに身を以て組織や権力の恐ろしさを彼は知っていたといえよう。ムサシの額からツウと一滴の汗が滴り落ち、その表情は一層固いものとなる。

「しかし、私と刃……私達が協力すれば向こうもおいそれと強硬はとれない。此方も組織として扱われる筈だ。おそらくは様子を見てから対処する事を選ぶだろう」

「なるほど、確かに個人単位で動くより背後に大掛かりな組織が介入すれば、相手も慎重になる。あとは相手の出方や交渉でどうなるか……じゃな？」

コクリと頷いてエメラルドも同意を示す。

「ああ、私達は不干渉を望む。この星に危害を加えるような異物がなければそれでいい」

雰囲気的に陰悪な物は流れていなかった……だが直感的に感じるものがあつたのだろう。あの女性は普通の人間ではないと、だから幾分の警戒も交えて小声でお互いの確認を図っている。

「やれやれ。このままでは埒が明かんじやろう、恭也殿に美由希殿。それに刃よ、この際じゃから士郎殿も交えて話をゆっくり聞かせてもらおうではないか」

このまま前回のような事態になっては士郎殿達に申し訳ないしいう。あの様子では懸念で済むじやろうが、万が一という可能性もある。態々その姿を現すからには余程の事情がありそうじゃしな。ならば……全ての者を交えて説明を聞くのがよかろう。

そして武蔵の提案もあつてか、恭也や美由希もそれに頷き場所を

変えての説明となった――。

――同時刻――

高町家でそんな急変が起きてる頃、ここ臨海公園の方でも……。突如現れた少年によって事態が急変していたのである。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせて貰おうか」

（誰よ、あの人？）

（また別の誰かが現れたって事なのかな？）

おそらくこの場で現状を理解しているのは……。

ユーノ・スクライア。

フェイト・テストロッサ。

アルフ。

この三人であろう。彼等は別の世界の住人であり、時空管理局という存在を知りえているのだから。

――当然、この世界の住人である。

高町なのは。

アリサ・バニングス。

月村すずか。

彼女達三人は時空管理局なるものの存在を知らなかった。

「先ずは二人とも武器を引くんだ。このまま戦闘行為を続けるなら

……」

駄目だ。このままでは、あたし達は管理局に捕まってしまう。少なくともロストログアに関する犯罪はただじゃ済まない。となると……フェイトだって無事で済む保障はどこにもない。

そう判断したアルフの行動は素早かった。

時空管理局執務官を名乗る男に攻撃を仕掛けたのである。

「！！」

瞬間、クロノの手には魔法陣が展開される。

自分に向けて放たれた魔法を防ぐ為に。

「フェイト！撤退するよ、離れて！」

（フェイト、このままじゃ管理局に捕まっちゃうよ。早く逃げないと）

（アルフ……）

幾重にも放たれる魔法の数。

それらが全てクロノの周囲へと襲い掛かった。

アルフ自身もそれで相手を倒したとは思っていない。寧ろこんな攻撃で事が済むとは思っていない。自分が出来る事は時間稼ぎと主のサポート。

そしてその間に――。

「フェイト、はやく！」

アルフの言葉に反応してフェイトはジュエルシールドを手に入れようと上空へ飛翔する。

だが……。

その行動を阻止すべく鋭い魔力の光弾がフェイトに向かって放たれたのだ。

「フェイトちゃん!？」

「フェイト!」

彼女達の前に現れたのはデバイスを突き付け、鋭い表情で攻撃を加えようとするクロノであった。

なんで? どうして? 急に現れてフェイトちゃんを攻撃するの? まるで自分の大切な親友が傷つけられたかの様に感情が昂る。早く彼を止めないといけない! そんな焦燥感に駆られ、なのははクロノの前に立ち塞がった。

「だめー!」

「!?!」

「なんで!?! どうしてフェイトちゃんを傷つけるの? 撃たないで!」

そこにあるのは理屈ではない。

己の感情ただそれだけであった。

それ故に強く、後悔もなく、これ以上は攻撃させないという気概に溢れていた。

(……なんで?)

(アイツ……)

突然のライバルの行動に意味が分からなかった。
何故自分達を庇うのか。

敵意ではなく好意を投げかけてくるのか。

そんな今迄に感じた事もない違和感を胸に浮かべたものの……。現状ではそれに悩んでいる暇はない。

早くこの場から撤退する事が最優先だと。

そして彼女達は罪悪感と戸惑いを感じながら――。

なのはとクロノが対峙している一瞬の隙を突いてこの場から離脱したのである。

「ふう」

これ以上の戦闘行為は無意味となったのだろう。クロノは構えていたデバイスを下ろし地面へと降り立ってきた。

「なのは！」

「なのはちゃん！」

「大丈夫？なのは！」

そして事が決着したのを見計らって、なのはの下へ心配そうに駆け寄って来る親友達。

「うん。私は大丈夫だよ。それよりもフェイトちゃんの方が……」（きつと……きつとまた話し合えるよね、フェイトちゃん）

若干の心残りとはフェイトの事を気遣いながら自分は問題ないと応える。

その顔には少し残念な表情も残っていたが、以前の様な不安定さと脆さを感じる事はなかった。だから彼女達も安心したのだろう。なのはの安否に安堵しつつも、次々とフェイトの事もきつと大丈夫だと声を投げかける。

そして頃合いを見計らったかのようにクロノとなのは達の間を挟んで映像が浮かび上がる。

「クロノ、お疲れ様」

「済みません。片方は逃がしてしまいました」

「ううん。ま、大丈夫よ」

「でね、ちよつと事情を聞きたいからそっちの子達をアースラに案内してくれるかしら？」

事の顛末を話さなければならない。どうやらそういった空気になってきているみたいね。何事もなければいいんだけど……。

両親を実業家に持ち生来の気性の強さもあつたのだろう。彼女もまた何らかの天性の才能を開花させるが如く、この先に待ち受けているであろう事態を薄々と感づいていた。交渉という話し合いの場もまた、戦場に等しい物であると。

Side — 高町家 —

「……つまり、君の話を要約するとこの街は今大変な危機に見舞われていると？」

「そうだ。このままではこの街、大変な事になる。

この街だけじゃない、この異変はわたし達、地下の民にも大変」

「ふむ」

考え込むは高町士郎。恭也達が連れてきた女性、エメラルドと名乗る人物の話を聞いているのだ。名前だけなら以前、刃に話を伺っ

ているので知らない訳ではなかった。だが、話の限りだと彼女は本来ここに存在すべき人ではない。それらの事情を踏まえて彼女は自分がここに姿を現した真意を話したのである。

「この地、ジュエルシードと名乗る遺物が紛れこんだ。
わたし達、ずっとこれを見守ってきた」

「要するに、そのジュエルシードという物のせいで、この世界が破壊する可能性があるというんだな？」

先日なのはの話では確かに危険な物だとは言っていた。だが：そこのままで危険な物であるとは認識していないみたいだな。果たしてこのまま、なのはだけに任せて良いのだろうか？恭也の中ではそんな疑問が湧いてくる。

「だから、わたしここに現れた。
ボスが、また刃に力を借りたいと、考えたから」

なるほど……確かにエメラルドは一度亡くなった。じゃが、この危機を感じ取った地底人が再び刃との架け橋となるべく世に産み出したと。

武蔵の方も彼女がここに現れた理由を知った。

確かにワシ達はジュエルシードの事については良く分かっておらんかったな。ユーノの話だけは聞いておるが、実際に触れてみる機会があったのは三回程。刃が犬の怪物を倒した時、そして残るは街中に樹木が現れた時とジュエルシードの本体が暴走した時のみ。やや危機意識が足りなかったのかもしれない。

「ちょっと待って。じゃあ、その時空管理局っていうの？その組織に任せたら大丈夫なんじゃないの？」

「確かにアイツ達、それ出来る。」

「だけど、この地に住まうものとして、それ見過ごす事できない」

地の民達は永くこの地上を見守ってきた存在だ。当然、過去にも時空管理局なる存在がこの地に現れた事を知っている。そして魔法という力の片鱗も少なからず認識しているのだ。

何れにしても自分達の世界が危機に瀕しているというのに動かない訳にはいかない。

だからこそ鉄刃の力を借りようとしているのだ。

あのヤマタノオロチを封印した、スサノオの血をひくサムライの力を。

「兎に角。そのジュエルシードをこれ以上暴走させないように、何とかすればいいんだろ？」

「そうだ。でも、先も言った通り、時空管理局も動いた。この先、何が起こるかわからない」

彼等程の進んだ科学力と技術力があれば事は収めよう。だが、最悪の場合も仮定する必要がある。彼等がどんな手段を取るか分からない以上は……。

「大丈夫。わたし達、揃えばこわくない！」

「お？ おう」

力強く刃に語る姿勢はそこはかとなく嬉しそうだ。

そして、その場だけ何となく甘い雰囲気醸し出してくる。

それを眺める高町家の人達。

おやおや？ 何ですか、その二人だけの世界は？ と、そんな視線へ変わるのとは仕方ないのかもしれない。故に先程までの深刻な話が台

無しである。

そんな空気を察した士郎がとりあえずの結論を出した。

「ん、とりあえずはエメラルドさんの話は大凡分かりました」

「そうね。これからの話は、なのほも加えて改めてって事にしまし
ようか？」

流石は高町夫妻。

野暮な事をしない所作が心憎い。

「あ！？そうだ、刃君」

一応は話が纏まりかけた時、美由希がふいに思い出した事を口にする。

「なんだよ？」

隣で引っ付いて来るエメラルドが邪魔で話にくそうに応える。

「前から気になっていたんだけど……もしかして、刃君ってあの鉄
グループと関係してるとか？あの日本有数の大企業の」
アイアン

「ふん。関係も何も刃はその長男じゃよ」

「「！？」」

これに驚いたのは恭也と美由希。

いや、隣で聞いていた士郎も少なからずの驚愕を抱いた。

こんなボンクラな姿形をしていれば中々想像に連結するのは無理
からぬこと。

というか、企業家としての雰囲気には程遠いのだ。

このギャップがあって驚きも一入だったのだろう。

実に彼等に見てみれば間の抜けた顔をしているのが傍目から見
て一目瞭然だった。

S i d e ー アースラ ー

「ユーノ君、ここって一体…」

「時空管理局の次元航行船の中だね」

初めて見る巡行艦内部にびくつきながら語っているのは、なの
とユーノ。

「へへ。何だか凄い場所ね、ここ」

「う、うん……」

（アリサちゃん、順応しすぎ）

アリサの方は家柄からこういった面にはある程度、適応力が強い
ようだ。

もつとも、隣のアリサは性格的な面から戸惑っているようだが…。

「ああ、何時までもその格好というのも窮屈だろう。バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ。それに、君も元の姿に戻っても良いんじゃないか？」

「ああ、そう言えばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れていました」

クロノが語りかけると同時、なのはが普段の姿に戻りユーノも元の姿へと戻る。

ユーノの方も人間の姿に戻ったのは久しぶりだったので、何気ない笑顔で微笑むのだが――。

ここで少女達三人の姿が固まった。

そして……。

「ふええええええええー!?!」

なのはの声が艦内に絶叫したのである。

「なのは?」

そのあまりの驚き様にユーノも訝しむ。

「ユーノくんって、ユーノくんって、あの、その」
凄じ取り乱しようだ。

そして運の悪い事に事態はそれだけで収まらなかった。

「:ねえ、ユーノ:あんたって、人間だったの?」

「フェレットじゃなかったんだ?」

顔はにこやかに笑っているが後ろにはドス黒い気配を漂わして詰問する二人。

アリサとすすかだ。

「え!?!」

その恐ろしい気配に思わずたじろぐユーノ。

「:アンタ、確か以前温泉に宿泊した時、私達と一緒に湯に入ったわね?」

「うん。私もそれは覚えてるな…」

「え、えくと……」

駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ。

逃げる逃げる逃げる逃げる。

そんな生存本能が語りかけてくる。

このままでは自分は助からない、そんな危機一髪の状態に天使が降臨した。

「その…ちよつといいか？君達の事情は良く知らないが、艦長を待たせているので出来れば早めに話を聞きたいんだが」

なんという正論。

なんという大義。

その救いの言葉にこの場は一旦の收拾がつくのであった。

おそらくユーノから見るとクロノは神様にも等しく見えたに違いない。

尤もその後三途の川を渡るような体験をするのだが、それはまた別のお話。

―クロノに連れられて四人は艦長室へと赴く。

「艦長、来てもらいました」

四人の眼に飛び込んできたのは……。

正面に正座して客人を待ち望む艦長の姿。

そして周囲は何というか……。

場に馴染まない異質な日本風景だったのだ。

明らかに何かを誤解していると言った方が賢明かもしれない。

そんな三人の戸惑いを余所に話は続く。

「はじめまして。私は時空管理局提督、艦長のリンディ・ハラオウンです」

爽やかな笑みでもて成し、説明を求めるべく話を促した。

何故、なのは達がジュエルシードを集めているのかを。

その原因を。

話が進むにつれ、ユーノも自分の責任を感じていたのだろう……。責任感の強さに苛まれながらも自分で何とかしようとした事を説明していた。

「立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある」

ロストロギアの危険性を十分に把握しているクロノが糾弾する。

何か事が起こってからでは遅いからだ。

そんな流れを余所になのはも気になっていた事を質問する。

「あの：ロストロギアって何なんですか？」

「遺失世界の遺産……過去に進みすぎた技術等で滅んだ世界があったわ。こことは違う別世界の。それで、その失った世界の遺産の事を総称してそう呼ぶの」

「……これはある伝承の一つなんだが、ある世界で魔法の力を巡って大戦争“魔大戦”というのが起こった事があるらしい」

「魔大戦？」

当然の事ながらその伝承を知らない三人は訳が分からない。

クロノはそれを置いて話を続けていく。

「何でもその結果、その世界から魔法が消え機械文明が発達して世界は再び復興した。だが、皇帝ガストラという男が幻獣という存在に目を付け「魔導」という力で世界征服を目論んでしまったらしい。そしてその野望が引き金となって、三闘神（「魔神」「鬼神」「女神」）というその世界に君臨した神の封印が解かれ、その世界が切り裂かれてしまった事があったそうだ。皇帝ガストラも結局はケフカという男に殺されてしまったけどね。因みにこの伝承に語られるロストログアを「魔石」というんだ。何でもそれには幻獣の力が込められていて凄い力が隠されているとか……持つ者によっては信じられない力も発揮したそうだ。何れにしてもこういったロストログアに纏わる話は、伝承の類から実際に起きた悲惨な歴史が数多く存在する。だからそれを然るべき所に管理して封印しなければならないんだ」

「それに、貴方達が捜しているロストログア、ジュエルシードは次元干渉型のエネルギー結晶体。いくつか特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こす可能性があるの」

「君も知っていると思うが、この地でも次元震に類する余波があったんだ」

ここでこの場に居る四人の脳裏に浮かんだのが先日 の件。

刃がジュエルシードの暴走を力で無理やり抑え込んだ事だ。

あの時の余波が次元震に匹敵するのだろうと思うと背筋が凍るのを感じた。

そして説明の方が一段落した頃合いを見計らい、リンディが言葉を締める。

「これよりロストログア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通り暮らすといい」

その言葉に間誤つくなのは。

そんな一言であっさり納得するほど浅い関係ではなかったからだ。自分が今迄頑張ってきたのも、その覚悟も必死のもだった。

だから――。

納得できません。

そんな表情で縋ろうとしたのだ。

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて、皆で話し合って、それから改めてお話をしましょう」

諦めきれないなのはを諭すように話す。

少なからずそこにはなのは達の身を案ずる気配りもあったのかも
しれない。

しかしここで思わぬ人物が介入してきたのだ。

「ちょっといいですか？」

「あら？何かしら」

アリサ・バニングス。なのはの友人にして実業家の両親を持つ英才。

彼女は胸に抱いていた不審をぶつけてきたのである。

「今回の事件は本来私達のような民間人が介入するような事じゃないんですよね？」

「…ええ」

「なら……なんで強制的にこの事件から下ろそうとしないんですか？」

「アリサちゃん？」

何の事か分からないのは達は、彼女へと視線を集める。

「だって、変じゃないですか？普通、組織だつての行動となるなら、個人の行動なんてもっと制限されるものですよ。警察だつてその為に権力とかがあるんですから」

「何がいたいんだい？」

クロノが片目でアリサを睨むように視線を飛ばす。

「つまり、本当にジェルシード集めに私達を関わらせたくないって事なのか疑問なんです！」

「何なら今すぐその権力を使って君達を除外しても構わないんだぞ！」

こちらの好意を無碍に扱われたと思ったのか、クロノの感情も昂る。

何故なら自分は本心から彼女達をこの事件から外そうと思っていたのだから。

「なら！何で私達に時間を与えようとしたんですか！？こう言うのも何ですが、そもそもこの事件に関わる気がないなら初めから干渉しませんよ！」

段々とアリサの意図する所が読めてきたのだろう、すずかの方も何かに気付いたようだ。

「わたしも：私もアリサちゃんの言う事に一理あると思います」
おずおずと手を挙げながらアリサを擁護する。

「だって、こんな事になってまで手を引くなら、もっと前に止めている筈だよね？なのはちゃん」

「え！？あ：うん！」

「つまり、こんな事話す前から分かり切ってる事なんです！少なくとも公的な組織は個人の感情より規則を遵守します。なのに：まるでこちらの反応を試すようにするなんて……」

詰る所、本気で相手を締め出す気なら直ぐに出来たのである。少なくとも相手は時空管理局という公的な組織だ。当然の事ながら局内の厳しい守るべき法が存在する筈。それを置いておいて人情的に猶予を与えるというのだから懐疑的になるのだ。全くの初対面相手にその対応は釈然としないものもある。だから、アリサは異を唱えて問い質したのだ。

―その思わぬ所からの反応に―

「あら？それなら今直ぐにでも強制権を発動させましょうか？」
淡々と自分の姿勢を崩さないリンディ。

「そんな事を聞きたいんじゃないじゃない！何でこんな回りくどい遣り方をするんですかって事です」

「回りくどい？」

「そうです！なのは、私達の力を借りたいなら素直に話せて事よ！」

やや感情の昂りに地が出てくるアリサ。

だけど彼女もこのまま何も分らず親友が利用されるような事は見逃せない。

自然、その瞳には強い意志が宿って来る。

「艦長！」

クロノの方もここまで言われては黙ってられない。

やや強引なのは仕方ないが強制的に排除すべきですと、応えを待つ。

「……ふう」

「艦長？」

「ふふ。私の負けね」

まるで降参しましたと振舞うリンディ。

その行動に虚を突かれたか、アリサやすずかも戸惑う。

「確かに私は貴方達を試すような事をしたわ。それについては全面的に謝ります」

「え？」

相手の思わぬ意趣変更に戸惑ったままのアリサ。

「ですが、私達にも立場というものがあるの」

ああ成程。ここでアリサは納得してしまった。仮にもこの艦の提督を務める人だ。個人的な感情だけで動く分けにはいかないし、艦の人員達の安全を守るべき立場にある。そんな彼女が安易に民間人から助力を乞ったり、小さな少女を全面へと押し出すような行為を認める訳にはいかない。少なくとも自分達から助力を求めるのと、相手方から協力を求めるのでは外聞としてもかなり変わって来るのだ。当然、面子といったものから責任問題といったのも含まれてはいるが……。

こういった事情の機微に聡いアリサは何となく分かってしまったのだ。
だから――。

「私は、なのはがこれ以上危険な事にならないようにしたかったんです」

少し照れくさく、それでいて気恥ずかしさに瞳を逸らして応える。

「ふふ。なのはさん、良いお友達をお持ちのようね」

「ふえ？」

今一、現状を理解していないらしく困惑するなのは。

ただ、彼女も親友を褒められた事は嬉しかったのか直ぐに満面の笑みで頷いた。

「クロノ執務官」

「は、はい」

「これより我が艦は、高町なのは、ユーノ・スクライア、アリサ・バニングス、月村すずかの四名を民間協力者として迎え入れる事に

します」

「艦長!？」

「ただし!こちらからも条件があります。貴方達の身柄を一時、時空管理局の預かりとする事。そして、こちらの指示を必ず守る事。これだけは約束して貰わないとならないわ」

「なのは？」

「なのはちゃん……」

(なのは、どうするの?)

「わ、私は大切な友達と始めた事を最後まで遣り通したいの。それに、まだ大切な人と話だって終わってないから。危険な事だっていうのは分かっています。でも…でも私には力になってくれる人が周りにたくさんいます。指示だってちゃんと守ります。だから、この事を最後までやらせて下さい」

この子の魔力は黒い子と比べても何ら遜色はない。少なくとも話ではいくつかのジュエルシードを封印している。それにこの仕事を無事成し遂げるには、少しでも戦力が必要なのは否めないわ。この艦で彼女達に匹敵する力を秘めているのもクロノだけだしね。あの少女だってジュエルシードを狙う目的が分からない以上は協力、もしくは黒幕的存在が後ろに隠れている可能性だってある。まだまだ不確定要素が多い……そしてなのはさんが話していた鉄刃という人物の話も気になるわ。今回は現場にいなかったみたいだけど、なのはさんの協力者として同行しているみたいだし。

——なら……私の応えも決まっているわね。

そして、なのはの返答にリンディも頷いて協力を求める事になっ

た。

第九話 交渉（後書き）

強引な手法なのは承知していますが、これでアースラにはアリサ・なのは・すずか・ユーノが民間協力者として加わりました。因みに刃については次に絡ませたいので今回は別行動。それとリンディ達には報告はしているものの、詳細については次回へと持ち越しにしました。後、アリサ達を加わらせたのには理由もあるんです。終盤のある復活イベントにつながりたいので。

それと今回新たに発覚した鉄財閥。

これもののちに本編へと絡める為の布石となりました。

しかし……フェイト影薄いなあ。

いや、凄い気に入ってるキャラなんだけど。

なのはと刃を動かすだけで精一杯になってしまっ……

アルフのあの健気な所も含めてつくづく勿体ない事しました。

それとクロノの件、あるゲームネタを遊び的要素として取り入れてみました。

それなりに有名なシリーズなんです、かなり古いです。

作者的にはかなりプレイしてたのを覚えています。

まあ……その割に殆ど忘れてしまってますけど（苦笑）。

第十話 錯綜する想い（前書き）

アースラに招かれた高町なのは達は、時空管理局に力を貸すことになった。一方、高町家でもエメラルドが鉄刃に助力を求め行動を共にする事になる。そして追い詰められていくフェイト、それぞれの思惑が加速を増していくのだった。

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第十話 錯綜する想い

しかし、ふざけた数値だな……魔力の平均値が127万に143万。最大発揮値はそれ以上ときたか。才能に年齢は関係ないけど、潜在能力としてこれだけあるなら溜息以外何もでてこないな。

モニターを見ながら脳裏に浮かぶのは黒の魔導師と白の魔導師。今回の件で民間協力者となった、高町なのは。そして謎の少女フェイト・テスタロッサである。本当に末恐ろしい才能だと言わざるを得ない。

「やれやれ」

そんな事を考えていた為か、思わず溜息が洩れてしまう。

「あれ？どうしたの。ひょっとして自分より魔力値が高いから悔しかったとか？」

それを少しからかう様に言うエイミィ。

二人共この艦に於いて優秀な人材である。

アースラ通信主任兼執務官補佐に時空管理局執務官。年齢を考慮するならこの二名も同様な事が言える。

「別にそういう訳じゃないよ、エイミィ。それより、高町なのはの言っていたもう一人の協力者……」

「えっと、鉄刃って人だったかな？」

「ああ、そちらの方も若干気になってね……」

その男は魔力も魔法もなしにジュエルシードの力を抑え込んだみたいだ。

本当にそんな事が可能なのか？

直接会って早く話を伺ってみたいものだ。

生真面目な性格だったのだろう、仕事の事に関してはどんな懸念事項でも考慮する必要があるとばかりに、モニターから意識を切り替えていた。

Side — 高町家 —

アースラから元の世界へと戻ってきたのは達。

彼女達は刃達にも事情を話すべく全員で高町家に集まっていた。

「えーと、あの、そちらの人は……」

なのはが戸惑いながら語りかける。

彼女達が先ず驚いたのは、見た事もない女性がいた事だ。

見た感じだと凄く綺麗な女性で、髪留めを左髪に付けている。

でも……マントを覆っていて御世辞にも趣味の良い格好とはいえない。

なんだろう？このアンバランスさは。

明らかに普通の人じゃないよね？というか普通に考えるなら刃さん関係の人としか思い浮かばないんだけど。

「わたしの名はエメラルド……」

刃の力を借りにきた」

それに愛想もなく応えるエメラルド。

「ほら、前に話しただろう。コイツの事、ピラミッドを止める際に力を貸してくれたって」

刃の方も以前の説明を思い出させる。

「あれ？でも、刃さんの話だとエメラルドさんは確か……」

なのはも少し思案しながら、エメラルドの方を見つめる。

「ああ、だからその説明も含めて、お前等に話す事があんだよ」

……成程、エメラルドさんはジュエルシードの危険性と時空管理局の介入による不確定要素、これらの事を危惧した地底人が

回避手段として再び世に産み出したと。それにしてもまさか管理局の存在まで知っているとは思わなかった。基本、管理局は管理外界には不干渉の立場をとっているから、この世界で存在が知られているとは思えなかったし。

刃の説明を一通り聞き終えた後、ユーノはその意外性に驚きを覚えていた。ただ、時空管理局には地球出身者の人間もいるから、在りえない話ではなかった。でもそうなる……エメラルドさんは、僕達や管理局にも力を貸してくれるって事になるのかな？

「あの、刃さん。僕達からも説明しなければならない事があるんです」

そしてユーノもまた語り始める。自分達がその時空管理局と接触した事を。これからは彼等の管轄の下、ジュエルシード探索に力を貸す事になったと。その際に、刃さんの説明もあったので一度彼等と会って話をして欲しい事。

「まあ、オレは別に構わねえけどな……」

刃はチラリと士郎達に話を求める。

「……前にも言ったがお父さん達は、なのはを応援する。だがな、流石になのはに魔法の力が使えるからといって、そんな危険な事を任せるのは正直反対だ」

「俺も父さんの意見に賛成だな」

「ッ！ そんな……」

その意見に思わず反応するなのは。

「なのは。お前はまだ小学三年生なんだ。例えどんな力を使えたって親として心配しない人間がどこにいると思う？」

「それに……これにはアリサちゃんやすすかちゃんも関係している。無責任に何でも承知する訳にはいかないだろう？」

淡々と客観的な事実を述べる士郎と恭也。

なのはの自主性を尊重するのも大事だが、それは現実起こるであろう危険性や事の重大さにもよる。彼等はその辺の事をよく熟知しているのだ。だからそこ、安易な対応を取る事はない。

「だから」

次に紡がれる言葉を予想してか表情が硬くなるなのは。

いや、なのはだけでなくアリサやすすかも同様のようだ。

良くも悪くも士郎達の言い分は決して間違っていない。彼女達も自分達が足を踏み入れた世界が一般的には容認される事柄でないのを自覚しているからだ。そもそもこの親だって子供が危険になるのを見過ごす訳がない。そこにあるのは悪意ではなく、親身思う親心であるだけに自分達の我儘であるのを悟ってしまう。もっとも理屈では納得しても感情は別物というのが人間であるのだが。

「なのは……それに、アリサちゃんにすすかちゃん。君達もこの事に関与するなどは言わない。ならせめて、自分達の安否を必ず両親に知らせる事。そして軽々しく自分達の身を危険に晒さない事。これが約束できるかい？」

「え？」

あれ？予想とは違う言葉に拍子抜けしたのか、鳩が豆鉄砲を食らったような顔になってしまう。

「なのは達の事だ。どうせ駄目だと言っても聞きはしないんだろう？それに自分達にも身に覚えがない訳じゃないしな。だったら少しは楔を刺しておかないとな」

そこにあるのは自分の妹を娘を信用する家族の顔。そして何かあれば力を貸すといった表れであった。自分達の真意は伝えつつも、娘や周りの親友達を信頼しているからそこ認めるのだと。家族の固い絆であった。

「刃君、それに武蔵さん。親馬鹿と思われるかもしれませんが、娘の……なのはの力になってやって下さい」

「俺からもお願いする。頼む、なのは達の力になってやってくれ」

そんな男達の姿を微笑ましく見つめる桃子と美由希。自分達の話したかった事、気持ちも全て同じだとばかりに何も言わずに喜んでいるのだ。

「なに、ワシ等は元よりその積りじゃよ。お主達には散々世話になっておるしな。ここまで来て関係ない等という無責任な真似も出来ん。そして何より、当事者の刃が動く気満々じゃて。ありゃ、止められんわ」

水臭い事はなしじゃと、そんな表情でニヤリ顔の武蔵。

（そうだったな。この人達は損得勘定で動いたり、変な事を恩に着せるタイプじゃなかった。だから……愚直ではあるが、真直ぐな奴等だから気にいったんだったな）

士郎も逆の立場なら自分もそうしただろうとばかりに苦笑いで返す。

「よし！そうと決まりゃあ、早速そのアースラとかに乗り込もうぜ！」

「士郎殿、では申し訳ないのじゃが後の事は任せても？」

「ええ、そうですね」

「とりあえずこの場は一旦解散して、皆も家族に説明してからアースラに乗り込むべきだろう。何といっても纏まった休みが必要になるんだからな」

士郎と恭也の言葉を持ってこの場は一旦の解散となったのである。それぞれの決意を胸に込めて――。

……ただ別の思惑も一つ動いていた。

「あ、アリサちゃん。ちょっといいかな？」

「何ですか？美由希さん」

「実はね……」

「ええ！？はあ……ああ！なるほど」

「ね。面白そうですね？」

「はい！そんな事があったなんて。全然想像できませんでした」

物陰で語る、アリサと美由希。

実にあくどい笑顔であった。

何か悪巧みでも思いついたかのように。

S i d e ー フェイト ー

高町家で今後の検討が為されている頃、同じくジュエルシードを集めているもう一人の魔法少女、フェイトの方でもある動きがあった。

今回の件で私達は間違いなく時空管理局に目を付けられた。今迄のように自由に行動を取る事は難しい……下手をすればこちらの居場所も見付けられてしまう。これまでに私が集めた数は5つ。あの子達も既に幾つかは手に入れている……なんとかしないと。

「フェイト？」

アルフの方でもフェイトの焦りを感じて言葉を掛ける。

「アルフ……このままだと、ジュエルシードの方も上手く集まらない。だから賭けに出ようと思うの」

「賭け？」

「うん。今回の件で管理局までこの地に現れたでしょ？幸いにこの

居場所までは見付かっていないし、私もアルフも体力的にはまだ問題ない」

「……」

「でもこのまま消耗戦となると、明らかに私達にとって不利になる」

「だから早期戦に持ち込まないと私達は母さんの願いを叶える事が出来なくなる。相手もこちらの出方を探っている今なら、私の魔力でジュエルシードを強制発動させて最初に見付けてしまえば出し抜けると思うの」

「！？そんなの無茶す「分かってる」え？」

「無理矢理発動させるだけでも相当な魔力が必要なのは分かってる……でも、管理局まで動きだしたんじゃ、表立って動くのは難しくなる」

（な、何をそんなに焦ってるんだよ……フェイト）

アルフとしてもフェイトの案には承諾しかねた。その手段は最後の方法となるからだ。出来るだけ相手の目立たない様に集めるのが常套手段であるのに……主の、フェイトの手段は今の段階でとるには早すぎる策だった。

「私や母さんの関係だって知られるのは時間の問題だと思うの。私達にはあまり時間を割いてる余裕がない……だから、今の時点で先手を打っておかないと」

焦ってるのは、自分でも分かっている。本当ならこんなの最後の手段だって事も。だけど……私は母さんを悲しませたくない。その為

にはジュエルシードを絶対に手に入れる必要があるんだ。諦める訳にはいかない――。

――同時刻、とある場所では……――

「アリシア……もう少しよ、もう少しで私達の夢が叶う」

妖艶な笑みを浮かべて中に漂うジュエルシードを見つめる女性。見た目からは想像もつかないが、彼女はかつてミッドの中央技術開発局の第3局長という立場にあり、次元航行エネルギー駆動炉「ヒュードラ」のプロジェクトに参加していた大魔導師。そんな人間が何故ジュエルシードを求め、管理局と敵対しているのか……その謎は彼女の瞳からは決して窺い知れなかった。

（あの、あの忌々しい出来ごとさえ無ければ……アリシアも私もこんな事にはならなかった。自分の無力さが、大切な者さえ護れなかった無力さが、許せなかった）

自然、手に入る力が増す。その様は後悔に震えるように無力感を漂わせ、心の慟哭が今にも聞こえてきそうな雰囲気醸し出す。

「だからお願いよ、フェイト。はやく……早く母さんを喜ばせて頂戴」

（私には時間が……時間がないのよ）

何者にも揺らがない、確かな明確な決意の表情で―。
その女性は静かに時を待ち続けていた。

だがその女性も気付かない。

もう一つの意識。

何も話せず、存在すらせず、しかし確実にその女性と共にここを見守りつづけた意識がそこにはあったのだ。

S i d e ― アースラ ―

あの高町家での集いの後、少女達も決意を胸に秘めアースラに集っていた。

ある者は想いを伝える為・ある者は親友の為・ある者はそんな皆を支える為……。

そんな錯綜する想いはあれど、先日の士郎達の話で後顧の憂いを取り除いた者達ばかりである。

「えーと、貴方が鉄刃さん？はじめまして。私はリンディ・ハラオウン、このアースラの艦長でもあるわ」

（この人がなのはさん達の話していた鉄刃……）

「おう、宜しくな♪」

（随分と綺麗な姉ちゃんだな）

「ワシは宮本武蔵じゃ。まあ、なのは殿達から話はきいておると思うがの」

（……この女、なかなか腹芸が達者みたいじゃな）

「……わたしの名は、エメラルド」

ふーん。話の限りだと刃さんと武蔵さんだけだったのに、もう一人協力者がいたみたいね。見た感じだと極普通の人達にしか思えないんだけど……やっぱり彼の持っている質量兵器に秘密があるのかしら？

「艦長！」

「ん？あ、ああクロノの事も紹介しないとね」

段取りではクロノと模擬戦をやらせてみて彼等の実力を計る。もし、なのはさん達の言葉が本当なら色々調べる必要が出てくる。仮に違ったとしてもその程度ならこちらの邪魔になる事はない。最低でもなのはさん達の協力は得ているのだから、さしたる問題は無いと……。

まあ、私自身は正直信じ難い気がするけど。

私とクロノは事前に段取りを練っている。

ならこの後の行動はクロノに任せましょうかー。

「ん。僕の名はクロノ・ハラOWN、執務官の職を務めている」
軽く相手を威圧するかのような態度で相手の出方を窺うクロノ。
（さあ、どうでる？特に何の反応もなしか……それとも及び腰にな

るか)

「刃、少し話ある。

こっち来てくれ、武蔵もだ」

「お、おいエメラルド？」

何だ？　そういえば彼女の名前だけは知らされていない。見たところデバイスも持ち合わせていないし、彼女もこの世界の普通の人間にしか見えないが……。

(アイツ、明らかにこちら挑発している。
おそろく、刃の手の内見るため)

(ふむ。おそらくはそんな所じやろうな)

(ケツ、んなもん怖かねえや。戦いてくなら相手になってやるぜ)

傍から見るとスクラムのような形で話をしている。

これにはその場の者も少し呆れ気味のようだ。

(密談するにしろもう少しまともな格好があるだろうに……)

少し気が抜けたように観察するクロノ。

(目的、忘れるな。

わたし達、ジュエルシードの蒐集が大事)

(そういう事はアイツらに言ってくれ)

(ではこういうのはどうじゃ?)

ふんふん。

ほーほー。

「あいつ等は、何をやってんのよ？」

自分達を外して内密の話をしてる姿が面白くない。

そんな苛立ちを隠しもせず、いい加減にしろとアリサが近づいた時……。

「おい、クロノさんとやら。一つ提案があるんじゃないか？」

「ッ！ん、提案ですか？一体何でしょう」

別にさん付けに反応した訳じゃない。

ただ、あからさまに含みを込めて舐めている口調に思わず舌打ちしてしまう。

そんな気持ちの昂りを抑え、相手に耳を傾ける。

「なに、難しい事ではない。次のジュエルシードが見つかった際に、ワシ等に任せてほしいんじゃない」

「なに？」

（あら）

古狸と女狐。

この策士同士は瞬時に互いの思惑を理解する。

「そうだ。お前達、こちらの力知らない。

だから、次の蒐集で試せばいい」

「オレもいい加減、腕が鈍っていた所だし丁度いいぜ」

「刃さん？」

何で初対面なのにこう互いを挑発するような雰囲気なんだろ。

別に喧嘩腰になる必要なんてないのに。

この辺りの両者の思惑。それに気付かないユーノとなのは心底不思議に思っている。逆にクロノやリンディは警戒心を強める。こちらの考えを読まれたからだ。

（さて、どうしようかしら。こちらとしては別に構わないけど……このまま駆け引きで後れを取っては後々面倒になりそうだし）

「別に何も問題ない。

お前達、ジュエルシード集まればよし。

失敗しても自分達で確保できる」

それは言外に管理局にとって損はないと滲ませている。

「あら。じゃあ失敗してジュエルシードの被害を被ったら責任をとれるのかしら？」

「ふん。その時はこちらの規則に従ってどんな罰則にも応じるわい」

「……艦長」

「ええ、いいわよクロノ」

「そちらの申し分は了解した。ただし！最後の言葉は決して忘れないでくれ」

実際、クロノやリンディにとって本気で彼等を罰しようとは思っていない。万が一の際には自分達が干渉して大事にしなければ問題ないからだ。詰まりどう転んでも自分達にとってリスクはないので

ある。刃達の実力が本物かどうか、駄目なら体よく追い出せばよい。問題なのは交渉事や心理戦において相手に後れをとる事である。だからこの場では自分達の姿勢を崩さずに貫いたのだ。

そしてその応酬に気付いていたのは……。

（アリサちゃん……何でこう血の気が多いかな、刃さん達って）
（まあ、両方の言い分は仕方ないわよ）

（何だか面白そうな人達が入ってきたみたい♪）

アリサとすずか。

そしてエイミィの三人であった。

こうして次のジュエルシードの蒐集次第で、正式に刃達を協力者として仰ぐかどうなるかが決定した。

しかし――。

後にクロノは語る。

本当にあの時、模擬戦をやらなくて良かったと。

第十話 錯綜する想い（後書き）

これで次からは刃達を活躍させられる。やはり戦場こそが彼等の晴れ舞台、エメラルド共々華々しい舞台が設置できました。どうも交渉事の場面では刃は影が薄くなりがちで。暫くは戦闘場面が続くので大活躍間違いなし。少しロマンスもいれてみたいし。

因みにその為にフェイトは出番を奪われています。

アニメでは管理局を出し抜いて二つ程獲得しているのに、それが全部刃に持っていかれるので。でもこの辺は仕方ない。

それとアニメ10話でプレシアがジュエルシードを9個集めたと言っています。

この作品では刃に邪魔され一つ失敗しています。そして残りの3個はもう少し先になるので現段階で5個となりました。

第十一話 協力者（前書き）

アースラの面々と会談を果たした刃一行。だが、正式に管理局の民間協力者として行動を共にするには成果を見せる必要があった。その為に刃達はジュエルシード蒐集に力を尽くすのだが……

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第十一話 協力者

「後は任せた！」

「つう訳だ。さあ、覚悟しやがれ！」

舞台を踊るは鉄刃とエメラルド。

二人の連携がジュエルシードを捕獲せんと追い詰めていく。

「か・み・な・り——」

斬り！と叫びながら刃の太刀筋が一体の巨大な動物を切り刻んでいく。

それは大きな蛙の姿をした、ジュエルシードによって凶暴な姿と化した生き物を倒したのだ。

「ゲ・ゲ・ゲコ」

ジュエルシードの暴走が抑えられ、生き物は元の小さな蛙へと戻っていく。

ただしこのままでは再び暴走しかねない。
だから——。

「オーイ、こっちも終わったぜ」

「刃、わたしいる。問題ない」

場の收拾を求めるべく刃とエメラルドが上空に向かって叫ぶ。
其処に居たのは……。

「ああ。分かってる」

クロノ執務官。

今回の刃達のジュエルシード蒐集を見つめていた人物だ。

そしてその傍らには一人の少女と一匹の小動物。

なのはとユーノの二人である。彼女達もまた、今回の刃達の働きぶりを共に傍観していたのである。

「ジュエルシード、シリアル？封印」

クロノはそのジュエルシードを封印して無事蒐集する。

（それにしても……まさかこの眼で本当に魔法を使わずにジュエルシードを抑える力を見ろとは。彼女の言っていた事もどうやら本当みたいだな）

そう思いながら先程の戦闘を振り返る――。

* * * * *

今回のジュエルシード蒐集を一任された刃とエメラルド。
その二人の前にいるのは一匹の巨大な蛙だったのだ。

「あれを倒しゃあいいんだな？」

「ボヤボヤしない。さあ、行く」

エメラルドが積極的に行動へと移り、徐に刃の左腕を組むように絡めて対象へと歩み出す。

「うーん、それにしてもなあ……」

「どうした？アレ、問題ないと思うが」

「いや……そういう意味じゃなくてな」

（カエルの化け物を見てるとアイツを思い出すんだよなあ。ゲロ左エ門も初めは敵として現れたからな。懐かしいというか）

そんな思い出に浸ってしまったのか、エメラルドは刃を急かす様に彼を対象の敵へと放り投げる。

「な！？いきなり何しやがる」

「前見る。余所見、危険」

エメラルドの言葉とほぼ同時に巨大化した蛙が刃へと踏みつぶさんとばかりに襲い掛かる。もしまともに攻撃を受けたら再起不能になりかねない、重量のある一撃であった。

「チッ！！」

その攻撃に素早く反応した刃は瞬時に脚を地に着け、サイドステップで身を逃れる。

しかし……その怪物も甘くはない。

追撃の手として口から粘液の塊を吐き出したのだ。
明らかに死角からの攻撃となった粘液は今にも刃を飲み込まんとする。

「甘めえよ」

瞬間、刃はそれを悟っているかのように脚力を溜める。
まるで次の一撃の為に。

「そういう事だ」

何時の間にか刃の傍にはエメラルドの姿があった。
それを刃も当然の如く待ち望んでいたかのように。
そして――。

エメラルドが手を上空に翳すと刃と自分を包み込むようにシールドが張られたのだ。

その光は神々しいばかりに眩く、何人の侵犯も許さない。
見る者はそんな光景に見惚れるであろう、瞬時の攻防であった。
更にはその隙を見逃さずに紡ぐ。

「後は任せた！」

「つう訳だ。さあ、覚悟しやがれ！」

そう。そんな結末が当然だと知っていた刃は攻撃を防いだと同時に脚に溜めこんだ力を解放し普通では考えられない跳躍を試みせたのだ。

「もらった~~~~~!!」

その恐るべき跳躍力は蛙の化け物を正確に標的へと捉える。

遙か頭上から、刃の構えがまるで雷の様な閃光へと変わる。
そして……。

「か・み・な・り斬り!!」

全ての決着が着いた。
その攻撃で。

（彼女の防壁もだが……あの男の剣も要注意か）

普通ならジュエルシードの暴走で凶暴化した生き物を簡単に抑える事は出来ない。

軽く抑えられたように窺えるが、それは彼等の攻防がそれだけ常軌を逸脱していた事になる。俄かには信じ難いが全くの虚言でもなかった訳か……。

クロノとしても一度だけの戦闘で全てを推し量る事はしない。
そこまで単純でもなければ、判断する材料が足りないと分かっているからだ。

その一方で――。

「凄いね。刃さんもエメラルドさんも」

「うん、何ていうか……やっぱりあの人の無茶苦茶ぶりが解る」

なのはとユーノは刃の戦闘を何度か目になっている。

だからクロノほど疑う事はしていない。

ただ鮮やかな連係と軽々と任務をこなす姿に感嘆するのみだった。

（うん。私も頑張らないと！）
なのははその活躍に刺激され自分も頑張らねばと奮起されていたが。

「艦長」

「任務御苦労さま。今、そちらにゲートを作るわ」

リンディとクロノが状況確認後、アースラへの帰還ゲートが出現し一応の任務は終了となった。今回の結果報告を受ける為に。

「――で、お主から見て今回の結果はどうじゃったかな？」

「そうね……確かに彼等には魔法は使えないみたいだけど、戦力としては問題ないみたいですわ。もう少し実践を見せて貰いますが概ね協力を求める事になると思うわ」

先程の戦闘をモニター越しで観察していた武蔵とリンディ。

（点数を付けるなら及第点かしら？確かに彼等の力は侮れないし、気になる点も幾つかあった。でも……なのはさん達程の強さを感じる事はなかった。本気で戦ってる様に見えなかったとはいえ、必要以上に警戒する必要はないかしら？まあ、結論を下すには早計だけど）

「武蔵さん、とりあえず刃君達が戻ってきたら一休みして下さい。
ジュエルシードの探索はこちらで進めますから」

「了解じゃ。……まあ、及第点かの」

「!!」

リンディは一瞬だけ心を覗かれたかのような錯覚を起こす。この老人、どこことなくではあるが自分と同じ空気を感じるのだ。それは見た目とか性格ではなく、物事の捉え方や思考が似ていると。合理的な思考や計略の類を練る反面、それに徹しきれない人情面を感じるのだと。

英雄は英雄を知る。

自分と同じ匂いを感じる者同士は互いを認め合う、そんな言葉が相応しいのかもしれない。

故にリンディは自分の直感を信じる事にした。

（ん〜。やっぱり変に敵対するのは得策じゃなさそうね……彼等の詳細をもう一度なのはさん達から聞き出す必要もあるし）

そんなふうには武蔵とリンディが思惑を胸に秘め刃達を待っている。

——やがて。

「大丈夫か？ 傷とかあったらわたし、治す」

「あんなんで怪我なんかするかよ」

妙に甲斐甲斐しく刃の世話をしようとするエメラルド。

刃自身も決して女性や彼女の事は嫌いではない。
ただ……あんまり引っ付かれると少し動きにくいのだ。

その為二人の関係が微妙に苛立たしい……。

これが相思相愛でベタベタされると口を挟むのもバカバカしい、
いわゆる勝手にやってくれとなる。逆に変な位置で惚気を見せられるとどかしくなるものだ。そしてそれが苛立たしさを生んでしまう。

人間なんて得手して勝手なものである。

その様を白ける視線や弄りたくなる視線、そんな様々な視線で二人に降り注ぐ。

(……?)

「何か拙かったか？特に問題もなく倒したはず……だよな？ムサシ」
「たわけめ。皆の視線は違う意味じゃ」

「あの〜」

恐る恐る口を挟むなのは。

「もしかして……刃さんとエメラルドさんって恋人とかだったりします？」

「いや、特にオレは女とつきあ……痛！？」

「これはわたしと刃の問題。おまえたち、関係ない」

恐ろしいまでの冷たい視線、それはまるで刺し殺せるといわんばかりだ。

そしてその瞬間だけ周囲が氷点下の空間となり、まるで極寒の地になったかのように変貌を遂げる。

その迫力に……。

（こ、怖ええええ）

「なななななななななな、何でもないです!!」
恐れ慄く刃となのは。

いや——。

この二人だけでない……。

（あ、アリサちゃん、こ、こ、怖い）

（しっかりして、すずか! 大丈夫、あれは私達には来ないから）

（クロノ君、どうやらあれは禁句みたい）

（ん。僕もまだ死にたくないからな。気を付けるとしよう）

（まったく……これでさやか殿がおったらと思うと）

（あらあら。どうやら藪をつついて蛇を出さずにすんだみたい。これは触れないのが賢明みたいね）

（なのは……駄目だよ、人の恋路を邪魔しちゃ）

この場に居た者全員に禁句^{タブー}として封印された一言であつた。

「————で、エイミィ。そちらは何か分かったのかい？」

「黒い服の子、フェイト・テストロッサ。ずっと昔にミッドチルダの中央都市で魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして追放されてしまった大魔導師がいたの。そしてその大魔導師と同じ Family Name……それが彼女なの。まだ確証はないけど、私はその関係者だと思うな」

「で、そのフェイト・テストロッサの動きは？」

「今の所は何も」

（彼女には使い魔らしき者もいた。僕達が干渉してきた事でかなり警戒してるみたいだな。この分だと暫くは表立った動きはしないか……）

「じゃあ、次のジュエルシードの目星は？」

「そっちも大凡は目星がついてるよ」

——クロノとエイミーが今後の対応を検討している頃。
同じくアースラ内部で……。

「ふー。とりあえずは順当の結果じゃったな」

「あんなもんでか？」

「必要以上に力みせつける、危険。
大事なのは対等の関係になる事」

「そうじゃ。じゃからワシはこの提督とやらに交渉をつける。互いのデメリットとメリットを考慮した上で良好な関係を築く事こそ大事じゃからな」

（……過度な期待が禁物じゃが、おそらくあの女。話の通じない相手ではないな。なんとなくではあるが、ワシと同じ策謀を得意としている節もある。決して道理が通じない相手ではなさそうじゃ）

「まあ、オレとしては滅多に経験できない相手と戦えるんだから文句ねえけどよ」

刃と武蔵、そしてエメラルドが個室を与えられこれからの相談を行っていた。

今の所は問題なく順調な流れとなっている。

不必要に相手に警戒を与えないのもまた戦略上で欠かせない要素なのだ。

だから執務官との模擬戦も断り、ジュエルシードの蒐集協力を選んだのである。

こちらの戦力を妥当な範囲で見せて反感を与えない……相互にメリットがある上、相手の事を調べる時間も稼げる。話の通じる相手なら摩擦を回避する面でも得策といえるだろう。

「それに次のお呼びがあるまで待つしかねーんだし」
「なら体調管理も含めてわたしが調べる」

どうにもエメラルドは刃に干渉したいようだ。生前ではわずかな期間しか知り会えなかった。それでも――彼女にとって忘れ難い記

憶だったのだろう。彼の力や性格、全てが自分にとって好ましかったのかもしれない。昔の様な敵としてでなく、偽りのない自分の気持ちを持って接する事が彼女を変えていた。

「まったく、退屈せん奴らじゃ」

やや呆れながらも武蔵は微笑ましくその姿を眺めていた。

彼も少なからず嬉しかったのかもしれない。

あの悲劇を乗り越えて得られた仲間が。

——同時刻、同じようにリンディもなのは達と対談を行っていた。

「じゃあ……彼女、エメラルドさんは地底人だというのね？」

「はい。刃さんの話だとジュエルシードの暴走、延いては次元震が無視できなくて協力を仰ぐ為に現れたって」

（まさかそんなのが存在していたなんてね。まあ、他の次元世界には人間以外の生物も存在しているし、在りえない話ではないかもしれないけど）

「何か他に知ってる事はないのかしら？」

「他には特に……」

「アリサちゃんは何か知ってる？」

「ううん。すずかは？」

「私も同じかな……まだ知り会って時間もそんなに経ってないし」

「そう……」

（これ以上の情報は仕方ないわね。あとは現場で得られる情報を頼みにしよう）

——そうリンデイが思考を纏めた所で念話が送られてくる。

（艦長、次のジュエルシードの位置を発見しました。確保の命令をお願いします）

（クロノ？そうね……あの黒い服の子はどうなってるの）

（そちらはエイミィに任せていますが、現段階では動きがないみたいです）

（分かったわ。じゃあ、彼等の情報収集も兼ねて任務をお願いしますましょうか）

（では、僕は鉄の下に）

「あのーリンデイさん？」

「あ、なのはさん。次のジュエルシードが見つかったみたい。次は貴女もお願いしていいかしら？」

「あ、はい！」

「じゃあ僕も！」

「ええ、お願いね二人共」

コンコン。

ドアがノックされ一人の少年が入って来る。

「お？もしかして次の目標も見付かったとか？」

「ああ。今の所は黒服の少女も目立った動きがないからね。優先的にジュエルシードを集めなくてはならない。この任務が成功すれば間違いなく、貴方達も正式に民間協力者として迎えられるよ」

「そんじゃ頑張りますか♪」

「油断禁物。何が起こるかわからない」

本当に良い相性だ。

（傍からみると恋人といっても差し支えない程の雰囲気だな）
自然、笑みが零れ二人を優しく見つめてしまう。

「次の任務では複数個が同時にあるから、高町さん達も共同で任務に当たるそうだ」

クロノに導かれる様に刃とエメラルドは部屋を出ていく。

……そんな様子を静かに見守っていた武蔵は……。

（やはりな。あ奴も根は悪くなさそうじゃ）

少し満足気な顔で彼等を見送った後に自分もリンディの下へと向

かうのだった。

S i d e — ? ? ? —

「では鮫島さん。宜しくお願い致します」

「はい、きっとアリサお嬢様もお喜びになります」

「……刃」

とある車内、そこでは二人の女性が一つの目的地を目指していた。
そして彼女達が目指す目的地とは……？

S i d e ー フェイト ー

「フェイト、見付けたよ!」

(今なら管理局が来る前に何とかなるかもしれない)

——そう覚悟を決めた少女の瞳には力が宿る。

「行こう、アルフ!」

「大丈夫だよ! フェイトは必ずあたしが護って見せるから!」

一人の少女と使い魔はジュエルシードを求め空を翔ける。

まだ管理局も目を付けていないであろう大海へと。

そして刃達の方は……。

「おゝ美味そうだな」

「戦闘中、ふざけるよくない」

「だってなくアレ見ろよ」

大地にその巨体を動かすは巨大な蛇、ジュエルシードの魔力によって大蛇へと変貌を遂げた怪物であった。そしてその巨体からは凡そ想像も出来ない俊敏さで刃達へと襲い掛かってくる。

……しかしそんな怪物であつても……。

「左はわたし行く、刃は右任せた」

「よっしゃあ」

瞬時に左右へと分れ対象を惑わす。

そしてその隙を突いて刃が右翼から牽制の一撃を繰り出す。

飛ぶ斬撃——それが大蛇を切り刻むべく飛来するのだ。

必然、己の身を守るべく大蛇は防衛手段に出る。

大蛇の周囲に堅牢な障壁が展開され、驚く事に刃の攻撃を全て防ぎきる。

生半可な斬撃などでは傷一つすら付かない。

そんな言葉が相応しいのかもしれない……ここに彼女がいなければだが。

「思ったよりやる。しかし……『防御の戦士』の前では通じない」

目の前の女性、それはエメラルドソルジャーの名を冠する戦士だ。事、防御に関してはずば抜けた力を持つ。

「相手、悪かったな」

彼女がその言葉を溢した瞬間——。

神秘的な力を秘めた手で大蛇の障壁を無効化したのだ。

「さっすが。んじゃあ、これでお終いだな」

と、上空から舞い降りながら刃が一刀両断に切り裂く！

「ギャシャアア！！」

凄まじい断末魔を残し大蛇は元の姿へと戻る。

ジュエルシードの魔力が絶たれ暴走が鎮められたのだ。

「よし、これで三個目だな。思ったよりも歯応えがねーな」
「それより早く封印する。それ放置するといつ暴走するか分からない」
「い」

事の一部始終を見守っていたクロノが封印の為に現場へと近寄って来る。

彼等はこれで早くも4個目のジュエルシードを手に入れたのだ。
勿論封印や探索は管理局側が一任している。

それでもこの働きぶりなら文句は出てこないだろう。

「褒めるべきか、呆れるべきか……」

二人の働きからは凄みは感じられない。

ただ成果は凄いのだが危険な雰囲気がないからだ。

そんな常軌を逸した力を目の当たりにしつつも、特別な危機感を持たないのはそんな所から来ているのかもしれない。

そしてもう一組の方でも……。

「くっ！早い」

「ユーノ君、大丈夫！？」

（何て素早い動きをするんだ。あれじゃバインドで拘束するのも難しい……）

彼等二人の周囲を高速で旋回する巨大な蝙蝠。

その変則的な動きが二人を翻弄し狙いを定めさせないのだ。

「刃さん達は……」

もう一組みの協力者、刃とエメラルドの方へと視線を向ける。

そこには――。

既に三個のジュエルシールドを封印し終えた姿があった。

「何だか手応えのない奴等ばかりだな」

「何を言ってるんだ君は。碌に魔法も使えない人間が宙を飛んで戦ったり、魔力で暴走した動物を相手に出来る事が既に普通じゃないんだぞ」

呆れるように刃を見るクロノ。

彼も刃の戦闘を見てる内に剣の持つ不思議な力には気付いていた。

飛行能力だけでなく不思議な力で斬撃を行って見せたからだ。
(まったく……一度検査をする必要があるかもしれないな)

「そんな事よりいいのか？アチラ、苦戦してる」

「え？」

刃とエメラルドが淡々と任務をこなした為に油断があったのかも
しれない。

彼等の戦いは特に派手な物ではなかった。

巨大な力で圧倒するでもなく地味な連係と刃の剣技による術で事
が足りたのだから。

それに比べたら高町なのはとユーノ・スクライア。

特になのはの魔力は特筆するものがあつたし、クロノから見ても
これくらいの任務で後れを取るとは思っていなかった。

ただ難を言うのなら経験不足による大味な戦いがマイナスだと言
えた。

尤も彼女の場合はそれを圧倒する巨大な魔力で敵を掃討できるの
だが。

———逆に鉄刃。

彼の場合は非常に戦闘慣れしているのだ。多くの戦場を経験した
のか戦闘センスは特筆するものが窺われた。臨機応変な戦闘スタイ
ルで遠距離と近距離の攻撃をこなす。更にはパートナーとしてのエ
メラルドの存在。連携も隙がない鉄壁の布陣といえた。

難を言うのなら圧倒的な破壊力……広域型の殲滅魔法や直射型が
ないという事だ。

少なくとも刃が見せた遠距離型の攻撃は斬撃を飛ばす類で然程の
脅威ではなかった。

「じゃあ、あっちも手伝ってくるわ」

「ああ、お願いするよ」

「ユーノ君、どうしよう……あんなに変則的に動かれちゃ狙いが定まらないよ」

「待ってなのは。大丈夫、次は必ず好機がくるから」

「どういうこ……」

次の言葉を紡ごうとした時――。

どこからともなく斬撃が巨大な蝙蝠目掛けて飛んで来るではないか。

「あれは！」

「ね、言ったでしょ」

数発の斬撃が蝙蝠との間合いを離す。

その間隙を突いて刃の姿がなのは達の前へと現れた。

「よ、大丈夫か？」

「刃さん！」

「終わったならもっと早く来てくださいよ」

「早く片付けてアースに戻る。だからお前達、アレ倒すのに協力する」

そこからは一連の流れは踊るようだった。
刃が牽制の一撃を放つ。

「ユーノ！」

「はい！」

刃の目的は敵の翼を奪う事。
要は連携の繋ぎとなればよいのだ。
次の動きへと任せる為に――。

繰り出される数々の斬撃を回避しながら、蝙蝠は刃ではなくのは側へと飛んでいく。

「無駄だ」

そのなのはの前でシールドを張るエメラルド。

防壁に行く手を阻まれ、動きが一瞬鈍る。
そしてその時こそが自分の役目なんだと。

「今だ！！」

（何だろう……刃さん達と連携してると不思議な気持ちになってくる。迷いや躊躇いみたいなのが薄れて気持ち鼓舞されるような、何だか余計なモヤモヤがなくなって一つの事に意識が集中できる。こんな初めてだ）

ユーノもその隙を見逃さない。

絶好の好機とばかりに彼のチェーンバインドが蝙蝠を捉えたのだ！

「なのは！今のうちに」

「うん、任せて！」

不思議となのはも気持ちが昂る。

皆と力を合わせる事で無尽の力を得るように。

（皆が私の為にくれた舞台。^{チャンス}不思議だな……こんな風に気持ちを通い合わせられるなんて）

「リリカル、マジカル、ジュエルシードシリアル？封印！」

そんな戦果を艦で全て眺めているのは……。

「まったく、凄いわね彼等は。これで一気に四個ものジュエルシードが封印できたわ」

「まあ順当な経過じゃな」

リンディと武蔵の二人。

共に策士的に似通う考えがあるのか不思議と馬がっている。

「今の所はジュエルシールドも順調に蒐集出来てるし、もう一つの問題も目立った動きはなし。一つ一つ解決しているって所かしら」

上機嫌で語るリンディ。

現場の責任を一任している彼女にしてみれば大事な起きない事は何よりの経過なのだ。

「しかし……何時までも放置しておける問題でもなかろう。ある程度が目処は立っておるのか？」

「……そうね。確かに彼女の問題は放置しておけない。だけど今は情報収集の段階だから少し時間が欲しいわね」

二人がそう語り合った瞬間。

『E m e r g e n c y』
『E m e r g e n c y』

——艦内に緊急呼出しが鳴り響いた。

第十一話 協力者（後書き）

今回は刃とエメラルドの連携が考えていて楽しかったです。もう完璧に作者の印象で創ってるので原作とは少し印象が変わってるかもしれない。でも彼等がコンビを組んだら殆ど鉄壁の布陣になる気がしますね。

それと遊び心で出した化物達。一応はY A I B A原作の「ゲロ田ゲロ左エ門」・「ジュリアス・ズポタマス？世」・「バットマン」を想像して創りました。でも断末魔以外の声がないのでちっとも想像つきませんね、済みません。
あくまで作者の中ではという事で。

※かみなり斬り

せんぷう剣が敗れた事で新しく生みだされた必殺技。名前の由来は読んで字の如く雷から。稲妻のようにギザギザに切り刻む剣技で、竹林で水平に切り刻む訓練の末に覚えた。

第十二話 海上戦（前書き）

アースラの民間協力者として正式に認められる為、刃達はジュエルシードの蒐集を順調にこなしていた。このまま滞りなく済むと思われていた矢先、艦内に緊急呼出しコールが鳴り響く。これは何を意味するのか……。

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第十二話 海上戦

今回もジュエルシードの蒐集に問題はなかった。彼等の実力にも問題はなかった。ならば次からの任務では正式に民間協力者として迎えられるだろう――。

クロノがそんな思惑で今回の任務を耽けていた矢先、念話が送られてくる。

（クロノ？ 緊急事態よ。大至急アースラに帰還して頂戴）

（艦長？ 一体何があったんです）

（例の黒い服の少女。彼女が海上で強制的に魔力を送り込み、ジュエルシードの発動を行っているの。それも大規模な数を！）

（何だって！？ そんな事したらどんな事態になるか分かったものじゃない）

（そうよ、だから緊急事態に備えなければいけないの）

（了解です。直ちにアースラへ帰還します）

「皆、緊急報告が入った。これから急いでアースラへと帰還する事になる」

「何があったんですか？」

クロノの厳しい表情に徒ならぬ心配を察知したユーノが問う。

「ああ。詳細は艦に戻った際に説明するが、例の黒服の魔導師。彼女が現れたんだ」

「フェイトちゃんか!？」

これに反応するなのは。自分がずっと思いを告げたかった少女であるのだから。

「僕達は急いでこれに対応しなければいけない」

「だったらオレが行くか？」

「……悪いが今は無駄な時間を使うつもりはない。これは任務命令だ」

組織は集団で行動を起こす。たった一人の我儘だって認める訳にはいかない。

下手をすればそれが原因で大きな被害が生まれ兼ねないからだ。

その様子を見た刃は徐になのはへと顔を向ける。

彼女の表情からは戸惑いが窺われ、理屈と感情の板挟みになった感じだ。

心情としては直ぐにでも駆けつけたい……。

だけど幼き頃のトラウマが躊躇いを踏ませてしまう。皆に迷惑をかけては駄目だと。

「分かった。んじゃあ、最初に謝っとくわ。悪いな」

「なに？」

「オレとしてはどっちでも構わねーんだけどよ、なのはがな……面倒な表情かおしてやがるからさっさと解決したくてよ」

（あんな、仲間を見捨てられない様な表情かおされたらホットけねーし。そもそも見たくもねえからな……あんなのは）

ふと脳裏を過るのは昔の自分。

『龍神の玉』を巡る試練では大事な仲間を失った想い――。

『ゲッコー』との戦いで敗れた自分がさやかを奪われた想い――。
――。

『超重力装置』を破壊する際にエメラルドを失った想い――。

自分の無力さや哀しみ。

……現状いまのなのはから滲み出る感情、それは大事な物を失いたくない気持ちだと痛いほど解ってしまったから。

だから刃は問う、なのはの気持ちを、感情を。

「なのは。そんな時は無理しなくて大丈夫なんだぜ？何の為に仲間がいると思ってんだよ。一人では無理でも皆で力をあわせれば願いは叶う。少なくとも……オレは一人で何でも解決できるとは思ってねーし、仲間と力をあわせてきたんだぜ」

そこにあるのは大人の顔。自分より幾つもの人生を経験してきた男性。

眩しい程の真直ぐな瞳と強い意志。

だから――それに応えてしまう。

「はい！！」

「ッ！！君達は」

「御免なさい！高町なのは、指示を無視して勝手な行動を取ります！」

馬鹿な！大体現場の情報が何も伝わってないのにどうするつもりだ？どこの海域に現れて、何人の人間がいて、状況がどうなっているのか――。

その全てを知らない癖に勝手な行動を取るとでもいうのか！

この刹那にクロノが思い浮かんだのはそれ。

当然だ。そもそも場所すら知らないのにどうやって現場に行けるというのだ？

少し目を覚ましてやろうかと思ったのが……。

クロノは信じられない光景を見てしまった。

「ならてっとり早く済まそうぜ！なのはもユーノもこっちに来い！」

「え！？」

怒涛の展開に戸惑うユーノ。

「行こう！ユーノ君」

そんなユーノの手を繋ぎ走り出すのは。

高町なのは、ユーノ・スクライア、エメラルドが刃の下に集う。そして刃が両手で彼等と手を繋ぐ。

「頼むぜ、クサナギ！」

そう彼が一言を発した時……

刃の周囲が光の壁に包まれたのだ。

そしてクサナギは意思を持ったかのように宙に浮き、刃は皆の手を繋いだまま剣へと飛び乗る。

その光景を見ていたクロノは我が目を疑う他なかっただろう。

何故なら刃がその宙に浮かんでいる剣に乗った瞬間、信じられない事が起きたからだ。

刃はこちらへ苦笑いを浮かべ――。

「悪いな」

そうポツリと投げかけたと思うと刹那の速さでこの場から飛び去ったのだから。

「な、何だというんだ……」

後に残されたクロノは勝手な行動を制止する事も叶わず、見た事もない領域で飛行する光の剣に茫然とさせられた。

光速……光が伝播する速さの事で、俗に一秒間に地球を7回半回る速さをいう。実際その魔剣にそれだけの速度があったかは分からない。だが比喻として扱うならこれ程相応しいものはないだろう。それだけ常軌を逸した速度だったのだ。刃の扱う『魔剣クサナギ』から放たれる力の波動は、四人もの人を乗せ瞬間的に大海へと飛行を果たしていたのだから。

———
海鳴海上
———

「なのは、お前達なら魔力を感知する事も出来んだろ？」

「ふ、ふえ？」

光の障壁で護られていたとは言え、信じられない物を見せつけら

れたなのは若干呆け気味。故に反応がワンテンポ遅れている。

「は、はい。これだけ開けた場所で行われていれば……」

「あれだな!!」

それは一目でわかる。

S i d e ― フェイト ―

上空に漂うは巨大な魔法陣。

「A r u k a s , K r u t a s , E y g i a s ,」

一人の金髪の少女、フェイト・テストロッサ。

彼女は魔法陣の上で呪文を唱えている。

（駄目だ……フェイトのやっている事は間違っていない。けど、どんなに凄い力を持っていてもフェイトはまだ小さい子供なんだ。こんな無茶をやって魔力が持つとは思えないよ）

彼女の傍らで全てを見つめている使い魔、アルフはそう思っていた。いくら自分が全力でサポートをしても、管理局が気付くのは時間の問題……そんな短期決戦で海中にある複数のジュエルシードを確保できるのだろうか？ううん、自分はどんな敵が相手でも主を傷つけさせない。その想いは嘘じゃない、それでも心配なんだ――。

例えどんな力があろうと、才能があろうと、彼女は小さい子供なのだから。

「フェイト……」

アルフの心配を余所に……。

フェイトの魔力が雷の様に海面へと降り注がれた。

そして呼応するように現れる六つの魔力。

それは海中から竜巻のように渦巻き、荒れ狂う様を呈していた。

「アルフ、空間結界とサポートをお願い」

「ああ、任せといて！」

（だから……絶対に何があろうと、あたしが護るんだ！）

―― Side out ―

「風は空に、星は天に、輝く光はこの腕に、不屈の心はこの胸に――

R a i s i n g H e a r t ! S e t u p !

「見付けた。例の少女、アソコにいる」

「何だありゃあ………すげえな、オイ」

「例の使い魔もいる。……それにしても何て無茶をするんだ」

刃達が海上に辿りついた時、奇しくもフェイト達が魔力を海中に注ぎ込んだ時だった。そして海上で狂い荒ぶ様を目撃してしまったのである。

そしてそれを見過ごせない少女が一人、空を翔ける――。

「フェイトちゃん!!」

「!?!」

「あんた達は!?! クッ、フェイトを傷つける奴は絶対にあたしが許さない!!」

キン――――。

アルフの怒りが刃達を排除すべき敵として認識する。
と同時に、噛み千切らんと襲い掛かったのだ。
だがそれもユーノの障壁によって届かない。

「僕は戦いに来たんじゃないんだ! 話を聞いてくれ」

「うるさい! あたし達の邪魔をする奴の言う事なんか」

焦りは判断を狂わせる。アルフもまた主同様に冷静な判断が出来なくなっていた。敵対する者達ばかりで追い詰められる精神が余裕を奪う……。

それは敵味方の区別すら判断させなくなってしまったのだ。

「ならこの問題が片付いてからいくらでも競いあえる！」

「なんだって!？」

「少なくとも僕達も君達と同様、ジュエルシードを抑えに来たんだ。なら力をあわせてこの場を乗り切るのが先決だろ!？」

(何を言っているんだい、コイツ? 急にそんな事を言われて信用できるとでも……)

「刃さん！」

「とりあえずこれを何とかしねえとな！」

刃の一言と同時に彼の剣に恐ろしいまでの光が伴う。その眩いまでの発光はまるで鞘から解き放たれた刀剣のようだ。

そして……その剣を刃が上段から撃ちおろすと――――。

ズウオン!!!!!!

たった一振りの斬撃が海面に放たれたと思うと、津波のような水飛沫を舞いあがらせたのだ!

見る者はその眼を疑うだろう。剣から振り下ろされた一撃で海面にクレーターが出来上がっているのだから。というか下手したら地形を変えかねない力、そんな片鱗を突き付けられたのだ。

「嘘だろ！？なんだい、あの力は……」

「ちょ、ちょっと待って下さい刃さん！何ですか今の力は！？」

「ありゃあ。いやゝ一応加減したんだけどな……ま、今はそれよりもだ」

（今の感覚からすると霸王剣が解放された時の感覚みてえだ……）

「なのは！ソイツに何か伝えたい事があんだろう？しっかりな！！」

不思議と自然な表情で……あんな恐ろしい力を使ったのに恐怖など微塵も感じさせない瞳で、刃はなのはを促した。

なのはもフェイトも刃の一撃には驚いていた。しかし、彼の一撃は一時的に時間をくれる。それは彼が私の為に与えてくれた、僅かだけど彼女に気持ちを伝える為の時間――。

だから、なのはもそれに応える。

「はい！！」

「フェイトちゃん、本当はもっと伝えたい事があるんだけど……今は一言だけ聞いて欲しいの」

ずっと伝えたかった一言。本当に心の中にあつた真実^{おもい}、決して同情や傷の舐め合いなどではない想い。

「友達に、なりたいんだ」

「！」

高町なのはが伝える想い、それは純粹で一片の曇りもない気持ちだった。

「後はこれが全部片付いたらゆっくり話そうね」

そして……往年の友であるかのように、自然に語りかけていた。

「何なんだよ、アンタ等は……」

「とりあえず本体を狙った訳じゃねえから、この水飛沫が止んだら戦闘続行になるぞ」

「ていうか少し自重して下さいよ。あんなの無茶苦茶すぎます」
(まったく……あれで手加減した一撃だなんて、信じられないくらいだ)

「油断するな、そろそろ戦闘に入る」

飛沫が止み辺りが元の景色へと戻ってゆくと……必然的にフェイトの魔力に呼応したジュエルシードの暴走が竜巻の様な姿となって再び現れてくる。そう、問題はまだ片付いていない。

「お待ちせ！刃さん、ユーノ君、エメラルドさん」

「よし、じゃあ次はアレを片づけるか！」

「なのは！」

「……あまり休んでる暇はない」

その羨ましくなる光景、強い絆を見せつけられるアルフ。
絆だけなら自分とフェイトも負けてはいない。

ただ……彼等の様にたくさんの仲間はいない。その事がアルフの心を打ちつけるように苦しめる。何で……何で自分達はあんなに弱いのかと。本当ならフェイトだってアイツ等みたいにたくさんの仲間に関われていても良い筈なのに、こんなに悩み苦しまなければいけないのか？

単純な力、それは自分とフェイトがいれば問題ない。だけど仲間達との絆、それだけは二人だけじゃどうしようも出来ない事なのだ。だから自分の無力さと環境の不遇を呪ってしまう。ほんの少しの嫉妬を持って……。

「あ、アンタ等……」

「ユーノ、わたしとお前バックアップする。油断するな」
「はい！」

「いくよ、刃さん」
「そこなくっちゃ♪」

空に現れる魔法陣、それは高町なのはの足場となって固定される。
そして、彼女は自分が撃てる最高の一撃を放つ機会^{ふたい}を待つ。

「Divine Buster、フルパワー行けるね？」
『All right, my master.』

舞台の主演である姫君が後は自分の出番を待つだけとなる。

そして同じく舞台の相伴をあずかるもう一人の男は――。

「次は外さねえ」
（感じる……大地・海・風・雷・熱・光、地球上の全てのエネルギーがオレの中に、剣を通して入って来る）

「あ、あのエメラルドさん……刃さんは一体何を？」
「見れば分かる。刃はあの剣で全ての暴走を抑えるつもりだ」
「あれをたった一人でですか!？」

「そうだ。だからわたし達、その余波から身を守らなければなら
ない……アチラの分までな」

ヒュオオオオ———。

刃の周囲に火柱のようなエネルギー源が放出される。

それはこの場にいる全ての者が初めてお目にかかる力であろう。

魔力とは異なる力、まるで大自然の力が集結したようなエネル
ギー源。

遂に『魔剣クサナギ』がその力を解放したのだ。

「あの人は……」

「フェイト!？」

（あの人は以前にも見かけた……何だろう、あの力は？私やアルフ、
あの子とも違う不思議な力……魔力とは異なるのに凄い力を感じる）

この場に於いて彼女達は完全に乗り遅れていた。しかし、それは
仕方なかったのかもしれない……突如現れた乱入者達に戸惑いなが
らもその圧倒的な力に魅了されていたのだから。

「凄い」

一言、フェイトがそう溢した瞬間———。

「これだあ!!」

何と刃から繰り出された冷気の波動が、周囲の海を氷結していったのだ！

それはたちまちに一帯の海を凍り尽くしていき……

その恐るべき力でジュエルシードの暴走をも抑え込んでいくではないか。

刹那、刃は己の役目はここまでだと言わんばかりの瞳をなのに向ける。

「…Buster！」

その意を汲んだのはが吠える。
己の持てる全ての力を解放して。

そして……。

一筋の白い光、高町なのはが撃った魔法、それが全てを包み込んだ――。

S i d e ー アースラ ー

「ジュエルシード、六個全ての封印を確認しました」

「な、何て出鱈目な……」

アースラの面々も事の次第を全てモニターで確認していた。だから、そのありえない出来事に驚きを隠せなかった。確かに高町なのはの撃った砲撃魔法、これも常軌を逸した恐るべき魔力であった。迎じゃないが9歳の子供が放つ力ではない。

しかしそれと同じく、鉄刃の使った力。これもまた、見過ごせる代物でなかったのだ。そのありえない威力は海面を凍らせジュエルシードの暴走を抑え込んだ。まさに少女の砲撃魔法に匹敵する力だと言えるだろう。

だから……。

「武蔵さん、話してもらえますね？」

「別に何も隠してはおらんよ」

「ふざけるな！ あんな力、僕達は確認してもいないし、知らされてもない！」

あれは紛れもなくロストログアに類する代物だ。そんな物を個人が所有していたのを見過ごせる筈がないだろう。クロノの台詞にはそんな意味がありありと込められていた。

「一つ言っておくがああ力は刃だからこそ扱えるものじゃ。他の者が同様に扱える代物ではない」

「……」

「だから何だと？まさか、あれをこのまま見過ごせとでも言うのか？」

「そもそもあの剣は刃が地球で見付けだした物じゃ。それを余所者が勝手に自分達の理屈をゴリ押しして奪い取る気か？」

「……悪いが彼の所持している剣は明らかにロストログアに類する物だ。ジュエルシード同様に管理局で厳重に封印する必要がある」

「ふむ。ならば逆の立場なら、お主達はどうする？」

「なに？」

「急に自分達の所有する技術や武器が危険だと判断され没収……及び封印だと勧告されたらどうじゃと言ったのじゃ」

「そんな問答は無意味だな」

「お主も同じ答えかな？リンディ殿」

「……管理局の人間として答えるならクロノと同じと言わざるを得ません。ただし——私は何も見なかったわ」

「な、何を言ってるんですか！？かあ…艦長！！」

「クロノ……貴方の言い分は間違っていないわ。でもね、世の中には状況に応じて柔軟な対応も必要なのよ。現地の人間と不必要の衝

突は避けるべきではなくて？況してや彼等には地底人といった違う種族の存在までいるのよ」

「しかし！」

「勿論、私も貴方の言い分をそのまま受け入れる訳にはいきません」

「まあ、当然じゃな」

「ですから、形としてはあの剣をこちらで一度検査させて頂きます。そして貴方達を知る剣の能力や種類を隠さずに説明してもらう必要があるわ」

「ふん。そもそもアレを見る前は話半分程度にしか信じていなかったたのであろう？」

「あら、耳が痛いわね」

（母さん、何故です？こんな事をしてただで済むとは……）

（ま、大丈夫よ。上の人間が俄かにこんな話を信じる訳ないし、この情報はまだ送っていないもの。彼等だってこちらと不必要に争うのを良しとはしない筈よ。少なくともあの剣は刃君が使用するからあの力を発揮できるのであって、次元干渉の類だとは思えないもの）

（じゃあ、どうするんですか？）

（だから必要最低限の情報は掴んどくわ。それに折角、協力体制を築いたんですもの、態々それを陰悪にする必要はないんじゃないかしら？）

(それは……)

(それに刃君達はそんなに悪い人達とは思えないでしょ?)

(僕だってそれ位の事は分かっています)

(だから、これからの事を考えるなら現地の人間とパイプラインを築くという意味でも協力を強化しとく方が得策じゃないかしら?)

(……)

(そして最優先すべきはジュエルシードとあの少女の問題。彼女は間違いなく私達と同じ魔導師だもの)

(……分かりました)

「……ワシ等としてもそちらと争う理由はない。何もしないのであれば、協力を惜しむつもりはないのじゃが?」

「そうですね。おそらく検査の結果にもよると思いますが、私達としても貴方達とは協力を強化したいと思います」

(やれやれ……じゃから権力は嫌いなんじゃ。好き勝手に自分達の言い分を罷り通そうとするからの)

そしてチラリとリンディの顔を窺うと……。

「あら、まだ何か？」

「別に何でもないわ。それより刃達とあの少女を回収しなくてよいのか？」

（まあ打算的な思惑はあるじやろうが、一方的な横暴を通さないだけマシじゃな。少なくともこの艦の人間は話が通じない訳でもなかったしの）

こうして両者の思惑が一応は収まったのだが……
事態はさらに厄介を呼び込む事になる。

『E m e r g e n c y』
『E m e r g e n c y』

——再び艦内に緊急呼出しが鳴り響いたのだ。

第十二話 海上戦（後書き）

刃が使用した氷結の波動、これは龍神の玉にある能力の一つです。以前、感想で龍神の玉の能力は使用しないと説明したのですが、場の臨場感を表現する為に今回使うことにしました。本当に済みません。

今後でも微調整などで矛盾が発生するかもしれませんが、その際はどうか容赦していただけると幸いです。

そして武蔵とリンディ達の問答。これは凄い独自解釈（ご都合主義）なので、変だろうという所があるかもしれませんが。作者としては双方が争わないで済む抜け道を模索した結果、あんなゴリ押しとなっていました。

※火・水・大・氷・闇・金・当、これらの力を一つにしたのが龍神の玉であり、龍神剣である。今回使用したのは「氷」の能力。ただ刃が思っていた元ネタは霸王剣なんですけど……この辺はごっちゃにします。

第十三話 休息（前書き）

新たなジュエルシードを巡る争いは刃達の介入を持って一旦の收拾がつく。そして高町なのはは、フェイト・テストロッサに己の気持ちを伝える事に成功する。一方でその様子を窺っていたアースラでは、新たな衝撃が奔っていたのだ。

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第十三話 休息

— アースラ内 —

艦内に鳴り響く『Emergency』、その場の者達に再び緊張が走り始める。先の暴走は無事に収まったというのに、これ以上何が起るというのか？

「艦長！次元干渉です、別次元から本艦及び戦闘区域に向けて魔力攻撃きます」

「何だって！？」

「あと6秒——」

エイミィの言葉が終わる前に……。

——ズオン——！！

直後、激しい衝撃が艦内を奔り抜いた。

Side — 海鳴海上 —

時同じくして海上にいる刃達にも同様の攻撃が落ちていた。

「エメラルド、何か来るぞ！」

「拙い、別空間からの攻撃だ」

間一髪、エメラルドの障壁が刃達三人を包み込む。

そして稲妻のような光がその場を襲う様に落ちて来たのだ。

「クッ」

エメラルドにも悲痛な声が漏れる。

この攻撃にはそれだけの恐ろしい力が込められていたからだ。

「うあああああああ————————！！！」

だが一人の少女にそれは直撃してしまう。

まるで神の裁きのような一撃、普通の人間ならそれこそ死んでしまいかねない一撃が。

「フェイトちゃん！！」

それに動揺したのはがフェイトへと近づこうとするが……。

「……か・あ・さ・ん……」

最後の声を振り絞るかのようにポツリと一言を漏らして彼女は気絶した。

（え？ フェイトちゃん……今、お母さんて……）

「フェイトー！！」

主を救い出す為にアルフが人型へと姿を戻して宙を走る。おそろく今の状況を認識しているのは彼女だけだろう。何故なら先の攻撃を誰が行ったか分かっているのだから。

このまま場に留まるのは危険すぎる。フェイトの安否や管理局の動向、そしてあの女が次に何をするか分からない。

だからアルフは主を抱えたまま、6個のジュエルシードを奪い去ってこの場を離脱しようとしたのだ――。

――が、それを許さない者がいた。

「!?」

「ジュエルシード、渡さない」

アルフの前に立ち塞がったのはエメラルド。彼女は冷静にその場

の状況を判断し、アルフの行動を予測していたのだ。酷な考え方もかもしれないが、エメラルドは生い立ちや環境の起因から敵側の人間にそこまで寛容ではなかった。

というよりなのは場合は主観的な感情が先走っているので、どうしてもフェイト第一になってしまう。尤もこれは刃にも言える事であり、立場の違いでどうとでも変わるものだ。故に単純に善し悪しを決めつける事は出来ないであろうが……。

「邪魔、するなあ!!!!!!」

だがアルフもそれに激昂する。自分達の敵に何を遠慮する必要があるうか、自分にとってはフェイトが全てであり、彼女の為にならない者は敵以外の何者でもない。

そして彼女の怒りの矛先がエメラルド一点に集中し、エメラルドを障壁事殴り飛ばしたのだ。

「ッ!!」

その思いもよらぬ力に海面へと吹き飛ばされるエメラルド。

「思い知ったか!!」

怒りの一撃を殴りつけた為にアルフも冷静に戻る。

(よし! さっさとジュエルシードを頂いてここから逃げないと)

「!?! 三つしかない……」

(まさか……)

アルフが直感的にエメラルドへと感情の昂った怒りの視線を向ける――。

そこには……。

同じく三つのジュエルシードを掌に障壁で包み込んだエメラルドがいた。

(やっぱり！あの女……)

「……く……ちくしょう！！」

アルフもこのまま複数の人間を相手にする事は不可能だと分かっている。

だから、今優先すべきはフェイトを護りながらの撤退。

そんなやりきれない思いのまま、アルフは魔力を海に叩きこみ目眩ましを取るしか出来なかった。

「逃げられたか……」

「それより大丈夫か？エメラルド！」

「問題ない、アイツの攻撃ちゃんと防いでる」

「やれやれ。君達には話たい事と聞きたい事が山ほどある、至急アイスラに戻って欲しいんだが――」

辺りに静寂が戻り戦闘の危険が去ったのを確認したかのように上空に映像が映し出される。そこに映っていたのは頭を抱えて溜息混じりで語る……。

「クロノ……君」

思わず我に返る、なのは。

自分が犯した勝手な行動が気まづかったのである。

「兎に角、ジュエルシードを3個確保したのも知っている。そちらにゲートを送るから、今はこちらに戻ってきてくれ」

「ほら行くぞ、なのは」

「刃さん？」

「どうせ悩むんだったら、自分の気持ちに従った方が後悔しなくて済むってもんよ。少なくとも後悔はしてねーんだろ？」

確かに多少の罪悪感はある。周りを顧みない自分勝手な行動はどれだけの迷惑を与えるか知ってるつもりだから……

それでも後悔だけはしたくない。アリサちゃんやすずかちゃんに事情を語れなかった時もそうだった。もう自分を偽って誤魔化す事

はしたくない。

「……うん！」

* * * * *

「高町さん、ユーノ君、エメラルドさん……それに刃くん。分かっているわね？ 私が何故、怒っていて貴方達が立たされているのか」

「はい……」

「勝手な行動を取って済みませんでした」

「……」

「さあ？」

「そうそう、まず自分の行動の意味を理解し……」

あれ？ 何か今、可笑しな台詞が聞こえたような――。

思わず自分の耳を疑ってしまったリンディ。

いや彼女だけでなく、クロノやエイミィも呆気に取られていた。

「だってジュエルシードは3個手に入れたんだぜ？それもそっちの手を煩わせずにやったんだから文句ねーだろ？」

「馬鹿な！君が、君達が行った行動は命令違反ものなんだぞ！？そんな個人の勝手を認められると思ってるのか？」

「馬鹿野郎くだったらオマエ、他に何か手があったのかよ？」

何なんだコイツは？こんな人間に組織としての行動が務まるのか？あまりの身勝手な反応に絶句してしまいうクロノ。

しかしこれは仕方ないのかもしれない。刃は元々集団で生活していたのでなく、自由勝手きままに生活してきたのだ。常識的に捉えれば明らかに異常である。ましてクロノは幼い頃から組織の意義や機能を学んでいた。

こんな人種とは相反発するのも当然の事なのかもしれない。だからこのまま見過ごして良いのだろうかと思わずにいらなかったのだが……

「まあ、心配かけたのは悪かったけどよ……クロノにも感謝してるんだぜ。オマエが教えてくれたから、なのはも後悔しないで済んだしな」

そこには悪びれる気持ちもないが、クロノに対する感謝の念も込められていた。

これには流石のクロノも戸惑ってしまう。

（仲間の事を想ってると思えば、自己中心的……かといって人の話

を全く聞かないでもない。何て掴み所のない奴だ……)

刃の様なタイプの間人は初めてだった為にも掴めないクロノ。ここは本来なら怒るべき場面なのに……不思議とその氣を失くさせる。

(あらあら)

そんな戸惑う息子の姿に少し面白がるリンディ。

(まあ、今回の件による説教は私がこれからするとして、クロノもまだ子供だもの。これから様々なタイプの人間と接触して見識を広めていけばいいわ。それがあの子の糧となり、成長を大きくする)

リンディとしても刃の言動は見過ごせない。しかし……彼女は伊達に苦勞人ではなかった。世の中には様々なタイプの人間がいる。そして嫌いだから、反りが合わないから、等で全てを切る事はできない。

仮にもクロノは執務官なのだから。それにどう対処できるか、そういうった応変さも身につけなければいけないのだ。尤も彼女自身も刃達の事を悪人だとか、決して話の通じない人間だとは思っていない。

だから——クロノの為にもなると考えていた。

「あのね、刃君。結果こそ成果もあったけど、あんな個人行動を許してたら集團の統制がとれなくなるの。それは下手をすれば多くの

人命にも関わる事なのよ？」

「そっか……悪かったな、リンディ、それにクロノ」

（！？この人、まさか……全部自分の行動の意味を知ってて……成程、随分不器用な生き方ね。少なくとも刃君は個である生き方を選んでた訳だ……）

「……まったく。なのはさん、ユーノ君、エメラルドさん、貴方達も同様の事が言えるのよ？」

「「はい」」

なのはとユーノは思う所はあるものの、反省の意を示す。

「……」

エメラルドも一応は黙って頷いている。

（艦長……良いんですか？これで済ませてしまつて）

（クロノ、彼はどうかやら全部理解してたみたいよ。ただ自分の生き方に直結してるから譲れなかった。そんな所かしら）

（しかし、それを認めてしまつては……）

（まあ問題は残るでしょうが、彼は正式な管理局の人間ではないも

の。共闘という事でこちらの傘下には入ってくれるでしょうから、ある程度の指揮には従ってくれると思うわ)

(……つまり少し位の我儘は見逃せと?)

(ううん、そうじゃないわ。彼のような信念を持った人間との接し方、及び在り方を知る事で協力が図れると思うの)

(……もしかして、愉しんでませんか?)

(あら、これはクロノの為にもなるし、決して私達にとっても害になる事ではないわ。まあ、これも勉強と思って頑張ってるね)

(……眩暈がする……)

「さて、本来ならもっと重い罰則があるのですが……今回は刃君の想いに免じてこれで不問とします。確かに得る物がなかった訳でもないですからね。しかし――」

「二度目はない?じゃろ」

(まあ馬の耳に念仏みたいなもんじゃが)

「あら、武蔵さん。それにアリサさんやすすかさんまで」

「なに、そろそろ説教も終わる頃じゃと思っただけ。それより今後の課題についてどうするつもりじゃ?」

「……そんな軽くスルーされるのも困りますが、そうですね。今回の戦闘で得られた情報を元に今後の対応を考えましょうか」

—アースラでそんな会議が開かれている頃、ここ海鳴市では……—

S i d e — ? ? ? —

「…ちゃん、アレ！」

「鮫島さん、済みませんが車を停めて下さい！」

「!?!?……」体どうなされましたか」

「あそこ」

「酷い……凄い怪我してる」

「分かりました。怪我の処置も含めて、高町様の御家まで御急ぎになりましょう」

事態の鍵を握る一つの出来事が起こっていた。

— Side out —

——そして再びここ、アースラでは。

「成程……つまり今回の黒幕はその女性、プレシア・テストロッサが絡んでると見て間違いないのじゃな？」

「ええ、ほぼ間違いない筈です。なのはの話ではフェイト・テストロッサは母さんと溢していたそうですから」

「はい。確かにあの時、フェイトちゃんはお母さんって言ってました」

「そう……なら次の行動までに時間はありそうね。あれだけの魔力を行使したのなら、反動も大きい筈よ。その間にアースラのシールド強化等もするとして――」

「「?」?」」

リンディがチラリと三人の少女達に視線を向ける。

「貴女達も一度、実家や学校に顔出しした方がよさそね」

「僕達はその間に戦力の補給や情報を整理しとく」

「あ、刃くん。君はその剣を一時こちらに預けてくれないかしら?」

「……刃よ」

「へいへい。だけどよ……刀はサムライにとって魂みてえなもんだからな。あまり粗末に扱うんじゃねーぞ」

「ええ、分かってるわ。貴方の大切な物をそう粗末に扱える訳ないじゃない」

「あの、じゃあ……私達はこれから一時帰宅って事になるんですか

「？」

「ええ、そうよ。すずさん達も御両親を安心させてあげないとね」

「じゃあこっちにきてくれ。海鳴市までは僕が送るから」

——こうして束の間の休日 생각이 寄らぬ形で訪れる。

まるで運命の糸が手繰り寄せられるように……。

「ただいま」

「あら、なのは。お帰りなさい」

高町家には、なのはを含め三人の少女と居候の刃達が帰宅していた。

「心配かけましたけど、皆こうやって元気で戻ってきました」

胸を張って自分の元気な姿をアピールする。それはどこにも怪我はないし、自分の事を心配してくれた家族に対する思いやりでもあった。

「「なのは、お帰り」」

兄と姉も同じようになのはの安堵に笑顔を向ける。

「武蔵さん、刃君……本当に有難う」

「なくに、お主が心配するほど、なのは殿も無茶はせんかったよ」

「そうですか」

娘の安否に心から笑顔で応える士郎。
そして……。

「そうだ。刃くん、今日はこれから君にお客さんが来るみたいだぞ
」？」

少し悪戯顔で愉しそうに伝える。

「客？オレにか？ふくん……で、その客ってのは？」

「ふふふ。ここで教えちゃ詰まらないじゃない」

「そうそう、もっと刃くんの驚く顔がみたいしね」

「まあ、会ってのお楽しみって事だな」

何時の間にか家族全員で意味深な微笑みを浮かべている。

「「「「「？？？？？」」」」」」

これに関しては全く意味の分からない当事者……そしてアースラに乗っていた面々。

ふと、そこへ間を崩す者が現れた。

「刃、少し頼みがある。付き合って欲しい」

刃の右手を掴み懇願するのはエメラルド。

「そうだな。まだお客の方は少し時間がかかるところから……この際、たまの休日を貰ったんだ。行ってくればいいだろう」

「じゃあ、私達もそろそろ家の方に戻りますので」

「あ、アリサちゃんとすずかちゃんはもう少し待って」

美由希がまだ話す事があると少女達を引きとめる。何か隠し事があるといった顔なのが妙に引っ掛かり二の足を踏んでしまう二人の少女。

「?じゃあ、ちょっと出かけてくるぜ」

「さあ、行く」

エメラルドと刃がこうして家から出払ったのを見計らって、桃子が事の真相をこの場に居る全ての者に話したのだ。まるで悪戯っ子の悪戯が成功したといわんばかりの笑みで。

「――で、一体どこに付き合えってんだよ？」

「買い物だ」

「買い物？」

「そうだ。実は……一度試してみたい物がある。だから刃、おまえに是非見て貰いたい」

その顔は嬉々としており、ずっと昔から願っていた物、欲しかった物、それがこれから手に入る悲願のようでもあった。

（もしかして……オレ、荷物持ち？）

刃が思った事は高町家でもやらされた雑用、荷物持ち等の仕事。大抵がそんな事だったので出てくる発想もそんな感じであった。

「あゝ面倒くせ」

「あそこ、入ってみる」

何かの店を見付けたらしくエメラルドは刃を引っ張って入店していく……。

店の看板には『コスプレショップ』なる文字が表示されているとも知らず……。

——同時刻、高町家——

「へー、じゃあその人ってアリサちゃんの知り合いでもあるんだ？」

「そうよ、仕事の関係で知り合って今では仲が良いんだから♪」

「はやく会って見たいな」

「——しかし……お主達も中々、悪じゃな」

「いえいえ。これも刃君の為ですよ」

何かの企みに加わった武蔵も凄いノリノリで士郎に語る。武蔵もだが高町家の家族も良い意味で人を驚かす企画は好みらしい。人間なんて驚かす側に回れば悪戯心が踊る物なのかもしれない。

トゥルル——。

ふと、その時アリサの携帯にコールが鳴り響く。

「あ、鮫島？今皆でなのはの家にいるの。はや……何ですって!？」

「？」

急にアリサの様子が変わった事に周りの気配も気付く。

「ええ。分かったわ、今こちらでも応急処置の準備はするから急いで頂戴」

——プツ。

「なのは、今から怪我をした犬を連れてくるって。だから、急いで治療の準備が出来るようにして欲しいの！」

「あ、アリサちゃん？」

「なのは……今はアリサちゃんの言う事を聞いた方が良さそうだ」

アリサの様子と電話の内容を察した恭也が妹を嗜める。こういう場合は黙って相手の指示に従った方が賢明なのだ。だから恭也も美由希と共に怪我の治療に処置するべく準備を整える事にした。

そんな……高町家で急変が起きて事など知る由もない刃達は——
|。

「どうだ？これ、一度着てみたかった」

それはセーラー服を着飾ったエメラルド。その表情は凄く嬉しげで少し照れ臭さを醸している。おそらくその表情は誰しもが瞳を奪われる、そんな初々しい女性の素顔であった。

「へー。意外と似合ってるな、前の服よりずっと良いんじゃない？」

（なんかアイツ思い出すな。この制服姿を見ると……）

刃の方も御世辞抜きで歓心の声をあげる。実際、エメラルドは背も然程高くないので制服姿が物凄くマッチしている。だから自然と柔らかい笑みで応えていたのだ。

「ほ、本当!？」

「お、おいおい」

思わぬ言葉に反応したエメラルドが刃の腕を掴んで激しく揺さぶってしまう。

まるで……嘘じゃないよね？本心だよね？と問い詰めるように。

「いや、嘘じゃねえって。何驚いてんだよ?」

「そう……良かった」

何だか言葉の方まで変わってしまったのは気のせいだ（笑）。決して彼女に乙女をやらせたかったとかそんなんじゃない（汗）。

「ん？」

「どうした？」

「いや……何か変な声が聞こえた気が」

「じゃあ、コレにする。他にも何かあるかもしれない、だからもう少し見て回りたい」

「へいへい」

（何だ、結局荷物持ちかよ）

そしてこの後も様々な店を御供させられ、小物から雑貨そしてアンティーク物にまで足を延ばすのであった。そして、ブツブツと文句を言いながら付き合う刃も、やはり少しお人よしのようだ。愉しそうな顔をしている人間に水をさす事をしないのだから。

——しかし、そんな時間も長くは続かない。

「ピッ」

「……この声は……」

突如上空から舞い降りてくる庄之助。その様は何か緊急事態を伝えているようで、刃にも緊張が奔る。

「どうした、庄之助？」

「クピー」

「乗れってか？……エメラルド！」

「分かってる。だけど……」

少し目を瞑り覚悟を決めた様に刃の頬に手を当て――。

「これ、今日のお礼」

――そう一言呟いて、彼女は刃の頬に軽く口づけをした。

第十三話 休息（後書き）

今回は刃に少し不器用な生き方を演じて貰いました。アレです、原作で刃の父親が奥さんに謝ってた場面。刃もある程度成人してるので、父親似的な感じがあっても良いのかと。クロノ君、何かと振り回されるでしようが頑張って（苦笑）。

そして刃とエメラルドのプチデート。これはコミックスの扉絵からネタを拾ってきたものです。エメラルドがセーラー服の挿絵があったので面白そうだなと。という訳で軽くイメチェンを図ってみました。

これは余談ですがその挿絵がある単行本ではエメラルドと刃のキス未遂シーンもあります。これはある女性に阻止されるんですが、その女性も雪ダルマのソルジャーに邪魔されるんですよ。その場面がまたコミカルで受けるんです。自分の頭を投げつけてツツコミするんですから（笑）。

第十四話 逃亡者（前書き）

束の間の休息を得た刃となのは達。彼等は一時帰宅の名目の下、海鳴市に戻り各々の休息を過ごそうとする。しかし事態は更に急変を招く事となった。それは……ある女性達が連れてきた怪我をした動物によって齎された。

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第十四話 逃亡者

何で……何でこんな仕打ちをフェイトが受けなければならない？
そんな憎悪に似た感情が心の中で渦巻く。あの子は精一杯、期待に
応えようと頑張った……そりゃあ、結果はあの女が望む数には至ら
なかったかもしれない――。

「だけど!！」

（自分はここから動かないで全部人に任せておきながら、この仕打
ち……）

「これが許せるもんか!」

拳に思わず力が入る。あの女を打ちのめさないと、思いっきり殴
って目を覚まさせてやらないと気が済まない。

アルフの中ではフェイトを傷つけられた理由が納得のいくもので
はなかった。時空管理局という巨大な組織の網を掻い潜って見付け
るだけでも大変なのに。

それでも頑張って8個も見付けてきたというのに……。それなの
に、あの女は何をした？自分の娘に魔法を撃ち落とし、挙句驥とい
う名の拷問。

「もう限界だ……こんなのフェイトが何と言おうと許せるもんか」

アルフは抑えきれない感情から怒りの言葉が零れる。その胸にフェイトを抱きかかえてるにもかかわらず。

——フェイト・テストロッサ。

大魔導師プレシア・テストロッサの娘にして若干9歳の若き天才魔導師。

その彼女は気を失ってアルフの胸に抱えられていた。

「フェイト……御免ね……」

アルフは自分の主にそう詫びると、目前にある扉を破壊した。

あの女、プレシア・テストロッサを打ちのめす為に。

S i d e — プレシア —

（駄目だ……たった8個、これだけではアルハザードには辿りつけない。自分の夢が……あの娘の命も救えない。私達は何をした？何故こんなにも苦しまなければならない？あの娘が何か悪い事をしたとでもいうの？何故？どうして？）

「……」

プレシアはジュエルシードを見つめ何も語らない。

しかし……その瞳は深い哀しみと少しの愛情、そんな想いが秘められていた。

だが、そんな想いに水をさす怒声が響き渡る――。

「プレシアあああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

——私の名を大声で叫ぶ侵入者が現れたのだ。

「よくも……よくもフェイトを!!」

その侵入者は私に牙を？く。

お前の態度は、言動は、仕打ちは、一体なんのつもりだ！
そんな感情を込めた様で掴みかかってくる。

(私には時間がないというのに)

「あんたは母親で！ あの子はあんたの娘だろ！」

（私の娘……私に笑いかけてくれて、困らせた娘……何よりも愛した娘……）

「あんなに頑張ってる子に！あんなに一所懸命な子に！」

（そして私の手から零れ落ちた命……救えなかった命……全てを持
っていった命……）

「なんであんな酷い事が出来るんだよ！」

（だから……認められなかった……許せなかった……譲れなかった……）

「……時間がないのよ……」

「!？」

プレシアには時間がなかった。自分にも娘にも……こんな理不尽に屈したくなかった。だから逆らった。例え……それが間違っている行為だとしても。

そんな譲れない想いがプレシアを動かす。前に立ち塞がるなら何人たりとも許さないと。

——ドス。

掌から魔法を放ちその壁を^{アルフ}打ち抜く。

「かはっ！」

瞬時にアルフの身体を突きぬけた魔法は彼女を^{アルフ}吹き飛ばす。

「あの子は使い魔の作り方が駄目ね……余分な感情が多すぎるわ」

「ふ……フェイトとは、あんたの娘は、あんたに笑って欲しくて、優しいあんたに戻って欲しくて……あんなに!!」

「……消えなさい」

——ズズウン!!

(逃げたか……)

「私は止まらないのよ……全てに逆らった時から……」

(……プ・レ・シ・ア……)

その現実を見つめ、何も動く事のできない意識は哀しんだ。

——プレシアを止めてあげたいと。

——フェイトやアルフの力になってやりたいと。

そんな微かな願いが風に乗って舞い散っていた。

— Side out —

「――なるほど……それが、君が怪我を負っていた理由^{わけ}なんだね？」

「ああ……そうさ。だけど！あの子は何も悪くないんだよ！！」

「まあ、落ち着くがよい。別にお主を責めてる訳でも、拘束しようというでもない」

「その通りだ。少なくともここに居る皆は君の気持ちを理解しているつもりだ」

「……あんた等」

「大丈夫だよ、アルフさん！フェイトちゃんも、フェイトちゃんのお母さんも、きっと仲直りできるよ」

『時の庭園』、プレシアが拠点とする高次元空間にある巨大庭園。そこからアルフは瀕死の重傷を負いながらも海鳴市へと脱出する事ができていた。そして彼女は、偶然出会った二人の女性に助けられ高町家で治療を受けていたのである。その満身創痍でも主の身を案じる姿は悲壮感を漂わせていた。だが、一先ずの言質をとったのか急に力が抜け意識も飛ぶ。

「……」

「あ、アルフさん!？」

「大丈夫だ。少し気を失っただけだろう」

「良かった……」

最後の力を振り絞ってフェイトの懇願を果たした為か、アルフは力尽きたかのように気を失ってしまった。

少なくとも自分だけの力ではフェイトを救えない……だから助けられたとはいえ、敵であった者にも事情を説明した。そんな藁にも縋るような思いが彼女を動かしていたのだ。

「……済みません、事情が少々込み入っている様ですが兄は……お兄様はこちらには？」

「ああ、刃君なら庄之助が迎えに飛んでくれている。もう直ぐここに帰ってくる頃だろう」

「本当ですか!？」

「ええ、彼も武蔵さんと同様に私達の家と一緒に生活しているから」

「……刃」

（いつもこんな騒動や揉め事の中で生きている……良かった、私の

知ってる刃で)

「あの、さやかさん？」

「えっと、アリサちゃんだっけ？」

「はい、さやかさんの事は諸羽さんからも聞いていました。それで……この事なんですが、出来れば誰にも口外しないで欲しいんです」

ああ、そういう事か。今回は思わぬ事件に巻き込まれてアルフという犬をこの家に運び込む事になった。だけど、これは誰彼なしに吹聴する事件じゃないし、皆も同意見みたい。

「うん、私もこういうのには慣れてるから。そんなに心配しなくても大丈夫」

「よかった」

アルフの容体が落ち着いた事もあり、三人の少女たちは挙ってさやかと諸羽に話しかけてくる。それは昔話や刃との関係、好きな事から得意な事と話の尽きる事はない。さやか達の方も癖のある性格でなかったし、人当たりもよかったのが幸いしたのだろう。だからこうなってくると打ち解けるのも早く、女性同士で早くも姦しくなっていた。

「全く。何だか我が家も急に騒がしくなってきたな」
「ええ。でも良い傾向じゃないかしら」

「しかし意外だな」

「何がだ？」

「ほら、話は聞いてたけど……刃くんて恋話とかには……ね？」

「まあな。印象だけで語るとそう思うのも無理ないか」

終いには恭也と美由希でさえ愉快気に語り合っている。

そんな、各々が論を興じていた時――。

――高町家の玄関を開く音が響き渡った。

ドタドタドタドタ。

そして、けたたましく廊下を走る音が段々と居間へと近づき……。

「オメーら、大丈夫か!？」

刃が大声を張り上げながら戻って来たのだ。

……。

訪れる一瞬の静寂。

刃が鬼気迫る勢いで高町家の居間に飛び込んだ時、展開されていた光景。

それは――。

――高町夫妻に兄妹、そしていつもの三人の少女達とフェレット（ユーノ）が生暖かい眼差しをこちらに向けている様であった。

「なんでえ、脅かしやがって」

肩透しをくらったのかガツクリと声の力が抜ける。

何だ、何だ？何事かと思って駆けつけてみれば平和そのもの。

士郎や桃子、恭也に美由希。

アリサとすずか、そしてユーノとなのはも元氣そうじゃねえか。

武蔵とさやかに諸羽だって変わら……？

……。

「さやか、それに諸羽か？」

それは凡そ三年ぶりの再会。

鉄刃と峰^{みね}さやか――かつて武蔵に『刀』と『鞘』と称され、心では固い絆で結ばれていた二人。そんな二人の運命が再び交じりあう。

「や、刃」

その刃のあまりに変わらない様。

だから……自然とさやかの瞳から一筋の涙が零れ落ちる。

（あれ？何でだろう……ずっと会いたかったのに、刃の顔が見たかったのに、嬉しい筈なのに……涙が零れるのは）

「あ……」

（話したい事や聞きたい事がたくさんある。だけど言葉にできない、出てこない。こんな、こんな筈じゃなかったのに）

そんな戸惑うさやかの様子を余所に刃が徐に口を開く。

「オメー、随分チビになったな？」

「あ、あんたがでかくなったのよ」

「昔はこんなにチビだったのにな」

「な、何よ！？あんただって、トンガリチビだったじゃない！」

……感動の再会？の筈が雰囲気はどんどん夫婦漫才チックな方に流れていく。俗に喧嘩する程仲が良いという言葉があるように、この二人にはそれがピッタリなのかもしれない。何故なら口では喧嘩になっていても、その瞳には嬉しさが宿っていたのだから。外野の

方もそれを感じている為か誰もそれを止めようとしなない。

「まったく……お兄様も相変わらずね」

クスクスと軽く微笑む諸羽。

彼女もまた刃と縁のある女性――。

――くろがもろは鉄諸羽、正真正銘刃の妹である。

「あのー、もしかして刃さんとさやかさんは昔からこんな感じだったんですか？」

「そうね……私はお兄様、ううん、お兄ちゃんと出会ったのは3年程前だから、それ以前の事については詳しくないわ。でも感じて良いなら想像に難しくないけどね。お兄ちゃんもさやかさんも裏表のない性格だから」

なるほど。短い付き合いだけどその気持ちはなんとなく理解できる。

なのはただでなく、黙って聞いていた少女達も頷いてしまう。

「だけど何時までもこれは拙いだろう」

「そうだな」

「刃君、それにさやかさん、募る話は後回しにして本題を伝えたいんだが？」

士郎と恭也の尤もな意見に刃ときやかも渋々ながら鉾を収める。刃にして見れば庄之助が知らせを届ける位だから何事かと思っ

いたし、さやかの方も既に事情の説明は受けていた。

「そうだ。何か事情あるなら早く説明する」

そしてタイミングよく間に入って来たのは……。

「……エメラルド？」

「何だ？」

刃を中央に挟み左右に陣取るエメラルドとさやか。

確かに事情は聞いていた。だからエメラルドが生きている事も知っていた。

しかし、実際にこの目で見るとやはり戸惑いは残ってしまう。

何を話せば良いんだろう？ そんな躊躇いに似た感情が生まれてしまったのだ。

そんな躊躇いがちな態度でエメラルドを見ると……。

何気に制服姿で刃の腕を自然に組んでいるのが瞳に映る。

（何よあれ！？ こっちが本気で心配してあげたのに）

「良かったわね？ 元気そうで安心したわ」

ある意味、宣戦布告に近い台詞を吐きドサクサに紛れてさやかも刃の腕を組む。

「さやか？」

「ほら、折角士郎さんが事情を説明してくれるのよ？黙って聞いてなさいよ！」

「な、何だよ？」

その得体のしれない迫力に気圧されて言葉を飲み込む刃。鬱陶しいから二人共離れてくれとは言えなかったのだ。ある意味、それは正解だったのかもしれない。

左右に浮かぶ『龍』と『虎』。

そんなオーラがドス黒く浮かんでいるのだから。

ゴホン。

士郎がその頭痛を抑え、仕切りのおす様に咳払いを入れる。

「まず刃君にエメラルドさん。君達にある事情を説明しなくてはならない」

そして語られるプレシアとフェイトの関係。

アルフが何故怪我を負って高町家にいるのか。

フェイトに対する哀願。

本拠地である『時の庭園』。

ジュエルシードは頼まれて集めていた事。

それらの事情が全て刃達にも伝えられると―――。

「この事はリンディ達も知ってんのか？」

「はい。きっと今迄モニターを通して見知っていると思います」

——と、そのユーノの返事を待っていたとばかりに、アースラから映像が送られる。

映しだされる映像はクロノとリンディ。

当然の事ながら彼女達も海鳴市での動向を探らねばならない。

だからなのは達の周辺にも偵察機を張っておく必要があったのだ。

「はじめまして。私はリンディ・ハラオウン、アースラでの艦長を務めさせて貰っています。モニター越しの失礼をお許し下さい」

「僕はクロノ・ハラオウン。時空管理局執務官を務めています。なのは…さんには御力を借りさせて頂いています」

前々から双方に事情は通っていた。だが、顔合わせはこの時が初だった事もあって、礼の欠く挨拶は許されない。だからこそ、リンディ達は先ず自ら名乗り出て紹介を始めたのである。

「いえ、事情の方はなのはから窺っています。親として娘の行動は心配ですが…なののはの意思を何よりも尊重させたいので」

士郎としても心で含む物はある。年端もいかぬ幼き者を戦場に送る組織に不審感がゼロとはいえないのだから。それでも現状と関わってしまった事実、おそらくなのはの方もここまで来て後戻りは出来ないだろう。

ただ、管理局側の人間の対応を見る限り決して礼義がない訳でもない。こちらと異なる世界観を持ち優れた技術を持つ組織。なのはを単に利用して使い捨てるような行動を取るなら……という危機感

は持ちつつも、今は自分の娘を信用するしかなかった。それに娘だけでなく、その親友達も共にしているのだから。

「……済みません。今は心配をお掛けしますが、決してなのはさん達を切り捨てる様な真似はいたしません」

「「「「！」「」」」」

これには士郎や恭也、そして桃子と美由希も驚いた。仮にも艦長クラスの人間が個人に頭を下げ、心情を明かすなど考えられないからだ。言葉は悪いが上に立つ人間は全体を考えねばならない。それは時として非情な判断を委ねられる事に繋がる。

その危機感をこちらが持っている事を察して相手側は謝ってきたのだ。ならば相手が礼を尽くすならこちらもそれに応えなければならぬ。

「父さん」

「ああ」

「なのは、頑張れよ」

「え？ あ、うん！」

兄と父から励ましの言葉が心を後押しする。

「なのは！」

「なのはちゃん」

いや声はそれだけじゃない。家族の皆、アリサちゃん、すずかちゃん親友も、ユーノ君や刃さん達も優しく微笑んでくれる。その事が私の気持ちを後押しする。自分は間違っていないと、多くの人に支えられていると。

——だから。

「うん！みんな、有難ね」

私はそれに応えるように満面の笑みを浮かべた。

そんな高町家の家族や周囲の応えを見詰め、自分達の伝えたかった真意が理解してもらえたと分かると、クロノが今後の計画を説明し始める。

「委細については彼女が目^{アルフ}を覚ましてからだ。そして、アースラに戻って来る前にもしフェイト・テストロッサと出会う事があったのなら……その時は、なのはに任せたい」

「どうかしら？なのはさん」

「はい！まだこの間の返事も聞かせて貰ってないし……何より、私自身がフェイトちゃんと向き合いたいです」

胸を張って応える。そこには誰にも邪魔されたくない、自分自身がやらなければならない事を物語っていた。

刻々と二人の少女が交り合う瞬間が迫っていたのである。

第十四話 逃亡者（後書き）

今回登場の峰さやかと鉄諸羽。諸羽ってスタンスとしては一步下が
ってる感じがするんですね……後で彼女も前衛に出しますけど。
因みにさやかは刃一筋なので分かり易い（笑）。

そして次回はいよいよ二人のライバルが激突。
いわゆる一騎打ちです。

何か気分的にはアナベル・ガトーとコウ・ウラキを連想しながら考
えています。

全く違う作品で内容も違うのに我ながら不思議だ……。

急ごしらえの出来なんでイマイチ納得できない仕上がりでした。
今回はあまり考えてる時間もなかったし（汗）。

第十五話 決着（前書き）

フェイト・テストロッサの使い魔、アルフ。彼女がプレシアの下から脱出した事により齎された情報は黒幕の存在を明らかにした。大魔導師プレシアと時空管理局、互いが衝突するのは最早避けられない事態となったのである。そして……その事は二人の魔法少女の運命も決定付ける事になる。

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第十五話 決着

―― 海鳴臨海公園 ――

まだ早朝の時間、空はまだぼんやりと暗さを残す時間帯。そんな早朝になのはや刃達が管理局と合流を果たすべく公園へと集っていた。

だがこの場所にいる全ての人間は何かを感じている……これから起こる一つの決着に。

「……出てきて、フエイトちゃん」

その呼び掛けに応えるように一人の少女が姿を現す。物言わず静かな佇まいで街灯の上に立っているのだ。

「なのは」

「刃さん」

これは高町なのはの問題、なら無粋な横槍は失礼というもの。刃とて数々の強敵と死闘を演じた兵、譲れない戦いを知っている。故になのはの気持ちも良く理解できるのだ。

ならば自分は何をすれば良いか？簡単だ。それは――。

コッソ。

軽く拳と拳がぶつかりあう音。

互いの心境を理解するからこそ、自然と行われる。

二人はすれ違いざまに互いの気持ちを交えたのだ。

「フェイト、もう止め『駄目だよアルフ』——」

「——例えどんな理由があっても、どんな風に思われても……私はあの人の娘だから」

母さんからは離れられない。幾つもの笑顔も、幸せも、確かにあったんだ。なら私は世界中が敵になっても、どんな事があっても——母さんの味方になりたい……それに私がいなくなったら母さんは一人になってしまう。

そんな悲壮な想いを胸に秘めフェイトはプレシアを裏切る事が出来なかった。もし、自分が母さんを裏切ったら自分でいられなくなる。そんな強迫観念にも似た思いが彼女を縛っていたのかもしれない。

「……分かってる。これが終わらなきゃ私達は一步も進めないって事も。フェイトちゃんが捨てられない想いを背負っている事も」

「……」

「だから賭けよう。お互いのジュエルシードを！未来に進む為に、私達の為にも」

ここまで来たら後はお互いの信念をぶつけあうだけ。何の飾りもない素の私を、偽りや建前じゃない本当の私。その結果が例えどうなろうと……勝ち負けの問題じゃない、傷つく事を恐れるでもない、私を見せるだけ。本当の私を！

「いくよ、フェイトちゃん！」

ここから先は問答じゃない、行動を示して曝け出すのみ。
そんな決意を秘めなのはは、フェイトへと勝負を仕掛けるべく宙を飛んだ。

「ッー！」

——キーン！

互いに意地と誇りをかけて真っ向から力と力が衝突する。ここで道を譲る事は撤退するにも等しい、そんな熱い闘志を外に出しデバイスとデバイスがぶつかりあった。

S i d e — アースラ —

「始まったか」

「うん……」

「エイミィ、君はどちらが勝つと思う？」

「うーん、私はなのはちゃんかな？ 勿論、身贔屓としての見方も含めてるけど、なのはちゃんの成長の速さは尋常じゃないもの。経験の差は大きいけど、それを跳ね返す何かを期待させられちゃうんだよね」

（……確かにそれは僕も薄々は感じていた。彼女達の話聞く限りなのはが魔法の力に目覚めたのはつい最近。それまでは普通の小学生だった……それが今ではAAAクラスの力。ハッキリ言ってこれは普通じゃない。あの年齢で魔法技術が存在しない星で、あの才能……）

「本当に末恐ろしくなるよ」

「何で？」

「いや、独り言だから気にしないでくれ。それより任務の方も忘れないでくれよ」

「おう、任せとけ♪」

クロノの思惑としては二人の勝負そのものには重要性はおいでない。なのはが勝てば問題ないが、大事なのは勝負の後の方。プレシア・テストロッサの拠点及び、フェイトの居住地のどれかを調べる事。特にプレシアの居場所は確実に掴んでおかなければならない。何しろ彼女はこのアースラに攻撃を仕掛けたのだから。このまま放

置するなんて事は絶対に許されない。

「まあ、僕もなのはが勝ってくれば余計な心配をしなくて済むからね」

「だから何だ？ クロノ君がなのはちゃんにあの事を話さなかったのは……」

「……勝負の前に余計な事で心を乱させたくない」

「人造生命の生成？」

「うん、プレシア・テストロツサが研究していたのは次元航行エネルギーの力だけじゃなかったの。彼女は愛娘のアリシア・テストロツサを事故で亡くしていたから、死者蘇生の秘術にも没頭していた見たい……」

「……！もしかして、フェイトは……」

「うん。まだ確証を掴んだ訳じゃないけど、十中八九その研究から

産み出されたと考えるのが妥当じゃないかな……」

「つまり、プレシアが実の娘を生き返らせる為に産み出した命。ふざけてる!!」

「クロノくん……」

クロノの顔からは悲壮感を漂わせ身体を震わせていた。

「誰だって、こんな筈じゃなかったという経験はするんだ。生きてる限り、人間である限り、それから逃げちゃいけないんだ」

「うん、分かってる。だから私達で止めてあげないとね？クロノくん」

「エイミィ……そうだな。僕達はその為にも今回の事件について尽力をつくさないと」

「あ、それともう一つ報告があったんだ」

「？」

「例の剣。刃さんが持っていた剣なんだけど、不思議な事に何の解析も出来なかったんだ。あれには明らかに魔力が宿っていないし、使用されている材料もごく普通の剣と同じ。だけど直に触れてみると誰にでも分かる不思議な力の存在を感じるの。少なくとも私達が扱ってる魔法とは別の力みたい」

「その不思議の力というのは？」

「それがね……全く分からなかったの」

「どういう事だい？」

「だから判明したのは材質が普通の剣と同じ事。そして魔力じゃない力を秘めている事。それだけなの」

「でも彼はその剣を使って海面を凍らせ、ジュエルシードの暴走すら抑えた……」

「ただ武蔵さんが言うには刃さん以外にはその力は扱えないって」

「やれやれ、プレシア・テストロッサの事だけで頭が痛いというのに」

「で、どうするの？」

「最終決断は艦長次第だけど、おそらくその案件は保留だろうね。態々不必要な衝突をする事はないし、彼の力も侮れない。下手に刺激して被害を大きくする事もないだろう。少なくとも彼は世界をどうとか、犯罪をするタイプの人間には見えないしね。要は僕達と良好な関係を築ければ当面の危機とはならない。話しから察するに誰にでも扱える代物じゃないんだろう？」

「だね。私も少し触ってみたけど、あんな力は使えなさそうだったし」

「なら、今は戦力として換算した方が得策だよ」

「やっぱり、クロノ君もそう思うか」

「まあね……」

（もっと詳しいデータも戦闘になれば計れるだろうし……）

「……ん」

「クロノ君ってば！」

「あ……何、エイミィ？」

「もー、さっきから呼んでるのに。何？また考え事？」

「ん、昨夜の事をね」

「まあ、心配する気持ちは分かるけど。ほら、画面の方にも意識を集中しないと」

「ああ、悪い」

— Side out —

—— 海鳴臨海公園 ——

「ファイア！」

「シュー！」

上空で繰り広げられる二人の決闘。互いが牽制の魔法を放ち、相手の隙を狙う。使用される魔法の数や質、どれをとっても高レベルの撃ち合いである。

「おーおー、凄まじいのう。あれで本当に小学生なのか、アヤツ等

「？」

「凄いね。なのはちゃんて」

「お、金髪の方が魔法を斬り裂いてくぞ」

「お兄ちゃんも顔負けの非常識さね」

「なのは、負けるんじゃないわよ！」

「なのはちゃん、しっかり」

繰り出される数と質は互角。それらが相殺される中、なのはは追撃の魔法を撃ち放つ。『Divine Shooter』、それは魔法の玉が幾つも展開されジャブの様に牽制の役割をこなす。足止めや相手の隙を作るのには常套手段といえるだろう。

しかしフェイトの方もそれに怯まない。『Scythe Form』、接近に優れた鎌の形態をとって魔法の玉を斬り裂いていくのだから。

「はあああああー！ー！ー！！！！！」

（ペースだ。自分のペースにさえ持ち込めば負けない。勝負はいかに自分の土俵に持ち込むかが肝心……あの子はまだそのペース作りが未熟なんだから。なら私は常に先手をとってこちらの土俵に持ち込む！）

「今だ！」

「ッ！レイジングハート、お願い」
『Round Shield』

バチバチィ！！

互いの力が互角であるが故に、衝突の均衡は崩れない。火花を散らすような音を立て、意地まほうと意地まほうがぶつかり合う。

（そっちが接近戦なら、私は遠隔操作で勝負！）

「流石だね、フェイトちゃん——」

「！？」

「——でも、私だって成長してるんだよ！」

「まさ——！！！」

フェイトは直感的に背後に危険を察知する。
そう、なのはは遠隔でフェイトの背後に奇襲の一手を撃ったのである。

「——こんなもので！」

ドゥン！！

左手を翳し攻撃を防ぐべく魔法陣が展開される。
これは奇襲の一手、一撃の重さは軽い。

案の定、フェイトの障壁を突破する決め手には至らない。

（まさか！？）

「これなら！！」

フェイトの一瞬の隙を突き、なのははフェイトの頭上を奪ったのだ。

上空からスピードの乗せた一撃を出す為に。

先手を打つつもりが後手へと回されるフェイト。

「クッ！」

ドオオオオオン！！！！

刹那、衝突の際に魔力が弾け凄まじい閃光が辺りを覆う。

（速い！スピードと経験の差で先手を打つつもりだったのに、守勢に回されるなんて……でも、私はまだ力を出し尽くしていない！）

「なら、これで！！」

「！」

なのはの一撃を防いだフェイトは返す刀でなのはへと一撃を繰り出す。

今度はこちらの番だといわんばかりに。

当然、なのはも正直にそれに当たるつもりはない。
なら攻撃を避けて距離を取る。

自分の番はそれからだ……と、姿勢を変えた瞬間に目に映ったのは――。

「――これは!？」

(そうか、フェイトちゃん……罠を作ってそちらに誘い込む為に。
やっぱり凄い、フェイトちゃんは)

なのはの逃げ道に複数の罠が仕掛けられていたのだ。
その魔法が発動し、なのはへと一斉に放出される。

「まだ、こんな事で!!」

(私だって全力を出しきっていない。まだ諦められないの!)

S i d e ー 三人称 ー

「ほう、やはり一筋縄ではいかないみたいじゃな」

「うーん。でもよ、あの様子だと金髪の方はまだ奥の手がありそうだな」

「その辺はキャリアの差かしら？」

「何でわかるの？」

「瞳でわかる。あれはまだ諦めていない……なら、自分の手を全て晒していないと考えるのが妥当」

「なのはちゃん、大丈夫だよね？」

「なのはが負ける訳ないでしょ？何たって私達が認めた子なんだから」

「でもまだ油断できませんよ。今はほぼ互角の展開だけど、何が起こるかわかりませんから」

（……確かなのはって子は強いよ。初めて会った時に比べたら比較にならない位。でも、フェイトはまだとおきを隠してる。アレを使われたら……）

なのはとフェイトの対決を見守っている刃達。この一騎打ちに横槍を入れる無粋な真似はしたくない……それでも心配や不安は付きまとう物だ。

「お？噂をしたら何とやらじゃな」

「……見てえだな。今度のは大きいのを一発狙ってそうだぜ」

「——！？まさか、フェイト……アレを使うつもりじゃ」

「「「「アレ？」」「」「」」

アルフの意味深な言葉に全員が振り返る。

「ああ、フェイトが使える魔法の中でも最高級の威力があるんだ。
ヤバイよ、あれだけは」

「ふむ……道理であの娘の眼付が変わった訳じゃ」

「分かるぜ。アレは相手を好敵手ライバルと認めた顔だもんな」

「って、何を呑気な事をいってるんですか！？下手するとなのはが
負けちゃうんですよ！」

刃と武蔵の人ごとみたいな解説に怒りを向ける面々。特にユーノ
は魔法世界の住人である為か、魔法の力に関しては反応も敏感だ。

「だってよ、これはなのはと金髪の子ビが決めた勝負だろ？これで
手心を加えたり、横槍が入ったらそれこそ怒られるぜ。なのはに」

「つまりじゃ。お主達も精一杯頑張って互いに我を張りあってる…
：そんな場面を第三者に汚されたらどう思う？特に絶対に負けたく
ないと思ってる相手との勝負をな……」

刃と武蔵……共に終生のライバルといえる存在がいた。刃は鬼丸、

武蔵は小次郎。故に真剣勝負の意味は理解しているのである。

「そんな悠長なこと言って、なのはが負けたら元も子もないんですよ？ ジュエルシードだって奪われるし、何よりなのはに怪我をさせたくない！」

「んー。ユーノ君だっけ？ 君の言う理屈も分かるけど、なのはちゃん
の眼を見た？ あれは絶対に邪魔されたくない眼だったよ。きっと
怪我とかジュエルシードより大切な事なんじゃないかな？ あの子と
仲良くなりたいのは……」

「さやかさん……」

さやかの言葉にユーノもアリサ達もなのはを見詰め直す。
そこには――。

「負けない！ フェイトちゃんが最高の一撃で来るなら、私はそれに
耐えて見せる」

「……悪いけど、私も負けられない。だから……これで決めてみせる！」

「……」

ほんの僅か、フェイトが大技を繰り出す為に呪文を詠唱し始めた

時――。

（アリサちゃん、すずかちゃん、ユーノ君……それに皆、私は大丈夫！絶対に負けないから、フェイトちゃんとだって分かり合って見せるから！）

――そんな想いを瞳に込め、地上の皆へと視線を向ける。

「「「！！！！」」」

「やっぱな、オレだってそう思うもんよ」

「ま、なのは殿も士郎殿の娘だけあって武士の精神が宿っておったんじゃない」

「クッ、何よ私だってなのは事は信じてるわよ！フンだ」

「クス。今回だけは私達の負けだね、アリサちゃん」

「何で、すずかまでそういう訳？」

「だって、今のなのはちゃんの顔……昔の、私とアリサちゃんとなのはちゃんが知り合った頃に似てたから」

「分かってるわよ、そんな事くらい……ただ、ちょっと自分が齒痒かっただけよ」

（馬鹿ね、私も。あの子は昔からずっとああだったじゃない。それ

に今更気付くなんて)

「なのはー！ー！信じてるからね、絶対に負けるんじゃないわよ！ー！」

大声でなのはへエールを送る。これが今の自分に出来る精一杯の力、だけどそれでも、あの子なら……なのはならきつと応えてくれる。私達が信じなくてどうするのよ、まったく。

「アリサちゃん」

そんな二人の少女の光景を微笑ましく見詰める刃と武蔵。いや、二人だけでなくエメラルドやさやかも同じだった。

「負けんじゃねーぞ、なのは！」

「みんな……」

地上から自分を応援してくれる仲間達。

自分が伝えたかった気持ちを分かってくれた事。

その事が心から嬉しかった。

だから――。

なのはは自然と右腕をあげ、拳を握ってそれに応えた。

（なのは……そっか、僕は勘違いしてたのかも。考えてみれば僕を助けてくれた時だって彼女は何も後悔してなかった。寧ろ助けられなかった方が後悔していたのかもしれない。いつだって友達や仲間の事を想って行動しているんだから）

（アイツ……フェイトにもあんな奴が近くに居てくれてたら。きっとこんな風にはならなかった。悔しいけど、アイツになら、なのはにならフェイトの気持ちが開けるかもしれない）

「!？」

なのはがそんな一瞬の隙を作った時――。
彼女の周囲に無数の魔法陣が浮かぶ。

（これは……）

『Phalanx Shift』

「いけな——」

なのはが離脱を試みた時には遅かった。

彼女の両腕にバインドが仕掛けられ動きを封じられてしまったのだ。

「まだ戦闘の途中なんだよ……余所見をしてる暇はないのに」

「——だったね、フェイトちゃん。でも、私は負けないよ。ここにいるのは私だけじゃないから。皆が、仲間や友達も一緒だから」

「！」

なのはの挑発に似た言葉にフェイトが怒りを覚える。

無意識の内に嫉妬を覚えていたのだろう。

自分に無い物を持つてる相手。

自分が欲しかった物を持つてる相手。

だから羨ましかった。

だから悔しかった。

何で自分はそうじゃないのかと。

「Arukas, Krutas, Eygias…」

（フェイトちゃん、やっぱり寂しいんだ。独りだけの寂しさは私、

少し分かる。もしアリサちゃんやすずかちゃんが居なければ私だけで独りだったから)

「Baruel, Zalue, Browzel…」

(フェイトちゃんだって手を差し出せば応えてくれる人がいる！仲間だって友達だって出来る！今からだって遅くない)

アルフさん

詠唱が終わりを告げフェイトの瞳に意志が宿る。

そして……。

「撃ち碎け！ファイア！」

死刑宣告にも似た言葉と共に無数の光弾がなのはを襲う。

全ての終焉を迎えるべく、最強の魔法が放たれたのだ。

ズオオオオオン！！！！

光弾の数が炸裂しただけ爆音が響き渡り、辺りに一帯に噴煙に等しき煙が広がっていく。

「ハアハア……」

(これで終わったはず。いくらあの子でもあれは避けられない……)

「何で？終わったはずなのに……何でそんな瞳ができるの」

フェイトには信じられなかった。自分が放った最大の魔法で決着はついた筈。なのに、何でこの場に居る彼女の仲間は誰も動揺していないのか。いや、動揺するどころか確信に近い眼差しをしている。彼女は敗れていないと、勝負は終わっていないと。

（分からない……何でそんなに強い意志を込めた瞳が出来るのか。そんなに人を信じる事ができるのか……）

フェイトの不運はその狭い生活環境にあったのかもしれない。限られた人間関係で生きてきた。だから知らなかったのだ……仲間や親友と呼ぶ存在を。打算も憐れみもない、心から相手を認めた時の気持ち。

「撃ち終わるとバインドってのも解けちゃうんだね」

「!？」

煙が薄れ光弾が放たれた場所には一人の少女が姿を現した。

そう、高町なのははフェイトの魔法をもっても崩れなかったのである。

「うそ……」

「今度はこっちの番だよ、フェイトちゃん！」

『D i v i n e B u s t e r ! 』

主の意を汲んだレイジングハートから砲撃が放たれる。
立ち塞がる者を飲み込まんとする砲撃が。

「まだ！まだ負けてない！あの子が耐えたのなら、私だって」

フェイトを動かしているのは意地。
自分が認めた強敵——。

——だからこそ、譲れない。
強敵が出来た事なら自分にも出来ない筈がないと。

それはフェイトにも初めての事だったのかもしれない。
こんなにも張り合える相手、譲りたくない相手。

それがフェイトを突き動かす。

「クッ……」

フェイトは残された僅かな魔力を使い、なのはの砲撃魔法を必死で堪える。

彼女は本能的にここが正念場だと理解している。
だからこそ、相手の切り札を防いで見せるのがフェイトに出来る
最良の手段。

「出来た。私だって——」

薄れゆく魔力。

そう、彼女はあの砲撃に見事耐えきってみせたのだ。
だがフェイトがその直後に目にしたもの……。
それは——。

「受けてみて。ディバインバスターのバリエーション！」

——上空に彩る聖なる光。

なのはが翳すレイジングハートに眩い光が集り、巨大な魔力が生成されていく。

そして、なのはの言葉にレイジングハートも応える。

『Starlight Breaker』と。

それは魔法陣へと収束され、巨大な光の玉となって現れる。
なのはの全力を込めた魔力を集めて。

「まずい、アレは絶対に使わせ……!?!」

瞬時に危険性を悟ったフェイトが阻止すべく動こうとすると——
|。

「バインド!?!」

何時の間にかフェイトの両手足をバインドが拘束していたのである。

つい先程まではバインドを使った事のない少女が、フェイトの魔法を見て使いこなす。

———なんと恐るべき才能。

———なんと恐るべき魔力。

乾いた砂が水を吸うように、見た術を覚えていく。

最早、天才という領域すら超えているのかもしれない。

そんな彼女が言葉に力を込める。

「これが私の全力全開、スターライト———」

ブレイカー———!!」

フェイトの頭上から放たれた光。

それは「神の雷」ともとれる桁違いの砲撃魔法となって降り注がれたのだ。

そして……。

悲鳴すら許さずにフェイトを飲み込んだ。

第十五話 決着（後書き）

高町なのはの砲撃魔法、スターライトブレイカー。

これってラピュタの「天の火」に似ていると思いました。
構図的に何となく近いものを感じるんですね。

あの威力や砲撃の形も。

さて、今回はなのは無双という事でアニメ通りとなりました。
底なしの才能と天井知らずの強さに末恐ろしくなります。
つうか強さのインフレがジャンプ物も顔負けだよ、絶対。
あのスターライトブレイカーを浴びたフェイトが気の毒すぎる。

第十六話 真実（前書き）

高町なのはとフェイト・テストロッサの一騎打ち。一進攻防の戦闘は奥の手を新たに編み出した高町なのはの勝利となる。だがその行方を見守っていたのは、時空管理局や鉄刃達だけでなかった……。

魔法少女リリカルなのはく剣豪伝説、始まります。

第十六話 真実

「やはり、あの子じゃ駄目だったみたいね……」

（管理局にここを見付けられるのも時間の問題）

「そろそろ潮時か」

でもジュエルシードだけは渡せない。なら、私も直々に動く必要があるわね……。ここまできて、諦める訳にはいかないのだから。それを邪魔する者がいるのなら、容赦はしない。そう、例えば管理局だろうと何であろうと。

ついに自ら動く覚悟を決めたプレシアが先程の光景を空間モニターで見詰め直す。フェイトともう一人の少女の対決の結末を。このままではジュエルシードも管理局の手に渡ってしまう。ならば例えばこの居場所が探知されようとも、その前に取り戻す必要がある。

「まったく……役に立たない人形だったわね」

そんな溜息混じりの一言をポツリと漏らしたプレシアの周囲には魔法陣が浮かんでいた。

なのはとフェイトの一騎打ちはスターライトブレイカーによって
終止が打たれる。その様を地上で静観していた者達の反応は様々だ。
決着そのものに不満はないし、なのはの勝利を喜ばないでもない。

ただ……。

「おいおい、何だよアレ。とても小学生の放つ力じゃねえな」

「呆れるべきか、感心するべきか……」

「確かに」

「何、いまの……なのはちゃんてあんなに凄かったの？」

「まったく、随分と非常識な子ね」

「我が親友ながら、あの子には驚かされてばっかりね」

「なのはちゃん……流石にアレはちょっと」

「君の主に同情するよ……」

そう、あまりに圧倒的な火力を見せられた彼等は呆れていたのがある。

その桁違いな力と幼い少女が持つには分不相応な力に。
尤もなのは勝利を喜びこそすれ、怖がる者など誰もいないのだが。

「ふ、ふ、フェイト……って！呆けてる場合じゃなかった。オイ、フェイトは大丈夫なんだろうね？まさか重傷を負ったなんてなったら——」

「——まままままままままってよ」

人型になってフェレット（ユーノ）を握り締めるアルフ。

流石にあんなのを喰らってはフェイトだって無事とは限らない。
これだと何の為に管理局やなのは達に頼みこんだか分からないではないか。

「とりあえず問題ないんじゃないの？アレ、見ろよ」

ふと刃が指差した方角、そこには——。

「大丈夫？ フェイトちゃん」

「あ……」

（……そっか、私……負けちゃったんだ）

「私の……勝ち、だよな？」

「そう……みたいだね……」

——刃が指差した方角、そこにはなのはがフェイトを抱えて優しく微笑んでる姿があった。なのはの砲撃魔法を受けた際に、フェイトはほんの僅かな間だが気を失っていたのである。

「フェ、フェイト！」

「あの様子じゃ大丈夫そうだな」

「そうね。二人共動けるみたいだし」

「そういう事じゃ。ホレ、早くフェレット（ユーノ）を離してやれ」

「あ……いやゝゴメン、ゴメン」

「ゲ、ゲホッ。まったく……殺されるかと思った。でも、なのはもフェイトも無事みたいだし、本当に良かったよ」

「なのはちゃん、嬉しそうだね」

「まあね。あれだけ一所懸命に頑張ったんだもの、気持ち伝わってない訳ないわよ」

（……いや、まだ安心できない。わたしなら、この隙を突く。少なくとも、黒幕がいるなら油断できない）

「どうかした？ エメラルド」

「……何でもない」

同時刻ーアースラ。

「しかし……なんつうバカ魔力だったんだ」

「うん。アレは流石にないね。一瞬、フェイトちゃんが生きてるか心配しちゃったし」

「まあ、アレを見る限りその心配は杞憂だよ。だって動けない様子だけど、なのはがフェイト・テストロッサを抱えてるからね」

事の一部始終を監視していたので決着の行方も当然見知っていた。勝負そのものは大局に影響がないとはいえ、なのはの勝利は、やはりどこか安堵するものを感じさせる。問題はこの先で、どのタイミングでプレシアが介入してくるかだ。プレシアもこの結果は必ず見守っている。ならばみすみすジュエルシードを諦める事はしないであろう。

だからエイミィもクロノもこの勝負に一安心しつつも、緊急事態に即座に対応できるよう警戒は怠っていなかった。この好機を逃せば彼女の逃亡を見過ごす事になるし、敵の本拠地が発見できる絶好の機会でもあったのだから。

「エイミィ……で、例の方の動きは？」

「今の所は動きなし。でも、必ず動きはある筈だよ」

「だろうね。彼女の望みはジュエルシードなんだから、このまま手を拱いて見逃すとは考え難いし」

——と、二人がプレシアの動向を意見していた瞬間。

「これは！クロノ君、やっぱり向うも動いたみたいだよ！！」

「やはり来たか、プレシア・テストロッサ！」

バリバリイッ！！

「フェイトちゃん！？」

「ウッウウ！」

「拙い！プレシアとやらが動いたみたいじゃ」

「やべえぞ、ありゃあ！」

「あの子、あのままだと本当に拙いんじゃない？」

「みたいね。あの金髪の子、もう耐えられなくなってるみたいよ」

「なのはちゃん！」

「何やってんのよ！なのは、早く助けないと！！」

アースラでプレシアの動向が確認された直後、フェイトの頭上に雷の砲撃魔法が落とされたのだ。かつての大魔導師の魔法……。それはフェイトのデバイスである『バルディッシュ』をも破壊する威力があった。当然の如く、それを直撃したフェイトもただでは済まない。そしてその場の混乱を見計らったかのように、ジュエルシールドがプレシアの下へと転送されようとした瞬間……。

——パリン！

「そうはさせない」

（やはり動いて来たか、プレシア・テストロッサ）

この場の中で唯一人、冷静に事態を把握していたエメラルドがその行く手を阻んだのだ。

彼女だけはプレシアの動くタイミングを見定めていたのである。

だが——。

「これは！？……クッ」

——そんなエメラルドを嘲笑うが如く、彼女の周囲に魔法陣が現れる。

一旦はジュエルシールドの阻止が成功したものの、プレシアはエメ

ラルド諸とも自分の拠点へと転送を図ったのである。

そして本来なのはが獲得すべきだったジュエルシード8個とエメラルドが、転移魔法によってこの場から消え去ってしまった。

「エメラルド!？」

「クッ、アースラの方は何をやっておるんじゃない?」

「あ!あれ、何か魔法陣が浮かんできた」

「どうやら向う（アースラ）も本格的に動くみたいね」

「すずかちゃん……」

「分かってる、なのはの事もエメラルドさんの事も……」

なのはとフェイトの一騎打ちが一転、第三者の介入によってジュエルシードも奪われ、挙句エメラルドも巻き込まれる形で転送されてしまう。管理局側としてもこれは想定外の出来事であったが、プレシアの拠点を掴む目的は何とか果たしていた。

故に次の戦略として刃やなのは達との合流による戦力強化。また、フェイト・テストロッサの身柄も預かる必要があった。その為にアースラへの転送ゲートを送ったのである。

「武装局員、転送ポートから出動!任務はプレシア・テストロッサ

の身柄確保です」

巨大な魔法陣の前に幾人もの局員が佇んでいる。
何れもアースらの下で場数を踏んできた魔導師達だ。
そして武装部隊がリンディの命令と共にプレシアの拠点へと転送
されていた。

— Side out —

ケホッ——。

掠れた声で咳き込む一人の女性。
その女性の足元には血だまりが出来ていた。
そう……彼女は吐血をしていたのだ。

「チッ、忌々しいガラクタが……」

その女性が忌々しげに瞳を送る。

その先にあったのは一人の女性。

いや、性格にいうならアンドロイドと呼ばれる存在だった。

無駄に時間を費やしたわね。まさか、こんなガラクタがオマケとして付いて来るとは思わなかったわ……おかげで余計な力を使ってしまったしね。それにこちらの座標を管理局に掴まれた筈。どうやら私に残された時間もあと僅か……。

（本当、私達は神様から嫌われてるみたいね）

彼女がそう思考したと同時に、扉が開かれ数人の武装した男達が乱入してきたのだ。

「プレシア・テストロッサ！時空管理法違反、及びアースラへの攻撃容疑で貴女を逮捕します」

「武装を解除して此方へ」

投降を呼びかけながらも玉座に座る大魔導師を包囲する局員。

当然の事ながら身柄を拘束するまでは油断は出来ない。

だからこそ包囲網を築いたのだが――。

武装隊はパンドラの箱を開けてしまったのだ。

開けてはならない扉を。

プレシアを包囲する一方で現場の調査をした部隊が発見した者。

そこには……。

生体ポットらしき物の中に浮かぶ一人の少女。

美しい金髪に長髪。

真っ白の雪の様な肌。

誰もがその姿に瞳を奪われた瞬間――。

数人の局員達の悲鳴が轟く。

そして何時の間にか姿を現していたプレシア。

その彼女が口を開く……。

「私のアリシアに近寄らないで」

鬼気迫る形相でその生体ポットの前に立ち塞がる。

その姿は愛しき者を護る女性。

愛すべき子供を護る母親でもあった。

S i d e ー アースラ ー

「おい！ あれは……」

「……似ておるな」

転送された武装局員をモニター越しに見守るリンディと刃達。
だが映しだされているある姿に誰もが茫然とする。

「ア・リ・シ・ア……？」

特に一人の少女はその姿に戸惑いを覚える。
何故なら自分と瓜二つの姿をしているのだから。

「……お主達、何を隠しておる？ 全てを知っておるのじゃろう、あの少女の事もそこにいる少女の事も」

「それは……」

武蔵の問い詰めに応え難そうに戸惑うリンディ。いや、クロノやエイミィも同様に口に出すのを憚っているようだ。

「……いいのかしら？ 遅かれ早かれ、あの女性が全てを吐露しちゃうかもよ」

諸羽とさやか的事は一通り連絡が通っている。何故この場に居るかは一先ず置いておき、現状では確かに彼女の言う事が尤もだろう。何故ならなのはやフェイトに隠しておきたかった事実がこうやって明かされたのだから。

「……分かりました」

苦渋に満ちた顔で渋々と応えるリンディ。

最早隠し通せる段階ではないと踏んだようだ。

「いい、フェイトさん？これから話す事は気をしっかり持ってもらいたいので……。決して自分を責めないで、負けないでほしいの」

そしてポツポツと紡がれる言葉。

「プレシアがまだ管理局に勤めていた頃の話し――

彼女はある事故で実の娘、アリシア・テストロッサを亡くしていたの。そして彼女が最後に行っていた研究……それは使い魔を超える人造生命の生成と死者蘇生の秘術。『フェイト』という名は、その研究の開発コードなのよ……」

アアアアアアアア！！！！！

そこで大きな叫び声が響き渡る。
それも一人でなく大勢の悲鳴が。

「！？」

「艦長！局員達が！」

モニターに映し出されているのはプレシアの魔法を受けて全滅した局員の姿だった。

「いけない！局員達の送還を――！」

「了解です！」

リンディの指示の下、エイミーが素早く行動に移る。
今は緊急事態、まだ気を緩めたり油断するには危険なのだ。

そして局員達の転送が済むと同時に、サーチャに異変が起こる。

「これは……艦長、サーチャーが乗っ取られました!」

「何ですって!?!」

——まるで全てを見透かしたようなタイミングでプレシアが語る。

「ふ、ふふふ。よく調べ上げたわね。そうよ、そこのお人形は私がアリシアを蘇らせる

までの間に慰みに使うだけの紛い物。何の価値もないわ」

「貴女は何という事を!」

「プレシア・テストロッサ!」

一児の母親としてリンディは憤りを隠せない。

いや、彼女だけでなくクロノも怒りが溢れでている。

「聞いていてフェイト? あなたの事よ。アリシアの記憶とその身体を折角与えても……駄目だった。役立たずでちっとも使えない人形、ただの偽物よ。だから、あなたはもういないわ」

その一言一句がフェイトの心を蝕む。

自分を否定する言葉が、大好きな人間から不必要だと言われる言葉が。

そして……。

「最後に良い事を教えてあげるわ、フェイト。あなたを作り出してからずーっとね、私はあなたが——大嫌いだったのよ!!」

プツリ。

フェイトの中で何かが音を立て崩れていく。
真っ白で何も映らない瞳。

存在の全否定、その言葉が全てであった。

「フェイトちゃん！」

「フェイト……」

立つ事も覚束なくなったフェイトを支え、その身を案じるのはとユーノ。

この場にいる全ての者がプレシアの振る舞いに怒りを覚えるのは十分すぎた。

「んな事はどうだっていいんだよ」

そんな中、一人の青年が問う。

「……何ですって？」

「別にお前の目的なんてどうでもいいんだよ。こっちはエメラルドを助けにきたんだからな」

「エメラルド……？ ああ、あの機械人形の事ね。あのゴミ屑ならその辺に転がってるわよ。私が欲したのはジュエルシードだけ、他のは何の役にも立たないのだから」

さも当然だという様に、プレシアはエメラルドへと視線を向ける。その先には物も言わず意識さえあるのか疑わしい姿で倒れている様であった。

「――――れ」

誰にも聞き取れない小声が零れる。
だがそれも束の間、次に紡がれた叫び声は全てに轟かした。

「バー――ロォ！！ てめえ何かにエメラルドがやられるかよ！ ぶつた斬ってやつからそこで顔でも洗って待ってやがれ！！！！」

これ以上話す事などないとばかりにけたたましい大声で怒鳴りつけると刃は素早くユーノを掴みこの場から立ち去ろうとする。
しかし、その前に一人の女性が立ち塞がった。

「まちな。アンタ、今なんていった！？」

刃の胸倉を掴み殺気を漲らせて怒りを抑えるアルフ。

「馬鹿野郎、戦いもせず逃げ出す奴なんか知るかよ」

バキィ！

その台詞が流れ出た瞬間、刃はアルフに殴り倒されていた。

「あんたにフェイトの何がわかる！？フェイトの事を何も知りもしないくせして、勝手な事いいやがって！！殺してやる！！」

もう何も考えられない。あるのは殺意の衝動のみ。

そんな周囲の事が何も映らなくなったアルフが刃を殺そうと拳を繰り出した時……。

「だったら何で戦わねえ？何の為に両手がついてる？魔法が使えんだ？」

一寸の揺るぎのない鋭い眼光でアルフを睨む刃。

口からは血が零れつつも、刃の眼光はアルフを金縛りにする。

（な、何だよコイツ？う……動けない）

本能的に動物は恐怖を悟る。

己より強い存在、そんな者を眼にした時は戸惑うものだ。

実際、刃は何の力を出した訳でもない。

ただ鋭い眼力がアルフを射ぬいただけなのだ。

しかし……それは百戦錬磨、屈強の戦士が放つ眼力。

思わずたじろぐのも無理からぬこと。

そして逆にアルフの胸倉を掴みかえし投げ返す。

「悔しかったら吠えてみる！！母親に向かって噛みついてみる！！わたしはあんたの娘だってな！！」

そしてチラリとフェイトに視線を向け――。

「――それが出来なきゃただの臆病者だ」

「うっ……」

そんな刃の気迫に押され、アルフも二の句が継げない。

「分かったらさっさと行くぞ！なのはにユーノ」

「「!？」」

「何呆けてやがんだよ！もうやる事は決まってるだろ？」

（そうだ。確かにフェイトちゃんの事は心配だけど……今すべき事はフェイトちゃんのお母さんを止める事！そして目を覚まさせて謝らせてあげるんだ！）

（確かに……このままプレシアを見過ごせばどんな暴走をするか分からない。この事件の発端は僕にも責任がある！なら、今出来る事はなのは達と力をあわせてこの事件を解決する事）

「――って、待ちたまえ！君達は勝手に行動して命令違反を起こすつもりか!？」

どんどん自分達を無視して目的が決定していく。

そんな流れに我に戻り、クロノが指示を飛ばそうと入り込もうとした。

だが……。

「そもそも、どうやって——!?
なっとななななな——」

なんと刃がクロノを片腕で担いで走りだしたのだ。

ドップラー効果の如くクロノの言葉尻を残して。

その両脇にはなのはとユーノが覚悟を決めた表情で共に駆け抜ける。

いや——なのはだけ一寸立ち止り……。

親友達に向けて親指を立てる。

まるで「そっちは頼んだよ!」と言う様に。

そして、それに応える少女達。

アリサもすずかも同様のポーズでなのはを見送る。

あんたはあんたの戦場で頑張るなさいと——。

この場は心配いらなよと——。

「艦長……良かったんですか?」

「もう遅いわ。それに……誰かがプレシアを止めなければならないのも事実。こちらはサポートに尽力するわよ」

エイミィとリンディが意図せぬ流れで動いていく事態に頭を悩ませつつも、現状に於ける効果的な行動へと移る。

(それにフェイトさんの事も放っておけないし)

さやかに支えられ意識の焦点がないフェイトを見詰める。

そうね……彼女に突き付けられた現実とは過酷なもの。まだ9歳の少女にはとても受け入れ難い現実でしょう。だけど、彼、刃君の言っていた事も分かる。黙っていても現実が変わらない。過酷な現実から目を背け逃げ出すか、向き合うかは彼女自身の力で導き出さな
いといけない。

だから刃くんは発破をかけたんでしようけど。流石に少し配慮が足りないわね。皆が皆、前向きに動ける訳じゃない。まして母親の愛情を一身に願っていた幼い少女の希望が崩れた状態でそれを望むのは酷というもの。ここから先は同年代の力が必要なのかしら？

そんな思考の渦にリンディが耽けていると……。

「庭園内に魔力反応多数!!」

「これは……拙いわね悠長な事を言ってられなくなってきたわ」

モニターのレーダーに映しだされる数々の魔力反応。

それは大小含めて60〜80前後、それもAクラス反応だった。

そして、そんなアースラ内部の混乱を余所にプレシアは……。

「もう茶番は終わりにしましょうか。私は、私達は管理局には裁かれないわ。そして旅立つの……忘れられた都、アルハザードへ」

（私達の旅は誰にも邪魔させない。例えその道に破滅しか残ってい

なくともね)

彼女はアリシアの眠るポットを背面に最終段階へと計画を発動する。

そう、アルハザードへと。

そして――。

――ヒュウウウ……。

プレシアの狂気に呼応するかのように庭園の中にも風が吹きおこる。まるで悲しい悲鳴の様に。

それは一体の機械、いや一人の女性の周囲にも縋るように吹き荒れていた。

第十六話 真実（後書き）

プレシアがフェイトに三行半を突き付けた時、なのはさんが無口だったのは態とです（笑）。
だってこの場面で止めてって叫ぶのに違和感があつて。

勝手に人様のプライベートな問題に土足で入ってきて「止めて」はないだろうと。

何被害者面してんのさ？みたいな感覚が生まれて好きじゃないんです、この台詞。

寧ろここは、「だまれ小僧」や「その根性叩き直してやる」系の口上の方がシックリきます。

ここまで踏み込んだんだから、こういう複雑な事情を覚悟の上で介入して欲しいなど。

でもってそれを刃に使ったもんだから……なのはさんは空気と化してしまったのです（笑）。

フェイトにしみれば不遇以外の何物でもないんですけど。

この辺は後に救済措置を施す予定となっています。

※前回、諸羽の台詞が見事に全て抜けていたので修正しておきます。済みません。素で見事に欠落してました（汗）。

第十七話 覚醒（前書き）

明かされたフェイトの真実。それはアリシアのクローンであり、プレシアの望まぬ娘と別れを告げられる。そして忘れられし都、エルハザードへの旅立ちによる死者蘇生秘術こそがプレシアの目的であった。そんな中、更に時の庭園で不穏な動きが見られ事態は風雲急を告げる事になる。

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第十七話 覚醒

— アースラ内部 —

鳴りやまぬ事のない警報。

それが艦の人員にこれから起こる災いを予感させる。
とてつもなく大きな災いを。

「中規模クラスの次元震ですって!?!」

「はい! ジュエルシードの発動も確認しました」

まずい……このままだとアースラも巻き込まれてしまう。

そう認識したリンディの指示は的確だった。

「振動防御、影響の薄い区域に移動を!」

このまままだ次元断層まで生じかねない。

そんな最悪の想定も考え、隊員達も非常時に備えられるように対応していく。

(クツ、プレシア・テストロッサ……)

モニターに映る高笑いをしたプレシア。

そんな彼女をリンディ達は苦渋の思いで睨んでいた。

S i d e ー 時の庭園 ー

ジュエルシードを強制発動させアルハザードへと旅立とうとする
プレシア。

そんな彼女が狂気の笑いを発していた時……。

静かに一つの奇跡が起ころうとしていた。
排除されたと思われた侵入者によって。

『さあ、目覚めよエメラルド！お前は我等の仲間なのだ！！』

ビビビ――。

（ここは……？いや、あの姿はダイヤモンドソルジャー。という事は過去の記憶か？）

それはエメラルドがピラミッド内で同胞の戦士と戦っていた頃の記憶。

かつてスパイとして記憶を改竄され、同胞によって蘇らされた記憶。

（何故こんな記憶が今になって……）

（――やっとリンクできましたか）

（！？）

ふいに乱入してくる第三者の存在。

ここは記憶の中だというのに……。

そんなエメラルドの動揺を余所に声は語りを止めない。

（おまえは？）

（はじめまして。私の名はリニス、かつてプレシアの使い魔だった者です）

(……)

黙って続きを促すエメラルド。

彼女の目的や現状の不可解な現象を解くには情報が必要だ。故に彼女は何も語らずに黙って耳を傾けているのである。

(貴女は聡明な方ですね。……私もあまり時間がありません。ですからこれから話す事は全て事実であり、本心でもあります)

一つ溜めを作る様に話しを区切る。

そして――。

(――どうかお願いします、フェイトを……プレシアを救ってはくれないでしょうか)

(……どういう意味なのか理解しかねる。ただ、プレシアの行動は止める。その為に、私ここにいるのだから)

そんな返答をするエメラルドに苦笑いをするしかなかった。

この人も薄々は感づいているのに、意地悪だなど。

(そうですね。まずは私の生い立ちから説明する必要があります――)

リニス語る生い立ち。

それは……。

自分がアリシアの飼っていた山猫から生み出された存在である事。アリシアが生きていた頃のプレシアの事。

幸せな家族関係が残っていた頃の関係。

淡々と事実を語るが、どこか寂しげな口調。

そこにはリニスにしか分からない心情が隠されていた。

そして……。

事故によるアリシアの死がプレシアを変貌させてしまった事。それが優しかった母親の面影を失くし研究に没頭させた原因。そして自分がフェイトとアルフの母親代わりとなっていた事。

全ては不運が重なった出来事で誰も悪い訳ではない。

だがプレシアの過度なフェイトへの嫉に反発した自分は契約を解消されてしまう。

残されたのは関係を修繕出来なかった後悔と無念。

（――つまりその未練が、契約を解消されても魂として残った訳か？）

何も語らず黙認するリニス。

（そして……その役目を私に託したい……か）

（はい。私は長らく誰にも気付かれる事なく、この時の庭園に存在し続けました。プレシアにもフェイトにもアルフにも。しかし――）

（――私だけは接触する事が出来た？）

（はい。おそらく貴女にも同様の経験があるのでは？形は違えど愛する者の存在や無念の思いを……）

（……）

ふと流れる追憶のビジョン。

『おまえ……なら……できるはず』

ピーー。

その言葉を最後に何かの電子音が流れ爆音が木霊する。

そして記憶の最後に映ったのはノイズに塗れた真っ暗な世界。

——彼女の最期を意味していたのだ。

（分かった。可能な限り力は貸す。しかし……プレシアは何かを覚悟していた）

（……やはり気付いていましたか）

エメラルドとリニス、共に形は違えど思いを共感したのかもしれない。
だからこれ以上の問答は無用とばかりに本題へと移り出す。

（おそらくプレシアの命は残りが少ないのでしょうか。ですが私のように悔いを残したまま別れさせたくはないのです。プレシアにとっても、フェイトにとっても）

（そうか……。なら一つだけ手はある）

(!?)

エメラルドの思わぬ言葉がリニスに希望を与える。

(私はおまえ達の問題に対して接点がない。だからどう足掻いても他人にすぎない。ならば――)

(?)

(――おまえが直接応えてあげるしか方法はない)

その台詞はリニスにとって信じ難いものであった。少なくとも彼女にとって自分の思いを託せる者、それだけが後悔を解き放つ手段であつたのだから。

それが自分自身の手で果たせるなら夢物語ともいえる出来事だ。

(……そんな事が可能なのですか?)

確かに私は使い魔、再契約を結べば蘇る事は可能だ。
だけど――目の前の女性は魔力のないアンドロイド。
疑心暗鬼が芽生えないと言えば嘘となる。

(例え肉体はなくとも生命エネルギーや思念体が存在していれば可能。おまえの場合はその魂が思念体に相当する)

まるで我々の科学力を舐めるなよと瞳に力を宿す。
嘗て地の民は地上に封じられたかぐやを解き放った事がある。
さやかの中に生命エネルギーを通し復活させたのだ。
一人の人間の中に二つの反する意志が存在する……。
それはまさに奇跡に相当する技術だと言えよう。

（ただ問題は――）

（なるほど……そういう事でしたら）

* * * * *

「――――来たわね。管理局、そしてその狗共が……」

自分のテリトリーに土足で侵入する異物達。

管理局うんめいというのが立ち塞がるのなら、再び私達の幸せを壊すというのなら……。

「今度こそ捻じ伏せて見せるわ」

己の余命とアリシアの命、全てが望まぬ形となってしまった。
だからこそ取り戻したい。

こんな過去に屈したくない。

理不尽な運命になど敗れたくはない。

（例えその終着地点が破滅だとしても……自分の未来は自分で描ききってみせるわ）

「私はプレシア・テストロッサ！偉大な大魔導師なのよ。運命になど屈してたまるものか！！」

防衛システムといえる傀儡兵が無数に守備を固めている。

そんな映像を見詰めプレシアは最後の賭けに出る。

複数のジュエルシードを一度に暴走させ、次元震を起こし――。

――次元断層を誘発させる。

次元の狭間……そこにこそ彼女が望むアルハザードへの道があるのだから。

プレシアがジュエルシードを暴走させている頃――。

その庭園の入り口に転送した刃達は傀儡兵と一戦を交えていた。

「しゃらくせええー！ー！！！！！！」

ズズン！！

居合の構えから放たれる一閃が一筋の道を作る。
それはまるでモーゼが海を割った伝説の様に。

いかにAクラスの魔導師に匹敵する力はあれど、
自分の意思を持たず命令に忠実な代物。
100の力は出せても120の力は出せない。

そんなガラクタでは彼の壁にもなりえなかった。
所詮は道具なのだから。

「お前等は――」

更に追い打ちをかけるように刃がクサナギを上段に構える。
すると彼の周囲に旋風が吹き荒れて……。

「引っこんでやがれっ！！！！！！」

そして彼が袈裟斬りの要領で振り抜くと同時、竜巻となって目の
敵を全て呑み込んだ。

ズシャン！！

「……、何て非常識な奴だ」

「いや、大体あんな感じだよ。刃さんは……」

「にやはは。何だか一人で全部片付けちゃったね」

この場には三人の魔導師が居るにも関わらず、たった一人の人間。それも魔導師でないただの剣士が一掃してしまったのだ。もはや呆れる他ないといった感じだろう。

そして―――。

所々の地形が変形し、抉り取られ、元の景色が面影もない。残されたのはバラバラに刻まれた傀儡兵の残骸のみ。

「何、ボケっとしてんだ。早く行くぞ！」

「あ……ああ」

確かにこの男の力は以前から垣間見ていた。だけど、直接共闘してみるとその異常さがよく分かる。戦闘センス・的確な状況判断能力・剣技、どれをとっても桁違いなのだ。その人柄から抜けている様に見えるが、戦場に於いて彼はその才能を発揮する。陳腐な言葉で括るなら「戦いの申し子」とでも呼ぶべきなのかもしれない。

クロノは改めてその力を見せつけられ刃の力を再認識する。

厄介な相手だとは思っていたが決して手に負えない相手だとは考えていなかったのだ。

（本当、何とも複雑な気持ちになるよ。これで命令違反などしない奴だったら文句ないんだが）

少しだけ心の中で羨望と苦笑を交え、クロノは刃達の後を追いかけて行った。

— Side out —

— 同時刻 —

———パシィ！

渴いた音が鳴り響く。
それは……。

「あんた、本当にこのままでいいの？」

「アリサちゃん……？」

「あんた！フェイトに何をするんだい」

「アルフさんは黙ってて！！」

「————ッグ！？」

渴いた音の正体、それはアリサがフェイトの頬を叩いたものであった。

そしてそれに慌てふためくすずか。

片や怒りの感情を露わにするアルフ。

刃やなのは達が『時の庭園』へと転送した後、アースラ内部ではフェイトを個室へと移していた。それは彼女の安否を気遣う配慮であつたが、彼女は虚ろな症状で意識もハッキリしていない。

その原因を辿れば無理からぬ事なのだが……、それを見過ごせない少女がいた。アリサ・バニングスその人である。彼女はなのはからフェイトの事を託された事は勿論、その性格からどこまでも真直ぐな少女であつた。羽に衣着せぬ物言いや年齢に見合わぬ挙動、どれもがどこか大人びている。だからこそ知っていたのかもしれない……。フェイトに必要なのは同情や甘やかしでない、事実を受け入れて乗り越える事だと。

——例えそれが過酷な行為と現実を伴おうとも。

「なのはや刃さん達が戦ってる姿を見ても俯いたままでいられる訳？ あんたはこんな処でイジケて燻ってるつもりなの！？」

アリサはフェイトの胸倉を掴み個室のモニターへと指を差す。

そこに映し出されている映像……それは刃となのはが戦闘を行っている場面であった。

「確かに私にはあんたの気持ちなんて分からない。父親だって母親だって健在なんだからね、でもね——

——それは私にも言える事なのよ。ううん、すずかやさやかさん、諸羽さんにだって同様の事がいえる。誰だってその人の全てを知っている訳じゃないんだから。私だって生きている以上は苦しみや悩みを抱えているわ。それを……あんたは全部分かるとでもいうの？」

（アリサちゃん……）

そう、月村すずかにだって持って生まれた業というものがある。

夜の一族という出自……。

それはとても辛くて苦しくて誰にも言えない真実。

だけどそこから逃げ出しては自分を否定する事にもなる。

だから強く心を持って現実を受け入れなければならない。

そもそも他者と比較して不幸を並べるのはおかしいのだ。

「あんた……いい加減に好き勝手いうのも」

これだけ一方的に捲し立てられてはアルフとて黙っていられない。しかし……。

「まだ分からないの！？あんたがそんなんだからこの子も立ち上がれないのよ！」

「どういう意味だい！？」

虚を突かれた台詞にアルフも意味が分からない。

「この子に……フェイトに今一番必要なのは、甘えさせる事じゃない！頬つぺたを叩いて目を覚まさせる事よ。誰だって目を背けたい事実はある……だけどそれを怖いと認める事と逃げる事はイコールじゃないのよ。現実と戦って生きていくのが人間なんだから！！」

感情の昂りがアリサを興奮させる。

ただ―――。

彼女の顔は涙を溢し相手を想う気持ちだけが滲み出ていた。

「あんた……」

「私もアリサに賛成ね」

「諸羽ちゃん……」

「知ってるかしら？こんな話があるの……『Stand and Fight』、立って……ただ戦う。だけどそれには百の言葉よりも重いたった一つの真実、おもいそんな言葉を残した人間がいたの。彼は何も教えない、ただ火をつける男だって言われていたわ」

ほら、と指を差す方向に映し出される映像。

ただ只管に戦場を駆ける刃やなのは達。
彼等が示す姿勢はまさにその言葉の通り。
戦士としての背中が見ている者の心を揺さぶりかける。

———お前はそこで何をしていると。
———そのままでもいいのかと。

「少なくとも貴女には戦場に出るだけの魔法（力）があるじゃない。
だったらこんな日陰で燻ってるよりも直接話したらいいじゃない。
御母さんと」

ピクリ

そして母親という単語に僅かにフェイトの精気が戻る。
どこまでも愛した母親。
どこまでも認めてほしかった母親。

最後は見捨てられてしまったけど、その気持ちに嘘はない。

「ねえフェイトちゃん。今は暗いトンネルの中かもしれない……だが
けどトンネルっていつかは抜けるんじゃないかな？……ね」

ふつふつとフェイトの気持ちが目覚めて行く。
それらの言葉が^{おもい}確実に心を響かせて。

それは……まだ自分には為すべき事があると。
何故自分はこんな処にいるのだと。

自然、瞳に光が増していく。
否、それだけでない———。

「——そうだった。まだ何も終わってないんだ……このまま何も
伝えないままサヨナラなんてできない」

「フェイト？」

まだ覚束ない足取りであるがハッキリと瞳には光がさしている。
そしてバルディッシュを掴むと……。

まるでフェイトの意を汲んだかのようにバルディッシュが起動を
始める。

「そっか……そうだね。お前もこのまま終わるのなんて嫌だね」

まだ伝えたい気持ちがある。

まだ自分は終わる事が出来ない。

まだ全力を出し切っていない。

そんな熱い気持ちでフェイトの心を満たし——。

「——だから、本当の自分を見付けなきゃ！」

そう彼女が覚悟を決めた時、一つの奇跡が生まれる。

主の魔力を吸い込みバルディッシュが新たに復活したのだ。

全てに決着を着ける為に主もデバイスも心が一つになったという
べきかもしれない。

「」「」「フェイト（ちゃん）！！」「」「」

「うん……心配かけてゴメン」

そんなフェイトの様子に心から喜ぶ女性達。
そして照れ臭さと申し訳なさを交えて応える少女。

ここに一人の少女が新しい覚悟の下、復活を見せていた。

第十七話 覚醒（後書き）

今回は元ネタの台詞があります。
はい、フェイトの叱咤激励に使った引用部分。

『Stand and Fight』・『トンネルっていつかは抜けるもの』・『頬つぺたを叩いて目を覚まさせる事よ』の部分ですね。これは「修羅の門」と「うしおとら」から使わせてもらいました。些か使いまわしが多すぎたので拙かったかな？という気持ちも強いですが、大好きな台詞なので敢えて使いました。両作品とも名言がとて多くて好きなんです（汗）。

さて本編の方についても補足を。

エメラルドの記憶は破壊された時迄ですが、新たに復活した際に地の民の技術が注ぎ込まれています。Y A I B Aの世界は死者蘇生が何気にあるんですよ……だからこの辺が悩みの種だったんですが、かぐやネタを参考にしました。確か原作では生命エネルギーを注ぎ込んでさやかやかの身体に入れましたからね（この際、龍の巫女だったからというツッコミ厳禁）。これは応用として魂も生命エネルギー同様に捉えたと（うゝん、苦しいな）。

素直に鬼丸が使った媒体を用いた復活ネタもあったんですけどね（苦笑）。

第十八話 それぞれの絆（前書き）

プレシアの暴走はエメラルドを打ちのめし、フェイトを絶望の淵へと追いやった。だがフェイトはアリサ達の言葉で己を取り戻し、再び母との接触を試みようとする決意を新たにす。そんな中、エメラルドも自身の記憶内でリニスという使い魔とリンクが繋がっていたのだが……

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第十八話 それぞれの絆

「エイミィ、どうやらフェイトさんも現地に赴いたようね。私もこれから次元震を抑えに出向きます。艦の方は任せるわ」

「了解。任せて下さい、艦長！」

所々の地面に穴が開いてその下が奈落の底にでも繋がっている…
…そんな感じのさせる不思議な黒い空間が無数に点在していた。

（あれって何かな？）

なのはが足元に注意しながらそんな意識を持っていた。

彼女は魔法の世界に足を踏み入れて日も浅い。

だから見る世界は新鮮に溢れているが知識がそれに追いついていない。

そんな彼女の意識を悟ったか、はたまた忘れていたのかクロノが注意を促す。

「その穴…黒い空間がある場所は気をつけて。虚数空間といってあらゆる魔法が一切発動しなくなるんだ。もしも落ちたら重力の底まで落下して二度と這い上がれなくなるよ！」

「——と言う訳で次の扉が見えてきたぜ！」

まるでクロノ忠告など意に介さないとばかりに只管に前しかみていない刃。

ただ心なしかその表情には薄らと焦りを漂わせていた。

（そうか……彼もあの女性の事が気になっているんだな）

焦りは足元を掬う危険もある。しかし、現実には時間がないのも確かだ。プレシアの暴走を止めないと次元断層が発生してこの世界が呑みこまれる危険があるんだからね。

「よし！じゃあ、室内に入ってからには二手に分かれて行動を取るぞ！」

「うん！」

「了解！」

なのはとユーノもここにきて己の役割を自覚する。
クロノはこの元凶の元を食い止める必要がある。
それならそのアシストは自分達の役目だと。

「よし。そうと決まりやあ——」

「——邪魔なもんは薙ぎ払ってやらあ！！」

ドカン！

言葉と同時に、一寸のズレもなく目前の扉は壁の役目を果たせず、侵入者の通行を許す事になる。その中央に円形の穴を開け風通しの良い風体を晒すが如く、中が丸見えになっているからだ。

「これは!？」

「傀儡兵の数が先よりも多い！」

「何を今更！それより、なのはとユーノは最上階にある駆動炉の封印を！僕と鉄はプレシアの下へ行って彼女を止めてく——」

ドドドドドッ!!!!!!

「なにチンタラやってんだ！」

刃の行動は迅速かつ的確だった。

己の視野に入った瞬間、躊躇なく目前の敵へ攻撃を仕掛けたのだから。

彼の剣から放たれる波動はその威力が大きく変動する。

山を貫き、海を割る。

おそらく刃が本気になれば霸王剣に勝るとも劣らない奇跡を見せてくれるだろう。

その力をどうして傀儡兵如きが止められようか。

最上階へ続く道を瞬く間に開いてしまったのだ。

「————る……って、まだ最後まで指示してないだろうに。君には呆れるよ、まったく。でも鉄の言う通りだ！なのは、ユーノ、君達は早く最上へ」

「なのは！ここはもう迷ってる場合じゃないよ」

「うん！刃さんもクロノ君も気をつけてね！！」

互いに心配する心がないと言えば嘘になる。

しかし此処まで来た彼等には一種の連帯感も生まれている。
言い換えれば強い絆というべきかもしれない。

そんな後ろを安心して任せられる信頼を持って彼等は別々の道を
突き進む。

S i d e ー プレシア ー

玉座の部屋から離れ、薄らと暗く岩盤が剥き出しになった洞窟の
ような場所にプレシアは佇んでいた。その手でアリシアの眠るポツ

ドを護るように抱き包みながら。

「さあ、ようやくアルハザードへの道が開くわ。永かった……本当に永かった、この26年間。アリシアを失ってから私は全てを失った。私にとってはアリシアこそが全てだったのだから」

アリシアの居ない世界など何の価値もない。全てが死に絶えた大地、太陽の光さえ遮る漆黒の闇、まさにこの世にあって地獄というものだった。

でも……それもこれでお終いよ。元々が足りない時間で足掻いた私の未練。

それなら――――。

（――――この命、賭けても決して悪い勝負じゃないわ。そう思わないかしら？ 管理局員さん）

（！？……どうやら気付いていたようね。プレシア・テストロッサ）

（ふふ、ここは私のテリトリーよ？ この地で起こる事なら大凡の情報は手に取る様に分かるのも当然じゃなくて？）

（それなら最早無駄な話し合いは不必要ね。時空管理局提督、アースラ艦長の名に於いて勧告します。これ以上無駄な抵抗は止めて大人しく投降して下さい）

（……次元震の方は貴女が抑え、現地に赴いた局員は私の逮捕と駆動炉の占拠。なるほど、確かに状況としてもう詰みといった処になるわね）

そこで一拍の間を置いてプレシアが止まる。
さもお手上げね、といったニュアンスで客観的事実を認めた。

しかし……。

（だから何だというの？こんな事で諦める位なら最初からアルハザードなど求めやしないわ。お生憎様、私はね往生際が物凄く悪いのよ。今更利口になんてなれないわ）

（どういう意味かしら？貴女も認めたように最早打つ手のない状況で何をしようと……）

（言葉どおりの意味よ。精々足掻かせてもらうわ、貴女方の手に掛かって諦める位なら私は自ら運命を決めるまで。運命にも管理局にも……何人にも裁かれるのは御免被りたいのよ）

（貴女程の人間らし——）

プツリ

これ以上の問答は必要ないとプレシアは念話の遮断を行った。
ここから先は譲れない意地と信念をぶつけるのみ。

「……随分と遅かったのね？」

そして待ち人を待っていたかのように背後に語りかける。

「そこまでだ！大人しく投降すれば悪い様にはしない」
「……」

「坊や、悪い事は言わないわ……大人しく家に帰って母親の御乳でも吸っていなさい。ここは貴方みたいな子供が来る処じゃなくてよ」

「なっ!?!……僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウン。アー
スラ攻撃及び、時空管理法違反で逮捕する!?!」

プレシアから吐かれた挑発に怒りを覚えつつも冷静に管理局員としての任務を遂行するクロノ。

「まだ分からないのかしら? 私が話したいのは後ろの男よ。貴方は
お呼びじゃないの、分かって?」

「ッ! 減らず口を……貴女が何と言おうと、ここで拘束する事に違
いはない。大人しく投降するのであれば悪いようにはしないが?」

「話はそれだけかしら?」

「なに!?!」

「悪いけどもうその話はウンザリなの。今更手を引けと言われて引
けると思ってるのかしら? そもそも降伏する位なら初めからジュー
エルシードなど求めていないわ。私は運命に逆らってるのよ……この
程度の逆境なんて承知の上でね」

彼女がそう呟くと掌から無数の光の玉が生じる。

そして光弾となって無差別にクロノ達へと襲い掛かったのだ。

（拙い!?!）

「チッ！」

ドウオンッ！！！！

まるで爆撃のように恐ろしい威力を秘めた攻撃が雨のように注がれる。

「—————今のは挨拶代わりよ。世間知らずの坊やには少しキツかったかしら？その姿勢は立派だけど、正論だけで世の中は渡って行けるほど世界は甘くないわ。私を止めたいのなら詰まらない話し合いでなく力づくで来るのね……」

（尤ももう一人の男は違うみたいだけど）

そして煙が晴れて視界が戻り始めた頃、そこに姿を現したのは……。

「ッ、君はいきなり何をするんだ！下手をしたら今ので致命傷を負っていたんだぞ！？」

「うるせえな。オレが防いでなきゃオマエだって無事に済まなかったんだぜ」

刃に脚元を掬われ転がっているクロノと無傷の刃だった。彼等の周囲を見ると結界らしきものが展開されている。

「……よく今の攻撃を無傷で凌げたわね」

（どうやらあの質量兵器で防いだみたいだけど、今のを無傷で防ぐとなると少々厄介になるわね。今以上の威力となるとSランク相当が必要になる……一体どうなってるのかしら？ あんな旧世代の代物で私の魔法を防ぐなんて）

そんなプレシアの思惑を余所にクロノは尚も問い詰める。

「何故だ？ 何故、貴女程の魔導師がこんな事をする。どんなに悲惨な過去があっても遣り直しはきかない、世界はいつだって自分が思った通りにいかないのは承知の筈だろう！？」

「……がれ」

「このままだと何の関係もない人間が大勢死ぬ事にだっ——」

『応えやがれ！！！！！！』

「——え？」

突如、大声で叫ぶ刃。

クロノとしても思わぬ介入に驚きを隠せない。

それも当然であろう。普通ならここで介入してくるなど流れを理解していても同然、空気読めよと返したくなるのだから。

急に意味の分からない大声を出されては対応にも苦慮するという

ものだ。

「……何の事かしら？」

「エメラルドはどうしたって言ってんだよ！オレはな……仲間が傷つけられたのを黙って見過ごすほど甘かねえぞ」

「エメラルド？……ああ、あのガラクタさんの事ね。今頃はどこかでスクラップにでもなってるんじゃない？愚かにも私の邪魔をしようとしたのだから当然だけど」

その顔が昏く歪む。

まるでゴミ以上の感情を持たない、だからどうしたのだと。

そして――――。

プツ

――その言葉と同時に何か切れる音がした。

— 大広間 —

刃とクロノがプレシアと対峙する一方で、なのはとユーノも駆動炉を目指していた。

迫り来る傀儡兵そのものは脅威ではない。

だが手数は確実に時間を奪い足止めを食らう。

「くそ！何て数なんだ」

「ユーノ君、今は弱音を吐いてる場合じゃないよ。私達だって二人で一緒に戦ってきたんだもん。やれば出来るよ！」

不思議となのはの言葉は気持ち奮い立たせ勇気を与えてくれる。刃さんもそうだけど傍で一緒に居るだけで何とかなると思わされる不思議な力。

「本当にズルイよ」

表情は苦笑いであるが決して不愉快な気持ちにはならない。

ユーノは湧きおこる気持ちを外に流し出すようにバインドを周囲の傀儡兵を捕縛する。

「何か言った？ユーノ君」

不思議そうな表情をするも油断なく声だけで疑問を投げかける。
しかし手元では阿吽の呼吸でなのはもそれに応じる。

ユーノが捕縛した傀儡兵を無数の光弾で撃墜していくのだから。

「何でもないよ！それより僕が結界で防御を固めるから、なのはは砲撃魔法でアイツ等をお願い」

「？……うん♪」

それぞれが得意とする分野で最高の力を発揮する。

長所と短所の補い、そんな連携が一つの力を二倍にも三倍にも増加させる。

なのはとユーノがやってる事はまさにそれであった。

（よし！この調子なら直ぐに——）

「——なのは！後ろ……」

「え！？」

ほんの一瞬の隙——。

僅かな油断——。

なのはとユーノが勢いに乗り敵を殲滅していた時に、撃破したと思っ
た敵が背後から攻撃をしてきたのだ。

戦場においては倒したと思われた敵が生きていた。止めを刺しきれな
かった等の理由で手痛い反撃を受ける事がある。

今の状況はまさにそれと酷似していた。
だが……。

ここで信じられない光景が映し出される。

「エ……エメラルドさん？」

「無事だったんですか！？」

なのはの窮地を救ったのは驚く事にエメラルドであった。
彼女はプレシアの言によると倒れた筈。
それが目の前でなのはを救っている。

二人の反応も詮なき事といえよう。

「私達の目的、プレシア・テストロッサを止める事。それを果たさ
ずして倒れる訳にはいかない」

「……うん！」

思わぬ味方の復帰になのはも力が入る。
それと同時に、なのはの魔法が生き残った傀儡兵を撃破した。

「本当にエメラルドさんなんですね！？良かった、皆心配してたんですよ」

「あ、でも今迄どうしてたんですか？」

仲間の生還を喜ぶも、アースラ内でプレシアが語った内容。

それはエメラルドの敗北だった。

それだけになるのは疑問は尤もな話でもある。

見た処、エメラルドの姿は以前のままで制服の汚れを除けば変化はない。

「今は時間がないから委細は省く。ただ、プレシアにここへ転送され彼女に敗北したのは事実。私も意識が戻ったのは先程だから……」

「「？」」

やや含みのある台詞に二人は引っ掛かるものを覚えた。

だがエメラルドの言う事も確かである。

今は時間がない、詳しい事情は後で幾らでも聞けるのだから。

「とりあえず私は刃の下に向かう。プレシアも必ずそこにいるのだから」

「え？でも、エメラルドさんはどうやって居場所を見付けるんですか？ここの内情に詳しくないと刃さん達を捜す事なんて……」

「それは問題ない。今の私には心強い味方がいる」

「？」

（心強い味方？何の事なのかな）

ふと疑問に感じる。ユーノ君の話に対してエメラルドさんは問題ないと言った。確かにエメラルドさんの目的はフェイトちゃんのお母さん、その事は分かる。でも、こんな複雑な室内でどうやって捜すんだろう。それに心強い味方って？ここには私とユーノ君、他はエメラルドさんしか居ないのに……。

「あ、あの――」

「来たか……」

なのはの言葉を遮る様にエメラルドが軽く呟いた瞬間、上空から舞い降りてくる二つの影があった。その影はなのは達にとっても見覚えのある形。

それがエメラルドとなのは達の前に静かに降り立った。

「――フェイトちゃん！」

「それにアルフも！」

そう、この場に現れたのはフェイトとアルフ。

彼女達もこの戦いに決着^{ケジメ}をつけるべく絶望の淵から這い上がって来たのだ。

「私も……私も、もう一度母さんと会いたいんだ。会って、話をし
て、それから……それから全てが始まるんだと思う」

「フェイトちゃん」

「だから例えどんな結末が待っていても、私は逃げない。自分からも真実からも……何よりその事を教えてくれた貴女達からも」

ハッキリとなのは達を見詰めフェイトは自分の決意を語った。
赤面して語るその表情に、申し訳なさど感謝を同居させながら。

「……」

（フェイト……立派に成長しましたね）

そして黙って見守るエメラルド。
否——。

——それを微笑ましく思う存在がもう一つあった。

（エメラルドさん、どうかお願いします。私にはやはりフェイトやアルフを見捨てて、消えて行く事は出来そうにありません）

（……分かった）

幼い少女の二人が握手を交わすその姿は麗しい友情を物語る。
まだ芽生え始めたばかりの小さな友情、しかし確実にそこには仄かな灯が宿っていた。

「フェイト」

「なのは」

（些か野暮になるが……仕方ない。あまり時間も掛けられない）
（申し訳ありません。こんな貧乏くじをお願いして）

エメラルドやリニスにしても流石に今の空気を壊す事はしたくなかった。

だが悠長に待って入れられないのも事実。

「——済まない。……そちらの少女と話しある。少し時間、貰えないか？」

「え、私……ですか？」

「エメラルドさん？」

（うわゝ折角良い雰囲気だったのに！あの女は空気も読めないのかね）

（まあまあ。確かにそれは同感だけど、エメラルドさんはそんな人じゃない筈だ）

「そうだ。手短かに話すが故あってお前に会わせたい人物がいる」

「私に……ですか？」

「その人物の名は——」

「——リニス。お前にとっても家族同然だった筈……違うか？」

「「!?!?」」

思いもしなかった名前に驚愕を受けるフェイト。
いや、彼女だけでなくアルフも同様の驚きを隠せなかった。

……え?何を言ったの、この人?……

……何?何の事、誰が会いたい?……

……マサカ?まさか?リニスって?……

頭が真っ白になる。

ありえない。

だってリニスは……。

全身を奔る電撃のような衝撃。

あまりに突然で聞き流せない名前。

最早思考が追いつかないフェイトを余所にエメラルドは尚も語りかける。

「もし……彼女がお前に会いたいと願っていると言ったら？」

「……!?」

「アンタ！それは一体どういう意味だよ!？」

最早言葉にすらならないフェイトと、恐ろしい程の真剣な眼差しでエメラルドに突っかかるアルフ。

彼女達にとって『リニス』という名はそれほど慕われ、頼られ、愛されていた。だからその名前を不用意にチラつかせる事は、逆鱗に触れるにも等しい行為であった。

（フェイト……それにアルフも。そこまで私の事を……）

決して触れる事も認知する事も出来ない存在。

そんな魂だけの存在となっても彼女は確かに残っていた。

愛するフェイトをアルフを、そして主であったプレシアの事を見捨てられずに。

「言葉通りの意味だ。リニスはお前達に会いたがっている。そして、プレシアにも」

「全然意味が通じないよ！そもそもリニスはもうこの世にいないんだ!! それをどうやってアタシ達に会いたいなんてデマを言えるんだい？」

「アルフ……」

そんな三人の駆け引きを傍で見ていたのはとユーノは当然の如く意味が分からない。

リニスという名前は初めて耳にするのだから無理もない事なのだが。

（ねえ、ユーノ君。リニス……さんって誰の事かな？）

（さあ？それは僕にも分からないよ。ただ……フェイト達の反応を見る限り、余程大切な人だったんじゃないかな？）

「信じる信じないはお前達の勝手。どうする？」

「どうって……そんなの会いたいに決まってるじゃないか！ねえ、フェイト」

「本当に……会えるんですか……？」

「一つ誤解がある。正確にはお前に憑依すると言った方が正しい」

「ひ……憑依？」

「はあ？……アンタ、何言ってるんだい。まさか、嘘だったなんて——」

「つ・ま・り・だ」

そこで話を纏めようとエメラルドも相手の制止を図る。
予想以上にテンパった行動の為、話の進行が上手く進まないのだから。

「お前達には見えないだろうし、認知する事も出来ない。だけど……確かにここにリニスは存在する。魂だけの存在として」

「え？」

「はあ？」

「残念ながらリニスは肉体が消失して蘇生させる事は出来ない。だがその魂が在るのなら生命エネルギーとして、器に入れる事が可能。もっと碎けて説明するなら、リニスの魂がフェイト……お前の肉体の中に精神として生き続ける。そこには明確な意思もあれば疎通も出来る。共に時間を共有し、存在を認識していける……そういう意味だ。もっとも信じる信じないはお前達の勝手。さあ、どうする？ 時間もあまりない。悪いが早急に決断して欲しい」

「……」

流れる刹那の時間。

そこにはどれだけの思考が流れ気持ち揺れていたのか？

それはフェイトとアルフのみ知る処であった。

そして――――。

「分かりました。もし貴女の言う事が本当だというのなら……リニスはと会わせて下さい」

後悔もないし覚悟も決めた。

そんな表情をされては、私も失敗は許されない。

クス

「?」

ほんの一瞬だけ女性としての面が強く出てしまう。

同じ女性として想い人がいるのがどれだけ幸せで強くもなれる。

その気持ちに共感してしまったが故に零れた笑み。

「よし。今から私がお前にリニスを憑依させる。他の者はここから下がっていきなさい」

その言葉に渋々とアルフもなのは達も場所まで引き下がる。従ってエメラルドの前に居るのはフェイトのみ。

「では、いくぞ」

「ッ、はい!」

スッとエメラルドの瞳が閉じる。そして彼女の身体から螺旋の光がフェイトと繋がり――

「これは!?!」

『進路補助シールド……固定、魂魄転送』

——まるで機械のような音声を発し、彼女から一つの姿が光とな
って弾け飛ぶ。エメラルド

（まさか！？……本当にリニスなの？）

光となって自分に向かってくる姿、それは……。
忘れる事の出来ない懐かしい記憶と共に甦る、あの家族の顔だっ
た。

そして——光はフェイトを包み込んだ。

ズアッ！！

「あれは！？」

アルフにとっても見覚えのある顔。

そう！リニスの顔を司った光が螺旋の回路を辿りフェイトに注が
れたのだ。

「アルフさん？」

「アルフ？」

……

.....

光の柱が収まり、その場に静かに佇むフェイト。
果たしてエメラルドの秘術は成功したのか？

そんな心配と仄かな期待を秘め、観客は固唾を飲んでフェイトを見守っていると。

「フェイト？」

恐る恐るアルフが身を乗り出す。

主の身も成否も全てが一番気になっているのは、間違いなく彼女だろう。

そんなアルフの心配を余所に返って来た声は……。

『久しぶりですね。アルフ』

「!?!?……まさかその声は、リ、リニス？」

ニッコリと聖母の様な微笑みをするフェイト。
紛れもなくリニスの声と気配を漂わせていた者が存在していたのである。

『今まで良く頑張ってフェイトを支えてくれましたね、アルフ』

「! !」

間違いない! リニスだ。

本物の……あたし達が知っているリニス。

アルフがそう確信した後に知らず流れる涙。
そして……。

「リ、リニス、リニス、リニス! うわあああああー」

……アルフの泣き声がどこまでも響き渡った。

第十八話 それぞれの絆（後書き）

これで見事（？）、復活を果たしたりニス。彼女はあくまで精神的な者としてフェイトの中に共存する事になります。時としてフェイトの身体を借り表にも出ますが、あくまで心の支柱としての役割になっています。そして母親となり姉ともなるべき存在です、ええ。

で、暴露ネタとして幾つかあったルート。

先ず一つがユニゾンデバイスとしての復活。これだと身体も得て自由に動けるのですが、エメラルドは魔導師でないのでシックリこないんです。そもそも刃達に魔法の力を使わせない設定で始めましたから、この作品。

そして二つ目。これは完璧な蘇生をして復活させる案でした。勿論使い魔でないので魔力も必要なしという何の束縛もなし。ただこれをやると管理局、クロノ達が黙ってないでしょう。アニメでもあれだけ禁句扱いしてたし。よって鬼丸が使った媒体復活は却下しました。

本当はプレシア戦まで持って行きたかったのに意外と延びてしまいました。

第十九話 プレシア・テストロッサ（前書き）

リニス、嘗てのプレシアの使い魔はエメラルドの秘術によってフェイトと共に在る事になる。それはフェイトのみならずアルフにとっても家族の絆を取り戻す事となった。

一方、刃とクロノはプレシアと対峙していたのだが……

魔法少女リリカルなのは〜剣豪伝説、始まります。

第十九話 プレシア・テストロッサ

——ポトリ。

赤色の何かが滴る。

「……なに!？」

エメラルドの事を詰られ激昂した刃が思わず立ち止まる。それは彼が行動を起こす前に意外な光景が目に見え込んできたからだ。

目の前の女性が見せるその姿に。

「がっ……」

苦しそうに咽ながら流れる大量の血。
それがプレシアの足元を染めてゆく。

（ふ……ふふふふ、いよいよね。自分の身体のことだもの、良く分かるわ。騙し騙し薬を飲んで永らえてきたこの命、それもここまで。あれだけの魔法を短期間に使えば嫌でも己の首を絞める事になるわ）

プレシアは自分の吐血を見詰め死期を悟る。
結局……ここまでの命だったのだと。

「オマエ……もしかして病を患ってたのか？」

「ふん。そうよ、でもそれが何？まさか今更勝負に手心でも加えようって訳じゃないでしょうね？」

刃に威嚇するような視線を突き付ける。

大魔導師たる私に情けなんて物は最大の侮辱にあたるのよ、と言わんばかりの瞳を。

「ま、待ってくれ。鉄にプレシア・テストロッサ！貴女がここで死んだら残された娘はどうなる？フェイトは……それに貴女だって時空管理本局の医療技術を使えば何とかなるかもしれないんだぞ」

「……」

「……」

クロノの任務はプレシアを殺す事ではない。ジュエルシードを確保し暴走を抑える事。そして彼女の身柄を確保し、然るべき刑を持って罪を償って貰う事だ。勿論彼自身にもプレシアの身を案じる心はあるし、フェイトの事だって気にはなる。

少なくとも現状ではプレシアの敗北は明らかだ。

だからこれ以上の戦闘は無意味。

そう言外に物語っているのだ。

それに対し刃とプレシアもクロノの意図する処は掴めている。
しかし――。

「そりゃあ無理だぜ」

「あら？ 良く分かってるじゃない」

――無常にも返答は否。

「なっ！？ これ以上の戦闘行為は無駄だというのが分からない訳じゃないだろう？」

「そういう問題じゃねえな。これはアイツの意地なんだよ」

「そうね。それにプライドもあるわ。私を止めたいのなら――」

――殺す事ね」

ここでクロノは己の未熟さを露呈する。

確かにクロノの立場を考慮すれば彼の行動は間違っていない。
寧ろ当然の行為で被害も収まる最良の手段である。

だが理解していないのだ。
公的な立場の人間と私的な立場の人間の違いを。

クロノが執務官という公的な立場ならプレシアや刃は一個人と言う私的な立場。

そもそも土台となる行動理念が異なってきたのである。

彼等は何処までも我を貫ける自由な身。それ故に時として周りを顧みず信念を貫き通せるのだ。いかなる人間にも規則にも屈しない……それは横暴とも身勝手とも取れるエゴイズムでもある。しかし、それだけにシンプルで想いも強い。

片や執務官等の組織に準ずる人間は一人の身勝手な行動は許されない。遵守すべき規則があり、集団行動を円滑に進めるにはルールを決めねばならないのだ。そしてクロノは管理局の法に則った行動理念を選ぶ他ない。

当然の如くその二つは相反する傾向が強い。

だから集団という数の暴力で個を抑えるのが世の常である。

元来、組織が個を抑え維持していく事で安定がはかれるのだから。

クロノはその若さ故に己の未熟さを知らなかった。

どこまでも自分が準ずる組織が正しいと……間違っていないのだと。

そしてそれに従う事こそが幸せなのだ。

一元的な見方であれば決して間違っているとは言いが、時として己の死すら問わない人間がいる。彼等のように自分の命より大切な信念がある人間は、クロノの理解の範疇を超えているといっても過言ではなかった。

（やはり口で説明しても分かって貰えないようだな）

グッ。

クロノが己のデバイスを掴む手に力を入れる。

『――Stinger』

執務官としての任務を遂行する。

だが、そう決断した時は既に遅かった。

「随分と遅いのね」

（なっ――！？）

クロノが放つ魔法より先にプレシアの砲撃魔法が紫電となって牙をむいたのである。

「――があ――！」

咄嗟にプロテクションを展開する。

もし間に合わなければ即リタイアという瀬戸際での英断であった。

しかし、それでも完全には防ぎきれない。

伊達にSSランクの魔導師が放った砲撃魔法ではないのだろう、クロノの防護服が随所で焼け焦げている。

（何て威力なんだ！これで本当に病に冒されているというのか？信じられない）

「これで理解して貰えたかしら？現場で一々迷っていたり、判断を誤れば致命的なミスとなって自分に跳ね返って来るものよ。少なく

とも私は自分の行動に躊躇いも迷いもない。坊やが勝手に話し合いを持ちだすのは構わないけど、それで相手が応じるかは別問題。もう少し彼我の力量を判断して対応する事ね」

そこには圧倒的な強者としてのプレシアが存在した。

この場合に於ける最良の判断、それは彼女の意思をへし折る事。つまりハッキリと敗北を突き付ける事こそが彼女を止める手段だったのである。

「クッ……」

（だが何故追撃の手を緩める！？？言ってる事とやってる事が矛盾してるじゃないか）

「さて、力の差が理解して貰えた処で本命に移りましょうか」

「なに？」

「その黒髪の男よ。私にとっての脅威は彼のみ、だから全力を持つってお相手するわ」

「そうこなくっちゃな」

雌雄を決するに相応しい相手、互いがそれを認めたのか自然と魔女はデバイスを、サムライは剣を構え対峙する。

「クロノ、悪いが少し下がってろ。言っとくけど、この戦いに水を

差すんじゃないぞ？もし邪魔をしたら、オレはオマエを許さねえからな」

「馬鹿な！？今は個人的な事を優先してる場合じゃないんだぞ！！そんな事をしてる間にも次元震が大きくなって次元断層が起きたらどうするつもりだ」

非難の眼差しでクロノは刃を睨む。

そう、クロノは確かに間違っていない。

しかし人間の導き出す答えは算数とは違うのだ。

全てが合理的な結末ばかりではない。

ただ……。

少なくとも目前の二人は理屈でなく本能で分かり合っていた。

——自分が為すべき事。

——自分が最後の相手を選ぶ事。

ほんの些細な詰まらない意地。

そういった個人の機微をクロノは読み違えていたのである。

「名前を聞かせて貰ってもいいかしら？」

「刃、鉄刃。サムライだ！」

「私はプレシア。プレシア・テストロッサ、嘗ては大魔導師と呼ばれた者よ」

互いに認め合ったからこそ名乗り合う。

そしてこれ以上ない宣戦布告でもあった。

「じゃあ行くわよ、剣士さん」

「なに！？」

プレシアが宣戦布告を告げデバイスを構えた直後、無数の光の玉が刃を取り囲むように現れる。その一つ一つには凄まじい威力の電気が帯びている。

もしこんな数が一斉に放出されたら防ぐ術はないだろう。そう思わせる程の数であったのだ。

「私は偉大なる大魔導師、プレシア・テストロッサ！どこの馬の骨ともしれぬ輩に私の夢を邪魔させやしないわ。——立ち塞がるなら瓦礫の山となって埋もれるがいい！！！！」

ドオンッ！ドオンッ！ドオンッ！

容赦なく降り注がれる光の玉が標的へと襲いかかる。
そこには逃げ場などなく、あらゆる角度からの同時攻撃。

常識で考えるなら助かる筈もない結論。
もう勝敗はこれで決したのだ。

そう、常識で語るならば。

「ずりゃあ!!」

突然の大声と共に煙幕の晴れぬ中、一刃がプレシアに飛来する。

「やっぱりね。これでお陀仏する程、脆くはないと思っていたわ」

対象の男を見るとバリアの様な障壁が覆われている。

おそらくアレで凌いだのだろう。

故にその表情は礼でも言いたいかのような喜悦に満ちてくる。
まるで私の期待に応えてくれて有難うと。

「―――だけど、それ位の攻撃が当たると思ってた?」

そう呟いた後、三日月の波動は彼女の足元を通り抜けた。
彼女の身が宙へと舞い上がっているからだ。

「甘いぜ! 空に居れば攻撃が届かないと思ってんのか! ?」

「! ?」

——キーン！

光のオーラに覆われた青年が魔女と交錯する。

「ツッ！……やるわね。でもあの攻撃でカスリ傷程度だなんて、少しショックだわ」

（オマケに私の障壁を軽々破るか……本当、反則よ）

プレシアは右腕に手傷を負っていた。

先の一瞬、刃が交錯した時に一太刀を浴びせていたのである。通常なら破る事の出来ない障壁を貫いて。

クサナギ——別名、あまのむらぐものつるぎ天叢雲剣。

それは「日本書記」や「古事記」に由来される神話の冠を名する剣。

そこには幾多の逸話が含まれている。

言ってみれば霸王剣と比較しても遜色のない神格があるだろう。そんな力を刃は振るっているのである。

プレシアではないが反則だと思ふのも仕方ないのかもしれない。

——！！

――！！

――！！

（――クロノ！！どうしたの？返事をしなさい）

「……あ」

脳内に響き渡る声。

現場の戦闘に見惚れていたクロノがそれで我に返る。

あまりにも気の抜けた一声と共に。

（艦長！？済みません、一体どうしたんですか？）

（次元震の方は私が抑えています。貴方は早くプレシアを抑えなさい）

（……はい。それは分かっているんですが……）

（何かあったの？）

（プレシアの方はおそらく問題ありません。鉄が今、彼女と交戦中なので）

（そう。でもあまり悠長な事も言ってられないわ）

（彼女には降伏の意志はありません。遺憾ですが残されたのは実力行為のみです。もう少し待ってくださいませんか？）

（プレシア程の人間が己の現状に気付かない筈がありません。……

つまり、敗北は覚悟の上で最後まで抵抗すると)

(はい。残念ながら)

(分かりました。でもそちらに、フェイトさん達も向かっているわ。出来る限り彼女を傷つけないでその身の拘束を!)

(了解しました)

リンディとの念話を終えたクロノは目前の戦闘領域へと視線を移す。

本当に傷を少なくしてこの決着が着くのかという一抹の不安を抱えながら。

「ヘッ!やるじゃねえか。それならコイツはどうだ!？」

突きの構えから放たれた火炎の塊。

まるで業火の炎とでもいうべき火の玉は直線上の全てを焼き尽くす。

「甘くみないで欲しいわね。そんな単純な攻撃で私を倒せると思って?」

しかしプレシアもその反応は素早い。

即座に足元に魔法陣を展開すると、彼女はその場所から空間転移を図ったのだ。

（アイツは火の性質まで扱えるのか!?!）

——シン……。

その姿を確認出来るのは刃とクロノ。
そして束の間の静寂が場を支配する。

（……どこだ?どこから現れる）

己の神経を研ぎ澄まし相手の気配を探る。
例えばどこに転移しようと攻撃の一瞬だけは気配が生じるからだ。

（無心だ。こんな時こそ心を無にするんだ）

そして一瞬の気配を察した時こそ攻撃の機会。
そう判断した刃からは全ての闘気が消え失せ、自然体となっ
ていく。

まるで海面の波が消え、凪になったような静けさだけ残して。

「……」

（何だ?鉄のあの感じは……まるで空気みたいな、何の気配も敵意

も感じられない。まるで僕の存在感だけが浮き彫りにされた空間じゃないか)

クロノが何とも言えぬプレッシャーを感じ、その身から一滴の汗を滴らせた瞬間。

ポト……

まるでその音が合図となったかのように。

「これでお終いよ!! 私の前に立った事を悔いて散りなさい!」

上空から雷が降り落とされたのだ。

それはまるでフェイトのサンダーレイジの様な広域攻撃魔法であり、それでいて決定的に違うその威力。

まさに大魔導師たる名に恥じない桁違いの魔法だった。

S i d e ー 鉄刃 ー

ポト……

その音が合図となって明確な敵意を察知する。

（来やがったな！）

「雷はオマエだけの専売特許じゃねえんだぜ！！」

——喰らえ、これが最後の一撃だ！！」

嘗ての雷神剣、雷神が宿りしその力。

その再現とも呼ぶに相応しい雷光が天空に向かって柱をたてる！

まさに同時。

プレシアと刃、二人の攻撃がここで重なったのである。

— Side out —

「――散りなさい！」

「――最後の一撃だ――！」

――カッ！！！！

雷と雷。

相殺する様にぶつかり合った時、空間全体が光に包まれる。
それは真っ白で何も移さない光の世界。

「はあああああっ!!」

（ふざけるのも大概にしろ!こんな狭い空間で広範囲域の魔法を使用したらどうなるか分からない訳がないだろうが。オマケに鉄まで似たような攻撃を放つなんて……まるで悪夢でも見てるみたいだよ!）

辺りを包む轟音と余波、それから身を護る為にクロノはシールドを展開する。

そして光の世界だけとなった一瞬の時間が崩れ……。

薄らと光が戻っていく。

まるで雨雲の中から差す光のように。

「……あの影は、鉄とプレシアか!?!」

（一体この決着はどうなったんだ?くそ、まさか共倒れとかいうんじゃないだろうな）

周囲から好戦的な気配は消え刃とプレシアの姿が薄らと現れる。
尤もその影からは勝利者がどちらかなのかまでは予想がつかないが。

ゴフッ――。

プレシアがガックリと膝を突くと、大量の血が口か零れ出る。最早これ以上の戦闘は不可能。

刃とプレシア双方の違いを見るとそれが一目瞭然であった。

「プレシア」

「ふ、ふふ、ここ…まで…みた…いね」

プレシアは口から血を滴らせて尚、笑う。

良かった。本当に良かった、私の最期がこれで。この男が相手でもうこれで思い残す事は何もないわ。名誉ある死、死に際だったけど病でも管理局でもない、自分が全力を振るって且つ勝てない相手。これ以上の誉はないもの。

「札を言わせて貰うわ。これで私は戦って逝ける」

「ああ、オマエは間違いなく強かったぜ！」

結局両者の勝敗を別けたのはプレシアの病。無理な魔力行使のツケがここに来て限界を超えてしまい、満足に動けなくなったからだ。

これで全てが終わった。

その場の人間がそう意識した瞬間。

「――母さん!!」

フェイトが姿を見せたのだ。

「……エメラルド!」

「済まない。心配かけた」

そこにはフェイトだけでなく、アルフとエメラルドの姿もある。

「皆!無事だったか。なのはは?」

「なのはとユーノなら駆動炉の方を制圧してる筈だよ」

なのは達はフェイト達と合流を果たした後、それぞれの仕事へと赴いた。

だからフェイトはプレシアの前へと姿を現したのである。

「……消えなさい。それとも無様な私の姿を嗤いにでも来たの?」

「母さん。私は貴女に言いたい事があって此処に来ました」

「……」

フェイトの真剣な眼差しにプレシアも黙って耳を傾ける。
いや、彼女達だけでなく周囲に居る全ての人間も。

「……私は……アリシア・テストロッサじゃありません」

（フェイト……）

（……）

彼女と特に関係の深いリニスとアルフ。
彼女達の心境も複雑であった。

「私は……貴女にとってただの人形なのかもしれません——」

だがそれでも揺るがない気持ち。
それが告げられる。

「——だけど、私は……フェイト・テストロッサは貴女に生みだ
して貰って、育てて貰った貴女の娘です！」

例えどんな生まれであろうと！

例えどんなに嫌われていようと！

決して覆る事のない事実。

フェイトにとっても、プレシアにとっても。

どんなに足掻こうと忘れようとしても……ここから始めなければ進まない。

そんな想いを込めた一言が紡がれた。

『プレシア。私からも話があります』

「!?!?……まさか、その声は……」

『はい。かつては貴女の使い魔だった……リニスです』

「……そう。それで？」

ここに至ってプレシアは何が起きても驚かなかった。
いや、もう覚悟は決まっていたのである。

どんな言葉が投げられても……。
どんな人間が現れても……。

（私にはアリシアが全て。それが叶わないなら残された願いは一つだけ）

『どうかお願いします。これ以上、フェイトを……そしてアリシアを悲しませないで下さい』

「……私に投降しろと？」

『……はい。私にとっても貴女は生みだしてくれた母親に等しい存在です。嘗ての……あの優しかった頃の貴女に戻って頂きたいので

す
』

「……ぷ、くくく、ふははははー！」

『プレシア？』

「まったく……とんだ茶番劇ね。聞こえているんでしょう？ フェイト」

「……はい」

「まさか今更貴女を娘と呼んで欲しいと？ あれだけ否定しても娘である？」

「……貴女が、それを望むのなら」

フェイトにとっての真実。

それは―――。

「私が貴女の娘だからじゃない、貴女が私の母さんだからです」

母にどう思われているかではない。

自分が母をどう思っているのか。

そして、まだ終わっていない現実。

誤魔化しや目を逸らすだけでは何も始まらない。
だから勇気を出して一步を踏み出した。

「なら、これが私の返事よ。私はプレシア・テストロッサ！例えばどんな結末を迎え、自分の望みが叶わなくても、自分が歩んできた道にも汚した手にも、後悔などありはしないわ！！！！！」

そう叫ぶと彼女は足元に魔法陣を展開させ地盤を崩壊させる。

「母さん！？」

どんなに否定され是正されようと、己の突き進んだ道は変えない。ならば敗者が辿る道は唯一つ。

「さようなら」

無情とも思われる一言。

プレシアは最後にその一言を残しその身を虚数空間へと委ねたのである。

そして……。

アリシアのポッドも虚数空間へと消えていく。
まるで最愛の母親を追いかけるように……。

第十九話 プレシア・テスタロッサ（後書き）

こんなのプレシアじゃねえよ！的な扱いです、はい。

でも私としてはアニメの展開を見るとこれも有りだと思うのです。というのもアニメはあくまで高町なのはやフェイト視線。プレシア視線ではないからです。子供を虐待して犯罪を犯す狂気の塊……それは否定しませんが、彼女も愛ゆえに狂った事を考えると行動理念も納得出来てしまつて。それ故に狂気の一面を出すより、己の暴挙を認めつつも愛に殉じた女性として扱いたかった。

これは例ですが『一子相伝の暗殺拳』を覚えた主人公が登場する作品。これに「退かぬ・媚びぬ・省みぬ」発言をした帝王がいて、コイツも許されない外道なんですが、「愛ゆえに人は苦しまねばならぬ・愛ゆえに人は悲しまねばならぬ」と大言を拔かします。

そう、私としてはプレシアが彼と重なってしまつて。

娘を愛するが故に暴走したプレシア、なぐんか帝王と重なると思いません？

どちらも根底にあるのは愛した人を失った事。そして愛を拒否した人間と、取り戻そうとした違いはあれど、最後に求めたのは最愛の人だったのだから。

だからプレシアは生き延びるのではなく、己が認めた好敵手と戦った後に散らせました。

※因みにクサナギの件は私の造作で原作と何ら関係がありません。

最終話 帰郷（前書き）

母と子。プレシアとフェイトは悲しい離別をもって決着がつけられた。また今回の事件は少女達と青年にとっても大きな影響を与える事になる。ここに一つの物語が終わりを告げようとしていた……

魔法少女リリカルなのはく剣豪伝説、始まります。

最終話 帰郷

「どうしても行ってしまうのかい？」

「私達の事なら気にしないでいいのよ？」

——ここは『翠屋』、高町なのはの両親が開く喫茶店。
そこにある一団が最後の挨拶を済まして旅立とうとしていた。

「お主達には世話になったの」

「まあ、元々オレ達は武者修行の途中だったしな♪」

「済みません。士郎さん、桃子さん……兄はああいう性格なもので誰かが傍にいないと本当に鉄砲玉みたいに戻ってこなくて。今回だって偶然アリサから連絡があったから見付かったものですし」

「刃だけでなく私達までお世話になって……本当に有難う御座いました」

いわずもがな刃達御一行である。彼等は此度の問題が一応は解決した事により、この地を去ろうとしていたのだ。

「でも！折角仲良くなれたのに……」

「そうだな。鉄ともこれからもっと仲良くなれると思ってたんだが

……」

「そんなに気にするなって。別に今生の別れて訳でもねーだろう？」

「そりゃあそうだろうけど……あたし達としてもさ、賑やかで愉しかったからね。なんだか寂しく感じるんだよ」

「な〜に、問題なかろう。どうせ刃の家は知れ渡っておるんじゃろ？ だったら連絡は何時でも取れるわい」

そう締め括る武蔵の一言に高町家の人間もそれ以上の追求は出来なくなる。事実、刃の実家である所在地は掴めているのだ。万が一の際や逢いたくなった時には連絡手段があるし、決して遊びにいけない距離でもない。

「——てっ訳だ。オマエ等も元気だな！」

「鉄達もな」

「なのは？」

「うん……」

（考えてみたら私、刃さん達と知り合って殆ど時間が経ってないんだな。なんか遠い昔から付き合いがあったみたいに錯覚してたけど）

ふと脳裏に浮かぶジュエルシードを巡る数々の戦い。初めは何も知らずに巻き込まれる形だったけど、自分の気持ちで何とかしたいと決意した事。そこからはフェイトちゃんや管理局の皆との出会い、

時の庭園での決着……何れも今迄の日常を大きく覆す事だったし、私も前みたいには戻れない。だって――――。

— t h r e e d a y s a g o —

「フェイトちゃん……これからどうなっちゃうのかな？」

「今回の事件は一步間違えれば大惨事に繋がりがねなかった事だ。だから今は、アルフと一緒に護送室で隔離している。彼女は重要参考人でもあるからね」

「でも形式上ただけなんでしょ？」

「ふえ？」

ここで助け舟を出す様に諸羽が口を挟む。

「少なくとも彼女は母親の目的を知っていた訳じゃないもの、何も知らされずただジュエルシードを集めていた。情状酌量の余地は充分にあるんじゃないかしら？」

「そうね。どうせクロノ達の事だから罪を重くするなんて考え難いもん。勿論フェイト達の協力があるかどうかに関係してくるだろうけど」

「諸羽さん、アリサちゃん。それ本当？」

「だから執務官さんに伺って見れば良いのよ」

そこで少女達の視線がクロノへと集まる。

「うっ……」

なんとも居た堪れなくなるのは気のせいだろうか？クロノは悪い事をした訳でもないのに、罪悪に苛まれるように冷や汗を流す。

「ああ、そうだ。彼女が協力姿勢で臨むなら、その特殊な生い立ちと事情もあって充分に罪を軽くする余地はある。裁判の手続きなどは踏んで貰うが、保護観察という形には持っていく自信があるよ」

お手上げと言わんばかりに固い口から実情を述べ出す。

「本当!？」

「良かったね、なのはちゃん」

「うん!」

「ところで……鉄がどこにいるか知らないか？」

「刃？刃なら武蔵やエメラルドと一緒にリンディさんの処に呼ばれたらしいわよ」

「艦長の処に？」

「うん。何でも聞きたい事があるとかで……」

そのクロノの問いにさやかとユーノが返事をする。

どうやらなのは達の方はフェイトの方に関心がいつているらしく、
無邪気に喜びを分かち合っているようだ。

（気になるな……様子でも見に行くか）

* * * * *

「つまり貴女の力がリニスさんの復活に一役買ったと……？」

「詳しい事は言えない。しかし、わたしの力で彼女をフェイトに宿したのは事実」

「……その方法は？」

「教えられるない」

（やっぱりそう応えるか。本来ならゴリ押しでも知りたい情報なんだけど）

両手を握りその額に押し当てて苦悩を呈する。

どこことなく拝み倒す姿にも似ていると言えない。

そんな様子でチラリとエメラルドを見るが……。

「いくら頼んでも無理な事は無理だ」

「はあ……」

「諦めるんじゃない。お主の立場は理解できるが、直接の上下関係もない上に協力者として尽力した者を咎める事はできない？」

（確かにレアスキルとして報告すれば問題ないけど、彼女の力は管理局としては気になるのよね。出来れば刃君も含めてこちらに引き込めないかしら？）

「それよりあの子供達はどうなるんじゃない？これだけの問題に加担していたとなると重罪……もしくは終身刑相当かの？」

「それについては心配いりません。確かに通常なら仰る通りの刑に比するのですが、今回は特殊な事情ですし、フェイトさんも大人しく私達の質問に応えてくれます。刑を軽くするのに問題はないでしょう」

「ふうん。じゃあ、後は問題ねえんだな？なら、オレ達もそろそろ戻るか」

「確かにさやか殿達とも逢えたしの。一度ここらで顔出しでもしようか」

「わたしも一度、ボスに報告する必要がある」

リンディの期待を裏切るように刃達は帰還を口にする。というより管理局に関心が薄いのか深く入ってこうようとしなない。

そんな刃達を惜しむようにリンディは縋ってみた。

「ねえ、相談なんだけど……刃君達とこうして知り合えたのも縁だと思うの。それで提案なんだけど、これからも私達と付き合っていないかしら？」

ここで管理局に勤めないか？と言わない処がリンディの最大の譲歩でもあった。どうせ答えは聞かずとも知れている。それなら突っ込んだ領域には口を挟まず今迄の関係を構築して、何れは親密な関係を築ければ良し。

このまま手放すのはあまりにも惜しい人材だったのである。

「そりゃあ構わないけどよ……オレ達は管理局とかに入る気はねえぞ？」

「あ、それは問題ないの。別に民間協力者として仲良く出来ればいいんだから。なのはさん達も同じだし」

「だが何れにしても一度、地上に戻る必要はある」

「そうね。それに関しても問題ないわ。あと数日もすればなのはさんと一緒に、送り届けてあげます」

「ところで……」

「なにか？」

「扉の前で聞き耳を立ててる奴等は何で入ってこないんだ？」

親指を扉の方に向けながら問いかける刃。

実はかなり前から聞き耳立てる存在に気付いていたのである。

「まさか……クロノ、そこにいるの？」

と、同時に扉が開き。

「済みません、艦長」

少し申し訳なさそうに語るクロノが現れる。そして彼の後ろにはなのは達まで苦笑いで顔をだしてきた。まさに芋づる式である。

「あら、なのはさん達まで……どうしたのかしら？」

「えーと……その……」

「お兄ちゃん達だけリンディさんの処に呼ばれてるのが気になったからよ。ね、なのは？」

「盗み聞きして御免なさい！」

少女達も罰が悪いのか頭を下げて謝りはじめる。

「あらあら。そんなに気にしなくてもいいのに」

その初な光景が微笑ましくリンディも相好が崩れる。
やはり子供の素直な姿勢は可愛いものである。

「でも艦長の言葉じゃないが、鉄……君の力には今回助けられた。出来ればこの先も協力しあっていきたい」

（まあ命令違反などの暴走は遠慮願いたいが）

「だから必要な時は力を貸してやるよ。オレだってそれなりに貴重な経験になったからな」

「鉄……」

どちらともなく互いに握手を交わす。

それは互いに戦場を渡った友情の証なのかもしれない。

（これが男の友情って奴かしら？）

（でも凄く嬉しそうだよ二人共）

（いいなあ）。私もフェイトちゃんと握手したいよ）

（刃らしいな。いつも敵とか味方とか拘りなく関係を築き上げる処なんて特に）

（まあ、お兄ちゃんも奔放な性格だからね。あっさりしすぎかな？）

（何だか納得いかない……僕だって頑張ったのに）

（まあまあ。その辺はクロノだってしっかり分かってるわ）

（そういう事じゃ。あまり気にするでない）

「じゃあ、そろそろオレ達も部屋に戻るか？」

「そうじゃな。地上に戻ったらワシ達もさやか殿の家や刃の実家にも戻る必要があるしの。少しは休息しとかねばマズイじゃろう」

「そうか……まあゆっくり休養をとってくれ。帰還にはまだ少し時間がかか——」

「ちょっと待って！なに？刃さん達が帰るってどういう事」

そこでアリサがふいに怒鳴り声をあげる。
まるで初耳だといわんばかりに。

「ああ、さやかや諸羽がこっちに来てるだろ？だから、一度家の方にも顔を出しといた方が良くないかなってな」

「ワシ等も永い間、武者修行に出ておったからここが良い区切りじゃろう」

「で、でも！私だけでなくアリサちゃんやすずかちゃんとも友達になれたんだよ？これからもっと知りあう事だって出来るのに」

「ねえ、なのはちゃん。別に二度と逢えなくなる訳じゃないし、時間だってたっぷりあるじゃない。直ぐにまた遊びにくるから、ね？」

「そういう事じゃな。そんなに急ぐ必要もあるまい？」

「まあ私達だって家族もいれば、古い仲間もいるのよ」

「」「うっ……」「」

その正論には流石に返す言葉が見つからないのか、唸る事しか出来なかった。

「それよりこの事件の後始末。そっちは問題ないんですか？」

「ん、そうね……概ねは問題ないわ。大きな禍根ともならず、首謀者達も一応は確保できた。次元断層が発生する事及び、ジュエルシードことロストロギアの確保も成功しましたからね。報告書の方には些か頭を悩めています、人員的にも大きな被害は出なかったから大丈夫よ」

（尤もプレシア女史が残したクローン技術の問題や、刃君達の異端な力にも頭が痛い部分だけどね）

「なら一先ずは安心ですね。事後処理とかは流石に私達が口を出す事じゃないし、地上に戻ってからの話は部屋でもゆっくり相談できるでしょ？とりあえずは戻りましょう」

「……はい」

「そうね。私からの報告は以上で終わりだし、募る話しは後でゆっくり出来るわ。クロノも負傷者の治療とかお願いね」

「ええ、分かりました」

「お？クロノは回復とかもやれんのか」

「まあね。自分でも言うのもなんだが、この艦では艦長に次ぐ実力者だと言う自負もある。こっちの方は僕達の仕事だから、鉄達はまた後でな」

「じゃあ遠慮なく。また後でな！」

その言葉だけ残して刃達は自室へと戻っていく。

「やれやれ、アイツは一度くらい組織で鍛えられた方が良いのかもな」

少し呆れたように呟く。それは刃の気軽さと、跡を濁さない性格に感化されたのかもしれない……決して軽蔑を含んだ物言いではなく、友情を感じさせるものがあつたからだ。

「あら？クロノも言うじゃない」

「僕も染まってきたのかもしれないね」

ハラオウン親子、彼女達もまた少なからず刃の影響を受けたのかもしれない。

少し寂しそうに刃達が去った後に視線を残していたのだから。

——事件の顛末……。

プレシアはロストログア、その強大な力を使用して幻の都とも呼ぶべき「アルハザード」へと旅立とうとしていた。その目的は失わ

れた技術や魔法の力を持って娘を蘇らせる事で、その為にクローン技術にも手を染めていた。その研究の結果として誕生したのがフェイトであり、彼女はアリシアの肉体を持って産まれたのである。

その禁断とも呼ぶべき技術は人道的にも問題で、それは管理局としても認められるものではなかった（表向きは）。だが彼女を含めプレシアも結局はその野望が潰え、この問題は大惨事になる寸前で事なきを得る。

その協力者となったのが現地の魔導師と人間。彼等はその素質と異端な力を見せ付け、事件解決の立役者となったのだ。尤も彼等の力も放置するには異質であり、強力すぎたので良好な関係を築く必要はあったのであるが。

こうして今回の事件は幕を閉じたのである。

そして後にP・T事件と呼ばれ、首謀者プレシア・テスタロッサの名を冠せられた。

——あんな事があつたんだもん。フェイトちゃんだってもっと仲良くなりたいし、勿論アースラの人達とも。何より自分にとって将来進む道を見付ける事ができたから。

そう自身を振り返った後に、なのは力強く声を張りあげる。

「またね！ 刃さん」

「なのは達も元気だな！」

こうして刃達は高町家を後にする……。

嵐にも似た荒々しい力強さと鮮烈を、皆の心に残して。

） F i n （

最終話 帰郷（後書き）

これでこの物語も完結となります。こんな拙い作品を読んで下さった方々に本当に感謝の念で一杯となりました。誠に有難う御座います。

今回の反省を活かして次作ではもう少しマシな仕上がりを目指していきたいと思います。とりあえずペース配分や登場人物（素材）をもう少し活用できる様になるのが今後の課題。

さて、そもそもこの作品を持ちあげた発端は、魔法以外の力をプッシュしたかったからです。魔法の世界で異端の力をどう活躍させるか？それがY A I B Aを持ってきた所以だったのです。原作を読む限り力という側面では決して劣る事もなく、テーマも深くないという観点から絡めるに至りました。作者の力量が覚束なく素材は一級品でも、味は三級以下というのはおいておき（苦笑）。

初期構成は高町なのはが「翠屋」の後を継ぐという設定だったのを思い出しますね。彼女は刃との間に一児を授かり、魔法世界から足を洗わせようと考えていたんですよ……これが。その為に彼女をヒロインにして、悩める少女と頼れる青年の構図と持っていきたかったのです。また、アースラから帰還後はエメラルドを連れて月に赴く流れだったのも覚えています。なるべく原作沿いに展開したかったです。それが終わってみれば見る影もないんだから、我ながら凄い路線変更だったなと思ってしまう。

以下、その要因。

連載を始める内に、なのはの性格に扱い難さを覚え、動かせなくなつた事。少なくともアニメから得る情報では、あまり好ましくなかったのが痛かった。一番違和感を覚えたのが成長速度。これは個人的に納得し難く、NOを突きつけたくなつた程でした。

何のリスクもなく短期間で魔法の力を物にする……勿論これは主人公特権として文句はありません。ですが限度や程度というのがありますし、偉大な師匠に師事した等の理由があればまだ納得出来たんです。それも無しでトップクラスの力を得たから、応援できなくなつたんだよなあ。それがラスト間際の『名前を呼んで』という屈指の場面すら、カットするという暴挙に及んでしまうと（笑）。それにフェイトにはリニスがいるから、依存対象としてアニメほどなのはに傾いていないのです。

後はエメラルドの出現でしょうか。そもそも9歳と18歳では恋愛関係に運べないし、見た目的にも歳が近いエメラルドの方が動かし易いんですよ。仮になのはに、お兄ちゃんっ子みたいな属性が描かれてればまだ違つただけど。この辺りは構成前と構成後の心理的な変化がネックとなつて挫折したのが大きいですね。

※ぶっちゃけ作者の好みの問題です。だからアニメが駄目だとかという訳じゃないですよ（汗）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9984o/>

魔法少女リリカルなのは～剣豪伝説～

2011年10月7日11時36分発行